

ペルソナ 4 → 3

第7サーバー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『鳴上悠』は八十稲羽市において発生した怪奇連続殺人事件を仲間たちと解決した。しかし、彼の戦いはそこで終わらなかった。

その戦いで発現した力を見込まれ、鳴上悠は時をかける。

目指す先に待ち受けるのは隠された時間と悲劇的とも取れる結末。

はたして鳴上悠はその場所で出会う事になる者たちと、そんな結末を変える事ができるのだろうか……。

※チラシの裏に移ったので、書いてある部分や書きたい部分からスケジュールを埋めていく形式の投稿をしようかと思えます。

とりあえずはメモ書きみたいな感じになったりもするので、時系列順にちやんと読みたい人はスケジュールが埋まってから一気に読みしてください。

それとそういう形式のために、コミユの順番を間違えたとかでちよこちよこ修正を入れるかも知れませんが、ご了承ください。

目次

序章 | 1

4月6日(月) : 出会い | 9

4月7日(火) : 学園 | 21

4月8日(水) ~ 9日(木) : 覚醒 | 36

4月10日(金) ~ 19日(日) : 特別課 | 46

外活動部 | 60

4月20日(月) : タルタロス | 84

4月21日(火) ~ 26日(日) : コミュ | 111

4月27日(月) ~ 30日(木) : 真実の | 111

行方 | 111

5月1日(金) ~ 9日(土) : 衝突回避 | 135

5月10日(日) : 愚者×愚者 | 173

5月11日(月) ~ 17日(日) : 学生の | 199

本分 | 222

5月18日(月) ~ 23日(土) : テスト | 236

が終わって | 287

5月24日(日) ~ 25日(月) : 嵐の前 | 252

5月26日(火) ~ 6月1日(月) : 未来 | 287

に続く | 287

6月2日(火) ~ 6日(土) : キミが世界 | 287

を変えるところとして | 287

6月7日(日) ～ 8日(月) : ひとりじや
ない | 313

6月9日(火) ～ 13日(土) : NEXT

STAGE | 348

6月14日(日) ～ 21日(日) : 未知と
の遭遇 | 378

6月22日(月) ～ 30日(火) : まだま
だ抜け日あり。 | 418

7月1日(水) ～ ※今のところ7月以降
は全部ここ。 | 456

P3とP4を入れ替えてみた・体験版

序章

それは全てを終えた後に起きた。

彼——「鳴上悠」は稲羽市における1年間の生活の中で、同時期に起きた怪奇連続殺人事件に、その町で出会った仲間たちとともに挑み、その手段となったマヨナカテレビの謎……元凶である神「イザナミ」にも辿り着き、ついにはそれを倒した。

人の身でありながら神を倒すという偉業を、彼は人知れずやり遂げた。

世界は霧に包まれ、人々は「シャドウ」になる——そんな危機から世界を救ったのである。

そして元々両親の仕事の都合で1年間という期限付きで転校してきた彼は、それを理由にその町を後にしようとしていた。

彼はその町で親しくしていた人たちに別れを告げ、電車へと乗り込み、一息吐くと、仲間たちと写った思い出の写真を取り出して微笑んだ。

彼の胸中には楽しかった思い出に加えて、やり遂げた実感と達成感が溢れている。

——しかし、マヨナカテレビに関する一連の戦いには決着がついたが、彼の戦いが終わったかという点、そうではなかった。

人を超える強さのイメージ……神格を顕現させる力 “ペルソナ”。

そんなペルソナ使いの中でも特殊な立ち位置に存在している “ワイルド”。

それが彼。

その力を持つ者は、もう一人の自分であるところのペルソナを付け替えることができる。
る。

その理由としてワイルドはその心の力を他者との絆によって、無限に育んでいくことができるからである。

まるで他者の想いを代弁するように、その力を強化していくワイルド。

それはつまり、ワイルドは他者のために戦う存在であるとも取れる。

ならば、彼が絆を育んだ相手が、彼に戦うことを望んだとしたらどうだろう。

彼の力が必要な事態が実はとっくに存在していて、彼の力が充実した今にこそ、その願いを頼んだとしたら。

彼の意識が薄れる。

それを振り払うように目を見開くと、そこはもはや彼の馴染となった場所だった。

夢と現実、精神と狭間の世界 “ベルベットルーム”。

訪れる者によってその姿を変えるところという幻想空間は——彼の場合は高級車の車内を模している。

高級車とはいえ現実的な質感を持ったその車内は、けれど幻想的な青い光に包まれていた。

だが、その場に特徴的な鼻を持つその空間の主はいない。

いるのはその補佐役である「マーガレット」という名の彼女だけだ。

「鳴上悠様。今回私が貴方をお呼びしたのは、貴方に頼みたいことがあったからよ」

「頼み？」

彼が口を開くよりも早く彼女は喋りだした。

白銀の髪に金色の瞳、作り物めいた美貌を持ちながらも、お茶目な部分がある彼女は、しかし今は真剣な表情で彼と向かい合っている。

なので彼もまた、挨拶は頷くだけで済まして、話を聞く体勢に入った。

「ええ、それは私の妹のこと。私の妹がある客人を探してどこかへと姿を消したということは話したと思うけれど、その原因は2年前の戦いにあるの」

「2年前？」

「そう。今回の貴方への頼み事と言うのはそれ。貴方にはその悲劇的とも取れる結末を変えて欲しいの」

彼女のその言葉に彼は表情を変えた。

「待ってくれ。それはまさか——」

「察しの通りよ。貴方には過去へと遡って、その歴史を変えて欲しい」
「そんなことが可能なのか？」

「ついこの間まで——そして今もこうして、非日常の世界を経験している彼にとつてもそれは半信半疑の申し出であつた。

しかし、彼女はどこまでも冷静にそれを肯定する。

「可能よ。でもそのためには幾つかの要因が重なる必要がある。貴方が築いたワイルドとしての力。そのほとんど全てを注ぎ込み、さらにはその望む時間軸に貴方以外のワイルドが存在していること。それでようやく“1年間”という期限を得られる」

「1年……」

「貴方以外のワイルドに関しても問題ない。貴方に救つて欲しいのはまさにその人物なのだから」

「救うと言うがいったい何から救えばいいんだ？」

話を受け入れるかどうか以前に、事情を知らなければどうしようもないと彼は尋ねるが——。

「それを私が言うことはできないわ。貴方はあくまで貴方自身の力でまた一から真実に辿り着かなければならないの」

彼女はその質問に対して静かに首を振つた。

ならばと彼は質問を変える。

「だが、俺はワイルドとしての力を失ってしまうのだろうか？」

「いいえ。ワイルドの力のその全てが失われることはあり得ないわ。真実と同じくまた一から新たな絆を結び育むことで貴方の力は取り戻せる。あるいはこれまで以上の力に目覚めることだってあるかもしれない」

「仮に過去へ行った場合、俺はどうなる」

「貴方の存在はその世界で違和感ない形で受け入れられる。そして貴方もそのことに対する疑問を抱き辛くなる。その結果、真実へ辿り着いても着かなくても、1年間という期限が過ぎれば、貴方は再びこの時間へと戻ってくる」

あくまでも仮定の話として、彼は質問を重ねていき、彼女もまたそれに答える。

「その世界での俺の記憶は関わった人たちの中から全て失われるのか？」

「それは……分からない。でも可能性としてならそれが一番高いわ。貴方がどれだけその世界で頑張っても貴方はいなかった人物として扱われる。ただ、結果だけが残るのよ」

「——もし、俺が志半ばで倒れた場合は？」

「その場合も同じよ。貴方はこの時間へと戻ってくる。ただしその時になって、貴方が望もうとも二度と過去へは干渉できない。貴方が育んだ絆が半端であったなら、その身

に宿す力も大きく削られていることでしょうかね」

「……そうか」

彼はとりあえずの質問を終えて頷いた。

決断の時は迫っている。

この先の展開を望まないならば、ここで目を閉じ耳を塞ぎ、否定の言葉を吐くことも可能だろう。

「今回の件は、貴方には少しの益もない話かもしれない。そもそもがそれはすでに過去に起きた本来なら変えようのない出来事。貴方はそれを変えるという事実には忌避感を覚えるかもしれないわ。それでも私は貴方へと頼むしかない。貴方の返答を聞かせて」

↓依頼を受ける

依頼を受けない

「本当にいいのね？」

しかし彼は彼女の依頼を受け入れた。

「ああ。どれほど悲劇的な過去だったとしても、それを糧に今を生きている人たちを想像えば、簡単に過去を変えるなんて決断はできない。でも、その時間で共に生き、共に悩み、共に考え、そして掴む真実や未来なら、その人たちも納得してくれると思うんだ」

「その結果、貴方一人が忘れ去られることになるかも知れないのよ」

「今更、絆の力を疑うことなんてしないさ。それに、誰もが忘れてしまったとしても、マーガレットは覚えていてくれるだろう?」

「……ふふつ。そうね。ありがとう」

故に彼は、この現在から過去へと遡り、新たな物語を始めることになるのだろう。

「まだ何も成し遂げていない。お礼を言うのは俺が全てを成し遂げられたらにしてくれ」

「分かったわ。……貴方が向こうの世界に受け入れられれば、私のことも一時的に忘れるかもしれない。でも、それでも覚えていて。私は貴方を信じている。私の挑戦をただ一人で受け、なおかつ勝って見せた貴方の力をね」

「ああ。心に刻んでおくよ。どんなギリギリの状況でも食いしばれるように。マーガレットに勝った俺が簡単に負けるわけにはいかないからな」

そうして彼は再び物語の主人公になるのだ。

だからここからは「彼」のことは再び「悠」とその名前で呼ぶことにしよう。

「——それじゃあ、始めるわよ。覚悟はいいかしら?」

「構わない」

悠がそう言うと、マーガレットから強烈な光が放たれた。

「ここは夢と現実。精神と狭間の世界。ベルベットルーム。ならば、後一押しがあるだ

けで時間すらも越えることができる。意識を集中させて頂戴。私が2年前の——いいえ、全てが動き出した3年前のその日へと至る道を開くわ。貴方はそこを渡るための力を」

悠はその言葉に、自身の究極の力である“伊邪那岐大神”の姿をイメージする。

あの時の戦いで使った力は失われていない。

それ故に未だ一線を駕した存在感を放つ伊邪那岐大神が悠然とイメージの中に佇んでいる。

「——……時は待たない。1年間。貴方の望むように生きて。それがきつと貴方を真実へと辿り着かせる力となるわ」

4月6日(月): 出会い

2009年4月6日(月)

彼——鳴上悠は、両親の仕事の都合で、1年間という期間付きで、港区にある私立“月光館学園”へと転入することになった。

その間は一人暮らし——というか、寮生活をすることになる。

悠はその寮に入寮するために、最低限の荷物を手に、月光館学園の制服を身にまとって、その場所へと向かっていた。

しかし、幸先悪くも人身事故だかの電車トラブルによって、かなりの時間を電車内で足止めされて、その寮がある巖戸台駅へと到着した頃には、時刻は深夜0時に差し掛かろうとしていた。

悠が一つ溜息を吐いて、改札を抜けたところで、ポンと肩を叩かれる。

その感触に後ろを振り向けば、XXIIという特徴的な留め方をしたヘアピンの少女がにっこりと笑っていた。

「くんばんはー!」

「……ああ、くんばんは」

「あはは、いきなりで驚かせちゃったかな？ キミがそんな荷物持つてるから、ひよつとしたら私と同じ目的なのかなーって思ってた声も掛けたんだ」

「同じ目的？」

「そー！ ああ、自己紹介がまだだったよね。私は『有里湊』。この春から月光館学園に転入するの！ キミもその生徒だよ？ 私と同じで制服着てるしさ」

見れば確かに悠と似たような制服を彼女は身に着けている。

女子用の制服なのだろう。

そして、手には旅行鞆のような荷物。

——なるほど、確かに同じ目的のようだ。

「ああ。そうなるな。確かに同じ目的みたいだ」

「やっぱり！ 私は転入生だけど……キミは新入生？ あ、でもキミって大人っぽい感じだし、先輩だったりするのかな？」

彼女の物言いから、悠は彼女が自分と同じく2年生であることが分かった。

「いや。俺も2年だ。俺も転入生なんだ」

「ホントに？ それは奇遇だねー！ あ、そろそろキミの名前を覚えてくれないかな？」

「あ、そうだな。すまない。俺は鳴上悠だ」

「鳴上くんか。よろしくね！」

「よろしく。有里」

二人が握手をすると、ちょうどそのタイミングで、周囲の電気が消えて暗闇に包まれた。

「わっ。何々？ 終電の時間過ぎちゃった？」

「——いや。それにはまだ時間があるはず。時刻だってまだ0時……？」

「どうかした？」

「腕時計、それに携帯も止まつてるんだ。充電が切れたのか？ でも合わせて三つ……タイミングが合い過ぎているか？」

暗闇の中で目を凝らした悠が、腕時計に携帯にと、そのどちらも動いていないことに首を傾げる。

そんな悠の様子に、湊もまた自分の携帯を取り出して確認した。

「あつ、私の携帯も！ なんでー！ まだ1日経ってないのにー！」

「電波障害？ でも、それで一齐に機械が止まるなんてことがあり得るのか？」

「うーん。こーいうのって考えてもしようがないよ！ とりあえず寮に向かわない？」

——つて、鳴上くんは寮？ どこ？ 私はねー、えっと、「巖戸台寮」！」

その状況を冷静に見極めようとする悠に対して、湊は軽くその話題を変えた。

「……俺と同じところだな」

「あれ、同じところなの？　男女で同じとかそれってアリ？　なんか漫画みたいな展開だね」

「階が違うとか何かしらの措置は取られていると思う」

「あ、なるほどね！　そっかそっか。でも、同じところならちようどいいね！　一緒に行こっ！」

「そうだな」

そして二人は歩き出すが……いかにも街並みがおかしい。

自分たち以外、人がいない街には棺が立ち並び、うっすらと緑色に染まった空間を、やたらと大きな月がその光によって照らしていた。

所々血を思わせる赤い液体が溜まっていたりもして、精神的なものかもしれないが空気が重く感じられる。

「これってオブリエ？　明らかに方向性間違ってるない？」

「たしかに……」

変なことに巻き込まれたような感覚はあった。

どこか気味の悪いモノを感じながらも、しかしそれ以上の何があるわけでもないの
で、二人はそのまま歩みを進めていく。

「……微妙に私たちがツいてなくない？　電車も止まってるたしさ」

「ああ。そうかもな」

「あ、でも！ 逆にそのおかげで鳴上くんを知り合えたと思えば、ラッキーなのかも！」
「俺も有里と知り合えたのはよかった」

「えへへ、そう？ —— あ！ あれじゃない？ 巖戸台分寮！」

「—— どうやらそうみたいだ」

その寮の玄関口で寮を見上げる湊。

4階建て、レンガ造りでレトロな洋風の建物だ。

「この状況だといまいち分からないけど、たぶん悪くない感じだよね！」

「ああ。ハイカラだな」

「とりあえず1年！ よーし、頑張るぞー！」

湊がドアに手を掛けてゆっくりと開く。

悠もその後が続いて中に入った。

「おじゃましまーす……」

寮の玄関を潜ると、その先はラウンジになっていた。

ホテルを思わせるカウンターがあり、その向かいにはローテーブルとソファ、テレビがあり、十人くらいが寛げそうなスペースになっている。

そのさらに奥には食事をするためだろうダイニングテーブルが備えられている。

「誰もいないな。部屋の場所を聞かないことにはどうしようもない。管理人を探そうか？」

寮の中は月明かりが遮られているために薄暗かったものの、室内に一通り視線を送った悠が、そう言つて湊を見ると、湊は何やらぼーつとあらゆる方向を見つめていた。

「有里？ 聞いてるか？」

「え……あつ、何？ ——つて、あれ？ あの子がいない……」

「あの子？」

「うん。今男の子がいたでしょ？ 契約がどうとかつて、とりあえず署名したけど。あ、鳴上くんも署名しないと」

「署名？ ……入寮する署名つてことか？」

「え、だと思うけど？」

何だか微妙に話が噛み合わないというか、何が言いたいのかが分からない。

そもそも湊が言うような男の子なんていなかったはずだ。

とはいえ、湊がそんな嘘を吐く意味も分からないので、悠は口に出さずに考える。

「誰っ!!？」

不意に女性の警戒するような鋭い声が響いた。

二人が少し驚いてそちらに視線をやれば、おそらくはこの寮生だと思われる女子生

徒が一人。

ピンク色のカーディガンはともかく、どうにもその太もみにガンベルトのような物を装着しているが、そういう趣味やファッションなのだろうか。

制服姿とはいえ、こんな時間なので見慣れない自分たちは不審者か何かとして警戒されているのかもしれない。

そう思った悠が入寮者であることを説明しようと口を開くより早く――。

「――待て！ 岳羽」

また別の、凜とした制止の声がかかった。

さらにその声に合わせてかのように寮内に電気が灯る。

それによって、先程までの不思議で重苦しい空気感も一掃された。

そしてその場に現れたのは赤く長い髪をした雰囲気のある少女。

正直制服を着ていなければ、少女とも思えないような貫禄を感じる女性である。

「有里湊と鳴上悠だな」

その確認の言葉に名前を呼ばれた二人が頷く。

「到着が遅れたようだね。――岳羽。二人は転入生だ。今日からこの寮で生活することになる」

「……いいんですか？」

「さあな」

この場にいるのは悠を除けば女性ばかりだ。

普通に考えるならば、男の悠がいることに對する問いかけと考えられるが、いかにも普通とは言い難い状況が続いている気がする。

だが、それを尋ねたところでこの様子では答えが得られそうにない。

なので悠は無難に挨拶をしておくことにした。

「よろしく」

「——あ、うん」

一方、湊は悠よりも好奇心旺盛だった。

「ねえ、なんで銃？　そういう趣味なの？」

「え、そんなわけではないから！」

「護身用さ。最近はこの辺りも物騒だからな」

空気詠み人知らず。

聞き辛いことをズバリと訊いた湊に、最初に現れた岳羽という少女をフォロースるよ
うに赤髪の女性が答えた。

ちなみにその女性の腰にもガンベルトが巻かれている。

「弾出るんですか？」

「まさか。ただの飾りさ。それでもいきなり銃を突きつけられれば、普通は怯むだろう？」

「どういう発想なのだろうか。」

「しかしこの場はそれで納得しろということらしい。」

「それはそうと、私は『桐条美鶴』。月光館学園の3年生で、この寮に住んでいる者だ。そして彼女は『岳羽ゆかり』。この春から2年生だから、君たちと同じだな」

「岳羽です」

ゆかりが軽く頭を下げる。

それを見届けると美鶴が続く言葉を口にした。

「今日はもう遅い。岳羽。二人の案内を頼めるか？ 二人の部屋はそれぞれの階の一番奥に用意してある」

「あ、はい。分かりました。——えっと、じゃ、行こ。有里さん、鳴上くん」

「私のことは湊でいいよ！」

「そう？ なら、私もゆかりで」

「分かった。よろしくね。ゆかり！」

まだ若干ゆかりのほうに壁がありそうだが、女子二人は早くも打ち解ける空気を醸し出していた。

先導するゆかりと、その隣を歩く湊の後ろを悠はついて行く。

「あの、さ。二人とも、駅からここに来るまでの間、ずっと平気だったの？」

そんな中、ゆかりが遠慮気味というか、探るような感じで二人に対して尋ねる。

「え、平気だったよ。ねー？」

「そうだな。おかしな雰囲気は受けたけど。あれは？」

悠の質問に対して、ゆかりは困ったような顔を見ると、曖昧に頷いた。

「あー、うん。その話はとりあえずまた今度ね。話していいのか分からないし、二人も広めないでね」

「よく分かんないけど、いいよー」

「分かった」

「うん。ありがと。——あ、鳴上千んの部屋はここだね。湊はちようどこの上になるのかな。それから、男子は用がない限り3階をうろついちやダメだからね」

悠の部屋は美鶴が言っていたように2階の一番奥で、ゆかりはそのドアを示すと、注意事項！ と指を立てて、悠に忠告する。

湊の部屋があるということからも3階は女子のフロアのようなのだ。

「勝手にうろついてたら桐条先輩に処刑されるから」

「あはは、処刑だって」

「……了解だ」

それは実は全然笑い事じゃない忠告なのだが、今はまだそうとは知らない悠が素直に頷くとゆかりも頷いて、視線で湊を促す。

「それじゃあ、えっと、おやすみなさい」

「おやすみー」

「ああ。おやすみ」

悠は挨拶をして二人と別れると部屋の中に入った。

部屋にはベッドや机の他に洗面台や冷蔵庫、テレビなどが備え付けられていた。

「これから……ここで、1年、か」

悠は荷物を置くとベッドに腰を下ろし呟く。

1年間が過ぎれば、再び悠は両親と暮らすことになる。

高校もまた転校しなくてはならない。

とはいえ、だからとテキトーに過ごすのはもったいないだろう。

来年は一応受験生ということもあるのだから、進学するしないはともかく、学生生活を楽しむならやはり今年だ。

部活をするのもいいし、バイトを試みるのもいいだろう。

それに、悠はこの1年間の間に、何かをやらなければならなかったような気もしてい

た。

先程の街の様子も当然だが気になっている。

確認するように窓から外を見れば普通の夜の風景。

携帯を取り出せば、充電が切れているなどということではなく普通に動いている。

これらはいったい何を意味するのだろうか。

悠はそんなことを考えながらも、寝間着へ着替えると、その日はそのまま眠りについた。

4月7日(火):学園

2009年4月7日(火)

悠が携帯のアラームで目覚め、学園へ行く準備を進めていると、不意にドアがノックされた。

「鳴上くん。起きてる?」

「ああ。起きてる」

「学園への道まだ慣れてないでしょ? よかったら一緒に行かない?」

「一緒に行こうよつ。鳴上くん!」

来訪者は湊とゆかりの二人だった。

どうやらゆかりは転入生である悠たちを気遣ってくれているようだ。

「分かった。ちよつと待ってくれ」

悠は最後に手荷物を確認して、部屋を出た。

「お待たせ」

「うん。おはようつ。鳴上くん!」

「おはよう」

「ああ。おはよう」

「それじゃあ、行こっか」

「出発〜!」

朝の挨拶を交わして、三人は学園へと向かった。

巖戸台駅からモノレールに乗って、ポートアイランド駅へ。

月光館学園は人工島の上に建てられた学園なのだ。

三人は適当に雑談を交わしている。

「あ、ほら、あれだよ」

ゆかりの声にモノレールの窓から外を見れば、月光館学園の全容が見えた。

「おー! 絶景ー!」

「そうだな」

「確かに絶景なのはいいんだけどねー。潮風をモロに浴びるから、髪の手入れとかはしっかりやらないと、すぐにバサバサになるのが考えものかなー」

「へー。そうなんだー」

「湊はそういうの気にしないの?」

「そんなことはないけど。ゆかりはオシャレ好き? 上着も違うしさ」

「あー、まあ、女子だからね。うちの学園、上着は結構好きにしているんだ」

そういうゆかりはワイシャツの上にピンクのカーディガンといった姿だ。

首にはハート形のチョーカーを着けている。

一方、湊は黒を基調とした制服をキチンと着こなしている。

首からMP3プレーヤーを提げてるのが特徴と言えるだろうか。

ちなみに悠はボウタイは自分には合わないと、普通のネクタイに変えていた。

だがそれ以前の問題として、三人とも服装以前に人並み以上の容姿をしているので、どことなく周囲の注目を集めている。

もつとも三人はその状態が普通と言えるほどに慣れているのか、単純に気付いていないのか、周囲を気にすることなく、至って普通の雑談をしたままに学園へと到着した。

「さ、着いたよ。ここが月光館学園の高等部。——ようこそぞ。私立月光館学園へ！」

「……なーんてね！」

ゆかりのそんな言葉を受けながら、今日からこの学園に通うことになる二人は校門を潜った。

「えーつと、二人はまず職員室だね。職員室はあっち。この先を出てすぐだから詳しいことはそこでね。プレートが出てるからすぐ分かると思うよ」

「そうか。ありがとう」

「あ、ゆかりのクラスは？」

「私？ 私は2―F」

「そっか。同じクラスになれるといいね」

「まあ、うん。そうだね」

ゆかりは相槌を打つと手を振って、二階に続く階段を上って行った。

「じゃあ、私たちも行こっか？」

「ああ」

玄関口から左手に曲がれば、すぐに職員室と書かれたプレートが目に入る。

「失礼しまーす！」

湊が元氣よく中に入って行き、その後に悠が続いた。

「――あ、あなたたち、ひよっとして転校生の？」

「はい。私、有里湊です！」

「鳴上悠です。よろしくお願ひします」

「あら、二人とも、もうすっかり仲良しって感じねー。ちようどよかつたわ。あなたたちは二人とも、同じクラスだから。2―F。担任は私。正直まとめて押し付けられたって感じよねー。でも、別に問題児って感じじゃなくて一安心ね」

あけすけな言動の教師に二人は苦笑を返す。

二人とも同じクラス。

さらにゆかりも同じだということが分かったので、二人は内心で心強さを感じていた。

何だかんだで転校生という立場の緊張や不安は、そういう感情とは無縁に見える二人の中にも、わずかにだが存在していたのだ。

「あ、ちなみに私の名前は、『鳥海いさ子』。担当は現代文。よろしくね」

「はい。(こちらこそ)」

「よろしくお願いしまーす!」

鳥海に連れられて二人は2—Fの教室へ。

そして、転校生のお約束である自己紹介をすることになった。

「はい。今日はなんと転校生を紹介します。それも見て分かる通り二人。はいはい。騒がない。じゃあ、お二人さん、それぞれ自己紹介よろしく」

二人は軽く目配せをして、先に湊が口を開いた。

「有里湊ですっ! 趣味は——えっと、音楽鑑賞! あと、スポーツも得意かな。そんな感じでよろしくお願いしまーすっ!」

明るい湊はクラスメイトに好印象を与えたようだ。

続いて悠が自己紹介をする。

「鳴上悠です。趣味は釣りと読書とプラモデル作りと家庭菜園。それから、料理です。

これから1年間よろしくお願いします」

悠の趣味は意外というか、高校生としては正直微妙な感じも多分にあつたが、落ち着きがあり頼りがいもありそうな雰囲気、それらは別にマイナス要因とはならなかつたようで、こちらもクラスメイトに受け入れられた。

実際二人が自己紹介した後の拍手は大きい。

「へえー。鳴上千んって趣味がたくさんあるんだね？」

「ああ。そうみたいだ」

「あははっ、変なの。自分のことなのに」

「はい。すでに仲良しな二人は席も隣でいいわよね。そこそこ、一つずつずれてくれる？ 転校生優先！ 予備の机？ 自分で持つて来なさい！」

鳥海の言葉にバタバタと二人ほど教室を出て行く。

それを何となく申し訳ない感じで見送りながらも二人は席に着いた。

とりあえず、その日は新学期の初日だったので学園はあつと言う間に終わりとなる。

それぞれクラスメイトに質問攻めに合いながらも、ようやく一段落ついて帰ろうかという時にその人物に声を掛けられた。

「よっ。お二人さん。大変だったみたいだな。あつと、オレは『伊織順平』。ジュンペーでいいぜ。実はオレも中2の時に転校でココ来てさ。気にしてやんなきゃなつて

な。イイ奴だろ?」

順平はキャップにアゴヒゲに青のドレスシャツと、いかにもファッションに氣遣つてますアピールをしている陽気な感じの少年だ。

ちなみにどうでもいいかもしれないが、キャップの下は坊主のようである。

「——あ、順平。ようやく落ち着いたんだから、二人にちよつかい出さない」

そんな風に順平が氣安げに二人に話しかけていると、ゆかりがその間に入ってきた。

「な、何だよゆかりツチ。同じ経験者として、ただ親切にしてるだけだつて」

「同じ経験? その二人とじゃだいたい違うんじゃない?」

「ひどつ! これでも、転校当初はオレつちだつてなあ……」

やれやれと首を振るゆかりに、順平は大袈裟なりアクションを取る。

「あー、はいはい。分かった分かった」

「すつげー軽く流されたよ、おい」

そのリアクションすら面倒クサイとゆかりは順平をスルーして二人に向き直つた。

「それより二人揃つて同じクラスだとは思わなかつたわ。結構テキトーだよね。うちの

学園」

「私は二人と一緒に嬉しいからいいよ」

「俺も知り合いが最初からいるのは心強いな」

「そう？　なんかそう正面から言われるとテレるかも」

真正面からの二人の言葉に、ゆかりは頬を掻きながらテレ笑いをする。

「あ、やっぱ、三人は知り合いなわけ？」

得心したような順平の態度にゆかりが視線を向けた。

「やっぱって何よ？」

「知らない？　噂になってたぜ。なんかイケメンがゆかりツチと謎の美少女の両手に花で登校して来たって」

「はあ？　何よそれ……」

「え、謎の美少女って私？」

「自覚なし。そしてこいつは動じる気配がなしてか」

順平が悠を示す。

特に気にしてなさそうな悠の様子にゆかりは溜息を一つ吐いて気分を切り替えた。

「ま、気にしてもしょうがないか。行き先が同じなんだから、これからもたまにあるかもしれないもんね」

「おっと、それって結構意味深な台詞じゃないの？」

「ただ私たちの寮が同じってだけだよ」

「何——!!?」

「湊がさらりと口にした言葉に、順平は大声を上げ、教室にまだ残っていた他の生徒たちも何事かと視線を向ける。」

「あ、馬鹿。そんなことわざわざ言わない」

「なんで?」

「なんでって……」

きよんとした湊の表情に、ゆかりがどう言うべきかと考えている間に、順平が悠に詰め寄った。

「おまつ、それは羨ましすぎだろつ! ゆかりツチは性格アレだけど美少女だし、有里は性格イイ上に美少女じゃねえか!」

「順平。性格アレだけどつてどういう意味?」

ギリリと光るゆかりの視線に、順平は手をバタつかせて後ずさる。

「あ、いや、それは言葉のイヤと言いますか……興奮して、ついぼろつと本音が……」

「余計悪いっつーの! 湊、分かった? こういう馬鹿が出てくるから、そういうことはわざわざ言わないほうがいいのっ!」

「あ、うん」

ゆかりの勢いに押されて、湊は素直に頷いた。

「分かればよろしい。——じゃあ、帰ろつか?」

「そうだねー。鳴上くんも帰ろー」

「ああ」

三人はそれぞれ鞆を手に席を離れる。

「え、この流れはまさかのオレっち放置？」

「順平は帰らないのか？」

「鳴上。お前オレっちを誘ってくれるのか……？」

一人取り残されかけたところで、掛けられた優しい言葉に、ホロリと涙を拭うポーズをする順平。

「えーっ、順平は要らないんじゃない？ どうせ途中で別れるんだしさ」

「ゆかりツチ……ゆかりツチは意識してないかもしれないけど、その言葉は普通にオレっちのハートにグサグサ来てるぜ……」

しよぼくれてみせる順平に、ゆかりはやはり面倒くさそうに溜息を吐く。

「はあー。なら、好きにすれば」

「あ、そう？ じゃあ、みんなで仲良く帰ろうぜー！」

ゆかりがそう言った途端、それまでの態度はどこへやらと、順平はハシヤギ、気安く悠の肩に手を掛けたりしている。

「はてしなくウザいんだけど」

悠はそれを溢れる寛容さで受け入れるが、ゆかりはジト目で見やりながらボソリと呟いた。

「またまたゆかりつつちつてば!」

「……またまたじゃないっつーの!」

何はともあれ——そんなこんなでその日は四人で帰った。

順平と別れ、寮へと三人が入ると、メガネを掛けた長髪でスーツの男性がラウンジでその帰りを待っていた。

「あ……幾月さん」

「やあ、お帰り。君たちが転入生だね。私は『幾月修司』。君らの学園の理事長をしている者だ。イ・ク・ツ・キ。言いくいだろ? おかげで自己紹介はどうも苦手だよ。油断すると噛みかねん……」

突然の理事長の登場に若干驚きながらも、悠と湊の二人は頭を下げた。

「——鳴上悠です。よろしくお願ひします」

「有里湊ですっ! よろしくお願ひしまーすっ!」

「ああ。よろしく」

軽く手を上げて応える幾月に、やはり何故いるのか気になった悠が尋ねる。

「それはそうと、理事長がわざわざどうして?」

「別にたいしたことじゃないさ。仕事で近くによつてね。ここには桐条君もいるだろう？　だから挨拶に寄つたのさ」

「桐条先輩がどうかしたんですか？」

「うん？　知らないかな？　桐条財閥。彼女はそこの令嬢なんだよ」

「え、そうなんですか！」

桐条財閥と言えば世界でも有数のそれであるために、さすがに尋ねた悠も驚く。

そういう高貴な——お嬢様的な雰囲気は感じていたが、それにしてもという感じだろう。

「——さてと、他に何か聞いておきたいことはあるかい？」

「んー、鳴上くん、何かある？」

「じゃあ、他の寮生のことを」

「君たちがまだ会つてない寮生っていうと、真田君かな？　真田君は3年生だから、君た

ちの先輩だ。ボクシング部に所属してて、試合では無敗を誇っているらしいよ。テストでも常に上位の成績を保つてるから、何か困つた時は頼るといいんじゃないかな」

「なるほど」

スポーツに勉強もできる先輩というのもそうだが、自分以外にも男子がこの寮に住んでいることを知って悠は安堵した。

女子ばかりだと順平のような反応をする者も出てくるし、これで一安心だと悠は頷く。

「他にもう一人いたんだけどね。彼は今ちよつと出てるから、縁があつたらその時に聞くといいと思うよ。他に何かあるかな?」

「……この辺りで釣りはできますか」

悠は他に何かあつただろうかと考えてその質問をした。

幾月は少し意外そうな顔をした後に、考える素振りを見せ口を開く。

「釣り? そりやすぐそこに海があるからね。やろうと思えばできるんじゃないかな」「そうですか。どうもありがとうございます」

丁寧に頭を下げて悠がお礼を言うと、幾月はそのメガネの奥から探るような目を向ける。

「——質問はそれで終わりかい?」

「はい」

「……本当に?」

「ええ」

悠の頭の中には昨日——いや今日だろうか、あのおかしな街の光景がよぎつていたが、ゆかりに広めないでねと言われていたので、ここで尋ねるのは止めておいた。

ゆかりも特に反応しないし、湊に軽く視線を向けても、尋ねる気配がなかったことも理由だ。

「よろしい。じゃ、良い学園生活を。私はそろそろ失礼するよ。転入したては色々と疲れるだろ？ 早めに休むといいよ。身体なんてグーグー寝てナンボだからね。昔、漫画にあつたろ？ 『グーグーナンボ』？ ……なんちゃって」

「はい？」

「……ごめんね。ああいう人なの」

「ああいう人？」

「そうやって冷静に訊き返されると対応に困る人ってことよ」

深夜0時 — 影時間—

『影時間』とは何かと聞かれてこの時点で答えるべきことは特にない。

今はまだ緑色の夜だとか、非日常への入り口程度の認識で問題ないだろう。

そんな時間の中で——かなり大型な壁一面に配置されたモニターを見ながら喋る者たちの姿がある。

「ふむ。平然と眠ったままか。二人には『象徴化』が起こっていない。本当にただ眠ってるだけみたいだね」

その分割されたモニターに映るのは悠と湊の二人の部屋。

どうやら、この者たちは眠る二人の様子を観察しているようだ。

「——ええ。これまでもただ気付かなかっただけなのか、その辺りが気になります、二人には適性があるということかと」

「まあ、そう結論を急ぐものじゃないよ。とにかく、もうあと何日かはこうして様子を見てみないと」

「隠れてこんなこととして、ちよつと気が引けますけどね……」

「そう言わない。二人は君の同級生じゃないか。しかも一人は同性。仲間になってくれれば君も心強いだろう?」

「それはそうですけど……」

「それにこの時間は二人とも寝てるだけだ。別段プライベートを覗くことにはならないよ。来て間もないからか、たいして荷物もないようだしね。——おつと。今日はここまでのようだね。影時間が明ける」

そしてわざわざ正体を隠すほどでもない者たちの観察の時間が終わる。

ただ、彼らが知らずに眠つていようとも、彼らの物語はこうしてすでに始まっており、覚醒の時もまたすぐそこにまで近付いていた。

4月8日（水）～9日（木）：覚醒

2009年4月8日（水）

今日からもう普通に授業が行われた。

現代文の授業の時に、悠は湊とは逆側——右隣の席の住人である順平に質問の答えをせがまれたりもしたが、授業を真面目に聞いていたために正しい答えを教えられた。

そんな縁もあつてのことか、その日は順平に港区にあるシヨツピングモール[〃]ポロニアンモール[〃]を案内してもらうことになった。

湊はゆかりを含めた女子グループと帰るらしいので別行動だ。

「ガツコのヤツらと、ちよつとどこか行くべーつてなるとココだな」
「そうか」

悠は順平の言葉に頷いて、周囲に視線を向ける。

噴水のある広場を中心に配置された数々の店。

中にはちよつと怪しげな店もあるが、確かに学生の暇潰しには最適な場所だろう。

実際二人以外にも、多くの学生の姿があつた。

「カラオケとか、ゲーセンとか、あとCD見たりとか。あとアレよ。クラブ。遊んだり、

服買ったりは全部ここで済むな。とりあえず一通り見て回るか？」

「ああ。頼む」

「OK! このポロニアンモールマスターの伊織順平様に全部任せておけて！ これで今日からお前もポロニアンモールマスターってな! ……クラブは行ったことないけどな」

やたらとテンションの高い順平と遊び回った後に寮へと帰れば、その日はもうそれなりにいい時間だった。

疲れていた悠は、上着を脱ぎ、ネクタイを緩めると着替えないうちに眠りに落ちてしまった。

「明日もまた案内してやるよ」なんて言う順平の言葉通り、翌日もまた同じような時間が流れる。

何か夢を見たような気もするが、それは結局思い出せなかった。

そして――。

2009年4月9日(木)

運命の影時間が訪れる。

ドンドンドンッ!

悠は部屋のドアが激しくノックされる音に目を覚ました。

とりあえず近くにあった上着を羽織る。

「鳴上くん、起きて！ ゴメン、勝手に入るよっ！」

勢い入ってきたゆかりの後ろには湊の姿もある。

「……二人してどうした？」

「うーん。私はよく分からないんだけど、何か物音が聞こえたから、ラウンジに降りようとしたらゆかりが……」

「悪いけど説明してる暇ないの！ 今すぐここから出るからっ！」

湊は悠と同じく事情がわかっていないようだが、ゆかりは焦っているようだ。

「念のためにコレ持ってる！」

そう言って悠が渡された物は「模造刀」だった。

見れば湊は「薙刀」を持っていた。

不審者にしても、少し大げさな気がする。

だが、ゆかりの焦りようからしても何かが起こっていることは間違いないだろう。

「これからどうするんだ？」

「とにかく急いでるの！ 1階の裏口から外に出るよっ！」

ゆかりの後に続いて裏口の前まで行くと、何やら通信が入った。

『岳羽、聞こえるか!!?』

状況的にか、いつもより硬質ながらも凜としたその声は、上級生の桐条美鶴のものだった。

「ハ、ハイッ! 聞こえますっ!」

『——気をつけろ。敵は一体じゃないみたいだ。こことは別に……本体がいる!』
ドンドンドンッ!

「うわっ、何々?」

「ひ、ひとまず退却!!?」

裏口のドアから始まり、壁や窓を叩く音は三人が走るのに合わせて付いてくる。

三人を追いかけて来ているのだろうか。

三人は追い立てられるままに屋上へと出た。

「フウ……鍵も掛けたし、ひとまずは大丈夫かな……」

屋上のドアに電子ロックを掛けたゆかりが吐き出すように呟いた。

しかし、その気配は彼らの背後、屋上の縁、壁を登るといふフザケタ方法で現れた。

蜘蛛のような……とでも言えばいいのか、黒く無数の腕、その腕が握る仮面と剣、完全なる異形の存在——化け物だ。

「嘘ッ……!!? アレがここを襲ってきた敵……シャドウよっ!!!」

「シヤドウ!!?」

悠はその光景に既視感を覚えていた。

しかし、頭にフラッシュバックし続けるその何かは形にならない。

それでも、立ち向かわなくては行けない。

そんな想いを、手の中にある武器の感触と自分以外の二人の存在が後押しした。

「逃げろっ!」

そう叫ぶと、悠は模造刀を手にシヤドウに挑む。

何故だか戦い方が分かる。

そのおかげで無数の腕の無数の剣を相手にたった一振りの模造刀で斬り結べていたが、何かが足りない。

そもそも自分の身体はこんなにも動かなかつただろうか。

徐々に強くなるそんな違和感を感じながら、それでも悠は戦っていた。

——だが、限界は悠ではなく悠が手にする模造刀に先に訪れた。

シヤドウの攻撃を受け切れずに模造刀が碎け散る。

悠は瞬間的に、後方に転がるように跳び退いた。

その英断で悠が斬られることはなかったが、その手の中に握られたそれは、もはや柄だけの存在と化していた。

マズイ——悠が代わりになる物は何かないかと辺りを見れば、いまだ逃げずに立ち竦む二人の姿がある。

シヤドウもそれに気付いたのか、そちらに狙いを定めた。

「くそっ！」

悠が咄嗟に投げた柄がその攻撃の軌道をわずかにずらした。

しかし、衝撃にゆかりがよろめき倒れる。

一方の湊はそんなゆかりのほうによるよると歩くと、落ちていた銃を拾った。

そういうえば、先程倒れる前に、ゆかりが握っていたのを、一瞬だが悠は見たような記憶があった。

銃で戦う気かと思えば、湊はその銃口を自分のこめかみに当てた。

「何を——っ!!？」

そうは思いながらも、その使い方で間違っていないという直感がある。

悠は湊から目が離せない。

「ペル……ソ……」

湊が何事かを呟きながら、ついにその引き金を引く。

我は汝……汝は我……我は汝の心の海より出でし者……幽玄の奏者……
“オルフェウス”なり……

機械的な関節——軀をして、ハート形の大きな豎琴を持った存在が湊の背後に現れる。

その存在はシャドウに対して、手に持った豎琴で攻撃を仕掛けた。

一進一退の攻防、それだけでも勝てるかと思つたが——事態はさらに急変する。

戦いの最中、まるでこれでは足りないと言わんばかりに、自身の殻を脱ぎ捨てるようにして、別のナニカが、そのオルフェウスの中から出てきた。

黒く、先程のオルフェウスに比べれば、ずいぶんと凶悪なフォルムをしている。

肉食獣を連想させる仮面、棺のようなものを鎖で繋ぎ、背中にマントや翼のように纏つたナニカは、その腰に佩いた剣を引き抜くと、跳ぶようにシャドウに斬り掛かった。

その姿、その力は、格が違うと思えるほど圧倒的に、シャドウという名の化け物を屠つた。

どちらが化け物なのかと思いたくなる光景だ。

その新しく現れた黒いナニカは、煌々と輝く満月の下で、その存在を示すように高らかに吼えると、その姿を消した。

「——今のは……」

その光景に目を奪われていた悠が、ようやく絞り出したような声で呟こうとした時、その影が視界に入った。

先程のとは別の個体——いや、斬り刻まれたシャドウの破片だろうか。

どちらにしろ黒いナニカが屠った時のシャドウに比べれば小さく、迫力もないが、異形の存在には変わりがない。

悠は反射的に駆け出そうとして、手元に武器がないことに気付いた。

どうするかと悩んだ瞬間に思い浮かんだのは、浮かぶのが当然と思えるほどに強烈だった先程の光景だ。

その光景が、悠が戦っていた時に感じた物足りなさ、違和感に一致する。

それを自覚すると、心の中からそのイメージが浮かんできた。

悠はポケットに手を入れる。

そこにそれが入ってる気がしたので。

そして、実際に入っていたそれを——黒いフレームのメガネを掛ける。

そのメガネは悠にとって、戦闘モードに入る合図だった。

心が高揚し、青白い炎が悠の周囲に湧き上がる。

制服の上着がバタバタとはためく。

悠はその求めていた感覚に笑みを浮かべ、中空から舞い降りたアルカナカードをぐしやりと握り潰した。

「……ペルソナ！」

悠が先程の湊と同じくその力ある名を叫ぶと、悠の背後に学ラン——いや長ランのよ
うな服を着て鉢巻きを締めたような姿の仮面の怪人が現れた。

その手には矛のような巨大なナイフを手にしている。

その怪人——「イザナギ」は、眼前のシャドウを見据えると、手にしたナイフで斬り
裂いた。

見た目的に先程の焼き直しみたいな光景——……

それで今度こそ、その日の戦いは終わりを迎えたのだった。

同時刻——作戦室——

その状況をモニターで見守っていた彼らは、自分たちが駆け付ける前にシャドウを倒
した二人の覚醒に——そのイレギュラーさに声を上げて驚愕を示した。

「なっ——!!?! どういうことだ!」 「召喚器」も使わずにペルソナを召喚するだど!!?!

それに有里は二体の違うペルソナを操ってみせた! いったいどうなっているんだ!!?!
「理事長、今のは……」

今更隠すほどのことではない理事長——幾月は美鶴の言葉に、メガネの位置を直しな
がら自らの考えをまとめるようにしながら答えた。

「……いや。確かに驚いたけどあり得ないことではないよ。召喚器はあくまで補助。覚

悟を示すための道具だ。彼がそれを必要としないくらいに強固な精神力の持ち主——たとえば、自分の全てを受け入れ、肯定しているとすれば、可能性はある」

「では、有里については？」

「うーん。ペルソナは心の力だ。ならば、その時の精神状態によって、ペルソナが姿を変えられることもあり得るかもしれない……としか今は言えないな」

「……なるほど。とりあえず、今は三人を保護しましょう。有里に至ってはいきなり連続召喚した影響でかなり消耗しているようです」

「そうだね。しばらくは安静が必要かもしれないね」

物語は動き出す。

主人公足り得るイレギュラーは二人。

それがこの先の確定したはずの未来に、どれだけの影響を与えるのかは、まだ——誰も知らない。

4月10日（金）～19日（日）：特別課外活動部

2009年4月10日（金）

ペルソナの覚醒と連続召喚で消耗し、意識を失ってしまった湊と違って悠は、ある程度の説明を受けていた。

毎晩深夜0時になると訪れるという影時間。

それは1日と1日の狭間にある隠された時間。

影時間内では、普通の人間は棺のような姿に象徴化して、その時間があることすら感じない。

その中ではシャドウという異形の化け物が現れ、何らかの要因で象徴化を逃れて生身で影時間にいる者を襲い、精神を食らう。

精神を食われた者はたちまち生きた屍——これは確定ではないらしいが、近頃流行り出している「無気力症」という症状も、そこから派生したものではないかと彼らは考察していた。

しかしそんな象徴化を逃れた人間は、影時間の適性者としてある力に目覚める可能性が存在する。

それが——ペルソナ。

影時間内では人間だけでなく電気や携帯が止まったように、普通の機械は動かない。つまりシャドウに対抗する手段は、そのペルソナのような超常の力に限られてくるわけだ。

だからこそ、彼らは自分たちにしかできないこととして戦っている。

“S・E・E・S”……特別課外活動部を英文字に変換して頭文字をとった略。

表向きは部活として——実際にはシャドウを倒す集団として選ばれた者たちの集まり。

私立月光館学園・巖戸台分寮に暮らす者たちのことだ。

悠と湊が入寮したその寮は、S・E・E・Sの本拠地という実態を隠していたのだった。

「影時間が訪れる理由は分かっている。シャドウを倒すとともにその謎を解明するのが私たちの目的だ」

「お前と有里も少し特殊な形とはいえ俺たちと同じくペルソナに目覚めた。だから二人には仲間になってもらいたい。有里にも起きたら同じ説明をするつもりだ」

上級生の桐条美鶴と、そこで初めて自己紹介を交わした短髪で赤いベストと皮手袋が特徴的な同じく上級生の“真田明彦”、さらにはゆかりと幾月を加えた四人が現在の主

なS・E・E・Sのメンバーらしい。

正確にはその後ろに桐条財閥が存在しているようだが、実動部隊として動くのが彼らであるのは間違いないが。

「……俺や——有里が適性者だということは分かっていたんですか？」

「ん？ どうなんですか、幾月さん」

「分かっていたと言うよりは、可能性として目星を付けていた程度さ。とりあえず一番安全なこの寮に入れといて、適性者じゃなければ、適当な理由を付けて他の寮に移ってもらうつもりだった」

どう目星を付けていたのかは知らないが、何せ彼らの後ろにいるのは世界有数の桐条財閥だ。

悠はそれで納得することにして、少し考えを巡らせた後に尋ねる。

「——なるほど。……答えはすぐに出したほうがいいですか？」

「もちろんそのほうがいいが、有里のこともある。彼女が目覚めるまでは私たちも特に動くつもりはないから、それまでは答えを待ってもいい」

「とはいえ、どの道、影時間は毎晩嫌でも訪れるんだ。単純に自衛を考えても、俺たちに協力するのが無難だぞ。仲間にならなかつたからと見捨てるつもりはないが、どうしても優先度は低くなるからな」

「ちよつ、先輩にそんな言い方されたら彼も困るんじゃないや……あんなのと戦うとか、どう考えても普通じゃないし……そりや、仲間になつてくれるなら……その、心強いですけど……」

ゆかりは窺うような視線を悠に向ける。

シヤドウが現れた時の慌てようからして、ゆかりもS・E・E・Sに入ってから間がないのかもしれないと悠は考えた。

「……そうだな。鳴上も色々あつて疲れてるだろう。答えは先程も言ったように有里が目覚めてから聞かせてもらうことにしよう」

「分かりました」

美鶴の言葉にその日は解散し、湊の目覚めを待つことになった。

同日 — 放課後 — 【2—F教室】

「有里、いきなり休みだな。お前同じ寮なんだから何か知ってる? やっぱ、転校して環境が変わつたから疲れが出ちまったのかな?」

影時間は終わつても、学生としての日常は変わらずに続く。

影時間で起きたアレコレやその説明を何とはなしに振り返っていた悠は、一瞬反応が遅れたが、話し掛けてきた順平に視線を向けると頷いた。

「だと思う。きつとすぐによくなくなるさ」

「そうか？　ならいいけどなー。あ、そうそう！　そういや、お前の寮って真田さんも――ああつ、いやいや、やっぱ今のなしっ！　忘れてくれっ！」

「どうした？」

順平はいつもテンションが高めだが、それ以上にどこか浮かれた様子を見せる姿に悠は首を傾げる。

しかし順平は意味深に笑うと話題を変えて誤魔化した。

「へへっ。ひよつとしたらそのうちに分かるかもな。とりあえず今日はどうする？　巖

戸台周辺の食いもん屋でも紹介してやっか？」

「順平がいいなら頼む」

「OK！　どこにすっかなー。ハンバーガーかラーメンか……牛丼って手もあるな」

そして……湊の意識が失われてから戻るまで約3日を要することになった。

2009年4月12日（日）

「目が覚めてよかった」

休日、それに湊が退院するということで悠が辰巳記念病院に顔を出すと、湊はちょうど退院の支度を終えたところだった。

湊は身体的には本当にただ眠っていただけのようで、軽い検査のみですぐ退院許可が出たのだ。

入れ違いにならずによかったと思いながら、悠が湊の意識が戻ったことを喜ぶと、湊は若干はにかんで笑う。

「あははっ。心配かけちゃった？ ゆかりにちよつと聞いたけど大変なことになってるみたいだね」

「ああ。答えは有里が目覚めてからって話だったけど、なんか俺たち以外にももう一人候補がいるみたいで、そいつが来てからってことになった。有里も今のうちに考えておくといい」

「そうなんだ？ って言っても、結局は答えなんて一つしかない？」

「……そうかもな」

そういうことになっていた。

悠たちがシャドウと交戦した前日の影時間内に、明彦——上級生の真田明彦がもう一人適性者を見つけていたらしい。

その時は混乱していたので軽く説明して帰したが、再び話して、とりあえずの協力を取りつけたとのことだ。

その人物もしばらくすれば入寮してくるといいう話で、説明をするなら全員揃っていた

ほうが都合がいいだろうと、返答はその時まで待つという話になったのだ。

もつとも——湊の言う通り、ここまで状況が揃ってしまっていれば、答えはもう決まっているのかもしれない。

「——有里。一応は病み上がりだろ？ 今日の夕食は俺が用意するよ」

「え、ホントにーっ？ そういえば趣味が料理とか言ってたっけ？ 私、男の子の手料理とか初めてかもっ！」

「期待に副えばいいが」

その後、その場に居合わせたゆかりにも手料理を振る舞った悠。

その評価は——……。

「うまーっ！ 鳴上千んっ、これすっごい美味しいよっ！」

「……ホント。男の子にこれを作られると、ちよつと自信失くすかも」

どうやら大好評だったようだ。

2009年4月19日（日）

「今日だよね？ そのもう一人の人が来るの」

「ああ。そのはずだ」

間に流れた1週間という時間では、やはり影時間の存在こそ意識させられたものの、

シャドウの襲撃のような事態がまた起こることもなく、改めて転入生としての日常を――学園や港区に慣れるための時間として用いられた。

そして今日、今度は改めて非日常に向かい合うことになる。

「どんな人かな？」

「……私、なんかすっごく嫌な予感するんだよね」

そのために必要なもう一人を待っている三人だったが、ゆかりはその人物に心当たり

——あるいは何かしらの予感があるのか、微妙な表情をしていた。

そしてガタガタと大きな荷物を持って現れたその人物はと言うと。

「あ、順平だーっ」

「順平か」

「ほらーっ！ 嫌な予感がするって言ったじゃんっ！」

「よっ！ 三人とも！ ——あー、テヘヘ……今日からここに住む伊織順平です。どうもっス」

明彦が言うもう一人の人物とはクラスメイトの伊織順平だった。

順平がどこことなく浮かれたようにテンションが高かったのも、この影響だったのかもしれない。

確かに漫画やゲームのような展開にその気持ちは分からなくはないのだが……。

——とにかく、順平が荷物を置いて一息吐いた後に、彼らは寮の四階にある作戦室へと集められた。

「……説明は今した通りだ。改めてこの話を聞いた上で君たちの答えを聞きたい」

もう一度、影時間やシャドウ、ペルソナに関する説明がなされ、美鶴が新規組の三人を見る。

「オ、オレはやるツスよ！　なんか正義のヒーローみたいでカッコいいじゃないスか！」

「私もです。いろいろ考えたけど、結局それしか答えはないかなって思うから」

「そうか。鳴上はどうだ？」

↓仲間になる

仲間にならない

「一応理由を聞いてもいいか？」

「はい。でも、二人とそう変わらないです。シャドウが人間を襲ってて、それをどうにかできるのが自分たちだけならやるしかない」

「分かった。それでは君たちに専用の召喚器と腕章を渡す。鳴上は召喚器は必要ないかもしれないが、一応持っておいてくれ」

美鶴は悠の言葉に頷くと、アタツシユケースの中から銃型の召喚器と、S・E・E・Sと入った腕章を取り出し、三人へと手渡す。

悠も素直に頷き、それらを受け取った。

「必要ないって何?」

渡された召喚器を眼前に掲げ見ながら、順平は傍のゆかりに尋ねた。

「鳴上くんは召喚器がなくてもペルソナを呼べるみたいなの」

「ふーん。それだとなんか違うのか?」

「別にそれ以外の違いはないんじゃない? そもそもペルソナって一人一人違うものだから」

「そか」

ならいいやと順平は再び召喚器にその興味を戻した。

そうして、それぞれが召喚器と腕章を受け取ると、幾月が口を開く。

「いや、感謝するよホントに。これでやっと始められそうだよ」

「おっ! さっそくなんか始まるんすか? なんかワクワクするっす!」

「これだけ頭数が揃えばあの場所に挑める」

「あの場所って…… “タルタロス” ですよね?」

「タル……なんすかソレ?」

「タルタロス。あそこは言ってみればシャドウの巢。影時間の謎を解くカギがある場所だ。……おそらくな」

悠も湊も順平と同じくその場所については何も知らない。

ただ、おそらくということとは、そうじゃない可能性もあるということだ。

自分たちだけじゃなく、S・E・E・S自体が、まだ何も分かっていない手探りの状態。

影時間の真実を知りたければ、これから自分たちの手で探すしかないようだ。

「……今日はもう遅い。これまでにしようか。タルタロスには近々行くことになると思うが、明彦はこの前の『大型シャドウ』に襲われた際の怪我がまだ治っていない。同行はしてもらおうが探索は無理だ」

「分かっているさ」

大型シャドウとは湊のペルソナが倒したシャドウのことだ。

あれは寮に現れる前に見回りをしていた明彦と交戦し——というか、その戦いで負傷した明彦が連れてくる形で現れたらしい。

「大型シャドウ?」

「この前の満月の時に出たのよ。——でも、怪我つてペルソナで治せないんですか?」

一人事情を知らない順平に軽く答えると、ゆかりは自分も疑問を口にした。

「今、私たちが使える『ディア』では足りないようだ。一時的に痛みを和らげることができるが、それ以上の効果はない」

「『ディア』?」

「回復スキルよ。ペルソナが使える魔法みたいなもの。切り傷とか体力の消耗はある程度回復できるけど、ヒビとか骨折だと、ダメってことみたいね」

ペルソナは超常の力である証明として、魔法やら、そういう空想の世界に存在する力を現実のものとして使うことができた。

「へー! それでもすげーじゃん! マジで魔法とかさ!」

順平はその言葉に浮かれた様子を見せるが、ゆかりは溜息を吐いてその短絡的な思考を戒める。

「そんな騒がないでよ。私たちの相手するシャドウだって似たようなことして来るんだから」

「え、マジで?」

「マジよ。だからあんたもそうやって浮かれてばっかじゃないことね」

「それは明彦にも言えることだな。——そうだ。理事長はどうされますか?」

「え、僕はここに残るよ。ペルソナ、出せないしき……」

幾月は影時間に適応こそできたが、その言葉通りにペルソナは出せない。

なのでタルタロスに行く時も付いて来ることはしないようだ。

そして彼らは適性者足り得なかった理事長の発する微妙な空気の中解散した。

「……けどさ。正直言うど驚いたぜ？ お前らもペルソナ使いだって聞かされた時はヤ」

「こつちも驚いたわよ」

「でも、知ってる顔がいてよかつたよ。やっぱ、一人じゃ不安だったしな」

作戦室から出ると順平はそんなことを言い出した。

「浮かれた顔を見せてはいても、いきなりの非日常に対して、やはり不安に思う部分もあつたらしい。」

「順平……」

「ま、お前らもオレつちが仲間んなって、ホントんどこ嬉しいだろ？」

「え？ ま、まあね」

ゆかりは若干言葉に詰まったが、最低限同意する優しさをみせた。

「うん！ みんなで協力して、世界に平和を取り戻すために頑張ろうよっ！」

「——世界、か」

「規模大き過ぎでしょ」

「いやー、そんなことないんじゃない？ 別に影時間ってここだけの出来事じゃない

んだろ？」

「え、たぶんね」

「だったら、その謎を解明すれば世界的偉業ってことっしょ!」

「だねーっ!」

「……はあ。あんたらしいよね。なんかお気楽でさ」

夜が更け、影時間が来て、影時間が明けて、再び影時間が訪れる時——彼らはその非日常の集大成とも言える異形の塔へと挑むことになる。

タルタロスという物語の舞台は、すでに準備は整ったと、主人公たちが訪れるのを待っていた。

4月20日（月）：タルタロス

2009年4月20日（月）

ガラッ！

そうして開け放たれた扉から入って来た人物に、彼らの教室がざわめく。

桐条美鶴——この学園の生徒会長であり、完璧超人を体現したような人物ならその反応も当然だ。

しかも先輩。

「用件がある。この間話したことを覚えているか？」

「お、例の話っスね？」

「私は色々と準備がある。そうだな。0時前に学園の校門前に集まってくれ」

「なんかよく分かんないけど、オレっちに任せてくださいよ」

「そうか。じゃあ伝えたぞ」

ピシヤ！

ざわめきをよそに言うだけ言うと、扉を閉めて美鶴は去って行った。

悠や湊には目配せこそしても、挨拶一つしていない。

「ほんつと用件だけ言つて、去つてったな……」

「私たちと違つて忙しいんでしょ。なんか色々さ」

「え、あれ？ ゆかりツチつて桐条先輩のこと嫌い？」

「……別に嫌いってわけじゃないけど」

ゆかりは視線を逸らすと、どこか複雑そうな表情で呟いた。

同日 — 23時55分 — 【月光館学園前】

「よし、みんな揃つたようだな」

夜中と言える時間帯に学園の校門前に集まる学生たちの姿。

これで見つかれば補導とかされそうなものだが、何せ彼らの後ろにいるのは桐条財閥。
この月光館学園にしても、桐条財閥の出資によつて成り立っているために、その警備関係やらもある程度把握していた。

「で、結局なんなんですか？ そのタル——何とかつて……いったいどこにあるんですか？

もうみんな揃つてますよ。出発しなくていいんですか？」

「あーっ！ 鬱陶しいわね！ あんたは少し落ち着きなさいよっ！」

明彦がそのやり取りを横目に携帯の時計を見る——23時59分。

「……そろそろだな」

その携帯の表示が深夜0時になると同時に消えた。

それに合わせて学園がその様相を変えていく。

地面から突き出るようにして様々なギミックが現れ——それはあつと言う間に天高く聳える巨大な塔になった。

「これが……影時間の中にだけ現れる迷宮。タルタロスだ」

それは子供が無秩序に組み上げた積み木の建物を、無理矢理超常の力で固めたような、建築方式とかバランスとかそういうものを完全に無視したデタラメな塔。

見ているだけで人を不安にさせるようなその建物に、順平はただ叫ぶ。

「な、何なんだよコレ!!? オレらの学校! どこ行っちゃまったんだよ!!?」

「影時間が明ければまた元の地形に戻る」

「——ってかオカシイっしょ!!? 何でウチの学校のトコだけこんなっ!!?」

しかし、そんな順平の疑問の叫びに応える声はない。

何故なら——。

「分からないんすか……?」

「……ああ」

そう。

その答えを、影時間の真実を求めて、彼らはその塔に挑もうとしているのだから。

「きつと色々あるんでしょ事情が……いいじゃん別に……」

「ここには絶対何かある。影時間の謎を解くカギになるモノがな。そのための探索だ。ワクワクするだろ?」

「明彦。意気込むのは勝手だが探索はさせないぞ」

「う、うるさいなっ。何度も言うな!」

そうして一行は、巨人が入ることを想定でもしているのかというほどに巨大な門を潜り、タルタロスの内部へと足を踏み入れた。

「おお。中もスゲエな」

「ここはまだエントランスだ。迷宮は階段の入り口を抜けてからだ。——それから、しばらく探索はお前たち四人だけで行ってもらおう」

「えっ? 私たちだけでですかっ?!?」

「深入りさせるつもりはない。私は通信でここからお前たちをナビゲートする」

そう言つて美鶴が押してきたバイクを軽く叩く。

何でも影時間でも動く特別製らしい。

それとペルソナを使って後方支援に徹するということのようにだ。

「真田先輩は怪我だし……先輩たちは二人とも来られないと……」

「そういうことだ。——それと、探索にあたり、現場を仕切るリーダーを決めておこうと思う」

明彦の言葉に、順平は目を輝かせる。

「リーダー？ 隊長？ ハイ！ ハイハイッ！ オレオレッツ！」

「……俺としては鳴上か有里に任せたいと思っっている」

全身でリーダーになりたいとアピールする順平だが、明彦は数秒間無言でその姿を見つめた後、自分の中であっさりとそれを切り捨てたのか、悠と湊の二人に視線を向けた。

「何でっスか!!？」

「——あのね。二人はもう実戦経験者なの」

「え、マジ!!？」

当然その選択に文句を言う順平だったが、ゆかりの言葉に驚いて、明彦に真偽を確かめる。

「それもあるが、選んだ理由は簡単だ。順平。岳羽もだが……ペルソナの召喚。二人のようになんかできるか？」

「っ」

「そ、それくらい、余裕っスよ！」

順平はともかく——実際ゆかりは、前回の大型シャドウの襲撃の一件では、ビビって

引き金を引けなかったという負い目があった。

しかし、目の前でそれを成し遂げた湊の姿に、今回はと覚悟を決めてきたので、言葉ではなく行動で示してみせると、軽く拳を握る。

「そうか? まあ、今回は初回だし実績を優先する。適性によつては交替も考えるから我慢しろ」

「はあ……分かりましたよ。——それで? 結局どつちがリーダーやるんだ?」

「別にどつちでもいいぞ」

「はーいつ! じゃあ、私やりたいっ!」

明彦の言葉に、はいはいと手を上げる湊。

そんな姿に握ったはずの拳も解いて、ゆかりは溜息を吐いた。

「順平並のお気楽思考がもう一人……」

「鳴上はそれで構わないか?」

「はい。希望者がいるなら、とりあえず任せます」

落ち着いた様子でそのやりとりを見守っていた悠は、頷いて肯定を示す。

「——よし。じゃあ、リーダーは有里に任せる。中では何が起こるか分からない。それぞれ準備運動でもしておけ。準備ができたら探索開始だ」

各々渡された武器の具合を確かめたり、屈伸をしたりしてその時に備える。

そんな中、湊はあらぬ方向を見てぼーっとしていた。その先には別に何も無い。

けれど悠はその先にごく懐かしい気配のようなものを感じた。その気配に想いを馳せていると、悠の意識も飛んだ。

「——待ってたわ」

「待ってた？」

周りの風景が変わったわけではない。

それでもどこか違う場所で、悠はその誰かに再会した。

「今の貴方には分からないでしょうね。——これを」

「これは？」

「かつて貴方が未来で築いた絆」

「かつて？ 未来？」

「それは今はほとんど何の力も持たないただの器。それに中身を注ぐのは貴方の役目よ」

「どういう意味だ？」

「戦いをこなせばそのキツカケは得られる。けれど、本来の力を取り戻すためには絆の力が不可欠なのよ」

それ以上その誰かは、何かを説明するつもりはないようだ。

悠は渡された蒼い装丁の本をばらばらと捲ってみた。

その中は白紙——いや、*「螺鈿細工のしおり」*が挟まった最初のページにだけ何かを描かれている。

《愚者—FOOL—》

LV1 イザナギ

電撃：耐 疾風：弱 闇：無

力5 魔5 耐5 速5 運5

ジオ スラツシユ ラクカジャ ラクンダ タルカジャ 疾風耐性 食いしぼり

勝利の息吹

「これは——俺のペルソナ？ ペルソナの本ってことか？」

「*「ペルソナ全書」*。それがその本の名前」

「……ペルソナ全書」

「貴方がその本を再び——いいえ、それ以上にすることを願っているわ」

その誰かの気配が遠ざかるのを感じる。

「待て！ まだ聞きたいことが——っ！」

「……ふふっ、未来で待つてるわ。貴方が掴みとる、ね」

はつと気付き、辺りを見回せば、そこは変わらずタルタロスのエントランスだ。

誰かがこちらに注目している気配もない。

白昼夢のような現象だが、その手には半透明になった青い装丁の本。

その本をもう一度捲ってみようとすると、本はしかし悠の内に入るようにして消えた。

代わりに頭の中でその本がイメージできる。

——とはいえ内容は変わらず。

自身のペルソナであるイザナギがその精巧なイラスト付きで詳細とともに描かれているだけだ。

今はそれ以上の進展はなさそうだと、悠はペルソナ全書について考えることをやめた。

「——おい、しつかりしてくれよ。お前は今回のリーダーなんだからな」

同じく——というべきなのか、湊が順平に声を掛けられ、そのどこかから戻ってきたようだ。

「あ、えつと……うん。ごめんねっ。ちよつとぼーっとしてたかな？ でも、大丈夫大丈夫

夫！ 私の準備はバッチリだよ！ みんなはどう？

「おわつ、薙刀を振り回すなって！ ……ったく。オレっちは大丈夫だぜ。——ゆかりッチと鳴上はどうだ？」

「うん……。私も大丈夫。——覚悟、決めたから」

「俺も問題ない」

「だってよ、リーダー」

「うんっ！ じゃあ、桐条先輩！ お願いしますっ！」

「——了解した。それではこれよりタルタロスの探索を開始する」

四人は顔を見合わせると頷き合い、エントランスにある階段を上って行った。

タルタロス —2F— 【世俗の庭テベル】

『全員聴こえるか。ここからは私が声でバックアップする』

「えっ、中の様子が分かるんスか？」

『君は何のために私が残ったと思っている。——いいか？ このタルタロスは時間によつて中の構造が変わってしまう。ある程度こちらからサポートできるが、くれぐれもまとまって行動してくれ』

「了解ですっ！」

『よし。ではとりあえず道なりに進んでみてくれ』

美鶴の声に従い四人はその手に武器を持ちながら道なりに進む。

「にしても、スゲエな」

「うん……なんか迷いそう」

テベルは格子模様の床に、西洋風の城の中とでもいうべき通路が続くフロアのようだ。

しかしとところどころ意味不明に建てられた柱やら、ネジ曲がりどこにも通じてない階段やらが侵入者である彼らの感覚を惑わす。

「つーか、お前なんでメガネしてんの？ 目悪かったのか？」

「あ、ホントだ」

悠が探索を始めてから掛けた黒いフレームのメガネの存在に順平が目留め、周囲をキョロキョロと見回していたゆかりも、今気付いたと悠のその姿をジロジロと見る。

しかしその悠のメガネ姿に一番反応したのは湊だった。

「——メガネ男子！」

「あんた、どこでテンション上がってんのよ」

そんな湊はさっと携帯を取り出し、携帯が使えないことに気付き、とてもショックを受けた表情を見ると、後で撮らせてーと悠に泣きついた。

「特に理由があるわけじゃないんだけど、何だかしっくりくるんだ」

「カツコからってヤツか？ まあ、気持ちは分かんなくもないけどな。メガネの意味は分かんねえけど」

「でも、戦いになつたら、レンズとか危くない？」

「一応頑丈なヤツだと思う」

「そうなの？」

「クマ印だ」

「クマ？」

ゆかりが不思議そうに繰り返すが、悠自身も意味が分かってないのか、言った直後に首を捻る。

そこに美鶴の通信が入り、彼らの意識が切り替わった。

『お喋りはそこまでだ。前方の少し開けた空間にシャドウの反応がある。ここは先制攻撃を仕掛けよう。岳羽。伊織。できるか？』

「ペルソナでつてことですよね……」

『そうだ。と言つても、岳羽のペルソナはまだ回復スキルしか覚えていなかったな。伊織のペルソナで攻撃して、岳羽はそのサポート。ペルソナの召喚による体力の消耗を回復してやってくれ』

「分かりました」

「へへっ、いきなりオレっちの見せ場か」

順平は若干引き攣ったような笑みを見せると、ブルリと一度身体を振るわし、召喚器を握りしめた。

『有里と鳴上は伊織が討ち漏らした場合の追撃を頼む』

「はいっ！」

「了解だ」

「大丈夫だっつて！ オレ一人で決めてやっからよ！」

『タイミングはこちらで指示する。もう少し近付いてくれ』

美鶴の指示に従い四人はじりじりと進む。

『シャドウの姿は見えているな？——よし、今だ伊織！』

「っ、——ペルソナッ！」

順平が召喚器をこめかみに突きつけその引き金を引く。

順平のペルソナはどこか鳥をイメージさせるような、けれど人型の“ヘルメス”。

その腕と足を繋ぐような形で存在する金属製の翼のようなモノで身軽にシャドウを斬り裂いた。

『よし、いいぞ！ 伊織、敵を撃破だ！』

「へ、へへっ……何だよ。やれんじゃねーか……」

「足震えてるよ」

「こ、これは武者震いってヤツだつて！」

「はいはい。戦闘の後に何言つてんだか……でも、次は私の番だよ」

ゆかりが召喚器をぎゅつと握りしめると頭に突きつけ、一旦瞑った目を見開くと引き金を引いた。

「——ペルソナ！」

牛を模したような台座に鎖で繋がれ、けれど肅々と座る女性のペルソナ——その名は「イオ」。

イオがその身から光を放つと順平を包んだ。

回復スキルの「ディア」だ。

「おわわっ……つと、なんか身体が楽になったような……」

「どうやら、成功したみたいね」

『ああ。伊織、岳羽。二人とも良くやった。——だが、探索はこれからだ。その一つ先の空間にあるシャドウ反応はここより大きい。複数いる可能性があるな。次は有里と鳴上。二人をメインに戦ってみてくれ』

「了解ですっ！」

「分かった」

「へへっ、お前らがミスっても後にはオレっちが控えてるから、気軽にやれよ」
「回復なら任せて」

二人は頷くと、先に進んだ。

その先の空間には確かに三体のシャドウがいたが、オルフェウスとイザナギの魔法スキルを使うことで、相手を怯ませる。

『いいぞ！ 弱点にヒットだ！ 敵が怯んだぞ！』

「有里！ ここは総攻撃だ！」

「うんっ！ じゃあ、鳴上くん、合わせて！ いくよー！」

ドカ！ バキ！ ボコ！ ズガ！

その後は息を合わせての総攻撃。

ペルソナではなく剣に薙刀に弓にと自分たちで戦い一気に殲滅させた。

ペルソナは具現化しなくても、その身に宿していることを意識するだけで、自分たちの身体能力を向上してくれる。

普段では考えられないような速さや力を発揮した彼らは、四人いることもあって、誰か一人に的を絞られるようなこともなく、それ以降も上手い具合に戦っていた。

何度目かの戦いの後、不意に悠の目の前にペルソナと思われる絵柄が描かれたカード

——悠が召喚の際に握り潰すのと同じようなモノが現れてぐるぐると回り始めた。

悠はそれを見極め掴み取る。

すると、心の中に——そして頭の中でイメージするペルソナ全書のページに絵柄が追加された。

《恋愛—LOVERS—》

LV2 ピクシー

電撃：耐

力2 魔3 耐2 速3 運3

ディア

悠はそれを見て首を捻った。

このペルソナに付け替えることができるというのは感覚的に分かったのだが、今はLV3に上がつてるとはいえ、イザナギに比べて、能力値もスキルもだいぶ弱く感じる。

それ以前にペルソナのアルカナに違和感を覚えた。

何かが違う気がするのだ。

これがあの誰かが言っていたことだろうか。

つまり、これはただのキツカケで、本来の力とは別物なのかと悠は思う。

「『アップサラス』……?」

湊のそんな呟きに悠は視線をそちらに向けた。

「ん? 有里、どうかしたのか? もしかして疲れちった?」

「あ、ううん。そうじゃなくて、私、なんか新しいペルソナに付け替えられるようになったかも?」

「はあ?」

『どういうことだ。有里』

「……えっと、説明し辛いですけど、今のシャドウを倒し終わったらぐるぐるーってカードが回って、それを掴んだら、ぱーって!」

身振り手振りで説明する湊に、悠を除いた者たちが首を捻る。

『うん? よく分からないな。実際にそのペルソナを出すことはできるのか?』

「たぶんできますけど……戦闘外だとちよっと。氷結属性のスキルしかないみたいで……」

『ならば次の戦闘の時に——』

「あ、桐条先輩。俺もいいですか?」

言うならこのタイミングかなと悠が話に割り込む。

『なんだ?』

「俺も別のペルソナに付け替えられるみたいですよ」

『何っ!!?』

「マジかよっ? よく分かんねえけど、ペルソナって付け替えられるもんなわけ?」

「え、私、無理。確かに、湊は最初に召喚した時に、途中から別のペルソナに替えてたけど……」

『鳴上のはすぐに出しても支障はないか?』

「はい。覚えているのは回復スキルなので」

『そうか。では、頼む』

「分かった。——『ピクシー』!」

悠は頭の中で『螺鈿細工のしおり』をピクシーのページに挟む。

そして、手の中に現れたアルカナカードを握り潰すと、まんま妖精のようなペルソナが現れ、湊の体力を回復した。

「おわっ、なんか可愛えーのが出たっ!」

「回復ありがとっ」

「さっきまでの、イザナギだっけ? とは全然違うのが出てきたわね……」

三者三様の反応……さらにその状況をペルソナやらで観測していた美鶴も状況を把

握しようと頭を回転させる。

『うーむ。有里も同じようなことができるとしたらこれで二人か。二人が特別なのか、それとも何か条件を満たせば我々でも可能なのか……。——とにかく、付け替えができるということはスキルの幅が出るということだろう。悪いことではないのは確かだ』

「そうですね。回復スキルを使える人が増えれば、探索もやりやすくなるんじゃないですか？」

『ああ。岳羽の言う通りだ。だが、それだけ精神力を使う場面が増えるというデメリットもある。そのことに注意して、もう少しだけ探索を進めてくれ』

「了解ですっ！」

とりあえずは、探索を優先させるという結論が美鶴の中で出たようで、四人はそれに従う。

「ペルソナの付け替えか、オレたちもできんのかな？」

「まあ、便利は便利そうだけど、なんとなく大変そうじゃない？ ペルソナの経験も分散しちゃいそうだしさ。私はとりあえず今のペルソナに集中したいかな」

「おっとー。そーいう考え方もあるか……」

そんな感じで、多少の変化はあったが、探索は続き――。

「って、おわつ、今度は金！ 金が降って来たんすけど!!」

「タルタロスってなんでもありなわけ……?」

「うーん。ひよつとして私のせい?」

「何かしたのか?」

「また、ぐるぐる―って出たから選んだら、ペルソナじゃなくてコインの絵柄だったの」
「……それが原因っぽいな」

『と、とにかく。ここでは私たちの常識が通用しない事態も起こり得るということだ。その金はせつかくだから回収しておけ。偽金じゃないことが鑑定できたら、タルタロス探索の資金に充てよう』

「はーいっ!」

「なあなあ、多く儲かった日とかは、ちよつとくらい分けてもらえたりしねーのかな?
オレっち、慢性的に金欠気味で……報酬があつても罰当たらねーだろ?」

「そんなことは私じゃなくて桐条先輩に相談しなさいっての……」

この後もアタッシュケースにアイテム発見とか、ドタバタが起きたりもしつつ――。
『うむ。今日はこんなところだな。予想よりも多くのシャドウを相手にするハメになつたが、四人いたこともあつて、苦戦することもなかった。これならこれからも探索を続けて行くことができるだろう』

その美鶴の言葉で、ようやく探索は終わりを迎えようとしていた。

順平はその事実には疲労を顔に浮かべながらも軽口を叩く。

「そ、そつスねー。思つたよりも余裕？」

「その割にはあんた顔がバテてない？」

「そーいう、ゆかりツチもだろ」

「あー、つていうか、体力とか以前に根本的な疲労みたいのが……」

虚勢を張る順平に対して、ゆかりはその身体の芯に蓄積されるような疲労感を素直に認めた。

『そうだな。影時間の中では通常の時間よりも、疲れやすい。慣れれば少しはマシンになるだろうが、やはり今日はここらが限度だろう。全員エントランスに——む。その先に何か装置のようなモノがないか？』

美鶴の言葉に悠が先行し、円形の光を放つ装置を発見する。

「——これか？」

「んー。そうかな？ ありますよ、桐条先輩。なんか変なの」

『起動は可能か？』

『どう？』

「触るだけで動くみたいだ」

『そうか。それは脱出ポイントのはず。起動してみてください』

美鶴の指示に従い、その装置を起動すると——四人は光に包まれ、次の瞬間にはエントランスへと戻って来ていた。

「どわっ、なんだ？ ワープ装置？」

「その考え方で間違っていないだろう。どの階層にもこれがあるとすれば、探索は思ったよりも効率的に進めることができるかもしれない」

「あー、確かに。タルタロスを一番上まで登ろうとか考えたら、何日掛かるんだって話ですよね。影時間中にはとても無理」

何せ本当に天まで聳えるタルタロスだ。

内部の空間もいろいろとネジ曲がっているようだし、仮に現れるシャドウを全て無視しても、頂上まで上がるのに数時間と掛かってもおかしくない。

「でも、これって帰ってくるだけ？ それじゃあ結局何度も登るハメになるんじゃない？」

「エレベーターのようなものがあるのを期待するしかないな」

「そうだな……。まあ、その話はまた今度にしよう。みんな、よくやったな。予想より遙かに戦えていたぞ」

「えへへ、そっすか？」

美鶴に素直に褒められたことで順平は満更でもない顔を浮かべた。

「ああ。通信を聞いてただけだが俺もそう思う。これなら俺が復帰するまでの戦力としても充分だな。くそつ、こんな怪我さえなければ、俺も一緒に探索できるのにつ」

「——明彦。怪我をちゃんと治すことが最優先だからな。後輩の活躍につられて、影でトレーニングとかするなよ?」

「わ、分かっているさつ。ちよつとは俺を信用しろ」

「普段のお前なら信用しているさ。影時間やペルソナが関わっていなければな」

拳を握り悔しそうにする明彦に、それを戒める美鶴と上級生のそんなやり取りに四人は顔を見合わせ苦笑を浮かべる。

「あはは……真田さんって思っていたよりも無鉄砲なんかね?」

「かも。意外と順平といい勝負じゃない?」

「そこでわざわざオレっちを引き合いに出すなつーの……。あー、ダメだ。なんかマジでバテた。——お前はなんか平気そうだな? オレ運動不足なんか……。?」

順平はその場でへたり込むと、涼しい顔をしている悠を見上げる。

「いや、俺も疲れてるよ。そういうのがそんなに顔に出ないみたいだけど」

「メガネパワーだよ! きつと!」

「だから、あんたはメガネに食いつき過ぎ。そして、あんた自身も元氣過ぎ……」

探索が上手く行ったからか彼らの顔は疲労はあっても明るい。

しかしこれがまだ本当に始まりに過ぎないことを、彼らもすぐに知ることになるだろう。

——…影時間が終わる。

4月21日（火） ～ 26日（日）：コミュ

2009年4月21日（火）

その日の放課後、悠と湊の二人は明彦によってポロニアンモールの交番前に呼び出されていた。

「お。来たな」

「真田先輩。こんなところで何の用です？」

「会わせたい人がいる。俺たちの活動に協力してくれてる人だ」

それだけ言うと、明彦は交番の中に入っていった。

「協力者ってお巡りさん？」

「そうみたいだ」

「——黒沢さん。話した二人を連れて来ました」

「おう。そいつらがそうか」

交番の中には目つきの鋭い警官が一人いた。

「この人は『黒沢巡査』。影時間に対する適性はないが、俺たちに協力してくれてる」

「……君たちのことは聞いている。俺の仕事は街の治安を守ることだ。たとえそれがどん

な事情であつてもな。力などなくても俺にはこの街の異変が分かる。俺は俺が正しいと信じることをする。……それだけだ」

黒沢は揺るぎない信念を持つて動く人物のようだ。

自分の目で確認できない非日常に対して協力するというのはそうできることではない。

だが、黒沢はこうして協力すると言う。

その口振りからも街のことを想っているのが伝わってきた。

「黒沢さんは戦闘で使うような武器や防具——装備品を扱っている店と繋がりを持っている。黒沢さんに頼めば、それらを入手することができる。もつとも、タダにはしてくれないけどな」

「当たり前だ。世の中にタダの物などない」

「分かつてますよ。——有里。現場のリーダーはお前だ。これからは探索資金もお前が管理することになる。お前が必要だと思ふ物を買つて、みんなに渡せ。鳴上はその補佐役だ。何でもかんでも有里だけに押し付け任せのわけには行かないからな」

「私が選んじやつていいんですか?」

「あ、ああ。あまり変な物を買うなよ。鳴上とよく相談するんだ」

「はーいつ!」

「……鳴上。あるいはお前が頼りかもしれない。後は任せたぞ」
「分かりました……」

目をキラキラさせている湊に嫌な予感を感じたのか、明彦は悠の肩を叩いてそう言う
と、黒沢に挨拶をして、その場を後にした。

「えっへっへ、何買おつかなく！　っていうか、これって横流し？」

「……違う。あくまで君たちの要望に合いそうな物を、俺が店から用意するだけだ。
まあ、職務中にやることではないかもしれないが、このことがバレたとしても君たちが
捕まるようなことはないから安心しろ」

「仲介人ってことですか」

「ああ、そういうことだな」

とは言うものの、街中で剣とか持ってたなら普通に銃刀法違反なのではと悠は思い、何
故かリアルに自分がパトカーに乗せられる姿まで想像できてしまったが、そこら辺は桐
条財閥が上手くやってくれるのだろうと自分を納得させた。

もつともそれなら装備品も桐条財閥が用意してくれればいいのではと思わなくもな
かったが。

「うーん。なんかこれって物がないかな」

「今回はあくまで顔見せみたいなものだ。君たちがそれに見合いそうだと思えばより良

い物を調達して来よう。だから、たまに顔を出すようにするといい。俺の機嫌の良い時は、少しくらいは割引もしてやる」

「今日の機嫌はっ?」

「……今日は普通だな。割引はなしだ」

「えーっ!」

黒沢のそんな言葉に湊がさっそくと尋ねるが、黒沢は平静な顔でそう言い、湊はわかり易く頬を膨らませた。

「そんな顔してもダメなものはダメだ。一応は商売だからな。世の中そんな甘い話はない」

「ちえー、ケチ! ……鳴上くんは剣だよねー? この『キシドーブレード』ってヤツ欲しい?」

湊が名前の通り西洋の騎士剣のような武器を示すが、悠はそれに視線を向けて少し考える素振りを見せた後、静かに首を振った。

「……いや、俺はどちらかと言うと日本刀系統の方が良いな。それは順平に買ってやつたらどうだ?」

「ふうん、そっかー。刀は置いてないし、じゃあ、鳴上くんはしばらく模造刀のままだね」
「ああ」

「代わりに鳴上千人には、この『サバイバルガード』をプレゼント！ これなら制服の下に着れるよね？」

「そうだな」

「あとは私の薙刀とー、ゆかりの弓とー、——あう。もうお金がない。他は我慢かなー……。順平の剣は要らないかなー……。うーん、バイトでもするべきかな？」

湊は自分の財布の中身とにらめっこをして唸る。

タルタロスで降ってきたお金は問題がないとすでに湊に渡されているはずだが、それもあつさりと尽きてしまったようだ。

「今そこまで悩まなくていいんじゃないか？ それほど性能に差があるわけでもなさそうだ。相手の弱点を突くように戦えば、まだ余裕はあると思う」

「……そうだね。じゃあ、コレで決定——」

二人は買い物物を済ませて交番の外に出た。

さらにその日から、タルタロスへの準備を理由に寮の門限が美鶴によって解除され、夜行動が許可された。

それに対して湊は嬉々として外に遊びに行った。

悠も同じく外へと出掛ける。

どこへ行こうかと考えたところで、放課後の湊の言葉を思い出した。

そして、悠は登録制のアルバイトに登録して、「喫茶シャガール」にヘルプのような形で入ることになった。

「あれ？」

奇しくもそこには遊びに行っただと思われた湊もいて、一緒にアルバイトをすることになるのだった。

2009年4月22日(水)

この日から再びタルタロスへと挑む日々が始まった。

湊からゆかりに買った新装備が手渡され、何もなかった順平は不満を漏らしたが、「順平のペルソナは強いっばいから大丈夫ー」と湊がフォローするとすぐに機嫌を良くした。

まだ探索を始めたばかりだということもあり、タルタロスに慣れるためにも比較的安価な低階層をウロウロする四人。

しかし――。

『この反応は――マズイ！ 死神タイプのシャドウだ！ 今のお前たちが勝てる相手じゃない、逃げろ！』

「は？ 死神タイプ？」

『いいから逃げろ！ 死にたいのか！』

「——行くよ！」

突然の美鶴の指示に順平が呆けたような声を上げるが、湊は危険を感じてその場から駆け出す。

悠がそれに並走すると、ゆかりも慌ててその後が続いて走り出した。

「えっ……ちよっ！」

一人微妙に取り残された形になる順平。

その背後からは鎖の擦れるような音と異様な気配が近付いて来るのが確かに感じられる。

順平もそれに気付き、ごくりと唾を飲んで振り返った。

そして現れたのは——これまでのシャドウとは一線を駕す存在感を持ったナニカ。

血に染まったボロキレのようなコートに、顔を覆う布袋から覗くギラギラとした目。

銃身の異様に長い銃を両手に構え、ふわりと中空に浮かぶそのナニカは、滑るように順平に近付いてくる。

「……！」

順平の足は凍りついたように動かない。

そんな順平という獲物の姿を捉えたナニカは、順平へとその両手の銃口を向けた。

すると両者の間の空間に光が集まる。

順平はその光景に死を覚悟———することすらもできずに、ただ突つ立っていた。不意にその襟首が掴まれ、ぐんつと後ろに引きずり飛ばされる。

順平のその目に映ったのは誰かの後姿———誰かも何も男子の制服をこの場でまどつているのは順平と後はもう一人だけなのだから、それが誰かはすぐに分かった。

「鳴上———！」

悠は順平の身代わりとなつて光に包まれる。

光は弾け、爆風が周囲へと吹き荒び、順平はさらに転がった。

それは彼らにはいまだ未知の領域の力———万能属性の魔法スキル「メギドラ」。

それをマトモに喰らつてしまえば、今の彼らはそれはもうあつさりとな滅することだろう。

だから彼もまた消し飛んでいなければおかしい。

しかし彼は———鳴上悠はその爆発の中心地でゆっくりと立ち上がった。

身体はふらついていたが、食いしばったようで、その目に燃える闘志が消えることはない。

悠とそのナニカの視線がバチツと正面からぶつかり合う。

瞬間、わずかにだが、そのナニカが気圧されるように後ずさつたように見えた。

けれど、その状況で背中を向けたのは悠のほうだ。

足に渾身の力を籠めて駆け出すと、尻餅をついていた順平の腕を掴み、そのまま引きずるようにして逃げる。

湊とゆかりが手を振り声を上げている「ターミナル」——脱出ポイントに転がるように駆け込むと、そのままエントランスへと戻り、息を吐いた。

「だ、大丈夫!!? 鳴上千くん!」

「ああ……大丈夫だ」

二人の心配する声、美鶴と明彦も駆け寄ってくる。

そして我を取り戻した順平もヨロヨロと立ち上がると頭を下げた。

「悪い、鳴上……助かった」

「突然のことだったんだ。次に活かせばそれでいい」

「あ、ああ……」

そう言いながら、悠もまた先程の存在を思い出す。

思い出して——いずれば、何度も戦うことになるのだろうかとなんとなく思った。

……鳴上悠、その時の記憶はなくとも、未来でそのナニカ——〃刈り取る者〃ならぬ〃刈り取るもの〃からレアアイテムを刈り取りまくっていた男である。

だからあえて言おう。

今なら間に合う、逃げろ——刈り取る者。

2009年4月23日(木)

学園が終わり、帰る準備を始めた悠の下にゆかりが寄ってくる。

「ねえ、たまには一緒に帰らない?」

「それは構わないが、有里とかと方がいいのか?」

「湊は今日順平とラーメン食って帰るんだってさ。さすがに付き合えないかなーって」

「そうか」

「あの子って普通にラーメン屋とかに入れるみたい。女子としてどーなのって思わなくもないけど、それがあの子の魅力なのかな」

「そうかもな」

「うん……じゃあ、行こっか?」

二人はただ帰るのもあれなのでポロニアンモールに寄ることにした。

「あー、なんか色々見たねーっ。……散財もしたけど。そういうえば、鳴上千んって湊と同じでその喫茶店でバイト始めたんでしょ?」

そしていくつかの店を見て回った後、ポロニアンモールの中心にある噴水広場のベンチに、ちよつと休憩と並んで座る。

「時間が空いた時だけな」

ゆかりの言葉に悠が頷くと、ゆかりはうへーと顔を顰めた。

「湊もだけど、タルタロスもあるのによくやろうって思えたよね……」

「岳羽が部活で弓道やってるのとあまり変わらないと思うが」

「え、変わるって。ってか、鳴上くんは部活やろうとかは思わないの？」

悠の言葉にゆかりはそれとこれとは全然別だと言い、話は部活のことに移った。

「そうだな。興味はあるかな。今からでも入れそうなのところがあれば入るかもしれない」

「鳴上くんは戦ってるのとか見ても、運動得意そうだね。何かやってた？」

「……サッカーとバスケはやってたかな？」

少し記憶がぼやけているような気もしたが、悠はそれについて特に考えることもなく、自分のスポーツ経験を口にした。

「あー、なんとなく分かる。花形スポーツって感じ。でも、そこら辺は2年から入るのは難しそうかなー？」

「そうか」

「団体競技だしね。陸上とかテニスとか、個人でもできるのは再募集をかけてたっぽいよ」

「考えておく」

「うん」

そんな感じで話題が一段落した会話の切れ目、ゆかりは少し目を伏せると、口を開いた。

「……あの、さ。湊には話したんだけど、鳴上くんも聞いてくれる、かな?」

「ああ」

不意に神妙な雰囲気になったゆかりに、悠もまた真摯な気持ちで頷いた。

「うん……。ちよつと暗くなるかもだけど、私の戦う理由。……昔さ。この辺りで大きな爆発事故があったの」

「爆発事故?」

「うん。10年前……。私の父さんその事故で死んじゃってさ。それから母さんとも距離が開いてて……。父さんが務めてたの桐条グループの研究所だったの。だからここにいれば父さんのこと、何か分かるかもって思って……」

それがゆかりの戦う理由。

桐条財閥——桐条グループの裏の顔がそれに繋がっていると考えているということだろうか。

前に美鶴に対して若干思うような部分がある様子を見せたのも、それが関わっている

のだろう。

「そうか」

「……うん、そう」

「なんで俺に話してくれたんだ？」

悠の言葉に、ゆかりは伏せていた視線をちらりと悠に向けた。

「鳴上くんの手……」

「俺の手？」

「湊も凄いつて思うけど、鳴上くんって召喚器を使わないで、ペルソナを呼べるでしょ？」

「？」

「ああ」

「それって、凄く心が強いってことなんだって。自分の弱さとか、嫌なところから目を背けないことで初めてできること……。私、結構ぐらぐらしているとこあつてさ。……だから、私もそうなれたらなーって思つて。……えつと、決意表明みたいな感じ？」

「——なれるさ」

悠はそう思った。

だから素直にそう言ったのだが、ゆかりは目を少し見開いて驚いたような顔をする。

「あ、ははっ……なんか、やっぱ鳴上くんって凄いやね。……うん。頑張る。頑張るから

……その、鳴上千んもちゃんと見ててよね！」

「ああ」

「ならよし！——さつ、それじゃあ、休憩終わりっ！ ポロニアンモール、もう一周行っとく？」

「望むところだ」

∨ ゆかりとの間にほのかな絆の芽生えを感じる…

∨ ゆかりのことが少し分かった気がした…

私は汝…、汝は我…汝、新たな絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

“恋愛”のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん…

∨ “恋愛”属性のコミュニティである“岳羽ゆかり”のコミュを手に入れた！

∨ 鳴上悠の失われた力“恋愛”属性のペルソナの一部が解放された！

頭の中に直接囁くような不思議な声に、悠はペルソナ全書を見る。

確かに絵柄が追加されている。

だが、その絵柄は影になってはつきりしない。

どうやら今の悠の力では、それを召喚するまでには至らないようだ。

しかし、これがあの誰かが言っていた絆の力なのだろうか。

他者との絆が自分の力を強くする……。

悠はそのことについて想いを巡らせながら、ゆかりの後を歩いた。

2009年4月24日（金）

悠はゆかりとの会話から、運動部に入ることにした。

再募集を掛けている運動部は、陸上、水泳、剣道の三つだった。

テニスは女子だけで、女子は他にも団体競技であるバレー部も再募集を掛けているようだ。

悠は普段から戦っているので剣道は避け、走るという意味でサッカーやバスケットに一番近い陸上部に入ることにした。

「——みんな、生まれ！ 2年の転入生の鳴上が今日から陸上部に入ることになった。はははっ、強力なライバルの登場だな！ ……とはいえ、部活の仲間でもあるんだから、ちゃんと面倒見てやれよ！」

「よろしく」

その日の部活はトラックを走り回って終わった……。

「——よう。鳴上。俺、お前と同じクラスの『宮本一志』。顔、覚えてくれてっか？」

「ああ」

練習が終わるとクラスメイトの一志が声を掛けてきた。

一志は普通の学生生活からジャージで過ごしている短髪の少年だ。

そのためクラスメイトの中でも特に目に留まり易い一人だった。

まあ、ピンク色のカーデイガンを着ていたり、キャップを被っている二人のほうが目に留まりもするが、それはそれだろう。

「そうか。これからは部活仲間だからな。よろしく頼むぜ」

「(ハ)ち(ハ)ん(ハ)ん」

「おう。——それはそうと、親睦を深める意味でどつか寄つてかね。部活後つて腹減るよな？」

▽一志との間にほのかな絆の芽生えを感じる…

▽一志のことが少し分かった気がした…

我は汝…、汝は我…汝、新たなる絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

“戦車”のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん…

▽“戦車”属性のコミュニティである“運動部”のコミュを手に入れた！

▽鳴上悠の失われた力“戦車”属性のペルソナの一部が解放された！

ペルソナ全書を見ると、“スライム”というペルソナが追加されている。

物理に耐性を持ち、スキルは8個全部埋まっているが、LVは2だ。

やはり、今の悠が制御できるLVのペルソナしか使えないということだろう。

だが、スキルを多く覚えているのは助かる。

もつとも、だからと使いまくれば悠自身がバテてしまうだろうから注意は必要だが。

悠は一志の提案に乗って巖戸台駅の近くにある「定食わかっ」で食事をした。

2009年4月25日（土）

学園で聞いた噂を元に、悠はリニューアルしたという古本屋に行ってみた。

——すると、中には湊がいて、店の主人であろう老夫婦と思われる二人と仲良さそうに喋っていた。

どうにも悠は湊と行動先が被る傾向があるようだった。

「あ、鳴上千んつ。鳴上千んも来たんだね。そういえば読書も趣味だっけ？」

「ああ」

悠の姿に気付いた湊に、悠は軽く手を上げて応える。

「おやおや、湊ちゃんのお友達か？」

「うんつ。鳴上千んつて言うんだよっ！」

「鳴上悠です」

「じゃあ、悠ちゃんじゃな」

悠が頭を下げて名前を告げると、店主であるだろう老人は人の良さそうな笑顔でそう

言った。

「悠ちゃん……」

「あ、それいいっ！ 私も今度からそう呼ばっかな？」

「やめてくれ……」

「えーっ」

悠は湊の不満そうな声をスルーする。

さすがに同年代の女子に、名前呼びな上にちゃん付けされたら、急にどうしたとそういう噂になるのは間違いがなかった。

「悠ちゃん。悠ちゃんは身体が大きいからこれを食べなさい。お近付きの印じや」

悠は「かにぼん」を貰った。

「ありがとうございます。えっと……」

「お爺ちゃんは『文吉』さんって言うんだよっ。お婆ちゃんの方は『光子』さんっ」

「そうか。ありがとうございます。文吉さん」

「いいんじゃないよ。たくさんあまっておるからの」

悠はその後、本棚に目を向けた。

「はじまりの漢」という名の本が悠の目に留まる。

何故だか、凄く気になるタイトルだった。

悠の頭の中に漢シリーズ、幻の初版本という言葉が急に浮かんだ。

その本を買うことにした……。

自室に帰ってその本を読んだ。

これ以上は上がるはずのない勇気が上がった気がした。(勇気UP!)。

2009年4月26日(日)

休日だ。

先週は順平が入寮して、先々週は湊が退院してと、色々あったので、悠にとって予定のない休日はここに来て初めてだった。

何をしようかと考えながら部屋を出ると、ちょうど隣の部屋から順平も出てきた。

「お。鳴上。そうだ。これから友近とポロニアンモールで遊ぶんだけど、お前も来ねえ？」

友近というのはクラスメイトの「友近健二」のことだ。

「いいの？」

「おー、いいよ。あいつも別にそういうこと気にしねえだろうしな」

「そうか。なら行くよ」

「おお、そう来なくっちゃな！ じゃあ、行こうぜ」

頷き、順平と一緒に寮を出た。

ポロニアンモールの噴水前で健二と合流する。

「お？ 鳴上も一緒なのか。そういや、お前ら一緒に寮になったんだっけ？」

「そうだぜ、部屋もお隣同士なわけよ。これが」

「ふーん。お前らの寮って確か男女同寮なんだよな？」

健二はいかにもといった男子学生で、そっちの話題に興味があるようだ。

「ああ、女子は三階。オレらは二階だ」

「誰がいるんだっけ？」

「ゆかりツチと有里、それと桐条先輩だな」

「なるほどねー。そんなだとやっぱ、桐条先輩がなく、でも、年上っていうほどじゃないからなく」

「友近の狙いは『叶先生』だろ？」

「そうねー。やっぱ大人の女って感じが良いよなく。お前、そういうのどう思う？」

健二はどうやら年上好きのようだ。

悠は年齢に対するこだわりは特になかったので頷き同意する。

「悪くないな」

「おつ、分かってんじゃん！ 同年代の女はガキっぽ過ぎてさ。理想は高く年上につて

な！」

「頑張れ」

「ああ、サンキュー。……お前とこうして話すのは初めてだけど、意外に話が合いそうだな。これからよろしくな。鳴上」

「(ちん)ぞ」

▽健二との間にほのかな絆の芽生えを感じる…

▽健二のことが少し分かった気がした…

我は汝…、汝は我…汝、新たななる絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

“魔術師”のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん…

▽“魔術師”属性のコミユニティである“クラスメイト”のコミユを手に入れた！

▽鳴上悠の失われた力“魔術師”属性のペルソナの一部が解放された！

ペルソナ全書を見ると、ピクシーのアルカナが“魔術師”に変化している。

耐性が疾風に変わり、しかも、パラメータとスキルが増えている。

悠の失われた力とやらのピクシーは“魔術師”のアルカナだったということなのだろうか。

そして、これが最初にピクシーを見た時に感じた違和感の原因かと悠は考える。

人は見たいものを見たいように見る——というのは、いったい誰の言葉だったか

……。

これは人との関わり方によっては、そのアルカナが変わることもあり得るといふ一例なのかもしれない。

その後——三人はゲームセンターやカラオケで休日を満喫したのだった。

同日 — 影時間 — 【タルタロス — 14F — 世俗の庭テベル】

『フロア中央に反応が一体！ かなり強い、気を付けろ！』

タルタロスの探索は順調に進んでいた。

そんな折に美鶴が発見したのがその反応だ。

四人は顔を見合わせると、不覚を取らないために、その反応に接触する前に辺りを探索する。

「あった」

四人の前にあるのはエントランスへと戻ることができるワープ装置——ターミナル。

しかし、その形状は普段のものとは違い、アーチ状になっていた。

『——どうやら、5Fと10Fにあったものと同じ、双方向のターミナルを見つけたようだ。前に鳴上が言っていたエレベーターの役目を果たすもの。やはり何階層かごとにあるようだ。本当にあるとは運が良い。一度戻って来たらどうだ？』

美鶴の言葉に四人は一度エントランスに戻る。

そしてエントランスに備え付けられているアンティークの「置時計」に探索資金を払う事で体力や精神力を回復させる。

どういう原理か——そして、何故こんな物があるのかは分からないが、この機能は重宝していた。

もつとも、その回復量に応じてお金が掛かるといふことだけは、どうにかして欲しいのが全員の総意だった。

とにかく万全の状態になった四人は再び14Fへと戻り、先程の反応のシャドウと向かい合う。

『アルカナは「戦車」。ここの番人のようだ……用心しろ』

5Fと10Fにもいた番人タイプ。

5Fは「ヴィーナスイーグル」という鳥型で、10Fは「ダンシングハンド」という手の形をしたシャドウだった。

そして現在、目の前にいるシャドウは個体名を「バスタードライブ」といい、尖った両腕と四本の脚を持つ、機械的な姿のシャドウである。

「どわっ、こいつ、物理攻撃効かねえ……っ！」

「弱点らしい弱点もないみたいだ」

「うん。みんな、魔法スキルで攻撃して!」

それぞれが魔法スキルで攻撃をする中、悠はバスタードライブの身体が帯電するのを見て取った。

「マズイ——岳羽! 防御しろ!」

「えっ?」

「間に合えっ——イザナギ!」

雷が周囲に落ちる。

バスタードライブの「マハジオ」だ。

「きやああああつ!!?」

ゆかりはその身に宿すペルソナ的特性上、電撃に弱い。

ゆかりがダウンすると、バスタードライブはすぐに「アサルトダイブ」による追撃を仕掛けた。

それだけ喰らえば意識を失ってもおかしくないほどの攻撃だったが、悠が咄嗟に掛けた「ラクカジャ」の効果によって防御力が上がっていたゆかりは、どうにかその攻撃に耐えた。

「ゆかりっ!」

「岳羽!」

湊と悠が続けてゆかりに『ディア』を掛ける。

ゆかりは何とか持ち直した。

「つつー……ごめん、ありがとっ！」

ゆかりがお返しとばかりに疾風属性の魔法スキル『ガル』で攻撃する。

その後も戦闘は続き……。

「相手は力を溜めてる！ でも、あと一息だ！ 攻撃される前に押し切ろう！」

「うんっ！ みんな、ラストスパート！」

湊の言葉にそれぞれが精神力を振り絞りペルソナを呼び出す。

「イザナギ！」

「『ジャックフロスト』！」

「ヘルメス！」

「イオ！」

それぞれ属性の違う怒涛の四連続攻撃に、遂にバスタードライブは力尽き、消滅していく。

「やったな！」

「うん、やったねっ！」

「ヤバかったけど、勝てばオツケー！ ってな」

「私は良くないわよ。——まったく、あいつ、ピンポイントで私を狙って来るんだから……」

一番の被害を受けたゆかりが愚痴る。

「それで、どうする? 今日ほこれで切り上げるか?」

「そうだね。この階層だけ探索したら戻ろうか。桐条先輩、この階層に他のシャドウはいないんですね?」

『ああ。シャドウの反応はない』

「んじゃ、もう一頑張りしますかー」

「そだねー。あー、とつとと終わらせて、シャワー浴びたい」

四人はそのフロアを見て回る。

「お。アイテム発見!」

『それは「ソーマ」に「反魂香」だな。ソーマはエントランスの置時計と同じ効果があるアイテムだ。金が掛からない上、携帯できるのだから、いざという時に使うべきだな』

「反魂香は意識を失った時に使うアイテムか。あまり世話にはなりたくないな」

「だね。えつと、これでこのフロアは見て回ったかな? じゃあ、帰る?」

「賛成ー。それじゃ、帰ろ帰ろ」

そして、その日の探索は終わった。

——…影時間が終わる。

4月27日(月)～30日(木): 眞実の行方

2009年4月27日(月)

「単刀直入に言う。君たちに生徒会に入ってもらいたい」

それは、2—Fの教室に現れた美鶴が開口一番、悠と湊に対して言った言葉だ。

「生徒会?」

「急にどうしたんですか?」

本当に単刀直入過ぎる言葉だったので、悠と湊は顔を見合わせてから美鶴に詳しい事情を聞くことにした。

「うむ。生徒会長というのも、中々多忙だね。緊急時に口裏を合わせられる人間が欲しい。そしてそれは男女一人ずついるのが理想だ」

周りにまだ他の生徒がいることもあり、若干声を抑えて美鶴はそう言った。

「でも、私部活とかも入ってますよ?」

悠だけでなく湊も部活に入っていたらしく、生徒会と掛け持ちしてもいいのかと尋ねる。

「生徒会の活動は定例だが、君たちを常時束縛するつもりはない。時間がある時に生徒

会室に来るように心がけてもらえるだけでいい。どうだ？」

「俺は構いません」

「そういうことなら私も」

美鶴の言葉にあっさりと言いついてみせる二人だが、すでに通常の学生生活とタルタロスの探索に加えて、バイトに部活とかなり色々やっている。

この二人のバイタリテイはどれだけ高いのかと思わずにはいられない。

「ありがとう。君たちならそう言ってくれると思つたよ。……事後報告になるが、君たちの生徒会所属の件はすでに承認済みだ。ただ、登録の手続きだけは君たちが直接やらなければならぬ。君たちの担任のところに行つて手続きして来てくれ」

「あれ？ これつて実質拒否権なかつた？」

「相談もなしに段取りをつけたことは詫びるが、君たちを必要とする私の境遇を理解して欲しい。では——手続きを終えたら生徒会室に来てくれ」

美鶴を見送つた二人は職員室で鳥海から書類を渡されサインを書く。

そして、その足で生徒会室に向かつた。

「先日も話したが、有里湊と鳴上悠の両名には、今日から生徒会の一員として働いてもらう」

「君たちの話は聞いている。僕は『小田桐秀利』。風紀委員を仕切らせてもらつてい

る」

秀利はクラスは違うが悠たちの同級生で、風紀委員という先入観もあるかもしれないが、学園パンフレットの見本のようにつきつちりと制服を着こなした姿からは、生真面目さが窺える。

隣にピンヒールブーツの生徒会長がいるが、それは気にしてはいけないことだ。

上履き？ 上履き型ピンヒールブーツだよ！ ……たぶん。

「会計の『伏見千尋』です。1年生で分からないことのほうが多いので…その、お、お手柔らかにお願いします」

少し緊張した様子で自己紹介をしたのは黒縁メガネで下級生の女子だ。

「ああ。こちらこそよろしく」

「よろしくお願いしまーすっ！」

他にも数人の役員の自己紹介を受けて、二人もこれから共に頑張ろうと頭を下げ、軽い拍手で迎え入れられる。

「…：…会長が人を推薦するなんて、君たち、よつぽど有能なんだろうね。これから宜しく」

▽秀利との間にほのかな絆の芽生えを感じる…

▽秀利のことが少し分かった気がした…

私は汝…、汝は我…汝、新たな絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

“皇帝”のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん…

∨ “皇帝”属性のコミニティである “生徒会”のコミニティを手に入れた!

∨ 鳴上悠の失われた力 “皇帝”属性のペルソナの一部が解放された!

ペルソナ全書を見ると、しかし、絵柄が影になって追加されただけだった。

これは、恋愛のアルカナの時と同じだ。

おそらくは制御できる範囲のペルソナではないのだろう…いや、それとも他にも何か理由があるのだろうか。

たとえば、悠の力が足りないのではなく、育まれた絆がまだまだ弱いとかだ。

…生徒会に入り、生徒会役員たちと知り合いになった。

同日 — 放課後 — 【辰巳東交番】

「ん? 来たな。今日は気分が良い。安くしてやるが、何か買って行くか?」

「そうですね…」

悠が考えながら視線を巡らせていると、黒沢の前に湯飲みが二つ置かれているのに気付いた。

「誰か来てたんですか?」

「——ん？ ああ。ちよつと探偵がな」

「探偵？」

「警察の協力者つてヤツだ。警察関係者の中では有名な探偵一族の五代目……とは言つても、今はまだ君よりも年下の子供だな。頑張つてはいるようだが、名前が売れるにはもうしばらく時間が掛かるだろう」

「へえ……。そうなんですか」

悠はその人物に多少の興味を抱いた。

とはいえ、なんとなく気になる程度な感情だったので、すぐに思考を装備に戻す。

悠の現在の装備はタルタロス内の金色の宝箱から見つけた“数珠丸恒次”だ。

ここにある“グレートソード”のほうが性能は良いが……。

「“ケプラーシヤツ”だけ貰います」

「そうか。やはり、刀のほうが良いのか？」

「はい」

「ならば次は刀を用意しておこうか」

「お願いできますか」

「ああ。分かった」

黒沢の申し出をありがたく受け、それから——そういえばと確かめる。

「——あ、有里は来ていないですよね？」

「今日は来ていないな」

「なら、せっかくなので、グレートソードと、他のも買って行きます」

「そうか」

悠は武器防具を人数分買い揃えた。

そして寮に帰りみんなに渡したのだが——……。

「あーっ！ 順平はダメ！ 防具没収！」

「え、なんでオレっただけ？」

湊がなんてことを——と憤慨した様子で順平に渡した装備を取り上げる。

自分は何か間違ったことをしただろうかと悠は考えるが——。

「だつてせっかく、〃男気の甚平〃に〃バンカラ下駄〃なんて面白装備を手に入れたのに！」

——そんな理由だった。

その様子に悠ではなくゆかりが呆れたような溜息を吐く。

「あれ？ オレっちひよつとしてネタ要員？」

「うんっ！」

「そんなイイ笑顔で肯定すんなって！」

順平が怒っても湊はどこ吹く風だ。

リーダー権限と、強硬にその装備を順平に勧める。

「……俺が代わりに着ようか？」

「おまつ、マジ良いヤツ……」

「鳴上くんが着ても背中の中の文字が『真』でそんなに面白くないからダメだよ」

その状況に悠がした提案もあっさりと湊に却下された。

タルタロス内で発見した男気の甚平は、着る人間によつて背中に現れる文字が変わるという不思議装備だったのだ。

「そして、お前は少し自重しろ……。くそつ、『色』なんて文字が出た自分のポケ体質が恨めしい……」

その後、なんとか湊の説得に成功した……。

2009年4月28日(火)

その日は陸上部の部活動に参加することにした。

トラックを何周も走る……。

「はあつ、はあつ……鳴上、お前、足速えーな……しかも、全然息切れしてねえじゃねえか。普段どんな鍛え方してんだよ」

「特別な鍛え方だ」

タルタロスの探索なんてことをしていれば、実際嫌でも体力は付いていくだろう。

普段の生活ではペルソナの恩恵による身体能力の向上……身体強化は為されていないとはいえ、やはり身体を動かしていることには変わらないので、意識せずとも常人以上に鍛えられていくのだ。

「あー、やつぱさそうか……。こりや、俺ももつと頑張らねーとな」

だが一志は悔しがるでもなく、そう言つて明るく笑っている。

実は一志は陸上部のエースと言える存在であり、そのためにこれまで競い合える相手に限られていたので、自分以上かもしれないライバルが現れたことが嬉しいのであった。

「お疲れー」

「おー」

「はい、タオルとドリンク。鳴上くんも」

「サンキュー」

「ああ。ありがとう」

悠と一志は、褐色の肌をしたマネージャーの「西脇結子」からタオルとドリンクを受け取り、お礼を言う。

「それにしても鳴上くん凄いなー。ミヤって一応うちのエースだよ」

「根性だ」

「む。俺の根性がまだまだ足りないってことか。確かにお前の根性っていうか、根気は『タフガイ』って感じがするけど……でも、根性って悪くねえよな。いよつしやあ！ やってやるぜ！ まずはお前を乗り越えてやる！」

「あーあ……普段から暑苦しいヤツが余計暑苦しく……」

結子が呆れた様子で一志を見ている。

「さて………つと？」

「ん、どうかした？」

座り込んでドリンクを飲んだり休憩していた一志が、立ち上がった時に何やら不思議そうな顔をしたので、結子が尋ねるが、一志は少し考える素振りを見せた後に首を振った。

「いや……？ なんでもねえ。とりあえず今日の練習は終わりだ。鳴上。わかつても寄って帰ろうぜ」

「そうだな」

「ちゃんと栄養管理もしなさいよー？」

「おう、分かっているって！」

悠は一志とわかつに寄つてから帰ることにした。

〓一志のことがまた少し分かつた気がする…

〔Rank up!! Rank 2 戦車・運動部〕

〓“運動部” コミュのランクが“2”に上がった!

〓鳴上悠の失われた力“戦車” 属性のペルソナの一部分が解放された!

ペルソナ全書を見ると、“エリゴール”が追加されている。

さらにもう一体、絵柄は影のままだが、少しくつきりとした輪郭になっている。

とはいえ、今の悠の力では呼び出すまでには至らないようだ。

悠の現在のLVは13。

そのことから考えてみると、コミュランクが1上がる度にLVにして10の範囲分追加されるということだろうか。

それなら、皇帝のアルカナの時には悠のLVは足りていても、そもそもLVが10以下のペルソナが存在しなかつたとも考えられる。

加えて、前の時はそれほど気にしていなかつたが、スライムの時は“ナタタイシ”。

ピクシーの時もそのすぐ後のタルタロス探索中に“オロバス”が解放された。

それぞれLVが6と8になつた時のことだ…どうやらその考えで合つていそうだなと悠は思った。

同日 一夜―【巖戸台分寮】

「……君か。お帰り。良いところに帰ってきた。シャドウ襲撃の際に不通になっていたインターネットだが、明日には復旧する予定だ。部屋にパソコンがあるなら繋いでみるといい」

「はい」

悠の荷物の中にはノートパソコンがあつたはずなので、ネットをすることは可能だろう。

「これでシャドウにやられたものは、全て……いや、明彦のアバラが残っていたな」

「あーそだ、ネットで思い出した。『デビルバスターズ・オンライン』ってネットゲームがあんだけど、お前やる？ 家から持ってきた荷物に紛れてたんだけど、オレはもういいからさ」

ラウンジのソファで雑誌を読みながら何とはなしにその会話を聞いていた順平の言葉に、同じく寛いでいた湊が声を上げる。

「順平、ヒドイ！ 私にはそんなこと言ってくれなかったのにつ」

「は？ だから今思い出したんだって。ってか、有里ネットゲとか興味あんの？」

「ううん。別に」

「……なんなんだよ、お前！」

「順平、うるさい」

湊の答えにじやあ言うなど至極真つ当にツツコミを入れて、ゆかりに怒られる順平。

順平は今日も通常運転のようだ。

「え、オレつちのせい!!? ……そんで、どうする?」

「俺もそれほど興味はないな」

実際悠は機械音痴というわけでもなく普通に使えはするのだが、ハイカラな電子機器にそこまで興味がなかった。

というか——タッチパネルなどに指を触れれば、中に呑み込まれるのではとそんな考えが不意に浮かんだりするので積極的に使う感じにはならなかった。

今は記憶の奥底に眠る、未来の後遺症ではないと信じたところだ。

「あ、そう? でも、やってみればハマるかもしれないぜ?」

「なんか順平、鳴上千んに押し付けようとしてない?」

「いやははっ……なんだからで部屋の中がごちゃごちゃして来ててき。貰ってくれんなら助かんだよね。実際」

「分かった。そこまで言うなら貰つとく」

「お。話分かるね。あとで部屋を持って行くからよ」

「ああ」

悠はデビルバスターズ・オンラインを手に入れた！

2009年4月29日(水)

今日は昭和の日で祝日だ。

何をしようかと考えて、悠は順平から貰ったネットゲームを手を取った。

しかし、実際に現実で戦っている身としては、やる気がしない。

悠は外に出掛けることにした。

「いらつしやいー」

適当に街を散策した悠は、今はポロニアンモールの「青ひげフアマーシー」という名の薬局に来ていた。

ここで扱っている薬は効果が高く、ペルソナ使いが使用することによってさらに上昇する効果は、ペルソナのスキル並と言っても過言ではなかった。

しかし、今悠の視線はそれらのアイテムではなく、青ひげ店主が持つ物に向けられていた。

「ん？ 釣りに興味があるのかい？」

立派な青ひげを蓄えた若干強面の青ひげ店主が、その手の中にある手入れ中の釣竿を

示しながら言う。

「趣味です」

「ほお。若いのにイイ趣味してるな。——お前さん、名前は？」

「鳴上悠と言います」

「悠か。すぐ近くに海があるつてのに、この辺りには釣りをしてる奴がそんなになくてな。よければたまに釣りの話をしようじゃねエか」

「喜んで」

〈青ひげ店主との間にほのかな絆の芽生えを感じる…

〈青ひげ店主のことが少し分かった気がした…

我は汝…、汝は我…汝、新たな絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

“太陽”のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん…

〈“太陽”属性のコミュニティである“釣り仲間”のコミュを手に入れた！

〈鳴上悠の失われた力“太陽”属性のペルソナの一部が解放された！

ペルソナ全書を見ると、“カーシー”が追加されている。

カーシーは全体スキルの“マハガル”に加え、“ローグロウ”や“トラエスト”とちよつと変わったスキルを覚えていた。

さらに弱点である火炎にもキツチリと対策が為されている。

スライムやピクシーからしてそうだったが、悠の失われた力とやらは、弱点に対応したスキルを覚えているらしい。

これは戦闘後にたまにある“シャツフルタイム”で得られるペルソナとは違った大きな武器だった。

ついでに“ローグロウ”……“ローグロウ”は戦闘で直接使わなくても、ペルソナがその経験を少し得るといふスキルである。

コミュを築いて解放されたペルソナはみんなそのスキルと同じ状況である気がする。悠が成長すると、それに合わせて少しずつ成長しているのだ。

それが普通なのかと考えていたが、シャツフルタイムで得られるペルソナはそうではないし、今回こうしてそのスキルの存在を知ったということもある。

成長ではなく本来の力を取り戻していつているのだろうか。

とはいえ、そうなるとカーシーの“ローグロウ”はまるで必要がない残念なスキルとということになってしまうのだが。

「実はこの辺りにはある伝説があるんだ。悠にもその内話してやるよ」

悠は青ひげ店主のそんな言葉を後に店を出た。

ついでなので色々食材を買い込んでから寮に帰ることにした。

同日 一夜―【巖戸台分寮】

「あ、お帰り。うわつ、なんか凄い買って来たね……それ、全部食材？」

「ああ」

寮に帰るとラウンジのソファには、まだ帰ってきていないらしい湊を除く寮生たちの姿があった。

「そっか。ホントに興味なんだ？ 鳴上くんの料理美味しかったもんね」

「何々、ゆかりツチ、鳴上の手料理食べたことあんの？」

そういう話の気配を感じたのか、順平は若干下世話な様子でゆかりに尋ねた。

「……あんだ、なんか変なこと想像してない？ 前に湊が学園休んでたことあったでしょ。あれってペルソナの覚醒が原因だったんだけど、その時に鳴上くんが湊に作ったのを私も食べたのよ」

「へーっ、そんなことが。つーか、有里が体調崩したのってペルソナが原因だったのか」「しようがないわよ。あの子だって基本は普通の女の子なんだから」

「あー……そっか……そうだよな」

「何？」

何だか妙に納得するように頷く順平の姿に、ゆかりは不審そうな視線を向ける。

「いやいや、別に！ 何でもないですよっ？」

「はあ?」

「良ければ今日はみんなの分も作るが」

悠の提案に、いつもカップ麺やらレトルトやら外食やらで済ませてしまう面々が興味津々と話に乗ってくる。

「えっ、マジ!!? オレっち、期待しちゃうよ?」

「鳴上の手料理か。私も興味あるな」

「うわっ、鳴上くん、ハードル凄じ上がった!」

「手料理か……。〃シンジ〃を思い出すな」

「誰ですか?」

「この寮に住んできた奴さ。俺の幼馴染でな。今はちよつと事情があつて離れてる」

「へー、そんな人が……」

その後、悠は帰ってきた湊も含めて寮の仲間たちに手料理を振る舞った。

その評価は……。

「うまーっ!」

「つてか、マジで美味エよ! 店で出せんじゃね?」

「シンジの料理にも負けてないな」

「その人もこのレベルってこと……? 女子としてのプライドみたいなものがガラガラ

と……」

「鳴上。卒業したら、うちの専属料理人にならないか？」

「おわっ、桐条先輩認定！ お前、将来安定過ぎるだろっ！」

「どうやら、今回も大好評だったようだ。」

2009年4月30日（木）

「今日はタルタロスを探索しますっ！」

いつものようにラウンジに集う面々の前で、湊は拳を握りそんな宣言をした。

「どうした。そんなに張り切って」

「えへへ、ちよつと、『テオ』から依頼を受けちゃって」

「テオ？」

「あ、えつと、こつちの話、かな？ ——……というか、鳴上くんはベルベットルームっ

て知らない？」

「ベルベットルーム？」

「あー、知らないならいいの。鳴上くんって、私と同じでペルソナの付け替えできるから、ひよつとしたら、そうかなって思ったただだから」

ベルベットルーム……悠はその名前に何か惹かれる響きを感じたが、それが何故だか

は結局分からなかった。

とにかく、湊のそんな言葉で、今日はタルタロスの探索を行うことになった。

「あ、そうだ。鳴上くん。ちよつと刀貸して」

「なぜ？」

「えへへ、いいからいいから」

タルタロスのエントランスで湊はそんなことを言うと、悠から刀を受け取った。

悠は湊が何をするつもりなのかと目で追うが、湊はエントランスの端の方に行つてぼーつとするだけだった。

しばらくすると、急に振り返り、そのまま悠に駆け寄つてくると、満面の笑みで刀を返した。

「ありがとっ」

悠は頷くしかなかった。

タルタロス —15F—【世俗の庭テベル】

「あ、あいつ！ あいつの外殻が欲しいのっ！」

湊がカブトムシのような姿の“死甲蟲”という個体名のシャドウを指差して叫ぶ。

「よく分からないけど、あのシャドウの弱点は疾風だったな。——カーシー！」

耳が翼のようになった緑色の犬的な姿のカーシーが、疾風属性の魔法スキル『ガル』で死甲蟲を攻撃する。

弱点にヒット！

「よし、総攻撃チャンスだ！」

「うんっ、総攻撃！」

湊の号令の下に総攻撃を仕掛ける四人。

死甲蟲を倒した。

「やった！ 『甲虫の外殻』 ゲット〜！」

「……湊、あんなのどうする気なんだろう？」

「売って探索資金にする……とか？」

「売るのは同じだけど、装備品の素材にするのかもしれないぞ」

「いや、それはないでしょ」

「そうか？」

悠の中ではシャドウの落とす物といえ、装備品の素材という思考があるのだが、その思考はどこから来たのか。

とにかく、その後は湊のそういう奇行もなくフロアを探索し終え……。

タルタロス ―16F―【世俗の庭テベル】

「……何これ？ 通れないじゃん。行き止まり？」

「桐条先輩。どうすんすか？」

16Fへと上がってきたのだが、上の階層に続く階段の前には、ここが元々学園であつたことを思い出させるかのように、机や椅子がバリケードを作っており、さらには不思議な光を発している。

軽く剣先で突いたり攻撃してみても、そのバリケードが崩れることはない。

どうやら超常の結果が張られているようだ。

『そうだな……。この先に進むには何か条件があるのかもしれないな。そのフロアに他に何かないか？』

「――アタツシユケースがあるな。いつものか」

「中身は何かなくっ？」

湊がタルタロス内で、いわゆる宝箱の役目を果たしているアタツシユケースに手を掛けてそれを開く。

「……書類？」

「『人工島計画文書01』……？』

【電源の増設完了の報。

だが、明らかに供給量が異常値だ。
ただ学園があるだけのこの島に。

どうしてこれほどの電力が必要なのだろうか……」

「電源がどうかかって……学園とか島つてのはここのこと？」

「だと思おう」

「ひよつとして、これが影時間を解くカギつてヤツか？」

「え、でも、影時間内じゃ電気とか関係なくない？」

その書類の内容にそれぞれが影時間という現象に対する考察を進める。

悠はゆかりの言葉に考えながら口を開く。

「影時間内ではそうでも、影時間が生まれた理由には関係あるのかもしれない。——だいたい、影時間はいつからあるんだ？俺たちが適応したのは最近でも、影時間自体は生まれる前からあったとか言われたら、それは自然現象と変わらないことになるが……」

「そーいや、そだな。桐条先輩。その辺どうなんスか？」

『いや、それは……』

「……分らない、ですか？」

『ああ……』

微妙な沈黙がその場に流れた。

「ま、まあ、分かんないもんはしようがないっすよ！ それを調べるために探索してるわけでしょ？」

「……そうだな」

「はあ。ま、そうね……」

ゆかりは彼女が戦う理由である10年前の爆発事故と、これらのことを結び付けて考えているのだろうか。

どちらにしても、これだけでは情報が足りないと、悠もまたその思考を止めた。

「それで、これからどうしようよっか？」

『それ以上何も無いようなら、とりあえず戻って来てくれ。対応はまた考えることにしよう』

「了解ですっ！」

その日の探索はそれで終わりを告げた。

進めないタルタロス。

今回の探索の成果でもある人工島計画文書01。

これらはどう考えればいいのだろうか。

そして、嬉々として、その人工島計画文書01と甲虫の外殻を手にしたと思えば、再

びエントランスの端へと行ってぼーっとする湊。
——…影時間が終わる。

5月1日(金)～9日(土):衝突回避

2009年5月1日(金)

悠は学園が終わった後、ポロニアンモールにある「ピー・ブルー・ヴィー」という名のヒーリングショップでアルバイトをしていた。

湊たちは明彦の検査入院のお見舞いに行くという話だが、あまり大人数でもどうかと思つて悠は断つたのだ。

ふと、店の外を見た悠は、ホテルのドアマンのような青い服を身にまとつた人物と、お見舞いに行ったはずの湊が妙なやり取りをしているのを見て取つた。

ここでアルバイトを始めてからそれなりに時間は経っている。

どうやらお見舞いは済んだようだが――。

「綺麗な“完二”……？」

自分で呟いた言葉に首を傾げながら、意識を二人から外すと、悠は仕事に戻つた。

2009年5月2日(土)

悠は下駄箱で陸上部のマナージャーである西脇結子の姿を見つけた。

「西脇」

「え、あ、鳴上くんか」

「よければ一緒に帰らないか？」

「あー、うん。いいけど」

結子が了解したので二人は一緒に帰ることになった。

ポロニアアンモールの喫茶シャガールに寄る。

「鳴上くんってこういう店に来るんだ？」

「バイトもしてる」

「え、そうなの！ 部活もバイトもって、大変でしょ？ 他の部員にも見習わせたいわ」

結子は部員に対する愚痴を言い始めた。

「だいたいみんなさ、マネージャーを抜き使い過ぎ……。うちの部の男共って子供だし。

図体はデカいけど。やれ、俺のタオルどこ？ だのさあ……。私は保母さんじゃないつ

ての」

「すまない」

「えっ、鳴上くんは謝らなくていいよ！ 鳴上くんは全然そういうところないしさ！

——ってか、愚痴ばっか聞かせてごめん。なんか鳴上くんって聞き上手っていうか、頼

りになる雰囲気があるから。つい喋っちゃって……」

「別に構わない」

「そう? でもごめん。……つて、謝られてばつかでも困るよね。そだ! 注文! 追加しよう! すいませくん!」

結子はさらにケーキを二つ注文するようだ。

「……ひよつとして食べ過ぎ? で、でも、食べた分のカロリーはマネージャーの仕事で消費するもんね?」

「そうだな」

▽結子との間にほのかな絆の芽生えを感じる…

▽結子のことが少し分かった気がした…

【Rank up!! Rank3 戦車・運動部】

▽「運動部」コミュのランクが「3」に上がった!

▽鳴上悠の失われた力「戦車」属性のペルソナの一部分が解放された!

ペルソナ全書を見るが、影が一つ少しくつきりとした輪郭になっただけだった。

やはり悠がそれらを制御できるLVにならなければ、いくら解放されても意味がないらしい。

しかし、コミュは個人との絆かと思っていたが、グループによって築かれていることもあるようだ。

コミユがあるからないからではなく、多くの人たちと交流を持つことこそが絆を深めるためには大切なのかもしれない。

「今日は色々話せて楽しかったよ！ よかったらまた声掛けてね！」
結子と別れて寮に帰った……。

2009年5月3日(日)

今日は憲法記念日。

3日間のゴールデンウィークの始まりだ。

なんとなくテレビを点けると、ちょうど通販番組が始まるどころだった。

耳に残る曲が流れ、軽妙なトークで男が商品を勧める。

『さくあ、本日紹介する商品はこちら！ズバリ、〃ツカレトレール〃！あなたの健康を守ります！ヒュウウ、ワンダホウ！これになんと！〃マツスルドリンコ〃を2個お付けして、お値段はたったの1980円！』

悠は携帯を取り出すと商品を注文した。

その後、寮を出る。

何をしようかと考えて、辰巳ポートアイランド駅にある映画館〃スクリーンショット〃でアルバイトをすることにした。

そして夜は、今月18日からある中間テストに向けての勉強。
悠はゴールデンウィークの初日をかなりマジメに過ごした。

2009年5月4日(月)

初日をマジメに過ごした悠だが、マジメなだけではつまらないだろう。

というわけで、その日は部活仲間である一志に遊びに誘われたこともあって、休日の学生らしく遊んで過ごした。

一志は休日でも変わらずジャージ姿だった。

どうやら一志は見た目よりも機能性を優先するタイプようだ。

1日遊んで、少し一志のことを理解した気がする。

一志との仲が深まった気がした。

同日 一夜―【辰巳東交番】

特に何を買うわけでもないが、ポロニアンモールに来たついでに顔を見せた。

黒沢の機嫌は良い。

……そういえば、前に機嫌が良かったのも月曜日だっただろうか。

これは偶然かそれとも。

青ひげフアーマーシーは土曜日がセールだと分かっているが、こちらは黒沢の機嫌に寄るので、それが分かれば買い物もしやすくなるのだが。

来週も覚えていたら確認してみようか。

悠はそんなことを考えながら、結局世間話を少しだけして交番を出た。

2009年5月5日（火）

今日はまず通販で頼んでいた商品が届いた。

そして、中身を確認していると、携帯が鳴って、今度はクラスメイトの健二に誘われた。

悠はせっかくなので健二の誘いにも乗ることにした。

「よっ！ さてと、今日はどこ行く？ ……そういえば、前の時も思ったけど、お前の私服姿ってかなりイケてるよな。タツパもあるから大人っぽい感じでき。 ……よし！ 今日服見に行こーぜ。俺にどんなのが合うかお前の意見も聞かせてくれよ」

「ああ。分かった」

健二の要望で服屋を中心にポロニアンモールを見て回った。

1日遊んで、少し健二のことを理解した気がする。

〽健二との仲が深まった気がした。

2009年5月6日(水)

そうして、ゴールデンウィークは瞬く間に終わってしまった。

また今日から学園が始まる。

休み明けということも影響してるのか、授業中に順平から質問の答えを聞かれたりもしたが、それは正解を教えることができた。

放課後になって、少し学園を回ってから、帰るために下駄箱へと向かうと、どこか疲れた顔をした担任の鳥海と遭遇した。

「なんか疲れているみたいですけど大丈夫ですか?」

「ああ、鳴上くん……。ちよつとね。……。あ、鳴上くんはネットゲームってやる?」

「いえ……」

悠は順平に貰ったゲームのことを思い出しながらも、やってはいなかったので正直に答えた。

「そう。私ね、ちよつとハマってたゲームがあっただけ、最近どうもいまいちでね。もう止めようかなって。良いストレス解消だったんだけどね……。……」

「そうなんですか」

悠は鳥海の言葉に対してどう答えるかと考えていたところで、通販番組で手に入れた

アイテムの存在を思い出した。

「あの、あまり役には立たないかもしれないですけど、これをどうぞ」

「え、いいの？」

「はい。それで少しでも元気が出れば、俺も嬉しいですから」

「鳴上くん……ありがとう。——そうね。こうして気遣ってくれる生徒がいるなら、私もまだまだ頑張れるわね。教師としては生徒に励まされるなんてダメかもしれないけどね」

▽鳥海との間にほのかな絆の芽生えを感じる…

▽鳥海のこと少しかつた気がした…

我は汝…、汝は我…汝、新たな絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

“法王”のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん…

▽“法王”属性のコミユニティである“学園の教師”のコミュを手に入れた！

▽鳴上悠の失われた力“法王”属性のペルソナの一部が解放された！

ペルソナ全書を見ると、すでに登録済みだった“オモイカネ”が強化されている。

弱点が変わり、その対策含めて、色々な耐性をスキルとして持っていた。

ただ、LVが増えてはいないので、使う気なら少し成長させなければならぬだろう。

シャツフルタイムで得られたペルソナは、スキルがない限り勝手に経験値が入ったり

はしないのだ。

コミュで強化されたことによって、これからはそうではないかもしれないが……。

しかし、前にも思った通り、人の絆をコミュだけで測る気はないが、コミュの発生するタイミングによっては、いまいち使うタイミングのないペルソナも出てきそうではあった。

「鳴上くんも何か困ったことがあったら私に相談してね。私は鳴上くんの担任なんだから」

悠はその言葉にお礼を言うと、学園を出た。

その帰り道……なんとなく、「長鳴神社」の方面から帰ることにした悠は境内から湊の声を聞き取った。

気になった悠がそちらに足を向けると、ランドセルを背負った女の子とお喋りをしてる湊の姿があった。

悠の気配に気付いたのか湊がこちらに顔を向ける。

「あ、鳴上くん。寮に帰る途中に寄ったの？」

「ああ」

「……お兄ちゃん、だーれ？」

「私のお友達だよ」

「鳴上悠だ。よろしく」

「『舞子』は舞子だよっ！」

「そうか、舞子ちゃんか……」

悠は舞子の姿に誰かの面影を見た。

その感覚に戸惑った悠は、二人と軽く話した後、別れた。

長鳴神社を出たところでポケットに手を入れる。

取り出した手には一枚の写真が握られていた。

それはある『家族の写真』だ。

悠には舞子よりも年下の——妹のような存在がいたのだ。

そして兄と父の中間のような存在も。

「……次に会う時、がっかりされないように頑張らないとな」

あるはずのない写真という違和感には気付かず——。

悠はただ、より強固な意志で、これからの学生生活や影時間に挑むことを家族に対して誓ったのだった。

2009年5月7日（木）

悠は2—F教室前廊下で生徒会会計の伏見千尋と出会った。

「あ、千尋。——あれから、生徒会に顔を出せていなくてすまない。何か大変なこととか起きていないか?」

「いつ、いえ……。制服の廃止がどうかそれくらいで……。そ、それに、生徒会長から、鳴上さんたちは、通常とは違う形で生徒会に関わるって聞いてますから……」

千尋はオドオドとした態度でそう言った。

ちなみに千尋がオドオドしているのは、別に悠が千尋のことを名前で呼んだからではない。

いや、多少はそれもあるのかもしれないが、千尋だけではなく、悠が下級生を名前で呼ぶことはすでに周知の事実として受け入れられている。

なので、これは千尋の性格……。人見知りというか、元々男性を苦手としていることが原因であった。

「そうか。……千尋。俺のことが怖いのか?」

「えっ、あ、いえ……。そんなことは! ……ただ、その、私ちよつと男の人が苦手で……ごめんなさい」

千尋は申し訳なさそうに頭を下げた。

千尋自身、そういう性格を直したいとは思っていても、よし直すぞ! と思つて、その通りに直せれば、そもそもそんな性格にはなっていないという話である。

「謝らなくてもいい。——そうだ、よければ俺とどこか遊びに行かないか？」
「ええっ!!」

悠も千尋の性格はすでに理解しているのか、気長な対応——あるいは気楽な感じです。う提案するが、千尋は大袈裟に驚いた。

「あ、いや。一緒に帰るくらいでもいいんだ。せつかく知り合っただからな。それにこの先、生徒会の仲間として一緒に仕事をすることもあるはずだ。……今の俺が言っても説得力ないかもしれないが」

「そっ、それは確かにそうですね……。あ、あの、こ、心の準備をしたいんです。で、ですから、その今日は……」

「分かった。また声を掛ける」

「は、はいっ。よろしくお願いします……っ!」

恐縮したように頭をぺこぺこ下げる千尋に、手を振ってその日は別れた。

2009年5月8日（金）

放課後、健二に誘われて、順平と三人で「鍋島ラーメン・はがくれ」でラーメンを食べに行くことにした。

「そーいや、お前ら、我が校の『グルメキング』って知ってるか？」

「あー、グルキンだろ。実物は見たことはねえけど、たまに噂を聞くな」

「スゲエ食うって話だよな。ここにも通つてて、なんか『隠しメニユー』を出してもらえらって話だぜ」

「隠しメニユー?」

「そういうのがあるらしいぜ? よつぽどの常連にしか出さねえらしいから、興味あんならお前もここに通うことだな」

「つつても、オレっちもここに結構来るけど、そんな知らないぜ。話半分か、何か条件でもあんのかもな」

悠はグルメキングとはがくれの隠しメニユーに関する話を聞いた。

グルメキングとはその名の通り、大食いなど食に関する事で有名な学生らしい。

まあそれらの話とはかく——その後は、例のごとく健二の女性理論のようなものを見た。雑談をしたりして過ごした。

▽健二のことがまた少し分かった気がする…

▽Rank up!! Rank 2 魔術師・クラスメイト

▽『クラスメイト』コミュのランクが『2』に上がった!

▽鳴上悠の失われた力『魔術師』属性のペルソナの一部分が解放された!

ペルソナ全書を見ると、影が一つ少しくつきりとした輪郭になっただけだった。

残念ながらLV不足で制御できないペルソナらしい。

前に考えた仮説が正しいなら、悠の現在のLVが15なので、そのペルソナはLV16〜20の間のペルソナということになるだろう。

これからの探索では少しその辺りにも気を付けてみてもいいかもしれない。

しかし、前の時から悠のLVはそれほど上がっていない。

実際問題、これ以上の経験を得るためには、あの行き止まりの先に進まないと難しくなっている。

いったいどうすればあの先に進むことができるのだろうか……？

あれから日数が経過しているというのに、何が条件になっているのかは未だにわからず、手探りな日々が続いていた。

2009年5月9日（土）

影時間——。

「ふう……」

彼らの暮らす寮の四階に位置する作戦室。

四階の一フロアを丸々占めているその部屋は、応接室のようなセットに壁一面のモニターという構成で成り立っている。

そのソファに一人座り、美鶴は情報支援用の機材を操作しながら溜息を洩らした。

「何だ、まだやっていたのか？」

「——まあな。敵はいつ来るとも限らない」

作戦室に顔を出した明彦に声を掛けられ、作業を中断した美鶴は、やはりどことなく浮かない様子だ。

「タルタロスの外まで見張ろうなんて、そう簡単にできるものか？」

「本音を言えば、力不足だな……私の『ペンテシレア』では、情報収集はこの辺りが限界かもしれない。——しかし、ペルソナの力と言うのは、想像していたより、だいぶ幅広いものらしい。何しろ、次々とペルソナを替えながら戦う者まで現れたくらいだ」

美鶴のペルソナであるペンテシレアは、情報支援もできるといっただけであって、それを主としているわけではない。

桐条が開発した特別製の機材を使うことによって、その真似事ができる程度というのが本音だ。

けれど他にそれができる者もなく、強力な戦闘能力を持つ二人が仲間に入ったこともあって、得意ではなくても、美鶴は甘んじてその位置に就いていた。

「あの二人か」

「ああ。あの二人の能力には特別なモノを感じる。覚醒してまだ間もないと言うのに

な」

「……本当にそうか？」

「うん？　　どういう意味だ？」

悠と湊、二人の能力に特別なモノを感じるというのは、その能力を知る者の共通意見だろう。

それは明彦にとつても同じはずだ。

だから明彦が感じた疑問は、その特別さではなく、その後によく言葉の方だった。

「俺は通信を聞いてるだけだからなんとも言えないが、有里はともかく、鳴上はペルソナの召喚に慣れているように感じる。召喚器を必要としないことに関してもそうだ」

「——ふむ。だがそれは鳴上の精神力が並外れているというだけのことだろう？　　鳴上に関する資料にもおかしなところはない」

桐条グループは当然ながらS・E・E・Sに所属する者達の素性を詳らかにしている。

だが、それによって集められた悠の資料に、おかしなところはない。

確かにどんな生活をしていれば、そこまで強力な自己を確立できるのかという興味はあるが、むしろ美鶴的には——10年前にこの港区で両親を交通事故で喪っているという湊のほうが、その経緯やその後の対応に、若干何か引つかかるものがあるくらいだっ

た。

「まあ俺の考え過ぎかもしれないが……シャドウを初めて見た人間がああも立ち向かえるものかと思つてな」

「先月の話か。確かに模造刀一振りであれと戦り合うのは相当の勇気がいると思うが……ん？ 待て！ 噂をすれば影ということか？ シャドウ反応を見つけた！」

点けつばなしにしていた情報支援用の機材に現れた反応に、美鶴は声を上げ、その反応を確かめる。

「何っ!!? ホントに見つけたのか!!?」

「でも待て、反応が奇妙だ。大き過ぎる……これは、まさか——っ?」

「ひよつとして、先月出たのと同じ、でかいヤツか!!?」

美鶴の言葉に明彦の勘もまた、その答えを弾き出す。

今まさに話していた二人が覚醒するための「贄」となった大型シャドウの襲来。

「……間違いないだろう」

「そうか……思いがけず楽しめそうじゃないか。他の四人を起こすぞ?」

「ああ」

緊急招集——緊急時の警報が寮内に鳴り響くと、すぐに四人が作戦室に駆け付けた。

「お待たせしました！」

「何スカ?!? 敵スカ?!?」

突然の招集だったこともあり、四人はそれぞれ制服だったり部屋着だったりバラバラだった。

順平などは普段のキャップを外して坊主頭を晒しているために、それに気付いた湊が物珍しそうにじーつと見ている。

「タルタロスの外で、シャドウの反応が見つかった。詳しい状況は分からないが、先月出たような大物の可能性が高い」

「それって、真田さんに怪我を負わせたっていう……」

「ああ。外に出た敵は仕留め損なうわけにはいかない。影時間は、大半の者にとってないものだ。そこで街を壊されたりすれば矛盾が残る」

眠っていたわけでもないのに、気付けば目の前の建物が壊れていたとかそういうことになれば、誰もが混乱するだろう。

今回の戦いはそれを防ぐためのものということだ。

「ま、要は倒しやいいんでしょ? やってやるつスよ!」

「また、あんたは……」

「いい心がけだ順平! 今回は俺も!」

順平のやる気に、明彦もまた先月のリベンジだと普段から着用している皮手袋を

キユツと締める。

「——明彦はここで理事長を待て」

だがそんな明彦の参戦には、美鶴によって待ったが掛けられた。

「なっ……冗談じゃない！ 俺も出る！」

「まずは身体を治すほうが先決だ。足手まといになる」

「何だと!!？」

「彼らだつて戦えるさ。少なくとも、今のお前よりはな。明彦……もつと彼らを信用してやれ。みんなもう実戦をこなしてるんだ」

「……くそっ！」

戦いに関してはかなりの自負を持っている明彦だけに声を荒げるが、続く美鶴の正論に悔しげにしながらもそれを受け入れた。

「任してください！ オレ、マジやりますからっ！」

そんな明彦に対して、何があるのか分からないタルタロスの探索よりも分かり易いヒーローの仕事に、順平はテンション高くそう言うが——。

「仕方ないな……。現場の指揮を頼む、有里」

「やっぱそう来るんスね……」

結局、明彦たちがまず頼りにするのはリーダーの湊であるために、スカされた感じが

するのか面白くなさそうな様子を見せている。

「頼むぞ……できるな？」

「任せてくださいっ！」

マジメな雰囲気の中、一人順平の坊主頭に手を伸ばすか伸ばさないか、内心で葛藤していた湊は、そんな葛藤は微塵も感じさせずに力強く頷いた。

「ああ、期待しているぞ。——鳴上もフォローを頼む」

「はい」

「よろしくねっ！」

「分かった」

信頼した笑顔をみせる湊に悠も頷く。

「つか、もうこのまま、リーダー固定っばいよな……オレ、男なのにさあ……」

「安心しろ。俺も男だ」

「いや、知ってっけどもね……」

どうやら順平は最初に立候補した時から変わらず、リーダーになりたいという気持ちが強いようだ。

しかし、湊をリーダーとしての作戦行動は順調であるために、その意見が聞き入れられることはなく、不満を抱いているらしい。

「男も女も関係ない。できる者がやるだけだ」

「どの道、この状況で指揮系統を変えるわけにはいかない」

「ここで正論キタ！」

「いいから、四人は先に出ろ。美鶴は準備がいるんだろ？」

「ああ、駅前で落ち合おう」

「了解です。じゃ、行きますかつ！」

新都市交通 — あねはづる — 【巖戸台駅前】

「先輩、まだかな……」

「すぐ来んだろ」

「今夜は満月か……。なんか、影時間に見ると不気味ね……」

象徴化した人間もちらほらと見える駅前ロータリーの階段付近で待機している四人。

そんな中で見上げた満月は、煌々と影時間を、緑色の夜を照らしている……大型のバイクが近付いてきた。

いつも美鶴がタルタロス内に持ち込んでいるバイクだ。

「遅れてすまない」

「バ……バイク」

颯爽とバイクから降り立つその女子高校生らしからぬ風格に若干気圧されてしまう順平をよそに、美鶴はさつそくと作戦内容を告げる。

「いいか。要点だけ言うぞ。情報のバックアップを、今日はここから行う。君らの勝手はこれまで通りだ。シャドウの位置は、駅から少し行った辺りにある列車の内部。そこまでは線路上を歩くことになる」

「線路歩くって、それ危険なんじゃ……」

「心配ない、影時間には機械は止まる。無論列車もだ、動くはずはない」

「や、でもそのバイク……」

「これは『特別製』だ。それに、状況に変化があったら私が逐一伝える。——よし、では作戦開始だ!」

こう話している間にもシャドウが何か悪さをしなにとも限らないと、美鶴は号令を掛け、後を現場リーダーの湊に託す。

湊は頷くと腕を振り上げた。

「皆の者、出動だつ!」

「ああ、戦果を期待しているぞ」

「——いや、皆の者って……ってか、流した!!?」

【モノレール前】

「これ……だよな?」

『——全員、聴こえるか?』

駅から線路に降り、歩くこと数分……四人が止まっているモノレールを見上げていると、美鶴からの通信が入った。

「あ、はい、大丈夫です。今着いたんですけど、パツと見じゃ、特に……」

「いや。影時間内で駅でもないのに、ドアが開いてるのはおかしい」

悠は冷静にその状況における異常を口にする。

「あつ、そつか。確かに……」

『……敵の反応は、間違いなくその列車からだ。全員、離れ過ぎないように注意して進入してくれ』

しかし、シャドウがその中にいるというのならやはり調べてみるしかない。

美鶴の言葉に四人は顔を見合わせて頷き合った。

「分かりました」

「へへッ、腕が鳴るぜつつか、ペルソナが鳴るぜ!」

「じゃ、乗り込みますか!」

ゆかりが真っ先に、乗車口へ続く足場に飛びつき、上っていく……。

「……はっ！ ノゾかないでよ」

線路上からモノレールに乗ろうとすれば、まあ見える。

そのことに途中で気付いたゆかりはジト目で男子二人に警告を発した。

「へいへい、ノゾかねえつつの。……つてか、見えたらしょうがねーよ？」

「——湊。順平、ここに埋めて行こうか」

「作戦許可！」

「いやいやいやっ!!？」

【モノレール内 最後尾車両】

「これ、人間……つか、乗客だよな？」

棺のようなオブジェが立っているのを見て、なんとか処刑を免れた順平が気味悪げに
呟く。

「あっ!!？」

全員が乗り込み、象徴化した乗客の姿に気を取られていると、モノレールのドアが全
て閉じてしまった。

『どうした、何があった!!？』

「それが、閉じ込められたみたいで……」

『シャドウの仕業だな……。確実に、君らに気付いているということだ。何が来るか分からない。より一層、注意して進んでくれ!』

「りよ、了解です」

悠はその気配を前方から感じ取った。

「……いる」

「あつ!」

「出やがったなツ!」

だが、現れたシャドウは背を向けると、前の車両へと逃げ去っていく。

「ちよつ、こらツ!!?」

『——待てつ! 敵の行動が妙だ。イヤな予感がする』

すぐにそのシャドウを追いかけようとする順平を、美鶴が鋭い声で制した。

「そんなんつ! 追っかけないと、逃がしちまうっスよ!!?」

『有里、現場の指揮は君だ。この状況……。どう思う?』

「……慎重になるべきです」

『私も同意見だ。迂闊に追うべきじゃないな』

「何でだよつ!!? あんなのオレらで倒せんじゃん!」

——順平はこの中で一番普通だった。

父親がアルコールの依存症で苦勞したなんて背景があつても、それだけだ。

そんなだからこそ、そういう現実から切り離された非日常の存在に期待していた。隠された時間の中で、誰にも知られることなく特別な力を持って戦うヒーロー。

そのヒーローに自分は選ばれたのだと、最初は無邪気に喜んでいた。

しかし非日常であつても現実だ。

能力の高い者は優遇され、期待される。

そしてそれは順平ではなかった。

順平が得た特別は、その二人の特別さに比べれば全然普通で、だからその二人のことは嫌いじゃなくても苛立つてしまう。

「落ち着け」

力を手に入れたのにヒーローになれないなんて、生殺しもいいところだ。

「でもよっ！」

「シャドウがあれだけとは限らない。そもそもあれは大型シャドウとは言えない。モノレールに俺たちを閉じ込めたことといい、囷の可能性が高い」

「だけど——」。

「あつ……そ、そか。悪い。ちよつと突つ走りかけてた……」

その特別な二人は、ともすれば一人で何でもできるような万能感をみせるくせに、そ

んな順平を仲間として素直に頼ってくるのだ。

「——いや、その姿勢は頼もしいよ。モノレールに俺たちを閉じ込めたのは、攻撃手段を限定する意図もあると思う。いや、仮になかったとしても、タルタロスとは状況が違うんだ。攻撃力の高い順平をメインに、俺たちは回復やサポートに回るべきだ」

「うん、そうだねっ。それで行こうっ！ 頼むよ、順平っ！」

「あ、ああつ！ 任せとけてっ！」

だから順平はやはりその二人が嫌いじゃなくて——というか、嫌いになれなくて、別に一人でヒーローにならなくてもいいかな(ほら、たとえばフェザーマンとかは戦隊モノだしな)なんてことも考えたりもして。

そう、きっとこの苛立ちはまだ消え去ったりはしないだろうけど、それでも出会ってからこちら、友好的に接してくれる二人と仲違いしてまで、貫きたい意地じゃないと、その踏み出し掛けた一步は、自分のためじゃなく仲間のために出すことを選んだ。

『話はまとまったな。——む。後ろから来るぞ！ やはり囧だったかっ！』

現れたシャドウは二体。

だが、態勢の整っている四人の敵ではない。

続けて逆側から更に三体のシャドウ。

四人はそれも蹴散らした。

『よし！ いいぞ！』

「へへっ、オレらが揃ってりや、余裕だったの！」

「……つたく、調子良いんだから」

『——待て。敵の動きが急に静まった。警戒を怠るな！』

美鶴の忠告とほぼ同時に、なんと影時間内だというのにモノレールが動き出した。

「おわっ……何だよ！ 動かねエンじゃなかったのかよ!!?」

『どうやら、列車全体がシャドウに支配されてるらしいな……』

「らしいって……ちよつと、大丈夫なんですか!!?」

さらにモノレールの速度が上がる。

「お、おい……ヤバくねえ？」

『マズイ、このままスピードが落ちないと、数分で、一つ前の列車に衝突する！』

「「衝突!!」」」

「ど、ど、ど、どーすんだよっ!!? オレらの命がマッハでピンチじゃん!!?」

「……現時点でモノレールの最高速度はだいたい80〜90km/hのはずだ」

「そんな豆知識要らねえーっ!!?」

『いいか、落ち着いて聞くん。さっきから先頭車両に強い反応を感じる。たぶんそれ

が本体だ。行って倒し、列車を止めるんだ！』

しかし、そんな四人を阻むように三体のシャドウが現れた。

「クッソ！ なんのアトラクションだよ、ったく!!」

順平が悪態を吐くが、その気持ちは誰もが同じだ。

速攻でシャドウを倒し、先頭車両へと向かう。

『時間がない！ 走れ！ 計算によると、列車衝突まで——あと3分だ!』

「マジかよっ!!? シビア過ぎだろっ! 普通8分くらいあるんじゃない?」

「——なんの話よっ! いいから走りなさいよっ!」

その後もシャドウが現れては秒殺し——……。

『あと1分40——いや、30秒だ! 本体はその中だ! 準備はいいなっ!』

「大丈夫ですっ! みんな、行くよっ!」

中には運転室への扉を塞ぐようにして座る——座りながらもモノレールの天井まで届く体長の巨大な人型シャドウ。

個体名 プリーステス^ズ。

女性型でその髪は無数の帯のような形状で長く、意志があるかのように蠢いていた。

「いたっ! ——うっわ……すげーことになってんな……。コイツが本体?」

「先はもうないし、コイツで間違いないよ!」

ただ天井まで届くとは言っても、影時間内では時間や空間を超越するような現象が普

通に起きる。

実際、この大型シャドウの影響なのか、モノレール内はすでに準タルタロスのような空間と化しており、ご都合主義のようにペルソナを召喚したり、剣を振れるだけのスペースが存在していた。

そうでもなければ、きつと戦闘の余波だけでも、モノレールはとつくに壊れているに違いない。

『急ぐんだっ！ 残り約一分！ ——敵のアルカナは“女教皇”だ！』

戦闘は四人がその姿を確認すると同時に開始された。

髪が触手のように、けれど刃のような鋭さで襲ってくる。

それを刀でいなしながら悠が叫ぶ。

「今更、こんなヤツに弱点があると思うな！ 自分の最強の技で攻撃するんだ！」

「了解ーっ！ ——ヘルメス!!!」

悠と湊がそれぞれ攻撃力を上昇させる“タルカジャ”と防御力を上昇させる“ラクカジャ”を掛けた上で、ヘルメスが斬り込む。

「続いて——イオ!!!」

イオの放つ疾風属性の魔法スキル“ガル”がモノレール内を吹き荒れた。

『車内の温度が急速に低下——気をつけろ！ “マハブフ”だ！』

「そんな攻撃、私のジャックフロストならっ！」

雪だるまのような姿のジャックフロストは氷結無効。

しかし、湊が一人攻撃を無効にする事も見越したように、新たな小型のシャドウが現れる。

『——敵、さらに二体出現！ 召喚したのか!!?』

「嘘でしょ！ もう時間ないのにつ!!?」

「そいつはさつき見た！ 弱点は氷結！ 俺たちを惑わす気だ！ ——有里！」

「了解っ！ 個別に撃破すればっ！ ——ジャックフロスト!!!」

湊は氷結属性の魔法スキルを使ってくる大型シャドウは無視して、小型を「ブフ」で狙い撃ちダウンさせると、ペルソナをチェンジして、大型を狙い撃つ。

「——「グルル」!!!」

現在、湊が使えるペルソナの中で最強の攻撃スキル「パワースラッシュ」を持つグルルだ。

「足りない——っ、鳴上くんっ！」

『残り30秒切ったぞ!』

「小型も起き上ってくるっ！」

「——カーシー!!!」

カーシーが「マハガル」を放つ。

カーシーは悠が持つペルソナの中でも数少ない、全体攻撃スキル持ちだった。魔力はそれほど高くないが、すでに湊がだいぶ削っている。

カーシーの放つ風がシャドウをまとめて斬り刻んだ。

小型は倒れた——。

「順平!!!」

「おおおおおおおっ!!! ——ヘルメス!!!」

順平のヘルメスがトドメとばかりに大型シャドウに突っ込んだ。

だが——。

「……ダメだっ! ちよつとばかりし足んねえっ! 誰か——ッ!!!」

「オルフェウス!!!」

「イザナギ!!!」

二体のペルソナがその叫びに応えるように突っ込み、さらに悠が自身のペルソナを跳び越えると、そのままの勢いでイザナギの攻撃と十文字になるように大型シャドウを斬り裂いた。

「やった——っ!」

「——って、止まんねえじゃんかっ!!!?」

「ブレーキ！」

『急げ！ 残り約10秒!!!』

「任せろ！ 知識にある！」

「キヤアアツ!!？」

それは傍目に見てもギリギリだった。

むしろちよつと当たってるくらいかもしれない。

「……止まった？」

「助かった……のか？」

『おい、無事なのか?!?!』

「は、はい、無事、です……でも、どうして……」

咄嗟のことだったので、ゆかりは状況が掴めずに呆然と呟く。

その頃、運転室では手を重ねるような格好だった悠と湊がブレーキから手を放した。

「あ、あはは……焦った……!」

湊が崩れるようにその場に座り込む。

「お疲れ」

悠がそんな湊の肩を叩いて言うのと、湊はへにやつと微笑った。

二人揃って運転室から出る。

「お、お前ら……よく、ブレーキ分かったな」

「前に本で見た」

「女の勘」

湊はグツとサムズアップして応える。

「つておーいつ!!? 悠はともかく、湊ツチ、オテンバ過ぎっ!」

「湊ツチ?」

「悠?」

「あ、あー……鳴上と有里な」

どさくさの中で出た名前呼びを見咎められ、順平はテレたようにキャップのツバを弄る。

そんな順平の姿に悠と湊は顔を見合わせて笑う。

「悠でいい」

「でも、湊ツチはちよつと語呂が悪くない? 普通に呼び捨てでいいよ」

「あ、そ、そつか? じゃあ、これからは二人ともそういうことで」

今度は首に手を回し、若干俯きながらもニヤけている順平。

危機的状况を協力して乗り越えたことで、順平の中のアレコレは結構あっさり収束する方向に向かっているのかもしれない。

「そっち和んでないでよ。あー、や、やば、私、ヒザ笑ってるよ……」

「オレだって、メチャメチャ、ヤな汗掻いたっつーの」

何はともあれ——だ。

彼らは勝利した。

今回現れた大型シャドウが、何をするためにモノレールに現れたのかはわからないが、何かを起こす前に防ぐことに成功したはずだ。

『ふう……無事らしいな。今回は、バックアップが至らなかった。すまない……私の力不足だ。シャドウの反応はもうない。よくやってくれた、安心して戻ってくれ』

美鶴の口からもはつきり戦いの終わりが告げられた。

「——つか、帰りなんか食ってかねエ？ 安心したら腹減っちゃったよ」

「あんたねえ……。逆に食欲なんてないっつの」

「私、ラーメン！」

「……湊。あんたは自分が女子だつてことを、もうちよつと自覚しなさいよ」

「ほえ？」

「可愛く言つてもダメ！ 普通、女子はこんな時間にラーメンなんて食べないっ！」

「えーっ!!？」

「そこで驚かないでよ……あんたつてば、ホントにもう……っ！」

「あははつ、冗談冗談っ！ それよりさっきの連携良かったよねー！ 合体攻撃って感
じっ！」

「お、それいいっ！ 今度から機会があったら狙ってみつか？」

「そうだな」

「……え。冗談？ 何が冗談？ 私もしかしてあの子にからかわれてる？」

「特別課外活動部は厳しい戦いを経験したことでより戦いへの決意を固めた！

「戦闘中に『合体攻撃』が提案できるようになった！」

一方その頃——【作戦室】

「俺だ」

『こちら現場だ。たった今、全て片付いた。モノレールにも目立った被害はない。……

ギリギリだったかな』

「ご苦労さま。桐条君。やー、列車を乗っ取られたと聞いた時は正直どうなるかと思っ
たけど、上出来だよ。これなら明日の朝刊に変な大見出しが出るようなことは、なくて
済むね」

現場に行くことができずにイライラしながら待機していた明彦と、大型シャドウ出現
の報を聞いて駆け付けた幾月が美鶴からの通信を受けて作戦の終了を知る。

『彼らが良くやってくれました。短期間で驚くほど成長しています』

「しかし、シャドウの様子……ただ事じゃないですね。モノレールを乗っ取るなんて、調子に乗り過ぎてる」

「こちらでも調べてるよ」

こちらというのは当然だが桐条グループのことだ。

実際に戦えるのがペルソナ使いである彼らだけであつても、この状況を知る他の者たちが何もしていないわけではない。

特別チームによる研究や調査は、変わらずに続けられているのである。

『遂に……始まった、ということなんでしょうか?』

これまでは緩やかだったと、一足早く覚醒していた美鶴は思う。

その存在を知らながらも戦力が足りなくて挑めずにいたタルタロスに挑めている現状といい、ここに来て明らかに戦える者が増えている。

そしてこれまでにない異質な敵の存在。

それらの状況に、何かが始まったと考えるのは決しておかしいことではないだろう。

「うーん……まだ早計には言えないけどね……。ま、とにかく、まずは現れるキツカケを突き止めないことにはね。いつも、こんな土壇場まで分からないのはどうにもマズイ」

『私にもっと力があれば、みんなの負担を軽くできるんですが……』

「気にしなくていいさ。君は良くやつてくれてる。そんなことよりね……。真田君さー
……。何か、飲み物持つてない？」

「は……。？　というか幾月さん、今日、何だか疲れてませんか？　まさか、表に停めて
あつた自転車……」

「明日、いや、明後日辺り……。筋肉痛かな、こりゃ」

影時間内では機械は動かない。

そして『特別製』は特別な物なのだからそう数があるわけではない。
きつとそういうことだ。

——……。影時間が終わる。

5月10日(日): 愚者×愚者

2009年5月10日(日)

「ねえ、鳴上くん。コミュちようだい？」

「は？」

悠は湊の言葉に目を丸くした。

話の流れからそういう話になるのも分からなくはないが、まさかこうまで直接的に言われるとは思わなかったのだ。

話は少し前に遡る――。

「誰もいない……な」

朝――目覚めた悠は、身支度を整え、ラウンジに姿を現すと、その状況を見て呟いた。いつもならいくら休日とはいえ、この時間帯には誰かしらいるのだが……先の影時間の影響で、みんな疲労しているのだろう。

特に大型シャドウの討伐に向かった者たちはそれも仕方がない。

悠は体質の問題なのか、そこまで疲労を感じるようなことはなかった。

だがそれでも、先の影時間が大変な状況だったという感想に違いはない。

なので、みんなの体調が悪いようなら、通販で手に入れたツカレトレールを渡そうかと思うのだが、鳥海に1個あげたので、残りは2個しかない。

元々3個セットだったのだ。

しかし、その考えは杞憂に終わった。

パタパタと悠に続きラウンジに姿を現した湊は、疲労を感じさせない明るい顔をしていたのだ。

「おはよう。有里」

「おはよっ！ 鳴上くんっ！」

「——元気だな。影時間の疲労はないのか？」

「うんっ。この前通販でツカレトレール頼んだから！」

……どうやら、湊も時価ネットの利用者だったようだ。

「そうか。俺も頼んだよ。あと2個残ってるから、他のみんなが疲労してるようだったら、あげようと思ってる」

「そうだねっ！ というか、鳴上くんも時価ネット利用するんだ？ 良いよね〜あの歌

！ み・ん・な・の、欲の友〜！」

「あ、ああ。そうかな？」

「だよねっ! ——そだつ。鳴上くんには、これを進呈〜!」

湊は「こそこそ何かを取り出すとそれを悠に渡した。」

「ストラップ?」

「そっ! 私が作ったんだよっ!」

「作った?」

湊から渡された物は「和布のストラップ」。

和布の花飾りと、同じく和布で作られたジャックフロストのストラップ……これを自分で作ったというのは凄い。

手作りのストラップといえば悠も「キュートなストラップ」を持っているが、それと比べても……いや、完成度はそちらのほうが高かったが、こういうのは気持ちの問題であって、比べるものじゃないなと悠は反省した。

「うんっ! 家庭科室に「ファッション同好会」ってのがあってね。そこで作ったの!」

「ああ……:そういうえばフランス語で、そんなことが書いてあったな」

「あ、鳴上くんもあの張り紙読んでたんだ? 私もそれで興味を持って、せつかくだから入ってみたのっ!」

お礼を言って、ストラップを受け取った悠を、湊はにこにこして見ている。

しかし、不意に首を傾げた。

「あれー？」

「どうかしたのか？」

「うーん……これでもダメかー……」

尋ねる悠の言葉が耳に入っているのかいないのか、湊は何やらぶつぶつ呟いている。

「ダメって何が？」

「へっ、あ、ううんっ！ こっちの話……っっていうか、もしかしてだけど、鳴上くん、コ

ミュって知ってる？」

「コミユ？ それって、ペルソナ——失われた力を取り戻すために必要な他者との絆の

ことか？」

悠はコミユと言われて、近頃たまに頭に響くようになったあの声のことと結びつけ

た。

「わっ、なんか知ってたっ!!? ベルベットルームは知らなかったのにつ！ ……でも、失

われた力？」

「俺はそう認識してるが」

「ふーん……それはともかくっ！ 知ってるなら話が早いっ！」

「なんのことだ？」

悠が不思議そうな顔を見ると、湊は無邪気な顔をしてそう言ったのだ。

「ねえ、鳴上くん。コミュちようだい?」

「は?」

そうして話は現在に戻る……。

「ちようだいって、コミュってそうやって築くものじゃないと思うんだが」

「だって、鳴上くんのコミュ欲しいっ!」

「ずずいっと顔を寄せてそんなことを言ってくる湊に、悠は若干後ずさる。

「そう言われてもな……」

「うう……ゆかりや順平とは築けたのに、鳴上くんの意地悪っ!」

「意地悪って……」

悠は湊の勢いに辟易しながらも、順平とのコミュも築いたのかなんてことを頭の片隅で思う。

「クラスメイト」のコミュが発生した場合には順平もいたが、あれは順平のことも含まれていたりするのだろうか。

「ストラップもあげたのにつ!」

「そういう問題じゃない。人との絆をコミュだけで測るのは良くないと思うぞ」

「べ、別にいつもじゃないよ……でも、コミュがあると仲良くなれてるって実感があるから……」

湊は目を逸らすと、ちよつと気まずそうに呟いた。

「まあ……確かにその気持ちは俺も分からなくはないが」

「だよねっ！ だったらコミュちょうだい！」

悠がフオローすると湊がキラキラした目で詰め寄ってきた……。

悠は堪らず溜息を吐く。

その時——。

我は汝…、汝は我…汝、新たなる絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

“愚者”のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん…

▽ “愚者”属性のコミュニティである “有里湊”のコミュを手に入れた！

▽ 鳴上悠の失われた力 “愚者”属性のペルソナの一部が解放された！

▽ 有里湊との合体攻撃 “ミックススライド”が解禁された！

▽ 有里湊との合体攻撃 “ミックススレイド”に新たな可能性が追加された！

ペルソナ全書を見ると、“ヨモツシコメ”が追加されている。

ヨモツシコメは湊も使っていたことがあるが、悠のシャツフルタイムにはまだ出てきていなかった。

だが、その時の湊のヨモツシコメのアルカナは「隠者」だったはずだ。ピクシーの時と同じようなことが起こっているのだろうか。

そう思つてペルソナ全書を少し捲つてみると、イザナギのスキルも変化している。

「ジョ」が「ジオンガ」に、「スラツシユ」が「パワースラツシユ」になつていた。これはどう考えるべきだろうか。

初期ペルソナであるイザナギはすでにスキルを8個持っていたし、コミユによる変化はないと思つていたのだが、状況によつては既存のペルソナも強化されることがあるのだろうか。

……ちなみにだが、悠のイザナギは他のペルソナとは違つて、完全に悠と成長を同期しているようで、他のペルソナよりもさらに経験値が入り易く悠は主力として使っている。

そのため、この変化は素直に歓迎するところだった。

しかし今回、さらに分からないのは「ミックススライド」というものの存在なのだが。

「——鳴上くん、聞いてるっ?」

「え、ああ。……何だか俺のほうに有里とのコミユができたんだが」

「へっ……?」

悠の言葉に湊はぼかんとしている。

そして、爆発した。

「えーっつ!!? なんてーっつ!!? どうしてそうなるのーっつ!!? それって、私が
攻略される側ってことーっつ!!?」

「いや、攻略って……」

悠がその言葉に突っ込みもうとするが、きつ！ と湊に睨まれる。

「わ、私は……私は！ そう簡単に攻略されたりしないんだからーっつ!!!」

そう叫ぶと、湊はどこかへと駆けて行った。

悠はその様子を呆然と見送る。

……そして、しばらく経って正気に戻ると一言呟いた。

「そつとおこう……」

∨湊との間にほのかな絆の芽生えを感じる……

∨湊のことが少し分かった気がした……?

同日 一夜―【巖戸台分寮 ラウンジ】

「……今日はタルタロスに行きます」

どこかぶすつとした表情で湊が言う。

「えっ、昨日の今日だけ？ 確かに悠に貰ったツカレトレールで疲労感はねえけどよ」

「何か問題が?」

「い、いや、べつに!」

じとつとした視線に愚痴を漏らした順平の腰が引けた。

その様子を見てゆかりが悠に身を寄せる。

「ね、ねえ。湊ってはどうしたの? 鳴上千ん知ってる?」

「いや……」

湊は悠の姿を見て機嫌が悪くなったようだった。

その様子に、今朝のことが未だに尾を引いているのかと思つた悠だが、説明できるようなことでもなかった。

「そこ! イチャイチャしないっ!」

「い、イチャイチャって……」

ゆかりは反論しかけたが湊のただならぬ気配に語尾を弱めた。

「——しかし、本当に今日タルタロスに行くのか? 伊織の言葉じゃないが、昨日の今日だ。今日くらい休んでもいいんだぞ?」

美鶴のマジメな言葉に、湊のおかしな気配が少し薄れた。

「……予感がするんです」

「予感?」

「先に進める気がするんです」

「それは、大型シャドウを倒したからか？」

「そうかもしれない」

湊の言葉に美鶴は少し考え込むと、それぞれの顔を見た。

「ふむ……。他の者はどうだ？ 本当に疲労はないのか？」

「一応身体は問題ないっすけど」

「私も」

「俺もです」

「……俺もだ」

「明彦はまだダメだ」

「くっ……」

2年生組の中にちゃっかり紛れてみた明彦だが、美鶴に見咎められる。

明彦は悔しそうだ。

「……誰か、一段階上の回復スキルを覚えたりはしていないのか？」

「覚えてないです」

「私も」

「残念ですけど」

「くそっ」

「しつこいぞ。明彦」

往生際悪く尋ねる明彦だが、上位系のスキルは、それこそイザナギの『ジオンガ』や『パワースラッシュ』のような攻撃スキルしかまだ発現していなかった。

「……つてか、タルタロスのエントランスにある置時計で治せないんすか?」

順平がこれって名案じゃね? と提案するが、明彦はそれは試したと首を振る。

「無理だった……。というか、あれ自体が俺に反応していない。俺は探索メンバーとして認識されていないのかもしれない」

「あれって登録式なんですか?」

「おそらくだな。タルタロスで戦う者だけが使える」

「あ、忘れてましたけど、『宝玉輪』とかソーマならありますよ」

「——それだっ!」

明彦の怪我に使うという発想がなかったために、出てこなかった案を思いついた湊がそう言う。

どちらも範囲内の味方を回復させるアイテムだが、個人に使えないことはない。

明彦はその案に湊を指差し叫んだ。

しかし——。

「ダメだ。明彦の怪我は後少しもすれば治る。これから先に何かがあるか分からないんだ。貴重なアイテムを消費することは許可できない」

これも美鶴が却下した。

言ってることは正論なのだが、納得できない明彦は食い下がる。

「今が俺の緊急事態だ！」

「……再び大型シャドウが出てくるならともかく。タルタロスを探索するだけなら四人いれば充分だ」

「だがっ！——……そうだ。順平。お前、今日は疲れてるんだろう？ 寮で休んでいたいよな？」

「へ？ いやいやいやっ、ちよっ、真田さんっ!!? なんて拳を握りしめてんすかっ!!?」
真顔で迫る明彦の姿に、順平はおもいきり後ずさった。

「——明彦。いい加減にしろ。これ以上ゴネるようなら——処刑だ」

その瞬間、天然の氷結スキルが発動された。

明彦の動きがピタリと止まる。

若干身体が小刻みに揺れているようにも見える……震えているのだろうか。

悠は二人が戦っているところをまだ見ていないが、美鶴は氷結スキルを覚えて、明彦はそれが弱点な気がした。

「し、仕方ないな。俺はお前たちを信頼してるだけだ。——決して、美鶴の迫力に恐れを為したわけじゃないからな！」

そうらしい。

タルタロス —16F—【世俗の庭テベル】

「やっぱ閉まつてるよ。どうする?」

ターミナルで14Fへと一気に上がり、再び16Fへとやって来た四人だったが、その光景を見てゆかりが尋ねる。

「んだよ……。結局、無駄足か?」

順平が愚痴るがそれは気にせず、湊が行き止まりを調べる。

すると光が消え、バリケードを形成していた机や椅子はがたがたと動き出し、先に続く階段が解放された。

「——ほ、ホントに解放されちゃった……。これって昨日の大型シャドウを倒したから?」

『どうだろうな。とりあえず先に進めるようになったのなら、進んでみてくれ』

「了解ですっ!」

タルタロス ―17F―【奇顔の庭アルカ】

「なんかフロアの雰囲気変わったな……」

アルカは影時間色の強いテベルとは違い、薄ぼんやりとした赤紫色の背景で、その床も格子模様ではなく、幾何学模様が連続して並ぶような感じだが、その中には騙し絵的な要素もあつて、壁には悪趣味な顔のレリーフがこれまた等間隔で並んでいる。

まあ、テベルが西洋風の城の中のような感じでありながらも、若干学園っぽさもあつたのに対して、ここからはもうタルタロスだということを前面に押し出してきたフロアだとも言えはいいのだろうか。

精神衛生的にはあまり長時間いたくない場所だが、このフロアに足を踏み入れた四人はこれから、こういった場所を探索して行かなければならないのだ。

『少し待ってくれ。離れてきたからか、反応が……いいぞ。先に進んでくれ』

美鶴の言葉にフロアの探索を開始した四人は、すぐに何体かのシャドウと戦闘を行うことになった。

「シャドウ、ちよつと強くなった？」

倒すことは倒したが、その手応えにゆかりが誰にとはなく眩く。

「上に行くほど強くなるってか？ マジでゲームみたいになって来たな」

「油断せずに行こう」

四人は頷き合うとさらに探索を続ける。

だが、上に行けば行くほどに、美鶴の支援情報にタイムラグが出るようになって来ていた。

——それはともかくとして。

「青春のステイック」！ 青春ってステキっ！

「なんなのアレ……」

「機嫌が直ったみたいで良かったじゃないか」

「オレたちでも、湊のたまに出るあのテンションには付いて行けないわ……」

金色の宝箱から手に入ったアイテムに湊が機嫌を直したり——。

「『フアントムメイジ』は『ムド』に気をつけろ！ 喰らったら一発で意識を持って行かれるぞー！」

「どわっ、こっち来んなっ！ 悠なら閻属性無効だっつーの！」

なんてことがあったり——。

「あ、何あの金ぴかっ！ 速いよ！ あ、逃げるっ!!？」

「——追いかけてっ！ 仕留めるよっ！」

なんてこともあったりして——。

……25F。

再び、双方向ターミナルと番人シャドウが存在するフロアに出た。

『フロア中央に反応が三体！ 気を付けろ！ 状態に不安があるなら一度戻ってきて回復するんだ』

態勢を整える意味も含めて、四人は一度ターミナルでエントランスに戻った。

置き時計で回復したり、ちよつと休憩した後再び25Fへと向かう。

『番人か……倒さなくては先に進めないようだ。アルカナは『魔術師』タイプ。相手は番人だけあって普通のシャドウよりは強いぞ。注意しろ』

美鶴はそう忠告するもの――。

「『魔術師』ってことはオレっちと同じタイプか。松明みたいなのも浮いてるし、敵の攻撃は火炎属性か？」

「その可能性は高いな。弱点があるなら、順平と同じ疾風か、火炎の逆ということで氷結ってところだろうな」

「あ、ごめん！ 私今はヨモツシコメ持ってないから、氷結スキルが使えて火炎に耐性があるペルソナないよっ！」

「とりあえず――イオ！」

ゆかりのイオが風を巻き起こすが魔力以上のダメージはなさそうだ。

「『ガル』じゃないか……。なら――ジャックフロスト！」

「え、なんでジャックフロスト?」

「俺のジャックフロストならある程度の火炎は避けられる! それに——ブフーラ!」

悠のジャックフロストは悠のLVが16になった時に解放された。

氷結は無効で、「火炎見切り」というスキルも持つ。

そもそも8個目のスキルに「火炎耐性」というモノを持っていた。

——そして何より、「ブフ」よりも強力な上位氷結スキル「ブフーラ」。

しかも「氷結ブースター」のスキルの効果で威力はさらに上がる。

「えーっ! ブルイっ! 私ジャックフロストにそんなスキルどっちもないよっ!」

「どうやら氷結が弱点という読みは当たりだったらしく、悠が次々に「泣くテープル」という個体名のシャドウをダウンさせていく。

「総攻撃チャンスだ!」

「うーっ、なんか納得行かないけど、総攻撃!」

あとは総攻撃を決めてしまえばそれで終わりだった。

美鶴の忠告を必要としないほどに、四人は成長していたのだ。

「思ったほどには消耗しなかったこと、悠はイザナギを宿していれば、勝利の息吹」というスキルで体力や精神力を徐々にだが回復できるので、四人はそのまま探索を続

けることにした。

……ただ、ここで探索を止めておけばあんなことにはならなかったかもしれないの
と思つても、それは後の祭りであつた。

「こ、これは………っ！」

それは、28Fで起こつた。

震える手で湊がそれを目の前にある金色の宝箱から手に取る。

——そして、すつ、とゆかりに手渡す。

「ちよつ——はあっ!!? まさか、これを私に着るとか言う気じゃ………っ」

湊はにっこりと笑うと、グツ！ とサムズアップした。

「冗談でしょ!!? それ、どんなイジメよっ!!?」

「い、いやいやいやっ！ ゆかりツチ！ これもシャドウ討伐のため！ タルタロス探

索のため！ 影時間の謎を解くためだつて！」

「うっさい！ バカっ！ ——なつ、鳴上くんも何か言つてよ！」

ゆかりが悠に助けを求める。

しかし、悠は固有スキル「そつとしておこう………」を発動していた。

「あゝっ！ いつもは頼りになるのにこんな時に限つてっ！」

「悠も男だからな」

「やっぱ、あんたそれ目的じゃん！ さっきの理由全部建前じゃないっ！」

「うっ、バレた！ ……だがしかくしっ！ こっちにはリーダーさまが付いている！」

そう言つて順平はババツと両腕で大袈裟に湊を示す。

「うんっ！ リーダー権限発動っ！ ゆかりはそれを装備することっ！」

湊もそれに応えて足を肩幅に腕を組んで大仰に頷くと、ズビシつとゆかりに指を突きつけて命令する。

「だっ、そ、そんなにこれに拘るなら、あんたが着ればいいでしょ！」

「私にはこの『アンゴラニット』があるからっ！ 防御力もこっちのが高いし、ぬくぬくしてて、精神力UP！」

湊は一人完全に私服に見えるその装備でぬくぬくしていた。

ゆかりは渡された装備との差異に、齒噛みして睨みつけるが、精神力もUPしている湊は正面からスルーした。

「じ、自分ばかり……っ。——き、桐条先輩！ 何とか言つてやってくださいよっ！」

「うん？ 現場の判断は有里に任せているからな……」

「そこを何とか！」

『ふむ……有里、本人が嫌がっているのだから、その装備は止めておいたらどうだ？』

「桐条先輩！」

ゆかりは頼りになる先輩の姿——というか声に瞳を潤ませている。

それは砂漠の中で与えられた水や、飢えた時の一切れのパンのように、ゆかりの中に染み込み、ゆかりの美鶴に対する不信感やらを消し去って好感度を上昇させていく。

だが——。

「シヤドウ討伐のためです」

『い、いや、だが、しかし……』

「タルタロス探索のためです」

『ほ、本人がだな……』

「影時間の謎を解くためには必要なんですっ！」

敗北。

美鶴は湊の勢いだけの押し切りに寄り敗けた。

『むう……。岳羽——……』

「ちよつ、嘘ですよね？　桐条先輩。まさか順平が言っていたことを繰り返しただけの言葉に桐条先輩は屈したりしませんよね？」

『……すまない。だが、有里がここまで言うからには、その装備の有用性は確かなのだろ
う。我慢して着てくれ』

その言葉に絶望感を覚えたゆかりの中で、上昇した美鶴の好感度が元の位置よりちよつと低いくらいの位置まで急落していく。

上げた後に落とされたのでその振り幅は大きい。

「そ、そうだ！ リーダー交替！ ここからは鳴上くんをリーダーにしましょう！」

「ゆかりツチ……往生際が悪いぜ。——つーか、ここに来てそういうこと言うかね。昨日のことで、オレっちもようやく湊がリーダーだつてことを認められそうになつてたのによ」

「くつ、な、鳴上くんつ!!!」

ゆかりは最後の希望に縋るようにもう一度悠に助けを求めた。

しかし、悠は未だに固有スキル「そつとしておこう……」を発動している。

「あくもくつ!!! 着るわよつ！ 着ればいいんでしょつ！ 着てやるわよつ！」

「よつしやーつ!!!」

ヤケになつたゆかりがそう叫ぶと、順平が諸手をあげて喜んだ。

湊も小さくガツポーズをしている。

「あーつ！ うつさい！ バカつ！ 代わりにずっと覚えておくからね！ この恨みそう簡単に消えると思わないでよつ！」

『すまない岳羽……。だが、これも必要なことなんだ。……たぶん』

美鶴は、その言葉がいずれ自分の首を絞めることになることを、今はまだ知らずにいた。

「——つてか、どこで着替えるのよ」

「(ムム)」

その疑問に簡単に返す湊にゆかりは目を剥いた。

「はあっ?!? タルタロス内で着替えろつての?!?」

「うん」

武器とか上に身に着けるだけの装備とは違うというのに、それはもうあっさりとした頷きだった。

「うん……じゃないわよっ!　くくくつ、服の下からなら……つてか、そうだ!　上に服を着れば、解決じゃない!」

「それはダメ」

まさしく名案と、自分の考えに拍手を送ろうとしていたゆかりは、しかし再びたった一言で叩き落とされる。

「——何でよっ!」

「それじゃ、装備効果が発揮されないもの。装備は正しく装備しないと」

「……ああ言えばこう言う。——……桐条先輩、ちよつと誘導してください。湊、あんた

も来なさいよ。壁と見張り役！」

『あ、ああ。分かった』

「うんっ！」

「あなたのその笑顔……今は凄く殴りたい」

そして、男性陣からは陰になって見えない位置でゆかりはその装備に着替えると戻ってくる。

「お、おお……」

順平はただ頷いた。

「……何よ、その反応。何か言いなさいよ」

「いや、まさか、ここまで破壊力があるとは……これはシャドウも目じゃないっていうか……そう！ 昨日の大型シャドウ以上！」

ぱあん！ 順平の頬に問答無用で平手が飛んだ。

とはいえ、弱点である疾風属性の攻撃を受けるよりはマシだろう。

「ぐはっ……褒めたのに……」

「あんなシャドウなんかと比べられて喜ぶ女子がいるわけないでしょ！」

「鳴上千くんはどう思う？」

悠はその言葉にビクッと身体を上下させる。

湊から難しいフリがきた。

これは今朝や先程のジャックフロストのこともあって、わぎとやっているのだろうか。

ゆかりはじつと睨んでいる。

何故か固有スキル〃そつとしておこう……”が発動できない。

返答を間違えると順平の二の舞になりそうだ……。

似合ってる

奇声を上げる

似合ってる

踊り出す

話を逸らす

お金を払って見逃してもらおう

↓別の選択肢

↓別の選択肢

イザナギで食いしぼる

幻想の中のシャドウと戦う

ピクシーでトラフリー

幻想の中のタルタロスを探索する

カーシーで疾風耐性

幻想の中の仲間（相棒）にかばってもらおう

↓別の選択肢

↓別の選択肢

豪傑の勇気をもって立ち向かう

言霊使いの伝達力をもって心に響くポエムを贈る

ムを贈る

タフガイの根気をもって説得する

生き字引の知識をもって古今東西の謝罪

方法を試す

オカン級の寛容さをもって抱きしめる

諦める

↓別の選択肢

↓別の選択肢

「落ち着け」

頭の中で次々に増える選択肢のどれも選べずにいると、その言葉が口を突いて出た。

悠が持つもう一つの固有スキルだ。

その場の雰囲気は落ち着いた。

「……それで、今の私を誤魔化せると思うの?」

しかし、ゆかりからは逃げられない!

その装備——「ハイレグアーマー」を装備して、何か色々なモノを失ったゆかりには通じない……!

回り込まれてしまった!

「——は、ハイカラだな」

「ハイカラって……」

名前の通りの装備であるハイレグアーマーは確かにハイカラな代物かもしれない。

だが、それを示したところで事態が好転するわけではなかった。

「くっ、分かった」

「何が？」

冷めた視線を送り続けるゆかりに対して悠は覚悟を決める。

「俺もネタ衣装を着る」

「男気の甚平？ あんなのじゃ釣り合わないわよ」

「鳴上くんは女装が良いなっ！」

……まさか、全てが計算済みだったと言うのだろうか。

湊は無邪気にそんな提案をした。

ゆかりの興味がみるみるその提案に向くのが分かる。

悠はいずれ湊が衣装を手に入れたら、女装をすることを約束させられた。

「……頑張らせてもらう」

その日は、何だかみんなが色々大変だったので探索を終えることにした。

——……影時間が終わる。

5月11日(月)～17日(日): 学生の本分

2009年5月11日(月)

放課後、悠は部活に出た。

来週には中間テストがあるので、その前にと思ったのだ。

悠はいつものようにトラックを走っているが、一志の様子がどこかおかしい。

悠は練習を中断すると、一志に声を掛ける。

マネージャーの結子も寄ってきた。

「どうした？」

「いや、ちよつと……」

「膝の調子悪いの？ 病院行ったら？」

「そこまでじゃないって……」

「その様子で言われてもね。とりあえず、テーピングでもしておく？」

「ああ、頼む……」

結子が準備をするが、どうやらテープが切れていたらしい。

「ごめん。どっかで貰ってくる」

結子はテープを貰いに走って行った。

一志はその場に座り込む。

「ちよつと、練習し過ぎたかな……」

「大丈夫なのか？」

「ああ。大丈夫だつて！ どうせすぐにテストだろ。その間は部活やれないし、休めばすぐ治るさ」

「そうか」

しばらく雑談していると、結子が戻ってきた。

手にはテープを持っているが、何やら微妙な表情をしている。

「どうした？」

「え、あー、うん。どこの部もなんか色々あるんだなつて」

「どういうことだ？」

悠は女子テニス部で起きた話を聞いた。

厳しい練習に付いて行けず、誰かが練習をサボって合コンに行つたとかで、ちよつと揉めることになつたらしい。

女子テニス部といえば、悠と同時期に湊が入つたところだつた。

テニスなら個人競技の面が強いから、部員が来なくても問題ないとは思うが、ちよつ

と心配ではあった。

それはともかく、一志はテーピングをするが、結局今日の練習は切り上げることにした。

悠もそれに付き合う。

「悪いな、お前まで付き合わせて……」

「気にするな」

「……お詫びじゃねえけど、今日は俺が奢るわ」

「いいのか？」

「ああ。遠慮しないでくれよな。そうじゃねえと俺の気が済まないんだから」

「分かった」

「一志のことがまた少し分かった気がする……」

【Rank up!! Rank4 戦車・運動部】

「運動部」コミュのランクが「4」に上がった！

「鳴上悠の失われた力『戦車』属性のペルソナの一部分が解放された！」

ペルソナ全書を見ると、しかし、特に変わったところはない。

悠のLVが足りていなさ過ぎるのか、あるいはLV30～40の間のペルソナは存在していないのかのどちらかだろう。

どちらにしても悠の成長が追い付いていないのは間違いない。

ある程度仕方ないことなのかもしれないが、悠はそんな状況を歯痒く感じてしまった。

「よっし！ バリバリ食って、とつとと治すぜ！」

その宣言通り、一志はわかたずでも以上にバリバリ食べた。

同日 一夜――【辰巳東交番】

月曜日だ。

先週、先々週と、黒沢の機嫌が良かったので、今日はどうかと思えば、やはり良かった。

三回続けば、さすがに偶然ではないような気がする。

悠は率直に聞いてみることにした。

「機嫌良いですね。月曜日はいつも機嫌が良い気がしますけど、何かあるんですか？」
「ん？ そうだったか。……というか、そんなに分かり易いか？」

黒沢は少し目を見開いて、自分の頬を撫でる。

「ええ、まあ……」

悠が素直に頷くと、黒沢は少し考えるような素振りを見せてから口を開いた。

「そうか……。実は毎週火曜日は彼女の仕事が休みなんだ。だから、月曜日は待っていてくれてな。俺の機嫌が良いとしたらそのせいだろうな」

「彼女いるんですか？」

「ああ、意外か？ 学生の頃からの付き合いだな。元々この仕事に就くキツカケも彼女なんだ。俺も色々あったが、彼女は今でも俺の傍にいてくれる、良き理解者だ。感謝しても足りないくらいだ」

「そうなんですか」

「ああ。ちよつと喋り過ぎたな。他の連中には話すなよ。俺の様子に気付いた君だから話したんだ」

▽ 黒沢との間にほのかな絆の芽生えを感じる…

▽ 黒沢のことが少し分かった気がした…

我は汝…、汝は我…汝、新たな絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

“正義”のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん…

▽ “正義”属性のコミユニティである“街を守る者”のコミユを手に入れた！

▽ 鳴上悠の失われた力“正義”属性のペルソナの一部が解放された！

ペルソナ全書を見ると、すでに登録済みだった“エンジェル”が強化されていた。

アルカナは変わっていないが、疾風属性にも耐性を持つようになっており、スキルの

数も増えている。

パラメーターも少し上がっているし、純粹に強化されたと考えていいだろう。

「それで、今日は何か買って行くのか？」

「そうですね……」

そんな話をしていると、湊も現れたので、二人で相談しながら装備を揃えた。

ちなみに黒沢は先々週に約束したことを守り、「雷光」という刀を用意してくれていたのも当然買う。

ただ、湊が黒沢に女装に合う服がないかと聞くと、悠は遠い目になった。

黒沢はそれに対して微妙な表情を悠に向けながらも、女装に適した物はないが、「執事服」ならあると湊に勧めた。

湊は少し高額なそれに対して悩む素振りを一瞬見せたのだが、ほとんど即決でそれを買った。

あまり変な物を買わないようにと、明彦に頼まれていた悠だったが止める暇などなかった。

「メガネに執事服っ！ さらに刀を持つとか完璧っ！」

湊の中では悠には分からない世界が展開されているようだった。

2009年5月12日(火)

日曜日は湊との間に色々あったのだが、あの後一応通販を頼んでいたのものでその商品を受け取った。

夜になると、湊は昨日買った装備を試したいのか、タルタロス行きを主張したが、ゆかりがテストが近いからとNGを出したので断念した。

悠もタルタロスに行かないのならばと、テストに備えて部屋で勉強をすることにしました。

2009年5月13日(水)

その日は湊が今日こそはと、タルタロス行きを強硬に主張。

ゆかりはテスト勉強をしたそうだったが、さらに順平までもが主張し出したので折れた。

もつとも、順平のそれは、ただの現実逃避にも見えたが。

「……なんだ、この状況は。仮装パーティーか？」

明彦がその状況を冷静に突っ込んだ。

悠は執事服、ゆかりはハイレグアーマー、そして順平は何故か男気の甚平を再び装備している。

「順平はなんでその服なわけ……?」

ゆかりがどこか諦めたような達観した様子で呟く。

ゆかりは先程まで水着と変わらないとブツブツ繰り返していたが、どうやらその状況は乗り越えたいらしい。

「え、ああ……。新しい装備が欲しければ、今日1日はこの格好で探索しろって湊が」

「そう」

「……ああ」

何だか空気がどんよりした。

「鳴上」

「……すみません。なまじ探索でお金ができるので。——それに有里は自分のバイト代も充ててるみたいで」

「そうか……」

明彦もそこまでされると口を出せないらしい。

美鶴はすでにそのことに対する思考を放棄しているようだ。

探索さえちゃんとしていけば恰好は気にしないスタンスで行くようだった。

しかし、彼らはさらに湊の奇行に振り回されることになる。

「……なんで私ら、また最初からタルタロスを上り直してるわけ?」

「だから金色！ この前倒した金色の——『レアシャドウ』を、下層で見つけないの！」
「なんで？」

「それは秘密っ！」

美鶴はその通信を聞いて頭を抱えていた。

このまま湊にリーダーを任せていて良いのかどうか。

だが、言動はおかしいが、上に行くほどシャドウが強くなるという事実もあるため、不覚を取ることのないように一度下層でじっくりと鍛え上げる気なのではと、自分を納得させる。

これも事実として、湊にはこれまでの実績があるのだ。

湊をリーダーとしてタルタロスを探索して、まだ誰も反魂香などのお世話になっていないという実績が。

「仮装をしながら、下層を探索……なんつって」

「……そういうの幾月さんだけで間に合ってるから」

順平が空気を変えようとダジャレを言うが完全にスベっていた。

なんとかレアシャドウを見つけ倒した四人は、今度こそ前回の続きの探索を開始する。

28Fを越え、30Fに至ると、やたら強そうなプロレスラーみたいな姿のシャドウ

と遭遇した。

しかし、電撃が弱点だったために、あっさりと悠のイザナギに倒される。

何とも見かけ倒しなシャドウと認識された。

「つーか、これマジでどこまであるわけ？ 30Fだぜ。普通に疲れて来たんだけど」

「……そうね。今日は誰かのせいで最初から上り直したから」

「あ、あはは……で、でもつ、レアシャドウを倒した後はすぐにエントランスに戻って、25Fに行ったじゃないっ」

「そうだけどね……。それで渡された物が『おもちゃの弓』って何っ？ 私、バカにされてるっ?」

ゆかりはビヨンビヨンとおもちゃの弓の弦を弾く。

「し、してないしてないっ。強いでしょ？ おもちゃの弓」

「確かに強いけども……っ！ 何この全然納得行かない強さ……っ！ 攻撃するとシャドウもどこか『ヤケクソ』気味になるしさ……っ!」

「落ち着け」

「鳴上くんも執事服で冷静に言わないでよ……」

「いいよねっ！ 執事服っ！ お金があったら順平の分も買ってあげただけど……」

「えっ、オレっちも着るの……?」

それはさすがにないだろうと順平は妙に様になっている悠の執事姿を見る。

そして自分がそれを着た場合を想像するが、どうしてもコミカルな印象が先立ってしまふ。

「鳴上千ん、鳴上千ん！ メガネ、くいってして！ くいって！」

「誰かこの子を止めて……」

「あゝっ！ 影時間じゃなければ絶対に写メ撮るのにつ！」

「ないから……私、この姿を撮られたら、引き籠もりになる自信がある……」

その日も、何だかみんなが色々大変だったので探索を終えることにした。

——……影時間が終わる

2009年5月14日(木)

悠は再び2-F教室前廊下で生徒会会計の伏見千尋と遭遇した。

前と同じ場所であった時から、ちょうど1週間が経っている。

悠は未だ生徒会に顔を出せていないので、申し訳なく思いながらも、声を掛けることにした。

「やあ。千尋。未だ生徒会に顔を出せてなくて申し訳ないんだが、その後どうだ？」

「え、あつ……だつ、大丈夫です。今はテスト前なので、元々生徒会の仕事もほとんどな

いですから」

千尋の言葉に少し安心すると、悠は前回のやり取りを思い出しながら口を開く。

「それならいいんだが。——今日は一緒に帰れるか？」

「あ、はっ、はい。だっ、だ、大丈夫です、よ？」

「じゃあ、一緒に帰ろう」

「は、はいっ。よ、よろしくお願いしますっ」

千尋と一緒に帰ることにした。

「なっ、鳴上さんは、本を読んだりとかしますか？」

千尋は靴先を見て、悠を見て、靴先を見てを繰り返しながらも、何とか話題を提供し

ようと頑張っているようだ。

「よく読むよ。趣味の一つでもあるな」

「そ、そうですか。どんな本を読むんですか？」

千尋は悠の返答に内心で安堵しながら尋ねる。

「手に入ればなんでも読むが……最近読んで印象に残った本っていうと、はじまりの

漢っていう本だな」

「はじまりの漢……？　ちよっと、変わった名前の本ですね」

「そうかな？　千尋は？」

「私は……弱虫先生とか好きですね」

「——弱虫先生？　なんだか聞いた覚えがあるな」

悠は千尋が口にした題名に少し記憶を辿った。

確か読んだ事があつたはずだ。

「あ、そうですか？　まだ、それほどメジャーな本じゃないんですけど……あつ、そう
だ！　それならこの本をプレゼントします。弱虫先生シリーズの一作目、*弱虫先生、
最初の授業*”。つていう本なんですけど」

千尋の声の調子が少し上がった。

共通の話題——自分の趣味に関して喋れるということと勢い付いたようだ。

千尋から手渡された本を見て、悠の頭の中に弱虫先生シリーズ、幻の初版本という言葉
葉が急に浮かんだ。

「いいのか？」

「はい。実は家族も同じ本を買ってて、家に帰ればまだあるんです」

「そうか。ならありがたく貰うよ」

「はい。……あ、あの、できれば読み終わった後に、感想とか聞かせて頂けると……」

「分かった。読み終わったら教える」

「はいっ！」

▽ 千尋との間にほのかな絆の芽生えを感じる…

▽ 千尋のことが少し分かった気がした…

【Rank up!! Rank 2 皇帝・生徒会】

▽ “生徒会” コミュのランクが “2” に上がった！

▽ 鳴上悠の失われた力 “皇帝” 属性のペルソナの一部分が解放された！

ペルソナ全書を見ると、“オベロン” が追加されている。

火炎耐性、電撃無効、弱点の疾風にもキチンと対策が為されている。

さらに “メディア” や “マハジオ” と全体効果のあるスキルも覚えた中々優秀なペルソナのようなのだ。

とはいえ、LVは12なので、ここ最近でLVが上がったことを考えれば、主力とするには少しLVが低いかもしれないなかった。

「あの、鳴上さんは私といてどうですか？」

「どうって？」

「鳴上さんは学園でも人気があるし、こんなメガネで暗い子と一緒にいて、退屈と思ってるのでは……？」

千尋は不安そうにしている。

悠は微笑むと、その言葉を否定した。

「そんなことはない」

「……ホントですか?」

「ああ。メガネなら俺だつて掛けるし、本の話をするのは楽しかった」

「そうですか。……あの、鳴上さんつて、普段はコンタクトなんですか?」

「いや。メガネは伊達なんだ。掛けると落ち着くというかしっくりきて……そういうのつて変か?」

「い、いえつ、別にそんなことは……。私はファッシヨンのことはあまりよく分かりませんけど、メガネを掛けると落ち着くつていうことなら何となく分かります」

悠もファッシヨんで掛けているわけではなかったが頷く。

その後もしばらく話して、じゃあまた、と言つて二人は別れた。

自室に帰つて貰つた本を読んだ。

これ以上は上がるはずのない寛容さが上がった気がした。(寛容さUP!)

2009年5月15日(金)

「鳴上くん、勉強教えてっ!」

ゆかりが両手を合わせ、拝むようにして頭を下げた。

「それは構わないが、なんで俺に?」

「だって、鳴上くんって勉強できるでしょ？ 授業中の様子を見てれば分かるよ。いつ質問されてもあっさり答えるし、順平にも答え教えてあげてるじゃん」

「桐条先輩や真田先輩は？」

「あー……あの二人にはちよつと頼み辛いというか……鳴上くんのほうが教えるのとか慣れてそうないメージあるしさ。家庭教師の先生とかやってそうないメージだから」

悠はそういえばやったことがある気もすると思つたが、とりあえずは目の前のゆかりに意識を向けた。

そして、勉強を教えることになつたのだが……ゆかりはなんだかんだで女の子しているため、お互いの部屋とかではなくて、寮の二階の談話スペースでやることになつた。

二人のペンを走らせる音が流れる。

時たまゆかりの質問に答えることを除けば、静かでマジメな時間が続いていた。

「ねえ、鳴上くんって、好きな花とかある？」

「急にどうした？」

勉強とは関係ない質問に、悠も手を休めてゆかりを見る。

「ん、ちよつと息抜きっていうか……私はガーベラとか好きなんだけど」

「岳羽だったら、やっぱりピンクか？」

「あー、分かる？ 部屋にも飾ってるんだ。——って言つても、一時期は花を見るのも嫌

だったりして……最近かも。また飾るようになったの」

「どうして?」

悠の言葉にゆかりは苦笑しながら答える。

「元々母さんだったんだ。部屋に花飾ったりするの。……だから、父さんのことで母さんとギクシヤクするようになって、それで、花もダメーとか、我ながら単純だよね」

「どうして大丈夫になったんだ?」

「そうだなー。やっぱ、ペルソナを呼び出せるようになったからかな。……それと、湊やキミのおかげ!」

「俺も?」

「宣言したじやん。だから身近な——本当に簡単なことからだけど、これだって、ちゃんと一歩になってるよね?」

「そうだな」

ゆかりは悠に宣言した通り、少しずつでも自分を変えようと努力しているようだ。

それがどれだけ些細なことであっても、何もしないよりはずっとマシであることには間違いない。

「うん……。さすがにまだ母さんと正面から話し合うような勇氣は出ないんだけどねー。それは今後の課題ってことで」

「頑張れ」

なので悠も素直にその背中を押すように応援すると、ゆかりは若干テレ笑いながら頷いた。

「はい、頑張ります。……なーんて言っても、今はテストという名の目の前の課題が先決、かな？」

「ゆかりのことがまた少し分かった気がする…」

《b》【Rank up!! Rank2 恋愛・岳羽ゆかり】

「岳羽ゆかり」コミュのランクが「2」に上がった！

「鳴上悠の失われた力『恋愛』属性のペルソナの一部分が解放された！」

ペルソナ全書を見ると、しかし、特に変わったところはない。

このアルカナは前回もそうだった。

かなり条件が厳しいというか低LVのペルソナが存在しないようだ。

ゆかりと同じく、一歩ずつ頑張れることかな？

「今までの話と全然関係ないけど、勉強していると葎大福とか食べたくならない？ 私好

きなんだよねー」

「そうなのか。なら、今度作ってみるか」

「えっ、作れるの？」

「たぶんな」

「作つたらくれるよね?」

「その為に作るんだ」

「やば、鳴上くん凄くイイ人」

それから、また勉強に戻る二人、その様子を見た順平は逃げるように自室へと戻り、湊は仲間になりたそうな目でこちらを見ていたので仲間に入れてあげた。

2009年5月16日(土)

その日も悠はゆかりとテストに備えての勉強をした。

だが、若干フリーダム気味な湊は、学力を高めるためにゲームセンターに行つてくる!
と普通の感性を持つ人間なら疑問を持つようなことを言つて出掛けて行った。

ちなみに順平について語ることはない。

2009年5月17日(日)

テストを明日に控えた夜になって順平が泣きついてきた。

何が分からないのかも分からないくらいのノリでテンパっている。

とはいえ、さすがにあと数時間で日付が変わる状況でどうにかできる問題ではない

と、悠と勉強をしていたゆかりは切って捨てる。

だが、そんな順平をも見捨てられないほどの寛容さを持つ悠は、ここに来て湊以上にフリーダムな方法を提案した。

それは――。

「……っていうか、本気でやるとは思わなかったわ。桐条先輩もよく許可しましたね」

「あ、ああ……。伊織にテスト勉強が終わっていないのはタルタロス探索があったからだと言われたのでな。今回は特別だ」

「それ、信じたんですか？ そんなの完全にその場しのぎで口から出ただけですよ。タルタロスの探索がなくなつて、順平がちゃんと勉強するわけないじゃないですか」

「ははは、ゆかりツチつてば冗談キツイって……。オレっちだって、テスト前は勉強くらいしますよ？ つーか、そういうゆかりツチだつて参加してるじゃん」

「わ、私は、みんなが心配だっただけよ。だって――タルタロスで勉強するとか。普通ないでしょ……」

そう……。彼らが今いる場所はタルタロスのエントランスだった。

タルタロス内は、影時間の中でも、特に時間の流れが不安定な場所だ。

普通何もしていなければ、影時間は通常時間内でいう約1時間で終わる。

しかし、タルタロス内では、中にいる者たちの意志を反映しているのか分からないが、

その時間を緩やかに——あるいは引き延ばすことが可能なのだ。

実際、彼らがタルタロスを探索している最中に影時間が終わったことはない。

疲労を感じ外に出る——それまで影時間は終わらないのだ。

つまり、さすがに体力的に1日2日というわけには行かないだろうが、無理をすれば半日くらいの時間なら追加で確保できるのである。

「……まあ、その程度の時間で順平に足りるのかって話だけど」

「うぐつ、そ、それぞれの科目に絞って、テスト期間中も籠ればなんとか……」

順平は真理を突かれたように呻くが、それでもこの場所に最後の希望を賭けた。

「待て伊織。さすがにテスト期間中までは許可できん。タルタロスで勉強するなんて真似は今日だけだ」

「そ、そんな……」

しかし美鶴の言葉に、一転して赤点という名の絶望が這い寄ってくる。

「てか、そんなに身体が持つわけないでしょ」

「ツ、ツカレトレールでなんとか……」

「そんな理由じゃあげないよ?」

そう言つて順平は湊に視線を向けるが、湊は軽く首を振って断った。

「——湊、お前は仲間だと思つてたのに……っ!」

「私、これでも、頭はそこそこ良いってばっらしい。」

湊は一緒にされるのは心外だと頬を膨らませて怒っている。

「マジで？」

「マジだよー。ゲームセンターとかで鍛えたから」

「……最近の勉強ってゲームセンターでするもんなのか？」

「この子だけでしょ……」

「もう諦めてタルタロス探索をしないか？」

「明彦……ほとんど治ったからって調子に乗るな。テスト期間が終わるまでは我慢しろ」

実際テストに不安を抱えているのは順平だけなので、明彦は今日もタルタロス探索に加わることを主張するが、やはりまだ許可は下りない。

「順平。安心しろ。俺はお前を見捨てない」

「悠……」

「いや、俺のことは先生と呼べ」

悠は探索の時のようにメガネを掛けると、無駄にオモイカネなどを宿して順平と向かい合う。

もちろんペルソナを替えたからと知識量が変わったりはしないが、雰囲気だ。

「お、おう！ 頼んだぜ、先生！」

なんだかんだでとりあえず勉強をすることにした彼らS・E・E・Sメンバー……。若干スパルタ状態に入った悠の手によって、できるだけの知識が順平の中に詰め込まれていく。

順平は「動揺」やら「混乱」やら「恐怖」やら「ヤケクソ」やら、次々とバステに罹るが、ペルソナのスキルなどで問答無用で正常に戻され、休むことは許されなかった。

それでもやはり限界は訪れる。

その結果は、明日から——もとい、8時間かそこから後に迫った中間テストにおいて出ることだろう。

——……影時間が終わる。

「今日だけはマジ終わらないでくれーっ!!」
終わるったら、終わる……。

5月18日(月) ～ 23日(土)：テストが終わって

2009年5月18日(月)

そして中間テストが始まる。

中間テストは今日から土曜日までの6日間の日程だ。

悠は初日から軽快にペンを走らせる。

悠はまるでこの学年をやるのが2回目かのような感覚を覚えていた。

2009年5月19日(火)

Q. 吉村冬彦の随筆はどれか、次のうちから答えなさい。

A. 万華鏡

Q. グッドラックの意味にも使われる言葉をチョーズしなさい。

A. ブレイク・ア・レッグ!

2009年5月20日(水)

Q. 次のうち、仲間はずれのものを選びなさい。

A. カオス理論

Q. 赤道付近に住む人が、自転により進む速度はどの程度であるか。

A. 音速より速い

2009年5月21日(木)

Q. 石けんは何性でしょうか？

A. アルカリ性

Q. カルシウムとマグネシウムの含有量の多い水を何と呼びますか？

A. 硬水

2009年5月22日(金)

Q. あまり重要でない知識ですが、旧石器と新石器の違いは何か。

A. 石器の形

Q. あまり重要でない知識ですが、キトラ古墳は何県にあるか。

A. 奈良県

2009年5月23日(土)

今日は中間テスト最終日だ。

走り出したペンは止まらない！

——テストが終わった。

それまでの頑張り、日常の成果によって、悲喜交々の声上がる中、完璧な手応えを悠は感じていた。

これは結果も期待できることだろう。

そういえば——テストとは関係ないが、朝に日曜日の日課ともなっている時価ネットで頼んだ商品が届いた。

“十徳刀”と“カデンツァ”。

十徳刀はともかく、カデンツァとはなんだろう。

アルカナカード……二体のペルソナのようなイラストが描かれている。

不意にそのカデンツァのアルカナカードを眺めていた悠の頭に閃くものがあった。

“ミックスレイド”“カデンツァ”に必要なペルソナの組み合わせを閃いた！

(オルフェウス×アプサラス)。

同日 — 夜 — 【巖戸台分寮】

テスト後に行われた病院での検査から帰ってきた明彦は、晴れやかな顔をしている。

「おかえりなさいーっ」

「先輩、全快したそうですね！」

「おめでとうツス」

「おめでとうございます」

「復帰メニニューが山積みだ。まるーカ月サボっていたわけだからな」

掛けられる快復祝いの言葉に、鬨志漲る顔で明彦は応じた。

「急に無理すると、また折れちゃいません？」

「そうも言つてられない。新たなベルソナ使いも見つかったしな」

ゆかりの心配する声に対する明彦の新情報に、順平が目を輝かせる。

「おおっ!!? 新戦力って事スか! もしかして女子とか……!!?」

「女子だ。ウチの高等部2年のな。『山岸風花』……四人共、知ってるか?」

悠は明彦の告げた名前に首を傾げた。

なんだかんだで転校してきて1カ月半しか経っていない。

「『クラスメイト』、『運動部』、『生徒会』、『学園の教師』、と学園内で順調に交流の輪を広げている悠だったが、山岸風花という名前はその中にない。

別のクラスということになれば、さすがにまだ個人での付き合いはあまりなかった。

せいぜいが転入生ということで声を掛けられたり、何をやっているのか気になった時

などに悠から少し声を掛けることがあるくらいだ。

湊と順平も知らないのか顔を見合わせている。

しかし唯一ゆかりはその人物のことを知っていたらしく口を開く。

「山岸…………？ ああ、確かE組の…………。なんか身体が弱いとかで、学校ではあんま見ないような…………」

「俺たちのいた病院へ来てたらしい。それで適性が見つかった。——しかし、素養があつても身体がそれじゃ、戦いは無理かもな。召喚器も用意したんだがな…………」

「ええつ、もう諦めちゃうんすか!!? せっかくオレが、手取り足取り、個人レッスンとか…………」

「発想がオツサンだねっ!」

「明るく言われたっ!!? ——つてか、ナニ? みんなして、その可哀想な動物を見るような目は…………見んなよ。…………オレを見んなよ」

順平が視線から逃げるように縮こまる。

悠はその様子に助け舟として別の話題を口にした。

「それはそうと、順平、テストはどうだった?」

しかし、それは順平にとって追い打ちとなる話題だったようだ。

「…………あ、はは、あ、赤点は回避できたんじゃない? ……たぶん」

「あんなことやっておいてそのレベルなわけ、あんた……」

「う、うるさーいっ！　そういう、みんなはテストどうだったんだよっ！」

順平はそう言ってみんなに尋ねるが――。

「完璧だった」

「私も！　かなり良かったと思うよっ」

「手応えはいつも以上、かな。鳴上千んのおかげだね」

「俺はトレーニングができなかったからな。その分、今回のテストはバツチリだ」

S. E. E. Sのメンバーは、順平を除いて文武両道を地で行く者たちの集まりだった。

「何この圧倒的なまでの疎外感っ!!?　どうせここにいない桐条先輩も学年トップとかそういうレベルだろうし……優等生じゃないっ!!?」

慄き震える順平だが、ゆかりは冷めた目でトドメとなる一言を呟く。

「……今更？」

「ちくしょーっ!!!」

だが、その日はそれで終わらない。

やさぐれた順平の代わりに、治ったアピールを美鶴に対して執拗にする明彦を加えて、さすがにテスト期間には遠慮していたタルタロスの探索を行う。

それでも最初こそ復帰したばかりで、身体が鈍って——LVが低かった——明彦だったが、ようやく探索に参加できたということでテンションは絶好調であり、すぐに改善されていった。

明彦のペルソナは“ポリデュークス”の名を冠しており、筋肉質な軀に加え、右手は戦車の砲弾のようになっていた。

そして、切り揃えられた前髪で長髪と中々に特徴的な容姿をしている。

属性的には電撃で、これはやはりと言うべきなのか、氷結属性に弱かった。

タルタロス — 36F — 【奇顔の庭アルカ】

36Fには番人タイプのシャドウがいた。

一度エントランスで態勢を整えて、再び戻る。

その頃には順平の様子はだいぶマシになっていたのだが、今回はこのままのメンバーで戦うことにした。

だが、その判断は意外と正しかったようだ。

今回の番人——個体名“変容の彫像”は、シャドウの特徴である仮面……“女帝”タイプであることを表すそれを着けた彫像型なのだが、順平の弱点である疾風属性のスキルを使ってきたのだ。

しかも、「ガル」ではなくて上位スキルである「ガルーラ」。

それも全体スキルである「マハガルーラ」をも使って攻撃してくる。

ついでに弱点もないどころか、得意とする疾風は無効にするようなので、ゆかりは回復役に徹することになった。

悠の防御力を下げる「ラクンダ」や、明彦の攻撃力を下げる「タルンダ」で変容の彫像の能力を下げて、正面から挑む戦法を取る。

変容の彫像はさらに「ポイズンミスト」——「毒」を使ってくるという厄介な存在だったが、ペルソナを宿していれば、「毒」といえども即死するようなことだけはないので、キチンと回復すれば、その存在にそこまで怯える必要はない。

「これで——どうだッ！」

ボクシングで無敗を誇っていると言うだけのことはある明彦の素早い連撃に、変容の彫像は遂にその体勢を崩した。

「この瞬間を待っていた。仕掛ける——っ！」

「はい、総攻撃ですっ！」

四人の畳みかけるような総攻撃を前に、変容の彫像は存在を保つことはできずに霧散していった。

タルタロス — 40F — 【奇顔の庭アルカ】

「む。行き止まりか？」

40Fは16Fの時と同じく、不思議な力によって塞がれていた。

「また、行き止まり……どうします？」

「……」にも、アタツシユケースがあるな」

アタツシユケースの中は「人工島計画文書02」。

名前からして16Fで入手したその続きのようだが……その文書を湊が手に取って、読み上げる。

【桐条のエルゴ研が島に「ラボ」を置くという。

……おかしい。

単なる一研究員の私でも分かる。

この島で何かが始まるうとしている……】

「——桐条、か」

「それってやつぱり、タルタロスには桐条グループが関係あるってこと？ 影時間や、

ひよつとして10年前の爆発事故も——」

「どうだろうな。どちらにしても10年前のことじゃ、当時子供だった美鶴には分からないだろう。幾月さんなら分かるかもしれないが、何か分かってるなら言うてはるはずだ。

幾月さんも当時は今みたいな立場じゃなかった。知らないと考えるのが自然だ」

「隠してるってことは……」

「隠す? 隠してどうするんだ?」

「それは……」

明彦のそのままな疑問にゆかりは言い淀む。

悠も湊もゆかりの事情は本人の口から聞いているが、それ以上の情報を持っているわけでもなく迂闊に口を挟めるような内容でもなかった。

「だが、当時のことと言うなら……美鶴。親父さんとは連絡を取れないのか?」

明彦は少し考える素振りを見せると、通信で美鶴に尋ねる。

それに対する答えには少しだけ間があった。

『……お父様は忙しい方だからな。一応私の方から連絡を取ってみるが、いつになるかは分からない。期待はしないでくれ』

美鶴の言葉には若干苦いものが混じっている。

嫌っているような色は見えないが、傍目には完璧超人系の美鶴には珍しく、遠慮しているような感じだった。

やはり家が特別だと、親子の関係というのも独特なものになるのだろうか。

「何それ、影時間のことでしょう……」

「そう言うな。財閥の当主ともなれば、俺たちには分からないほどの苦労があるんだろうさ。——……とにかく、いつまでもこうしていても仕方ない。この行き止まり、どんな力が働いてるのかしらんが、ペルソナで無理に押し通ることもできなさそうだしな」

明彦がそれをコンコンと叩きながら言う。

「じゃあ、今日のところはこれで引き上げよつか？」

「——ああ」

何事か考えていたのか、同意を求めた湊の言葉に、少し遅れて返事をした悠の姿を見て、湊は珍しいと理由を尋ねる。

「鳴上くん、何か気になるの？」

「いや。今回は大型シャドウを倒したすぐ後に開いた。それが偶然じゃないなら、また大型シャドウが出るのかと思ってな」

『「！！！！」』

「……なるほど。確かに鳴上の言う通りその可能性はあるな。面白い。最初の奴にやられたりベンジをしてやる」

悠の推測はあり得そうな考えとしてみんなに浸透していく。

その中で明彦は拳を掌に打ちつけて不敵に笑った。

不安とかではなくそういう考えが真っ先に出るあたり、これまでもそんな言動を見せ

てはいたが、明彦はバトルマニア的な人種だと言えるだろう。

「また、モノレールとかは勘弁してよ? 桐条グループが働きかけたのか、ほとんど報道されてはなかったけど、深夜のオーバーランとかって少し噂になってたしさ」

「あ、私も聞いたっ!」

「……今更言つても仕方ないが、もつと上手くやるべきだった」

『そんなことはない。君たちは良くやってくれた。その話はこれまでだ。戻ってきてくれ』

「了解ですっ!」

美鶴は良くやったと言うが、悠はそう思えなかった。

あの時、罨を覚悟してモノレールに乗り込んだ。

影時間では機械が動かないという思い込みもあったのかもしれない。

そのせいで危険な目に合い、さらにはそういう結果に落ち着いた。

桐条グループがどう働いたのかは分からなかったが、桐条グループが手を回したのはおそらく報道関係だけだろう。

そうになると、何も悪いことはしていないというのに、運転士やらのモノレール関係者はクビになっている可能性が高い。

いや、それだけでは済まない可能性が……あの時の判断の甘さがその人物やその周囲

の人間の人生を狂わせたかもしれないのだ。

大型シャドウを倒して良かっただけでは終われなかった。

だが、その事をわざわざこの場で指摘して空気を悪くしても仕方がない。

桐条グループがその人物たちに対しても被害者として働きかけていることを願うしかなかった。

……いや、タイミングを見て美鶴にだけは相談してみるべきか、そんなことを考えながら悠は他の三人と共にエントランスに戻った。

「つーか、真田さん頑張り過ぎっスよ〜！ オレっちがいない間に行き止まりまで行っちゃうなんてっ！」

「ん、ああ。まあ、そう言うな。俺だつてこれまでタルタロス探索を随分と我慢していたんだ」

順平の様子はすっかりいつも通りになっていた。

しかし、一方では――。

「怖い……」

ゆかりは自分の身体を抱きしめるようにして呟く。

「岳羽？ どうかしたのか？」

「桐条先輩……私、大丈夫ですよね……？」

「大丈夫って何がだ？」

「私……この装備で戦うことに慣れてきてる気がして……」

そんなゆかりの装備は相変わらずのハイレグアーマーだった。

「そつ、そうか……。——大丈夫だ岳羽。自分を信じろ」

美鶴は一瞬言葉に詰まりながらも、ゆかりを励ました。

けれどその視線は、微妙に泳いでいる。

「うう、それ以前に、湊を止めてくださいよ……」

「……すまない」

ちなみにその原因である湊は、そんなやり取りを気にした様子もなく、先程手に入れた人工島計画文書02を手にぼーっとしていた。

——……影時間が終わる。

5月24日(日) ～ 25日(月) : 嵐の前

2009年5月24日(日)

中間テストが終わったの休日。

悠は通販の注文を終えると、寮を出た。

悠にはその日の予定としての考えがあった。

——釣りだ。

ここに来てから「釣り仲間」は出来たものの、なんだかんだで釣り自体はできていなかった。

だから、テストが終わった今日こそ、それを実行しようと考えたのだ。

釣り道具に関しては、実はすでに用意してある。

後はもう釣りポイントを確認して、釣るだけだった。

そして良さげなポイントを見つけたので、釣り糸を垂らす。

悠の根気なら5回——いや、5時間以上でも軽く耐えられるだろう。

だが、それほどの時間は必要ない。

どこで鍛えたかは忘れたが、悠の眼力なら、浮きが沈み魚が食いつく瞬間を見逃した

りはしない。

——……中々の釣果だ。

メバル、カサゴ、アイナメ、キス、クロダイ。

これだけ釣れば充分だろう。

釣った魚はどうしようか。

“釣り仲間”である、青ひげ店主に見せに行こうか。

悠は青ひげフアーマーシーに向かった。

「いらつしゃい！——おう、悠か。おつ、釣り道具を持つてるってこたあ……」

悠は青ひげ店主に今日の釣果を見せた。

「ほう……。中々やるじゃねえか。サイズも悪くねえ。マグレじゃねえな」

青ひげ店主はそう言うてにっと笑った。

“青ひげ店主のことがまた少し分かった気がする……”

【Rank up!! Rank2 太陽・釣り仲間】

“釣り仲間”コミュのランクが“2”に上がった！

“鳴上悠の失われた力”太陽”属性のペルソナの一部分が解放された！

ペルソナ全書を見ると、“ホウオウ”が追加されている。

L Vは20——今の悠と同じL Vで、ランク的にもギリギリのペルソナだ。

電撃が無効で、「ガルーラ」に加えて、なんと「マハラギオン」というスキルがある。これは「アギ」の一段階上のスキルである「アギラオ」の全体スキルだ。

魔力も低くない上に、「火炎ブースター」もあるので、現段階ではかなり強力なペルソナと言えるだろう。

悠が主力としてゐるイザナギも能力は高いが、全体攻撃ができないので、それを補えるペルソナの登場は大歓迎であった。

「これだけ釣れるなら、そろそろお前にも話してもいいかもしれないな。伝説をよ……」
青ひげ店主はそんなことを呟いている。

しかし、今日のところは話すつもりはないようだ。

また、出直すとしよう。

その帰り道……なんとなく長鳴神社の方面から帰ることにした悠は一頭の白い犬と出会った。

人に慣れてゐるようなので、近寄って頭を撫でてみる。

白い犬は気持ち良さそうに目を細めた。

悠は何か餌でもあげようかと考え、ちようど魚を持っていることに気付いた。

「おい……おい前」

魚をあげようとしていた悠に声が掛けられる。

「別に悪いとは言わねえが、調理もしてねえんじや、骨が喉に引っかかるかもしんねえ。俺が餌を持ってきた。今日はそっちにしとけ」

悠に声を掛けたのはニツト帽にコート of 男。

少し強面で近寄り難い雰囲気もあるが、悠が相手の容姿を気にすることはあまりない。

そもそもこの人物は、その会話内容から犬のことを気遣える優しい人物だと悠は認識していた。

「知っている犬ですか？」

「……その神社の神主が飼ってた犬だ。けど死んじまってな。それ以来、たまに餌を持ってきてる」

「代わりに飼ったりとかは？」

「それはできねえ。こいつは今でもその神社を守ってやがるのさ。神主としていたっていう散歩だって1日と欠かしちやいねえんだ」

男が取り出した皿に餌を移しながらに答える。

「たいしたヤツだぜ。犬だつてのによ……」

男が何かを想うように呟く。

悠はそのことについては訊かず、自己紹介をすることにした。

「俺は鳴上悠です。貴方は？」

「……『荒垣真次郎』だ。……って、ちょっと待て、鳴上悠だったか？ ひよつとして、お前、巖戸台分寮に住んでねえか？」

真次郎は悠の名前を聞いて、ピクリと表情を動かすと、犬に向けていた視線を悠へと移す。

「そうですけど？」

「そうか……ってことは、お前がアキが言ってた……」

真次郎は悠の頷きに記憶を確認するように呟いている。

その呟きを聞きとった悠もまた、記憶に閃くものがあった。

「アキ？ 真田先輩ですか？ ——もしかして、真田先輩が言ってたシンジさん？」

「あ？ そうだが……アキが何を言ってたって？」

「幼馴染で料理が上手いと」

そう。

明彦は前にそういう人物が寮に住んでいたと話していた。

今は事情があつて離れているという話だが……。

巖戸台分寮にいたということは、真次郎もペルソナ使いだったりするのだろうか。

「……どうしてそういう話になったんだ？」

「俺も料理が趣味なんです。一度寮のみんなに振る舞った事があって、その時に」

「なるほどな……。アキのヤツは普段ちゃんど食ってんのか？」

「——普段は牛丼とプロテインばかりですね……」

そのまま伝えていいのか少しだけ悩んだが、悠は正直に答えた。

寮に住む者は外食やらカップ麺やら、それぞれで食事をしているが、その中でも明彦は偏っていて、悠がラウンジで見かける時はいつも「牛専科・海牛」の牛丼とプロテインばかりを口にしていた。

「ったく、あいつは……。次会った時言わねえとダメだな。鳴上。お前も良ければ気に掛けてやってくれ。ちよつとサラダとか食わせるだけでもいいからよ」

「分かりました」

呆れたように顔を顰めながらも、明彦のことを気遣う言葉に悠は軽く微笑むと頷いた。

「おう。んじゃあ、食い終わったみたいだし、俺はそろそろ行くわ」

「あ、この犬の名前知ってますか？」

「“コロマル”だ」

真次郎はそれだけ言うと、皿を回収して去って行った。

悠は真次郎が去った後にこちらを見上げていたコロマルの頭を再び撫でる。

「荒垣先輩か……イイ人みたいだな」

「わんっ！」

悠の呟きに応えるようにコロマルが吠えた。

∨コロマルとの間にほのかな絆の芽生えを感じる…

∨コロマルのことが少し分かった気がした…

我は汝…、汝は我…汝、新たな絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

“剛毅”のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん…

∨“剛毅”属性のコミュユニティである“夢の動物王国”のコミュを手に入れた！

∨鳴上悠の失われた力“剛毅”属性のペルソナの一部が解放された！

ペルソナ全書を見ると、“ザントマン”が追加され、すでに登録済みだった“ヴァルキリー”が強化された。

ザントマンはLVが5なので、現状ではちよつと活躍の場がなさそうだ。

一方でヴァルキリーは耐性が斬撃から氷結に変わっていて、スキルが追加されている。

LVが変わったりはしていないのだが、8個全部埋まる代わりに失われたスキルもあつた。

ペルソナは一体につき、8個までしかスキルを覚えられないので、自分の失われた力

と差異があればそれも理解できるし、実際これまでもあったことだ。

だが、気になるのは「斬撃見切り」というスキルだ。

シヤツフルタイムで手に入ったペルソナはみんな斬撃、打撃、貫通といった属性があるのだが、失われた力は全て物理で統一されている。

この差異は思いの外大きいんじゃないかと思う。

たとえば「物理見切り」というスキルでも持つていけば、斬撃以外のものであってもカバードきるし、そもそもスライムなどは物理に耐性を持つていたりもした。

しかし、この差異はどこから来るのだろうか。

気になるのは確かだったが、考えるには情報が足りなかった。

……それにしても「夢の動物王国」って何だろうかと思はう。

動物たちじゃダメだったのか？ そもそも夢って。

いや、それ以前にコミュの相手は別に人間じゃなくてもよかったようだ。

悠はそんなことをぼんやりと考えながらも、そのこと自体にはどこか納得する自分を感じていた。

コロマルと別れて寮へと帰った……。

2009年5月25日(月)

「おーい、試験の結果、張られたぞー」

クラスメイトの言葉に悠たちも試験結果を見に行くことにした。

悠の成績は——なんと、学年トップだ！

周りから一目置かれている！

我は汝…、汝は我…汝、新たな絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

“刑死者”のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん…

∨ “刑死者”属性のコミユニティである “学園の生徒”のコミユを手に入れた！

∨ 鳴上悠の失われた力 “刑死者”属性のペルソナの一部が解放された！

鳴上悠の評判 “謎の転校生”

ペルソナ全書を見ると、しかし、絵柄が影になって追加されただけだった。

このアルカナはこのランクで制御できるペルソナはいないようだ。

…：それにしても “学園の教師” というコミユはすでに存在しているが、特定の誰か

と接することもなくコミユが築かれるとは。

これは、学園全体に於ける、悠の評判とかそういうことで育めるコミユなのかもしれ

ない。

「負ーけーたーっ!!!」

悠がそんなことを考えていると、隣からそんな声が聞こえた。

——湊だ。

「湊だつて充分いいでしょ。10番以内の成績だしさ。——つてか、鳴上くんは凄過ぎ。頭いいと思つてたけど、まさか、学年トップになるなんて……」

ゆかりは感心とも呆れとも取れるような声で呟いた。

そういうゆかりの成績も上位で、ゆかり自身もこの結果には満足していた。

「うう……桐条先輩からの『褒美が……』」

だが、ゆかり以上の成績であるにも拘らず湊からは恨み言が漏れている。

「『褒美?』」

悠は知らなかったが、成績がよければ美鶴は何か褒美を用意すると湊たちに話していたようだ。

「そーいや、そんな話もあったね。でも、別に学年トップになれつて言われてたわけじゃないでしょ? 10番以内なら貰えるんじゃないの? ……というか、今更だけど、私は湊の成績にビックリしてる。鳴上くんのことがあるから、あれだけど」

マジメに勉強をしていた悠やゆかりと違って、学力を上げるためにゲームセンターに行つてくるとか言つていた湊だ。

それで学年10番以内の成績を取つてしまうのだからと、ゆかりは湊の不思議さに溜息を吐いた。

しかし、湊はその成績でも満足はできないらしく、変わらず悔しそうにしている。

「確かにトツプじゃなくても貰えるかもしれないけど……トツプのほうがイイ物を貰えるに違いないものっ」

「……だからって、俺に言われても困るんだが」

悠がその言葉に突っ込むと、きっ！ と湊に睨まれる。

「っ、次は負けないんだからーっ!!」

湊は悠に指を突きつけて、そう宣言すると、どこかへと駆けて行った。

〈湊のことがまた少し分かった気がする…〉

【Rank up!! Rank2 愚者・有里湊】

〈“有里湊”コミュのランクが“2”に上がった！〉

〈鳴上悠の失われた力“愚者”属性のペルソナの一部が解放された！〉

〈有里湊との合体攻撃“ミックススレイド”に新たな可能性が追加された！〉

ペルソナ全書を見ると、“オバリヨン”が追加されている。

LVは13で物理関係のスキルが多い。

耐久性も物理、それと火炎にもあつた。

ただ、使うとするなら、経験を積ませる必要がありそうだ。

……それはそうと。

「ライブル認定されちゃったみたいだね。鳴上くん」

そのようだ。

悠はなんとなく溜息を吐いた。

湊はコミュが築かれた時もそうだが、そういう時はどうにも突っ掛られることが多い。

といつても、これが二度目だが。

普段は基本にこにこしているタイプなので、珍しい一面を見てるという意味ではそうなのかもしれないが。

これはひよつとすると、これからも度々こんなことが起こるといふ予兆なのだろうか……。

「……そういえば、順平。あんたはどうだったの？」

「それをこの状況でオレっちに聞くか……」

「あー……つて平均よりちよい下だったら、いつものあんたより全然良いんじゃない？」

ゆかりが張られた結果から順平の名前を見つけ出してそう言う。

「確かに普段なら、全然喜べるんだらうよ……でも、お前らが学年トップだ、10番以内だつて、話をしてる横でその結果を見ると、オレっちつてなんだらうな……つて思っちゃまうんだよ」

「あ、はは……そりや、そうだわ」

そんなこんなで結果発表が終わり、ついでに学園も終わって——放課後。

月曜日ということもあり、黒沢のところに行こうと、ポロニアンモールに向かう道の途中で、おそらくは他校の男子生徒数名に絡まれている月光館学園の女子生徒に遭遇した。

悠は迷うことなく仲裁に入った。

「何があつた？」

「あー、何だよてめえ。別にてめえにや関係ねえだろ！」

男たちは間に入った悠を威嚇している。

「複数で囲むようなことを彼女がしたのか？」

「だから、うつせえんだよ、てめえ！」

「なあ、やつちやう？ こいつ、やつちやう？」

「それもいいかも、なっ！」

別の男の言葉に応え、悠と話していた男が拳を振るう。

しかし、普段からタルタロスでシャドウと戦う悠からすれば、それはどうにも軽いものだった。

悠は掌で拳を受け止める。

「——なつ、てめえ、放せつ！」

悠はそのまま拳を受け止めた手に力を籠めた。

「いでつ、いででででつ！」

「てめえつ！」

「なめやがつて！」

他の男たちも掛かつて来ようとしたが、それを見て取った悠は機先を制するように、拳を握っていた男をそちらへと押す。

他の男たちはその男を受け止める羽目になり、掛かつては来られなかった。

「落ち着け」

悠からすれば街の不良程度は、簡単に撃退できるのだが、一応陸上部や生徒会に所属している身なので、あまり大事にはしたくなかった。

その言葉に、水を掛けられたように冷静になった男たちは悠の雰囲気呑まれた。

「これ以上やるつもりなら、こちらも手加減しないが——どうする？」

それは嘘だ。

手加減はするに決まっていた。

だいたい悠は事情が分かっていない。

見た限りでは、単純に激しやすい男たちが女子生徒に突っ掛ったように思えるが、女

子生徒のほうが悪かった可能性もあるのだ。

なので、場合によっては警察に間に入ってもらう必要があるだろうと、ポケットの携帯にも意識をやった。

男たちはお互いを窺うように見ている。

最初に動いたのは悠に拳を握られた男だった。

「——ちっ。バカらしい。行こうぜ」

そう言つてその男が背を向けると、他の男たちも悪態を吐きながら続く。

その男がリーダーのような立場だったのだろう。

そして、後には悠と、一言も口を挟めずにいた女子生徒だけが残った。

「あ、あの……ありがとうございます」

「別に構わない。どういう状況だったんだ？」

「それは、えっと……私がちよつと、あの人たちにぶつかっちゃつて……」

それだけらしい。

彼女の不注意もあるだろうが、絡むほどのことでもなかった。

「災難だったな」

「あ、はい……私、トロくて……あの、鳴上くんですよね？」

花柄でエメラルドグリーン、タートルネック系の服をインナーとしている緑髪の子

生徒。

顔見知りだったろうかと考えるが、悠の記憶にはない。

「なんで俺のことを？」

「それは、有名ですから。転校生ですし、今日のテスト結果でも学年トップで……凄いですよね」

「ありがとうございます。それでキミは？」

「あ、すみません。私、山岸風花って言います。えっと、2—Eです」

山岸風花……どうやら、目の前の女子生徒が明彦の言っていた、新たに見つかったペルソナ使いとしての適性を持つ人物のようだ。

ゆかりによると身体が弱いとかいう話だった。

見ただけでは、はつきりとしなないことだが——まあ、今の状況を振り返っても、戦いには向いていなさそうではある。

そんな彼女がこれから影時間の戦いに関わってくる可能性があるのかどうか。

それは学年トップになるだけの知識を持っている悠であっても分からないことであつた。

風花と別れて、黒沢のところに顔を出してから、寮へと帰つた……。

5月26日（火） ～ 6月1日（月）：未来に続く

2009年5月26日（火）

通販の品物が届く。

“多機能エプロン”ということで、料理が趣味の悠としては楽しみにしていたのだが、取り出してみるとどうにも女性物だった。

仕方がないので、誰かにあげるかと気を取り直して学園に登校する。

そしてあつと言う間に放課後になり、悠は美鶴と職員室前の廊下で遭遇した。

「——鳴上か。そうだ。テスト結果聞いたぞ。タルタロスの探索もある中、よく結果を出したな。これは褒美だ。取っておけ」

どうやら、湊たちが言っていたご褒美のようだ。

悠は美鶴から数枚のトランプのようなカードを手渡された。

「それは“インセンスカード”と呼ばれる物だ。ペルソナの能力を上げることができる。そしてこちらは“スキルカード”。ペルソナにスキルを覚えさせることができる物だ」

スキルカードは“ディアラマ”。

回復魔法スキルである『ディア』の一段階上のスキルだ。

現時点では結構貴重な物だと思えるのだが……。

「いいんですか？」

「いいさ。結果を出した者には相応の褒賞が与えられるものだ」

美鶴は微笑んでいる。

それはそうと、せっかくこうして出会ったのだからと、悠は美鶴を下校に誘うことにした。

「桐条先輩。よければ一緒に帰りませんか？」

「何、私とか？」

悠の言葉に美鶴は僅かにだが眉を上げた。

もしかして、驚いているのだろうか。

「どうかしたんですか？」

「いや……そうやって私を下校に誘う者など今までいなかったのにな」

「真田先輩は？」

「何か用事がある時は別だが、それ以外では明彦はボクシングばかりだったからな」

悠が転校して来る前から今のような関係が続けていたということだろう。

何か用事でもあるのか、美鶴は返答を考え込んでいるようだ。

「用事があるなら無理にとはいけません。また誘いますからその時にでも」
「ま、また誘うのか？」

「はい。S. E. E. Sの仲間で、帰り道だつて同じなんだから、それつて普通のことじゃないですか？」

「……仲間。わ、分かつた。一緒に下校するでしょう」

悠は美鶴の反応を不思議に思いながらも一緒に下校した。

途中で巖戸台駅前の商店街でたこ焼き屋「オクトパシー」に寄る。

「こ、これは、いわゆる買い食いというヤツか？」

「そうですけど……別に校則で禁止されていたりはしませんよ？」

「わ、分かつている」

「こういうの初めてですか？」

「あ、ああ。まあな……。——たこ焼きとは、タコの丸焼きじゃないんだな……。あ、いや、当たり前だな。そんな物を路上で振る舞うわけではないな……。自分の世間知らずが恨めしい……」

美鶴は何やら納得すると同時に凹んでいる。

「とりあえず食べましょう」

「あ、ああ……。ご店主、すまないが……。た、たこ焼きを一つ。……。何？ ああ……。一個

単位じゃないのか? なるほど、この値段で、そんなにたくさん買えるのか!!」

本当にこういうことが初めてのようで、美鶴はしきりに感心していた。

悠もその様子を見ながら、たこ焼きを注文する。

「なるほど……中にタコの切り身が入っているのか。ふむ……まろやかな酸味と、弾力のあるタコの感触……美味だ。……ん? タコ以外に、何か入っているのか? とにか
く、面白い味だ」

どうやらお気に召したようだ。

美鶴は新しい味覚を発見して喜んでいる。

▽美鶴との間にほのかな絆の芽生えを感じる…

▽美鶴のことが少し分かった気がした…

私は汝…、汝は我…汝、新たな絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

“女帝”のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん…

▽“女帝”属性のコミュニティである“桐条美鶴”のコミュを手に入れた!

▽鳴上悠の失われた力“女帝”属性のペルソナの一部が解放された!

ペルソナ全書を見ると、“センチ”が追加されている。

火炎無効に“メディア”もあるが、LVは9であるために、使うタイミングがあるかは微妙だった。

「こうしてキミと帰るのも楽しいものだな。たこ焼き、美味しかったよ。またいつか、食べに来よう」

美鶴と一緒に寮へと帰ることにした……。

同日 一夜―【巖戸台分寮】

「おいおいおい！ お前、やつちまったぜ……！」

寮へと帰ると、悠は何故か順平に手招きされ詰め寄られた。

美鶴はその様子に少し不思議そうにしながらも先に自室へと戻った。

「なんのことだ？」

「桐条先輩のことだよ！ 桐条先輩と一緒に帰るなんて学園のどんな男子でも成し遂げられなかったことなわけよ！ いや、男子だけじゃない。女子だってそうだ！」

「真田先輩は？」

「いや……あの人はいいんだよ。どうせ一緒に帰ったとしても何か用事があったとかそういう事だろ？ それはもう周知の事実的な関係だから問題ない。だつてのにお前は——仲良かったこ焼きを食つて来ちまった！」

「なんで知つてるんだ？」

悠が首を傾げると、順平は自分の携帯の画面を突きつける。

「メールで回って来たんだよ。今頃は学園の掲示板にも書き込まれているだろうぜ」
「そうなのか」

携帯の内容に目を通していた悠は、状況を受け入れると頷いた。

「そうなのかってお前……」

「ただ、誘っただけだ。帰り道だって同じなんだから、普通だろ?」

悠から自分の携帯を受け取った順平は、そんな悠の言葉に頭をキャップの上からガリガリと搔いた。

「——かあー! これが天然のイケメンの力ってヤツか!」

「なんでそうなる」

「いや、オレっちはお前がたくさんのペルソナを使える理由が分かった気がする」

「理由って?」

「それは、悠、お前がそういうヤツだからだ! それ以上の理由が見つからないくらいに完璧な理由だ! お前の勇気は『豪傑』だとか『漢』なんてもんじゃない。もう『勇者王』だな。『勇者王』!」

▽ 鳴上悠は勇気が限界突破した!

▽ 鳴上悠は勇気が『豪傑』から『勇者王』になった! (キーアイテム: はじまりの漢)。

悠はその言葉になぜだか誇らしい気分になった。

だが、美鶴と一緒に帰ることに勇氣は必要なのだろうか。

どちらかという和美鶴の知性についていけるだけの知識のほうが必要な気がするが。

——いや、必要なかもしれない。

普通のことだと思っていたが、悠は転校して来てまだ2カ月経たない程度で美鶴を誘えた事実になんとなくそう思った。

2009年5月27日（水）

放課後。

美鶴に貰ったスキルカードをどのペルソナに使うか考えていると、じとーつとした視線を感じた。

——湊だった。

湊は物欲しそうに、悠が手にしたスキルカードを見ている。

悠は仕方がないので、湊にそのスキルカードをあげることにした。

「べ、別に要らないよっ！ い、要らないけど……ちよつと借りるだけなら……い、5日くらい経ったら返すからっ！」

湊はそう言うと、スキルカードを手に、どこかへと駆けて行った。

その後、悠も帰る為に下駄箱へと足を向けると、運動部仲間である一志と結子の二人

に遭遇した。

「二人共、今帰りか？」

「鳴上……」

「あ、鳴上くん。帰りってどうか、病院」

「病院？」

悠が尋ねると、結子は呆れたように親指でくいつと一志を指した。

「ミヤの膝、全然治ってないみたいでさ。一人じゃ行こうとしないから、見張りよ。見張り」

「大袈裟なんだよ……」

「大袈裟じゃないっつもの。2週間以上経ってて、ちつとも良くなってないんでしょーが」
「うっ……」

一志はバツの悪そうな顔で呻いた。

「とにかく、そういうわけだから。それじゃ、鳴上くん。また明日」

「——じゃあ、気は乗らねーけど行ってくるわ」

「ああ。また明日」

悠は頷くと二人を見送った。

たいしたことがなければいいのだが……と、悠は心配そうに二人の背中を見送った。

2009年5月28日(木)

悠は部活に出るが一志の姿はない。

昨日の診察の結果が良くなかったのだろうか。

そのことを気にしながらもマジメに練習していると、こそこそとした様子で練習に参加しようとしている一志を見つけた。

「ちよつと、ミヤ！ あんた、練習は禁止でしょ！」

「な、なんだよ……。こつそり練習に参加しようと思つてたのによ……」

同じくその姿を見咎めた結子が一志を引き留めている。

悠は練習を中断して、会話に参加する事にした。

「どうした？」

「あ、鳴上千ん。鳴上千んからもミヤに言つてやつてよ。こいつの膝。ハムストリング筋が断裂しかけてるっていうのに、練習に出ようとすんのよ。認められるわけないっつーの！」

「そつ、そんなの、根性があればなんでもなるつて。すぐ治るに決まつてる」

ハムストリング筋の断裂……軽度なものであれば2週間〜4週間もあれば治るはずだが、2週間経つての結果がこれだ。

一志の性格からして、その状態でも無理に練習をしていたに違いない。

となると、治るまでに数カ月～半年くらいは掛かる可能性がある。

「だーかーらーっ！ 根性つてそういうもんじゃないでしょーが！ ここで無茶すれば来年の選考会にだって影響でるわよっ！」

「で、でも、そのためにも練習しないとよ……。」 —— 約束したんだ。お前だって知ってるだろ」

「そりゃ知ってるけどさ……。」

「約束？」

一志が拘る理由はそこにあるようだ。

悠が尋ねると、一志は俯きながら口を開いた。

「……ああ。事故で足を怪我しちまった甥っ子とな。夏にある明王杯。そんで来年の選考会——日本大会でも優勝してみせるって。だから、いきなり躓くわけに行かぬーんだよっ！」

「でも、怪我じゃしようがないじゃん。今は治療に専念して、来年は勝ってみせればそれでいいじゃない」

結子のそれは正論で、一志は叫ぶ際に上げた顔を再び俯かせると、少しして、悠にどこか絶るような視線を向けた。

「鳴上……お前は どう思う?」

「宮本の膝が心配だ。とりあえず今日は休んだほうが良い」

それは一志が求める答えだったのかどうか。

とにかく、一志は悠の言葉を聞いて、肺に溜めた空気を重く吐き出すと頷いた。

「……そうか。分かったよ。お前までそう言うなら、今日は休む」

「肩貸そうか?」

「ははっ。あんがとな。——けど、さすがにそんなじゃねえよ。お前は練習に戻って

くれ」

◁一志のことがまた少し分かった気がする…

【Rank up!! Rank 5 戦車・運動部】

◁「運動部」コミュのランクが「5」に上がった!

◁鳴上悠の失われた力「戦車」属性のペルソナの一部分が解放された!

ペルソナ全書を見ると、影が一つ少しくつきりとした輪郭になっただけだった。

今の悠にこのLV、このランクのペルソナを制御できるだけの力はまだない……。

「はあ……。ミヤのヤツ、思い詰めて無茶しなきゃいいけど……」

「そうだな」

「……あんがとね。鳴上くん。あいつ、鳴上くんことは、結構信頼してるみたい。でき

ればこれからも気にかけてやって」

「ああ。分かった」

悠は頷くと練習に戻った。

2009年5月29日(金)

「なあ、鳴上。一緒に帰ろうぜ。——ってか、ちよつと付き合つてくんね?」

放課後になってクラスメイトの健二が、悠の肩を叩いた。

「どうやら健二はついて来て欲しい場所があるようで、若干そわそわした様子を見せている。」

「それは構わないが、どこに行くんだ?」

「あ、ああ。叶先生がさ、欲しがってたチケットがあるんだよね。だから、それ渡して、デートにでも誘っちゃおうかなって。あ、もちろん、その瞬間にいろつてわけじゃないぜ。先生、女子テニス部の顧問だからさ。そこまでついて来てくれるだけでいいんだ」

前に健二は叶先生狙いだという話を聞いた事があった。

それはべつに冗談とかではなかったようで、意を決してデートに誘おうと考えているようだ。

「分かった」

「サンキュウ。お前、マジ話せる！これが伊織とかだと、余計な茶々ばつか入れてくつからさ〜」

悠は健二と共に女子テニス部に向かった。

「こ、こんにちは〜！」

「こんにちは」

「あつ、鳴上くん！ 後、友近くん」

「またアンタ？ 今日は何？」

「えーつと……おお？ お前らしいねーの？」

健二の言葉通り、テニスコートには湊ともう一人……ポニーテールの女子、二人の姿しかない。

悠は前に結子から聞いた話を思い出した。

それによると、合コンで練習をサボったとかで揉めていたはずだ。

事態はあれから改善どころか、悪化したのだろうか。

「他に誰か見えるなら、心霊体験ね」

「イヤミな言い方止めろよなー、可愛くねーのー」

「で、誰かに用だったの？」

その質問に健二は少し迷ったようだが、居場所を聞かなければ仕方ないと思ったよう
で口を開く。

「……叶先生。こここの顧問だろ？」

「そうだけど……全然来ないよ。やる気ないし……ルールも知らないくらい」

「まー、そりゃガキの遊びには付き合ってらんないよね、大人の女性は」

「ガキの遊び？」

「わー、嘘々、嘘だつて！ 青筋立てたら、綺麗な顔が台無しよ？」

「お、思ってもないことを言わないでよ」

健二の軽口にポニーテールの女子はカチンと反応したが、それをなだめるための言葉
に、頬を軽く染めるとぶいっと横を向いた。

「それにしてもさー、叶先生、どこかなー。わざわざ鳴上にまで付き合って貰ったつての
に……」

「……知らない。湊、知ってる？」

「もう帰ったんじゃない？」

「えええー、やつぱそうなん？ 残念過ぎて今日死ぬかも、俺」

「すぐなら俺が生き返らせてやる」

主に反魂香などでだろう。

もつとも、通常時間でしかもペルソナ使いではない相手にどこまで効くのかは分からないが。

「なんだそれ？ お前、たまにおかしなことを言うよな。まー、サンキュー」

「……そっち、鳴上千んだよね？ 湊と同じで転校生の」

「え、ああ、そうそう。鳴上悠。なんとこの前のテストの学年トップ様だぜー？ 平伏

せーつてか？」

「むうう」

湊が頬を膨らませている。

その話題は避けたほうがよさそうだ。

「鳴上悠だ。そっちは？」

「あ、私は『岩崎理緒』。よろしく」

「こちらこそ」

理緒が軽く下げた頭に悠も応じた。

「理緒はねー、私の友達っ！」

「一応は俺の幼馴染でもあるな」

「ただの腐れ縁でしょ」

理緒は笑顔で腕を組んできた湊には微笑んで応じながら、健二の言葉を一言で切つて

捨てる。

だが幼馴染ということは事実のようで、このやり取りも長年のものというヤツなのだろう。

「えー、冷たいなー。……それより、叶先生、居ないなら帰るか?」

「そうだな」

「どうして探してるの?」

「え、ああ。先生が欲しがってたチケットが手に入ったからさー……」

「叶先生が好きなんだ?」

状況を察知した湊がさりと口にした言葉に、健二は大袈裟に反応した。

「えー? 何? 言うの? えー!!?」

「……なんのために好きなの?」

「はあ? 理緒さんはガキですな……。いーい? なんのためとかじゃなくて……。恋

は 落 ち る も ん な の!!!」

「落ちる……?」

「つーかマジ、言わないでね? 理緒も、有里さんも!!! ね!!!」

健二が湊の名前を強調したのは、湊のほうが言いそうだからだろうか。

健二はテレたのか足早に去って行った。

「落ちる……ものなの？」

「そうだね」

「そうかもな」

「——つて、うわつ、鳴上くんまだいた！ もーうつ、こつから先は女子の会話なのっ！
鳴上くんはとつとと、友近くんでも追いかけたら？」

「それもそうだな。じゃあ、また」

悠は健二を追いかけ、鍋島ラーメン・はぐくれに二人で寄つてから寮に帰った。

▽健二のことがまた少し分かった気がする…

【Rank up!! Rank3 魔術師・クラスメイト】

▽「魔術師」コミュのランクが「3」に上がった！

▽鳴上悠の失われた力「魔術師」属性のペルソナの一部分が解放された！

ペルソナ全書を見ると、影が一つ少しくつきりとした輪郭になっただけだった。

だが、これ以上の経験を得るためには、行き止まりの先に進まないといけないかもしれない。

行き止まりの先——やはり大型シャドウが鍵なのだろうか？

もしそうなら、タルタロスと大型シャドウの関係とは？

大型シャドウは何体いるのか？

そもそも何故このタイミングで現れたのか？

美鶴たちの話では、悠たちが寮で確認したのが、最初の大型シャドウだと言う。

そして悠たちがペルソナに覚醒し、タルタロスを探索すると、次に現れた大型シャドウは鍵になった。

……これらは全て偶然で片づけてしまっただけのことなのだろうか？

謎は尽きない……全ては一つに繋がっている気もするが、そう確信するにはまだまだ情報が足りなかった。

2009年5月30日(土)

「おつはよーさん。お前ら、もう聞いた？ 今朝からこの話で持ち切りだぜ？」

悠が湊やゆかりとよく一緒に登校する中、ギリギリまで寝ていた順平は、だいたいHR間近の時間に登校してくる。

だから、その日も教室で顔を合わせたわけだが、順平は開口一番そんなことを言い出した。

「なんの話ー？」

「ああ。まあ聞けよ。隣のE組の女子が昨日の晩から夜通し行方不明でさ。それが今朝になって校門の前でブツ倒れてたんだと！ 事情は目下の謎で、噂じゃ意識も戻ってな

いらしい。今回の難事件……正直このオレも——お手上げ侍……」

「お手上げ……」

「侍？」

悠と湊が顔を見合せていると、今朝は一緒に登校していなかったゆかりが教室に入ってくる。

「何がお手上げ侍よ。バカじゃないの。……てか、バカじゃないの」

「二回言うな!!!」

一度言った後に自分の席に着き、一呼吸吐いてからもう一度言ったゆかりは、順平のギヤグを心底バカにしてるようだった。

「そーいやどこ行つてたん？」

ゆかりは自分より先に寮を出たはずだと思つた順平がそう尋ねる。

「先生に話してきたの。今朝倒れてた子、実は私、昨日部活の帰りに見たのよ。——で、その時ちよつとヤな話聞いちゃつて……いわゆるイジメつてヤツ？ その子イジメグループの一人だったみたいで、なんか……今回の事件と関係あるのかなつて……」

「それつて、イジメられてたヤツが仕返ししたとか、そーいう？」

「うん、まあ……そーなのかな？」

「イジメられてた相手の名前は分からないのか？」

「あ、うん。ちらつと聞いたただけだから」

「そうか」

悠は少し考え込むが、現時点では情報が足りないようだ。

そうしている間に担任の鳥海が現れ、HRが始まった。

同日 — 影時間 — 【タルタロス前】

緑色の夜に半分の月。

月光館学園の名残である正門前に集まっているのはS・E・E・Sのメンバー。

「こうして来たはいいいけどさー。何かやることあるの?」

「それなんだけどさー! 私、不意に思いついちゃったんだ!」

「……何そのイヤな前振り」

行き止まりに阻まれている以上、タルタロスでやれることは多くないはず。

なのによつて来たその前で、湊が口にした言葉に、ゆかりは露骨に顔を顰めた。

「大丈夫大丈夫。今日はそーゆるーのじゃないから」

「そうなの? つていうか、私の懸念がわかるなら、改めて欲しいんだけど」

「まあそれは置いといて」

「つまり、改める気はないわけね……」

さらりと意見を流す湊の姿にゆかりはいつものように溜息を吐く。

「——それで、何を思いついたんだ？」

話を進めようと悠が尋ねると湊は満面の笑顔を浮かべた。

「うん！ タルタロスの攻略方法！」

「タルタロスの攻略方法だと？」

その言葉にはさすがに探索方法に関して是我関せずで居た上級生組も反応する。

「はい！ それはもう、画期的な攻略方法です！」

湊はその攻略方法によほど自信があるようだ。

美鶴が続きを促すと、力強く頷いて話し出した。

「私たちが今までは真つ正直にエントランスに入つてタルタロスを上つてたじゃないですか。でも、それだとなんか行き止まりに邪魔されますよね？」

「そうだな。それがどうした？」

「はい、この状況……普通ならきつとお手上げ侍」

「侍？」

「お、湊、それ気に入ったのか？」

「あんなね……」

万歳をした湊はその恰好のままタルタロスを——空を見上げている。

「……そうして侍になって空を見上げた時に私は思いついたの。そう！ わざわざシャドウと戦いながら最上階を目指さなくても、ペルソナに乗って屋上まで飛んで行けばいいんだっ！——って」

万歳をしていた腕の片方を降ろして、ピシッとタルタロスの頂点を指差した湊は、そんな画期的な攻略方法を宣言した。

「「「「「……………」」」」」

沈黙が場に落ちる。

称賛を持つてその宣言を迎えられると思っていた湊は不思議そうにみんなの顔を見回した。

「あれ？ ダメ？」

「——ブリリアント！ それは確かに画期的な攻略方法だ！ キミはもしかして天才か!!？」

初めに動いたのは美鶴だった。

湊の思いつきを称えているようだ。

「えへへー、かもしれませんが。……だから、この前のテストの結果は何かの間違い！ 満点だどちよつと感じ悪いかなって本気じゃなかっただけなんだから！ まさかそのテストで大人げなくトップになる人がいるなんて！」

「……まだ根に持っていたのか？ スキルカードはあげたじゃないか」
「持っていない！ それに、借りてるだけだっただってばっ！」

それはともかく——。

「つていうか、桐条先輩も落ち着いてくださいよ。別にタルタロスの最上階に影時間の謎を解く鍵があるとは決まってもませんよ」

「む。その意見も一理あるな」

「甘い！ 甘いよ、ゆかり！ これ見よがしに攻略してくださいっていう高い塔があるなら、その最上階にボスやらお宝やらが待ち受けているのはもはや世界の法則なのっ——」

「なるほど……」

「え、そこ納得するところなの？」

美鶴に続いて男性陣も一定の共感を持ったようで、ゆかりは一人困惑する。

男性陣——男の子の方が、現実であつてもそういうゲーム的な要素は受け入れやすいということかもしれない。

「まあそんなわけだから——順平！ 頑張つて！」

「えっ!!? オレつちがやるの？」

「私、スカートだもの」

「絶対それが理由じゃないだろ……」

影時間もタルタロスも分かっていないことが多い。

加えてタルタロスは上層に行けば行くほどシャドウが強くなるという傾向もあるため、何が起ころるか予測がつかない。

湊は素で順平を身代りに選択したようだ。

「えつと……試してみたほうがいいんスカね？」

「ふむ、どうだろうな。それを試した者はまだいない。もしも有効な手段であるならば、間違いない画期的な攻略方法ではあるが……」

「成功すれば一躍ヒーローだね！」

「——行くぜ!!! ペルソナー!!!」

湊の煽りに乗った順平はヘルメスを召喚すると、その腕に抱えられ飛んで行った。

「おい! 止めなくていいのか?」

「さてな……」

「大丈夫です! 順平のペルソナはそのうち成層圏くらいまでなら飛べるようになる気がするからっ!」

「どっからそんな自信がくるのよ……」

「順平……生きて帰ってこい」

その動向を見守る一同。

順平を抱えたヘルメスは順調な飛行を見せていた、だが、間もなくその屋上に辿り着こうかというところで――。

「ん？」

バチイ!!!

「あいた、――!!?」

何やら不可視の壁に弾かれる。

要は行き止まりの結界的なアレが張り巡らされていた状況だ。

というわけで順平落下。

「ちよつ、ものスゴイ勢いで墜ちてきてるんですけど!!?」

「マズイぞ! あの高さから墜ちればいくらペルソナの恩恵で身体能力が強化されているとはいえ死ぬ!」

「えーつ、どど、どーするんですか!!?」

「――イザナギ!」

弾かれたショックでペルソナが消えて絶賛墜落中だった順平を、悠のペルソナがキャッチした。

そのままゆつくりとみんなの前に降りてくる。

「うん……今のは悪い見本だね！ ズルは禁止！ みんな、わかった!!？」

「せ、せめて謝れ!!！」

「ゴメン!!！」

その日は、そんな感じだったので探索は行わなれなかった。

……影時間が終わる。

2009年5月31日(日)

悠は暇があると色々な場所でバイトをしていた。

元々能力が高く、独特なカリスマ性を持つ悠はそれぞれの職場でも頼られ、一回のバイト代も上がってきていた。

なので、今回そのバイトをすることになったのも、自分から選んだわけではなくて、悠なら任せられると名指しで頼まれたものだった。

辰巳ポートアイランド駅前にある花屋「ラフレシ屋」でのバイトである。

個人を相手に直接花を売る仕事だから、相応の知識や伝達力など必要だし、頼れそうな雰囲気、お客の要求に応える寛容さも必要となる。

今まではそれら全てを、花屋のお姉さんって感じの店員が一人でやっていたのだが、たまには休みも欲しいし、誰かいい人はいないかと知り合いに相談した結果、巡り回っ

て悠が指名されたのであった。

初回ということで、今日はその花屋のお姉さんが悠について、店の仕事を説明している。

悠はその説明を一度で全て覚えた。

バイトに慣れていることもあるし、さすがのスペックでもあった。

花屋といえば、やはり男性よりは女性のほうが訪れやすい。

男性が女性へのプレゼントとして来ることもあるが、それでもやはり女性率のほうが高かった。

そしてここは月光館学園への入り口とも言える場所であり、悠は学園ではこの前のテストで学年トップを取ったことを含めて、かなりの有名人となってきた。

結果、今日は日曜日だが、部活などで学園に用があった女子生徒は、悠の存在に気がき、花屋に寄っていく。

しかも、相談すれば悠が花を選んでくれるということ、噂はメールで爆発的に広まり出していた。

「な、なんか、今日は客が多いわね。しかも、学生ばかり……キミってひよつとして有名人だったりする？」

「——どうだろう？　一応転校生なので、普通よりは目立っているかもしれません」

花屋のお姉さんはなんとなく事情を察して曖昧に頷いた。

こういう店の店員をずっとしているだけあって、そういった機微には結構敏感だった。

とりあえず、なんだかんだで店はとても繁盛した。

我は汝…、汝は我…汝、新たな絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一步なり。汝、

〃月〃のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん…

〃月〃属性のコミユニティである、〃アルバイト先の人々〃のコミュを手に入れた!

〃鳴上悠の失われた力〃月〃属性のペルソナの一部が解放された!

ペルソナ全書を見ると、しかし、絵柄が影になつて追加されただけだった。

このアルカナはこのランクで制御できるペルソナはいないようだ。

「お疲れさま。あ、そうそう、キミって家庭菜園をやったりもするのよね?」

「はい」

「だったら、この苗をあげるわ。頑張ってくれたからおまけよ」

「ありがとうございます」

「うん。それじゃあ、またお願いね」

「分かりました。時間が合った時にはよろしくお願いします」

悠はバイト代に加えてプチソウルトマトの苗を受け取ると、寮へと帰った……。

同日 一夜―【巖戸台分寮】

「家庭菜園？ そうだな……屋上でよければ使っても構わない」

美鶴の許可を貰った悠は、材料を用意して屋上に家庭菜園の為のスペースを作った。耐根シートに軽量土壌、それらをブロックで囲っただけの簡素なものだが上出来だろう。

「……何かが足りない気がする」

悠は出来上がった菜園を見て少し考えると、*“やさい畑”*と大きく書いた看板を作って立てた。

「よし」

今度こそ満足のいく出来だったらしい。

小さいが、菜園らしい趣きだ。

「楽しみだな」

プチソウルトマトはどうやら5日程度で収穫できるらしい。

収穫できるまで、こまめに菜園を見にこよう……。

2009年6月1日（月）

「どうも、こんばんは。伊織順平アワーのお時間です」

夜、巖戸台分寮のラウンジにて。

6月に入り、夏服へと移行したため、見た目にも涼しげな空間の中で、順平が懐中電灯を手に雰囲気を出しながら、2日前に起きた事件から流れる噂話を披露する。

「世の中には、どーも不思議な事って、あるようなんですよ……。ご存知ですか？ 遅くまで学校にいると……。死んだはずの生徒が現れて、食われるよ、って怪談……。」

ゆかりはこういった——いわゆる、怪談話が苦手なようで、ふるふるしていた。

「私の知り合いに、まあ仮にAとしておきましょうか。Aがね、言うんです。伊織さあ、オレ、変なもの見ちゃったって」

A——健二だろうか。

悠はわざわざ順平が伏せた個人名を特定しながら話を聞く。

「あまりに真剣なもんだから、何が？ っ、私聞きました、彼に。彼、首を傾げながらね、実は例のE組の子なんだけれどね……。事件の前の晩、学校来るとこ見たよって言うんです！」

夜……。学校。

悠の頭の中で何か繋がりそうさだ。

「嘘だ、そんなんあるかい、嘘だ、って、私、彼に言ってやりましたよ。E組の子、夜

遊びするような人間じゃない。でも、彼、真つ青なんだ、顔。確かに見たって、ガタガタガタガタ震えてる……」

それにしても、E組の例の子と言うのは……。

「……私、考えましたよ。そうなんだ、倒れていたE組の彼女お？ ……食われたんですよ、死んだはずの生徒に！ 夜中に学校にいたから食われて、だから倒れていたんだ！

……って」

順平が大袈裟な身振り手振りで場を盛り上げようとしている。

「どうやら、そろそろ話が終わりそうだ。

「私、ぞくーっとしました。ドゥーーっと、冷や汗が溢れ出しました……世の中には、どうも不思議なことって、あるようなんですよ……まあ、全部私の推測なんですけどね」

順平がそう言っつて話を締めくくった。

「どう思う……明彦」

「あら……？ オレが熱演した件はスルー……？」

「オンリヨウかはともかく、調べる価値はありそうだな」

順平の話に対して、美鶴と明彦は興味を持ったようだ。

マジメに話し合っている。

「しっかし、ゆかりツチさ。お化けが苦手とは、チョイ情けないよな」

「な?!? 情けないって言った?!? ——い、いーわよ、順平。だったら、調べよーじゃないの。お互い、これから1週間、いろんな人から徹底的に話を聞いて回ってさ。怪談なんて、絶対嘘に決まってるから!」

「それは助かる。気味の悪い話だからな」

「えっ……」

「じゃ、よろしくな。あー怖い怖い」

「ええっ……」

普段から生徒会やトレーニングで忙しい二人は、これ幸いとばかりにゆかりに押しつけたようだ。

ゆかりは情けない声を上げた。

それから、きっ! っと悠と湊を見る。

「ふ、二人もだからねっ! 二人も調べるのっ!」

「お手上げ侍っ!」

話を振られた湊が万歳をした。

「お手上げ侍じゃないっつーの! ちゃんと調べてよっ! 鳴上くんも!」

「それは構わないが……これは、シャドウの作業とは違うのか?」

悠が順平の話から繋がった考えを口にする。

「……むっ？」

「何？」

「シャドウ……？」

それぞれの反応を見ながらも、悠は言葉が続けた。

「順平の話によると舞台は夜の学校……実際、2日前に倒れていた少女の話聞いた時も、夜通し行方不明で朝に学園前で見つかったと言う。なら、影時間に入る瞬間に学園にいたと仮定するならどうだ？」

「どう……って」

「そうか！ タルタロス！ その生徒が象徴化を免れていたなら、シャドウに襲われることもあり得る！ 何せ、タルタロスはシャドウの巣だ！」

「なるほどな……」

タルタロスは毎晩深夜0時——影時間になれば必ず現れる。

それは彼らS・E・E・Sのメンバーが探索に向かわなくても変わらない事だ。

彼らがいる時にそういうことが起これば彼らが気付いたと思うが、今は行き止まりに阻まれていることもあって毎日探索に赴いているわけでもない。

事件が起きた5月29日〜30日の間の影時間にしても、彼らはタルタロスに赴いてはいなかった。

翌日なら順平が墜落した日なのだが。

「つてことは——……結局どーすればいいんすか?」

「……ふむ。確かに原因が分かってても、シャドウの作業となると、今まで通りタルタロスの探索を続けて行くしかないか?」

「でも、タルタロスつて、また行き止まりですよね……つて、まさか——つ」

「ならどうするのかと考えると、行き止まりの時に悠が口にした推測がみんなの頭に浮かぶ。」

「大型シャドウ?」

4月、5月と今まで二度姿を現した大型シャドウ。

6月に入った事でまた現れるのだろうか。

「うげつ、まーた、あんなのが出てくるつてことスか?」

「大型シャドウの作業——いや、今回の事件はその予兆ということか? ……とにかく、

岳羽たちは先程言った通り、今回の件について調べてみてくれ」

「え、あ、はい……」

「結局そうなのかよ……」

「まあでも、鳴上千んの仮説が当たってるなら、オンリヨウのせいってのはなくなつたつてことじゃない?」

「あつ、そうだよねっ！ やっぱオンリヨウなんかいないっつーの！」

湊の言葉にゆかりは先程までの姿はどこへやらと強気な態度を取り戻した。

「つーか、ゆかりツチ、シャドウならいいんだ……？」

「何言つてんのよ。シャドウは見えるし、倒せるじゃない」

「あ、そうスカ……」

その後——自室に戻った悠は、何とはなしにテレビを流しながら勉強をしていた。

いつもは勉強をする際にテレビを点けたりはしないが、今日はなんだかそんな気分だったのだ。

まさか怪談にビビったというわけでもないだろうが……そんな悠は、ふと、何かに気付いたかのように顔を上げると、勉強の手を止める。

テレビの中では豪華なケーキと共に誕生日を祝う歌が歌われていた。

バラエティ番組……誰かの誕生日のようだ。

見た感じアイドルだろうか、ツートールの中学生くらいだと思われる少女が、ふーつと、ケーキの上の蠟燭の火を消すと、拍手が鳴り響いた。

「……Happy Birthday」

悠はテレビに向かって呟いた自分に首を傾げながらも、再び勉強へと戻っていった。

6月2日(火)～6日(土):キミが世界を変えるとして

2009年6月2日(火)

「あつ！ 鳴上千くん、鳴上千くん！——はいコレ。返すね」

放課後、湊が忘れていたことを思い出したような感じでパタパタと寄ってくる。

湊が差し出した物は「ディアラマ」のスキルカードだった。

「いいのか?」

「うんつ。えっへっへー。ほらっ！ この通り複製に成功しましたーっ」

「複製?」

「そうだよー。長鳴神社のお稲荷さんに頼むとできるんだよ」

「そうなのか?」

願いを叶えるキツネ……なぜだか自分がそのために走り回っているイメージが浮かんだ。

その後、湊と別れた悠は、部活へと向かった。

部活の練習に一志の姿はない。

やはり、練習には参加できないようだ。

「——お疲れ、鳴上くん、調子はどう？」

「悪くない」

「そう。それなら良かった。調子が悪い時はちゃんと行ってよ？ ミヤみたいに我慢されるのが一番困るんだから」

「宮本はどうしてる？」

「さあねえ……。練習に出ていない以上は大人しくしてると思うけど、あいつ部活ばかりで、他に趣味らしい趣味もないっほいしき」

「……そうか。俺はこれで帰るが、西脇は？」

「あー、私今日はまだやることあるんだ」

「手伝おうか？」

「いや、いいって。マネージャーの仕事だからさ」

「分かった。じゃあ、今日はこれで」

「うん。また明日ー」

悠は結子と別れ寮へと帰る。

その帰り道……巖戸台の駅前で何をしてもなくぼーつとしている一志を見つけた。

「どうした？」

「ああ、鳴上か……。いや、何がどうしたってわけじゃねえんだけど……。俺ってホン

トに部活ばつかだったみたいで、いざそれから離れると何もやることがねえんだよ……」

一志は乾いた笑いをこぼした。

「どうやら現状に相当参っているようだ。」

「はあ。このままじゃ、あれだよ。……そう。無気力症つての？ あれになっちゃうよ、俺……」

「……ついて来い」

「え？ ついて来いってどこに……あ、おい鳴上！」

悠は一志を連れて歩き出す。

悠の目的地は長鳴神社だ。

一志に肩を貸して階段を上り境内に出る。

「神社なんかに来てどうすんだよ……？」

「この神社には願いを叶えてくれるキツネがいるという噂だ。他にすることがないならとりあえず神頼みでもしてみろ」

「神頼みか……。そうだな、それくらいしかできることなんてないよな」

一志はそう言うとお賽銭を入れて願い始めた。

悠はその様子を確認すると、それを呼び出した。

「……ピクシー」

悠の呼び掛けに応え現れた妖精から、光が溢れ……一志を包んだ。

——「ディアラマ」だ。

悠はどのペルソナにスキルカードを使うか悩んだので、最初にシャッフルカードで現れたピクシーに決めた。

今のピクシーはコミュの影響で、スキルも増え、経験値も入っているので、使えないということはない。

悠はピクシーの「ディア」の代わりに「ディアラマ」を覚えさせたのだった。

「ディアラマ」は「ディア」の上位スキル。

「ディア」は切り傷とか体力の消耗を回復するくらいにしか効かないが、「ディアラマ」は骨折であっても治す。

美鶴がこのスキルカードをいつ手に入れたのかは分からないが、これを使ってペルソナに「ディアラマ」を覚えさせておけば、明彦の怪我也治せたはずの優れモノだ。

とはいえ——現実の話として今回はそこまでの効果は得られないだろう。

そもそもが通常時間内でペルソナを召喚できるかが賭けであった。

そして、悠の召喚方法が「力の管理者」の用いるような特殊な召喚方法であったが故に、それが叶えられたとして、ペルソナの回復魔法スキルは、相手もまたペルソナ使い

であつてこそ十全の効果を發揮する。

「え、あれ、なんだ、これ? 身体が軽い? あ、足が、膝が痛くねえような……!」

つまり、一時的にそう感じてても残念だが完治したわけではない。

せいぜいが痛みを和らげたり、少し治りが早くなる程度であろう。

「キツネが願いを叶えてくれたんじゃないか?」

「キツネがつて……」

「まあ、宮本の身体のことだ。俺には状況が分からないからな。でも、多少でもよくなつていられるかもしれないと感じたなら、病院で確かめてみたらどうだ?」

「お、おうっ! そうなっ! ……つて、これどう説明したらいいんだ? ……いつそ違

う病院に行くか?」

一志は自分の身体のことながら半信半疑なのか、走り出したりはせずに、悠の肩を借りながら慎重に歩き病院に向かった。

▽一志のことがまた少し分かった気がする…

【Rank up!! Rank 6 戦車・運動部】

▽“運動部” コミュのランクが“6”に上がった!

▽鳴上悠の失われた力“戦車”属性のペルソナの一部分が解放された!

ペルソナ全書を見ると、影が一つ少しくつきりとした輪郭になっただけだった。

今の悠にこのLV、このランクのペルソナを制御できるだけの力はまだない……。
「ギリギリか……」

それが新たな診断結果であった。

一志がまずはと目指す明王杯は8月の頭……ちょうど2カ月後の話だ。

それまで安静にしていれば治りはするらしい。

しかし、当然ながら膝に負担が掛かるような練習はできない。

「……でも、本当に絶望的な状況だと思ってたんだ。参加できるなら希望はあるって考えてもいいよな？」

「ああ。それまでは治すことを第一に考えて、当日は全力で走ればいい。それでダメだったら、その時は俺が仇を取ってやる」

「ハハハ、言ってくれるぜ！ 分かった！ 絶対に無理はしねえ！ だけど、ダメだったらホントにお前に託すからな！」

「任せろ！」

悠が力強く頷きを返すと、ようやく一志の肩の力は抜けたようだった。

笑顔をみせる一志と別れて寮へと帰った……。

2009年6月3日（水）

その日はようやくというべきか、時間が空いていたので、悠は生徒会の活動に参加することにした。

悠の隣には湊の姿もあり、湊もまた生徒会の活動に参加しようと思っっているようだ。悠が生徒会室に入ろうとそのドアに手を伸ばすと、タイミングよくドアが開いて中から男性教師が出てきた。

E組の担任で古典を担当している「江古田」だ。

「む……」

「すみません」

「うむ」

道を譲り江古田の姿を見送る。

例の順平から聞いた噂話……被害者はそういえばE組の生徒だと言っていた。

江古田はもしかしたらその件で生徒会に注意を促しに来たのかもしれない。

そう思う悠だったが、生徒会室の中から言い争うような声が聞こえてきたので意識をそちらに戻した。

「あ、鳴上さん、有里さんも……」

「やあ」

「何があつたの？」

言い争いをしてゐるのは風紀委員の秀利と書記の男子生徒だった。生徒会長である美鶴の姿はない。

悠と湊の姿に気付いた会計の千尋に挨拶をしながら、その原因を尋ねる。

「だ、男子トイレでタバコの吸い殻が……見つかった、らしいんです……」

「タバコ?」

「はい。それで……そ、その犯人捜しを風紀委員でやってくれないかって話を、小田桐さんが会長の許可なく勝手に受けてしまつて……」

「なるほど」

どうやら例の件とは関係がないようだ。

声を潜めて事情を説明する千尋の話に納得すると、ちやうど渦中の言い争いも落ち着いたようであつた。

正確には秀利が風紀委員が風紀を正す行為をして何が悪いと押し切つたようだが。

「おっと、君たち、来ていたのか」

「犯人捜しをするのか?」

「もちろんだ。……期待する側の心情は二極だ。叶えば信頼、裏切れば不信。有能であるが故に期待も集まる……そしてその期待には行動で応えてみせてこそだろう?」

「……そうだな」

「私たちも手伝おうか?」

「気持ち嬉しいが今回の件を受けたのはあくまで風紀委員としてだ。それに……最近
は他にも色々騒がしいだろう?」

秀利は湊の提案に軽く首を振ると、少し視線を鋭くしてその件に触れた。

「意識不明になったという生徒のことか」

「そうだ。原因は分からないが、オンリヨウの仕業だとかくだらな噂が飛び交っているのは君たちも知っているだろう。風紀委員としてはどうにか噂の原因となったものを鎮めたいところだが、夜の見回りは会長に却下されてしまった」

影時間が関わっているかもしれないのだからそれはそうなるだろう。

しかしすでに美鶴に進言しているとは、秀利の風紀に対する思いはかなり強いようだ。

「今回も江古田先生が来て、その件に触れられるのかと思ったのだが、まさかタバコとはね……。けれどこの件を解決すれば、僕の発言力は上がるはずだ。こちらは関係あるのか分からないが、行方不明の生徒もいるようだし、できることからやるさ」

「その行方不明の生徒について他に何か知っていることはないか?」

「ふむ……そう言われてもね。僕も親しい相手というわけではないからな。知っているのは名前くらいのものさ」

「その名前って……」

予感があった。

そして湊の言葉に対して秀利がその人物の名前を口にする。

「——山岸風花。僕の知り合いが同じ部活でね。少し訊いた話では真面目で大人しい女子らしい。だから家出とかではないと思うのだが、元々少し身体が弱いところがあつたようだし、今回の件と合わせて誰かが面白がつてそう吹聴しただけかもしれない」

「事実確認はできていないのか？」

「軽く訊いてみたのだがどうにもはぐらかされてしまつてね。プライベートのことならそう突つかかることもできない」

「そうか……」

悠が少し考え込むように眉根を寄せると、その姿を見た秀利は逆に少し相好を崩した。

「ふっ……お互い苦労するな」

「え、ああ」

「それでは僕はさつそく校内の見回りをすることにしよう。鳴上君、それに有里君も、それぞれ職務に励んでくれ」

秀利はそう言い残すと生徒会室を出ていった。

秀利から期待されているようだ。

▽ 秀利のことがまた少し分かった気がする…

【Rank up!! Rank3 皇帝・生徒会】

▽ “生徒会” コミュのランクが “3” に上がった!

▽ 鳴上悠の失われた力 “皇帝” 属性のペルソナの一部分が解放された!

ペルソナ全書を見ると、影が一つ少しくつきりとした輪郭になっただけだった。

今の悠にこのLV、このランクのペルソナを制御できるだけの力はまだない……。

「む。今、鳴上くんコミュったでしょ」

「もしかして……有里もか?」

「もうー! 被り禁止! 鳴上くんは私と違う場所でコミュってよー!」

「そう言われてもな……」

自分もそうであったからか、それとも女の勘か、頬を膨らませて文句を言う湊に悠は嘆息するしかない。

「ちなみに今の私のコミュのランクは?」

「……言わないとダメなのか?」

「ダメです!」

「はあ…… “2” だ」

「2” かあ……つて、上がってる!!」

悠の答えに驚愕の表情を浮かべる湊。

コロコロと表情を変える湊は、傍から見てる分には面白いかもしれないが、それに対する側に立てば面倒な相手だと言える。

悠も寛容さが低ければそう思ったことだろう。

「むむむ。と、とにかく鳴上くんは現状を維持して！ 私の攻略は禁止！ 禁止だからね！」

被り禁止に攻略禁止……そういう情報が感覚的に分かっってしまうのだから仕方ないのかもしれないが、現実の人付き合いに対して、正直何を言っているのだろうと思わなくもない。

とはいえ、湊も自分がその対象になったことでちよつと感情を持って余しているだけのように見える。

なのでとりあえずはこれ以上の面倒事を避けるために、曖昧に頷いておくことで悠はその場を収めるのだった。

「……それよりも、山岸風花、か」

明彦が新たなペルソナ使いとして示した相手であり、悠自身も少し前に街中で出会った。

その人物がもしかしたら行方不明かもしれないらしい。
だがまだ情報が足りない。

悠は生徒会の仕事をしながら、風花の無事を祈った。

2009年6月4日(木)

やはり山岸風花のことが気になり、情報収集と学園を回ってみるが、有用な手掛かりは得られない。

クラスメイトや部活関係者、彼女のことを知ってはいても、彼女が現在どうしているかを答えられる者はいなかった。

他の被害者についての情報は少し手に入ったのだが……。

どうやら風花は学園内でそこまで親しくしている相手がいないうた。

「どうするか……」

呟きながら悠は図書室のドアを開ける。

「山岸さんは優等生だから図書室とか使ってたんじゃない？」なんて曖昧な情報から来てみたがどうだろうか。

「あ、鳴上くん」

「有里」

図書室に入ると中にいた湊が悠に気付き声を掛けてきた。

「どうしたの？ 本を借りに来たの？」

「いや……有里こそどうして？」

「私は図書委員だから」

湊は部活に同好会に生徒会、バイトに加えて委員会活動も始めたようだ。

悠も色々手広くやっているほうだが、湊のそのバイタリテイには素直に感心した。

「委員会活動を始めたのか」

「うん」

「ならちよūdいいいな。俺は例の件……山岸風花のことを訊いて回っているんだが、彼女が図書室を利用してたかもしれないって話を聞いてな。何か少しでも手掛かりがあればと思ってきたんだ」

「そうなんだ。ちよつと待ってて」

湊はそう言うのと貸出カウンターで対応をしていた女子学生の、その仕事が終わるのを待ってから話し掛けた。

一言二言その女子学生と話すと、悠に向かって手招きをしてくる。

悠はその招きに応じて貸出カウンターへと歩み寄った。

「えっと、沙織。彼は鳴上くん。私のクラスメイト、友達だよ」

「そう。初めまして鳴上くん。図書委員をしている長谷川沙織です」

「よろしく。鳴上悠だ」

ウェーブがかかった髪に、泣きぼくろ、落ち着いた容姿で大人っぽい印象を与える沙織だが、湊が名前呼びをしているということは同学年とかなのだろうか。

「長谷川でいいか?」

「ええ。私は2年だから同学年よ。実際はちよつと年上なんだけど、気にしないでくれると嬉しいわ」

「そうか。分かった」

悠が素直に頷くと沙織は微笑みを浮かべた。

「ふふつ、さすがは湊ちゃんの友達ね。そうは言っても気にする人が多いものなんだけどね」

「鳴上くんは天然だから」

「……有里には言われたくない」

「何ですとー!!?」

「ふふふつ、似た者同士ね」

悠と湊のやり取りに沙織は本当に楽しそうに笑っている。

「——それで、山岸風花のことだが」

「ええ、山岸さんね……。確かに図書室は利用するほうだったわ。だから図書室で見かけることは多かつたし、貸出や返却の際に喋ることもあったけど、お互いに相手の事情とかに踏みこむほうではなかつたから……」

「詳しいことは分らないか」

「そうね。ごめんなさい」

「いや、誰に訊いてもそうだからな。学園内で彼女の詳しい事情を知っている相手はそもそもいないのかもしれない」

「そうなの……」

悠の言葉に沙織は少し目を伏せてから口を開いた。

「何事もなければいいわね……。山岸さんは少しだけ私に似てる気がする。なんて山岸さんには迷惑な話かもしれないけど……鳴上千くんがどうして山岸さんのことを気にしてるのかは知らないけど、その気持ちが本当なら山岸さんが復帰したら良くしてあげて」

「長谷川？」

「病気でも留学でも、たとえ何が原因でも、人と空いた距離ってそう簡単に埋まらないのよ。普通はね。埋められるのは本当に親しい人間か、二人みたいに行動力がある人だけだから」

「……覚えておく」

「ええ。言われたから気にするってのも違うものね。それくらいでいいと思うわ」
軽く世間話をしてから図書室を後にした……。

寮に戻り、屋上のやさしい畑の様子を確認すると、プチソウルトマトができていた。
▽プチソウルトマトを3個収穫できた。

2009年6月5日(金)

「ハイ、では月曜に約束した通り、集めた情報の確認会をします!」

夜、寮のラウンジでゆかりに集められた2年生組は、今回の件に関する情報の共有を
することになった。

「それで、まず、この怪談騒ぎのそもそもの発端だけど……校門で倒れてた例の子の話
は、確かにちよつと怪談の内容と似てる。でもその話にはちよつとだけ続きがあった
の。さて、どんな続きでしょう?」

「被害者が三人いたんでしょ?」

「正解!」

「あら、そうなの?」

ゆかりが振った話に湊がはい! と手を上げて答え、悠もその情報は得ていたから

頷くが、順平は今日まで特に何もしていなかったらしく、まんま初めて聞いたという反応をしている。

「順平——10点ね」

「な、何の——ポイントだよ!!?」

そんな順平に対してゆかりが減点するが、何に対する減点かと順平が尋ねても冷めた目で見てるだけなのでちよつと怖い。

「とにかく被害者が三人もいたから、怪談なんて噂話に変換されちゃったわけ。ここまではいいよね?」

「ああ」

「まさかのスルー!!? え? オレっちのことはスルーする方向なの?」

「……うるさいから——5点。これで——15点ね」

「ええっ!!」

「あーあ、順平終わったね……」

「だ、だから何が!!?」

湊の追い打ちに焦る順平だが、それに対する返答もなく話は進む。

「……ま、それはともかく。被害のあった三人はクラスもバラバラで、一見、何の関係もないように思えます。では、その三人の共通点とは何でしょう?」

「よく家出してた!」

「ハイ、またまた正解。湊は+50点。65点分、順平を扱き使っていいよ」

「やった!」

「な、何なんだよ……もう面倒になってんだろ、それ……」

愚痴る順平。

しかし順平の抗議はやはり届かず。

「でさ。被害者の三人が決まって夜明かししてた『溜まり場』ってのがあらしいの」

「そこに行ってみようって話か」

「そゆこと」

「お、おいそれ、もしかして、ポートアイランド駅前の、裏に入ったとこの……」

「なんだ、知ってたの?」

「あそこヤバイって!」

みんなの視界の端のほうでイジけていた順平だが、その展開は聞き捨てならないと話に割り込んできた。

順平の中で不良たちはシャドウと対峙する時とは別の現実的な怖さがあるらしい。

それは普通の感性であつたが、すでにゆかりの興味はこの数日間の調査の答えを出すことにしか向いていなかった。

例えるなら探偵が謎を前にした時の心境……あるいは単純にS・E・E・Sの女性陣が強いというだけの話かもしれないが。

「そういう場所なら女子は待っていたほうがいいんじゃないか？」

「却下します」

そんなだから順平の反応を見ての悠の提案も素気無く却下される。

「いやいや、冗談抜きで悠の言葉に従つていたほうがいいって！ つーか、オレたちも遠慮したいんだけど……」

「じゃあ、順平が一人で行くか、みんなで行くかの二択で」

「——よっし！ みんなで行こうぜ！」

順平の素晴らしい変わり身で、明日その路地裏に2年生組の四人で行くことになった……。

2009年6月6日（土）

ゆかりの発案でそれぞれ事件について調べた結果、三人の被害者全員が辰巳ポートア일랜드駅の裏路地へ出入りしていたことが分かり、より詳しい事情を知るために現場に聞き込みへと向かうことにした2年生組。

ポートア일랜드の裏路地はいわゆる不良のたまり場のような場所で治安が良くな

いが、ゆかりはオンリヨウはダメでも、シャドウと同じく人間ならば別に問題ないらしい。

順平は嫌がっていたが、結局ゆかりに押し切られて、放課後、制服姿のままにその裏路地へと行くことになった。

裏路地に入ると華やかなポートアイランドが一転、建物に光を遮られ薄暗く、タバコの匂いなどが染みついているために空気も悪い。

そして何よりその雰囲気にあった——いわゆる不良と呼ばれる者たちがグループ単位で屯していた。

「ヤベエ……想像してたよりずっとヤベエ……」

「びびらないでよ」

明らかに場にそぐわない雰囲気、悠たち四人の前に、数人の不良が立ち塞がる。

「ちつと、お前らさ。遊ぶところ間違えてんじやねえの?」

その中の一人が口を開き、自分たちの場所に入られた不快感から因縁をつけて絡んできた。

「遊びに来たんじやない」

「げっ、お前は……」

「この間の」

絡んできたのはこの前、悠が風花と出会った時に相手した男たちだった。

「まさかの交友関係……なのか？」

「もしかして鳴上くんって月光館学園の番長だったりして！」

「番長っていつの時代よ……」

状況にすぐわず目をキラキラさせる湊にゆかりが呆れたように溜息を吐く。

「……そんな奴らを連れて何しに来やがった。俺らと一戦やろうってのか？」

「違う。訊きたいことがある」

「訊きたいことだあ？ 俺らは聞かれたから答えるようなお人好しじゃねえんだよ」

「月光館学園の前で意識不明になっていた学生の情報が知りたい。ここに通っていたという話を聞いた」

「ちつ……あいつらのことかよ。つっても別に話すことなんかねえよ。帰れつての。それともそつちの二人が俺たちの相手でもしてくれるか？ それなら考えてもいいぜ」

「どうやら悠と話している男は本気で言ったわけでもなさそうだが、悠たちを追い払うために湊とゆかりの二人に視線を向ける。」

そしてその男はともかく、他の男たちは男の言葉に下卑た笑みを浮かべた。

「サイテー……」

「とりあえずブツ飛ばしてから考えよっか」

「ちよつ?!? 二人共この状況でハート強すぎっから!」

「険悪な……今にも殴り合いのケンカでも始まりそうな雰囲気だ。」

「——よせ。これ以上余計なことすんな。お前らの質問には俺が答えてやる」

そんな雰囲気の中で、路地の奥から一人の男が現れる。

ニツト帽にコートの男。

悠は——いや、他の三人もどうやらその男とすでに面識があるようだ。

少し前まで巖戸台分寮に住んでいたという明彦の幼馴染。

荒垣真次郎。

「てめえの関係者かよ……」

「違えよ。けど、お前らじゃ話にならねえだろ。俺が追い出す。それで収めろ」

「何、勝手なこと言ってるんだ!」

真次郎は悠たちと違いこの場所の常連のようだが、他の者たちとツルんでいるというわけでもないらしい。

悠たちに絡んできた男たちの中の一人が、勢いで殴りかかるが、真次郎の頭突き一発でよろめいた。

「ぐはっ……て、てめえ……三途の川渡ったぞ、こらあ!」

「まだやんのか?」

ニツト帽の下からのぞく鋭い眼光に、殴りかかった男もビビったようであげさる。その代わりにそれまで悠と話していた男が口を開いた。

「……二度と近付けさせんなよ。そういうのが来るとシラけんだよ」

「ああ」

男の言葉で、不良たちは悠たちを睨みつけながらもその場を去って行った。

「……で、何でこんなところ来やがった」

その様子を見届けてから、真次郎が口を開く。

「意識不明になっている学生のことを調べて……」

「アキたちも知ってるのか？」

「むしろ押し付けられたっていうか……」

ゆかりの言葉に、真次郎はニツト帽に手をやると呆れたように息を吐いた。

「つたく、何やってんだ。まあ、いい。意識不明になってる奴らのことだったな」

「はい、何か分かりますか？」

悠の言葉に真次郎は僅かに考えてから答える。

「そいつらのことはよく知らねえ。ただここに通ってたことは確かだ。それでよくこんなことを言ってるやがった。山岸って同級生を色々イジってるってな」

「山岸って……確か真田さんが言ってた……そっか、イジメに遭ってたのか……」

「おかげで騒がれてるぜ……犯人は、その山岸のオンリヨウだ、とかな」

オンリヨウという言葉に裏路地とかは別にその場の空気が少し重くなった。

「オンリヨウって、山岸は病気だって話じゃ……」

「いや、そこら辺の事情は担任に訊いてもよくわからなかったらしい」

「え、じゃあマジで行方不明だってこと？ これ、もう怪談じゃないよ……」

沈黙が流れる……そんな雰囲気の中で再び口を開いたのは真次郎だった。

「……そうだ。これが手掛かりになるかは分かんねえが一つだけ気になることがある」

「何ですか？」

「意識不明になった被害者は “三人” で間違いねえな？」

「はい」

「だがその山岸をイジってた連中ってのは——いつも “四人” でツルんでた」

「「!?」」

「それってまだ終わってないってこと……?」

「さあな。俺が知ってるのはこんだけだ。それらがどう繋がってるのかまでは分からねえ」

真次郎からオンリヨウに関する情報収集をした悠たちはその場を後にした……。

「……ちっ。そうかアキの奴。あの日できなかつたことの代わりってか？　ったく、過去を切れねえのはどっちだってんだ」

悠たちが去つた裏路地で、真次郎は自嘲気味に呟くと、明るい道に戻る彼らとは違い、裏路地の更なる暗がりへと一人潜つていった。

その先で待つのはある事件のあと、ここに来るようになってから知り合つた三人の人物。

闇は……誰が知らずとも確かに蠢いていた。

6月7日(日)～8日(月):ひとりじゃない

2009年6月7日(日)

「なるほど……事情は理解した。明日、そのもう一人の女子生徒に話を訊いてみるとしよう」

翌日、悠たちが真次郎から得た情報を美鶴に伝えると、美鶴は頷きそう言った。

今日は休日で学園が休みであるから妥当な判断だ。

なので悠や他の者たちも、休日は休日として過ごすことにした。

悠は一志、湊は理緒とそれぞれ運動部の友達と遊び、ゆかりや順平もそれぞれの時間を過ごす。

束の間の休みは穏やかに流れ……そして、戦いの日がやってくる。

2009年6月8日(月)

昼休み、美鶴によって生徒会室に呼び出された悠たち2年生組はそのドアを開けた。

その中にいたのは二人の人物。

一人は当然悠たちを呼び出した美鶴で、もう一人は――。

「あれ、あなた……」

日焼け肌に茶髪、ヌーデイカラーのリップに、アイメイクといかにもな女子生徒の姿に、どうやらゆかりは覚えがあるようだ。

「……彼女が？」

「ああ。——さて、大まかな事情は聞いているが、山岸風花をどうしたんだ？」

悠が事情を察して美鶴に尋ねると美鶴もその通りと軽く頷く。

そして大した前置きもなく話の核心に触れた。

「違うの！……違うのよ、こんな……こんなことになるなんて思わなかった……」

彼女——『森山夏紀』は、本来なら日焼け肌で分かり辛い顔を、それでも周囲の者にそうなのだろうと思わせる雰囲気ですく染めながらポツリポツリと話し出した。

「……風花つてさ。ちよつと突いただけで世界の終わりみたいな顔すんだ……。すぐ分かったよ。コイツ優等生のクセに、根っこアタシらと同じ弱い人間だって……。どこ踏んづけるときや立てないかアタシには丸分かりだった……。だから、」

夏紀はその日もいつものように風花をイジっていた。

遊びのつもりだった。

話の流れでなんかそんな感じになって、風花を体育倉庫に閉じ込めた。

5月29日。

夜中になって、さすがに自殺とかされるとマズイからと夏紀がツルんでいた三人の内の一人が鍵を開けに行った。

しかし、彼女は戻ってこなかった。

学園の校門で意識不明の状態で発見された最初の被害者だ。

状況は分からなかったが、風花がマズイかもと急いで体育倉庫に行ってみた。

けれど、そこは変わらず鍵が閉まったままで……開けてみても中には誰もいなかった。

「アタシらみんなビビって、次の晩から夜な夜な風花を探しに行ったの……！でも、その度に行った子が帰って来なくて……みんな次々……マキみたいに……！」

夏紀の絞り出すように発せられていた声は最後はかすれて消えた。

……事情は分かった。

なのでここからは解決方法を探さなければいけない。

「……なるほどな。それで病院へ運ばれた君の友人について、何か気付いたことはないか？　どんな細かなことでもいい」

美鶴の言葉に対して一瞬の間の後に、夏紀は俯けていた顔を上げた。

「声だ……」

「声？」

「自分を呼ぶ『声』……そうだ。みんな病院送りになる前の晩……そういうえば同じこと
 言つてた……気味の悪い『呼び声』を聞いたつて……」

「気味の悪い『呼び声』……それが影時間に落ちる者たちの共通点ということだろう
 か。」

「桐条先輩」

「ああ。今まで誰が落ちるか事前に知る方法はないとされていたが……なるほど、『声
 か』」

「それつてヤツらが……」

「そうなるな。つまりその者たちは偶然落ちるのではなくヤツらによって落とされると
 いうことだ。ヤツらは確かに人間を狙っているんだ。——事情は分かった。放課後
 もう一度生徒会室に集まってくれ。私はそれまでに軽くやることをやっておく」

「やること……?」

「山岸風花が行方不明だということ……さすがに担任が知らなかったということはない
 だろう? 少しばかり灸を据えてやらねばな」

「な、なるほど……」

「そう言つて薄く笑みを浮かべる美鶴の姿は、まさしく女帝のそれで、その様子を見た
 者たちは風花の担任である江古田に心の中で合掌した。」

「それと森山。今夜は私たちの寮に泊まるがいい。それが一番安全なはずだ」
「安全……?」

「あとは私たちに任せろということさ。それから……もしも“声”を聞いてしまったらすぐに私たちに教えるんだ。何かに呼ばれたように感じてても、決して部屋から出るな。これさえ守ればキミは助かるだろう。……そして、おそらくは山岸風花もな」

同日 — 放課後 — 【月光館学園生徒会室】

集まった仲間たちは、それぞれ思い詰めた顔をしている。

「——今夜、この学園への潜入作戦を行う。目的は山岸風花の救出だ」

「あの、いまいち分かんないんすけど、山岸って、ガツコの中にいるんすか?」

「しかも、なんで夜に? 0時になっちゃったら、学園は……」

そこまで口にして、ゆかりもその事実気付いたのか口を閉じた。

「その通り。今回の件にはシャドウが関わっている。それは先程聞いた話からも確信が持てることだが、山岸もそうやって、タルタロスに迷い込んだんだ。もつとも幸か不幸か山岸には適性があつたために未だ意識不明の犠牲者として名を連ねてはいないが」

「じゃ、まさか山岸さんって、体育館に閉じ込められてからずっと……」

「……そうだ」

「そんな！ 10日も前の話じゃないツスカ！ それ……どう考えても……」
順平が口ごもるのも当然だ。

タルタロスに10日間も潜り続けていられる人間はいない。

シャドウはもちろん、人間として食事やら睡眠やらの問題もある。

「いや、悲観するのは早い」

みんなの頭に浮かぶそんな考えを遮ったのは明彦だった。

「タルタロスは影時間の間にしか現れない。なら山岸風花は、日中はどこにいますか？」

「言われてみれば……」

「こいつは仮説だが、おそらく山岸はあの時からずっと影時間にいるんだ。つまり10日と言っても、山岸にとっては影時間を足し合わせた分しか時は過ぎていない。生存の可能性はある」

風花が行方不明になった時から今日までS・E・E・Sは今回の件の情報収集などを優先してタルタロスに挑んではいけない。

挑んでいたとしても広大なタルタロスだ。

いると分かかっていて探してもしなければ見つかることはなかっただろう。

「でもタルタロスでは影時間が伸びることがあるじゃないですか」

「それは俺たちのように状況を理解している場合の話だ。タルタロスなんて普通の人間が長く留まりたいと思うような場所じゃない」

「なーる。探索しようなんて思わなければ影時間が伸びることはないってことツスね！」

「そうなるな。そして俺たちはそれに賭けるしかない」

出遅れているのは分かりきっていることだ。

だからこそすぐにでも彼らは山岸風花を発見し保護しなければならなかった。

「問題は探す方法ですね。桐条先輩の探知能力だけで探せるんですか?」

「……居場所が分からないとなると……厳しいな」

「じゃあ、手当たり次第ツスか?」

順平の言葉に明彦が静かに首を振った。

「方法はある。山岸とまったく同じ方法で中に入るんだ。同じ場所へ行つて、0時を待つ。そうすれば短時間で辿りつける」

明彦はそう言うが、タルタロスの内部は変動する。

絶対ではない。

だからこそかなりリスクのある方法だと言えるだろう。

「その方法、大丈夫なんですか……?」

「正直に言えば、私はこの作戦には諸手をあげて賛成はできない。最悪、二重遭難という可能性もある」

「なら、見殺しにするのか！ 助かる可能性があるのに、放っておくなんて俺にはできない……後悔したくないんだ。お前らが行かないなら、俺一人で行く」

明彦は冷静に見えて熱くなっているようだ。

人を助けるということに強いこだわりがあるようにも見える。

「大丈夫。俺も行きます」

「私も」

そんな明彦に賛同したのは悠と湊だった。

そして見れば、ゆかりと順平も決意を込めた目で頷いている。

「お前ら……」

S・E・E・Sはチームだ。

それぞれ戦う理由は違っても、誰か一人に押し付けてそれで終わりと思える人間はいなかった。

「……分かった」

その様子に美鶴からの了承の言葉も入る。

山岸風花救出作戦——決行は影時間に入るその少し前からだ。

同日 — 23時30分 — 【月光館学園前】

再び学園の校門前に集まったS・E・E・Sの仲間たちは、山岸風花救出のために全員出撃準備をすませている。

さすがにこの状況でネタ衣装が入りこむ余地はなく、それぞれ制服姿だ。

体育倉庫に入るためにはその鍵を得なければならぬのだが、この肝心な時に理事長である幾月とは連絡が取れず、一行は順平が仕込みをしておいたと言う鍵の開いた非常口から校舎内に侵入した。

「ブリリアント！ よくやったぞ、伊織」

「え、ど、どもッス」

順平は美鶴に手放しで褒められて逆にちよつと引いていた。

「……ブリリアントって気に入ってるのかな」

「ハイカラだな」

「あのね、言っておくけど、それもちよつとおかしいからね」

「もうみんなお手上げ侍だね！」

「……薄々気付いてたけど、この集団ってちよつと変な人が集まってる気がする」

「ゆかりも含めて？」

「わ、私はフツーだってば！」

……悠は何も言わなかった。

それはきつと悠の優しさからなるものだろう。

「お喋りはそこまでだ。まずは体育倉庫の鍵を手に入れるぞ。体育館の鍵とペアになっているはずだ。鍵はおそらく職員室か校務員室にあるだろう。二手に分かれて探し、1階の玄関ホールに集合だ。いいな？」

「……職員室のガサ入れか。テストの問題とかあるかも？ ウヒヒ」

「私の前で不正の算段か？ 事実なら処刑だな」

「じ、冗談に決まってるじゃないですか！ い、イヤだなーもう！」

美鶴の鋭い視線に順平は全身で応えた。

だが、そうは言うものの、あわよくばと多少は思っていたような気がしないでもない。

「それならいいが……とにかく、伊織、キミは私と共に校務員室だ。有里、キミは職員室だ。他に連れて行く仲間を選んでくれ」

「じゃあ、鳴上くんと真田先輩で」

「なんでその人選なわけ？」

「だって、ゆかりが傍にいますからかいたくなるから……」

湊に選ばれなかったことを少し気にする様子ゆかりだったが、その答えを聞いて溜

息を吐く。

「……はあ、訊かなければよかった」

そんなゆかりは怪談と同じく、そういう話の発生源である夜の校舎というのも苦手にしてのいるのだった。

同日 — 23時37分 — 【月光館学園職員室】

「職員室には鍵がかかかっていないのか……」

「えっへん。私がちよこつと細工しておきました」

「……そうなのか」

悠の疑問に答えて胸を張る湊。

順平といい、こういうことに慣れているような気配を感じるが、さすがにそれは考えすぎだろう。

「なら、その時に鍵を手に入れておけばよかったんじゃないのか?」

「……………ハッ!!? って、ダメですよ。ドアをいちいち確認する人はいなくても、鍵がなくなつたら気付かれる可能性が高いじゃないですか」

「なるほど」

元も子もない明彦のツツコミに一瞬湊の動きが止まるが、すぐに反論を思いついたよ

うで再起動した。

ドアも鍵を掛けたらちゃんと閉まっているか確かめそうなものだが、現に開いているのだから、今回は湊の言葉が正しいらしい。

「探すのは鍵置場だ」

「はい」

「了解です」

明彦の言葉通りに鍵置場を探す悠と湊はすぐにその鍵を見つけた。

しかし、肝心の明彦はなぜか鍵置場をスルーして見当違いの方向を探している……。

「くそっ……やはり学生にも分かるところに鍵を保管してはいないようだ。こうなれば美鶴たちのほうにあることを願うしかないな」

「……………」

「どうした。グズグズするな。美鶴たちと合流するぞ」

「……先輩の目は節穴か！」

「なんだと!!?」

湊の強烈なツッコミに明彦は憤るが、悠が鍵置場を指差すと、若干気まずそうな顔をしてから、取り繕う。

「……まあいい、見つかったんだ。ほら、さっさと行くぞー！」

同日 ー23時55分ー【月光館学園玄関ホール】

待ち合わせ場所の玄関ホールで再び合流した仲間たちは、今回の作戦における人選をしていた。

救出班に明彦、待機班に美鶴は決定済みで、湊もリーダーであるから救出班。

同じくペルソナの付け替えができる悠も救出班になった。

人数的にはこれで決定でもいいのだが、やはり救出班のほうが負担が大きいはずなので、ゆかりか順平のどちらかも救出班という話になる。

「なら私が……」

「タイム、タイム、ゆかりツチ。ほら、オレ前にモノレールの時にちつと暴走しかけてメーワクかけちつたじゃん？ だから恩返しつつかさ。汚名バンカイさせてくれよ、な？」

「はあ？ 変な見栄張らないでよ！ それと、汚名は『返上』」

「——そういうことなら、汚名返上させてやる。これで決まりだな」

「よろしくっスー！」

男の意地的なものに理解のある明彦の言葉で、救出班のメンバーが決定する。

必然的に待機班にゆかりが入ることになり、ゆかりは若干不満気に唇を尖らせた。

「えー……」

「なんだ、岳羽、美鶴と二人きりは苦手か？」

「い、いや、そんなことないですよ」

直で聞いてくる明彦の言葉にゆかりはパタパタと手を振るが、正直そうであろうことは透けて見えた。

「……」

「鳴上千くん、何か気になることでもあるの？」

「いや……森山は大丈夫だろうかと」

「正直を言えば、影時間に絶対安全な場所などはない。だが、寮にいる限りは他の場所よりはかは多少はマシなはずだ。どちらにしても私たちも人手があまっているわけではな
いからな。彼女のためだけに一人を割くことはできない」

「……分かってます」

夏紀に関しては、何か起こるかもしれないし、起こらないかもしれない。
少なくとも今日まで彼女は無事だった。

それに対して、山岸風花の救出作戦ではタルタロスへと挑む以上、ほぼ確実にシャド
ウと戦うことになるだろう。

戦力を減らすわけにはいかなかった。

「……そろそろ時間だ」

「行くぞー!」

結局、チーム的な変更はなく、救出班の四人が体育倉庫の中に入り、その時を待つ。そして、その時はすぐに訪れた……。

深夜0時 — 影時間 — [??]

タルタロスへと変容していく学園の中で、悠はその形容しがたい圧力によつて意識を失っていた。

そして目を覚ました時、その場所にはおそらく悠一人で、周囲は深い霧に覆われていた。

「なんだ……?」

クマ印のメガネを掛けてもその霧は見通せないようだ。

「誰かいなか!」

大声を張り上げるのはシャドウを引きつけて危険かもしれないが、他の者たちの安否が気になった。

「桐条先輩! 桐条先輩、聴こえますか! ……ダメか」

美鶴との通信もノイズばかりで繋がらない。

仕方がないと悠は視界の利かないこの場所を警戒しながらも進んで行く。

どれくらい歩いただろうか、不意に尋常ではない気配を感じた。

「死神タイプか……?」

それくらいに強大な力を持った存在であるのは間違いない。

正直一人で戦うのは厳しいだろう。

しかし、逃げ場もない上に、それがこの状況の元凶である可能性や、放置すれば仲間が襲われる可能性もある。

——悠は覚悟を決めた。

相手もこちらの存在に気付いているのが分かる。

ほぼ同時に互いが踏み込み、剣戟の音が鳴り響いた。

「!!? —— 待て! —— もしかして人間か!!」

「そうだけど。そつちも?」

「ああ、そうだ。すまないシャドウと間違えた。俺に敵意がないなら剣を収めてくれ。俺もそうする」

その誰かは聞いたことがない声をしていた。

だけど男の声だ。

だから聞き慣れていないだけで山岸風花の声だったということもないだろう。

悠は念のため少し距離を取ると自身の武器である雷光を鞘に収めた。

「どうやら相手もそれにならって剣を収めたようだ。」

「まさかここに僕たち以外の人間がいるとは思わなかった」

「それはこつちの台詞だ。詳しく話を聞きたいところだけど、仲間とはぐれていて、今はそんな時間がないんだ。ここから出る方法は分かるか?」

「いや……僕もみんなを探しているところだから」

相手の男は同年代くらいの少年ではないかと思つた。

こうして向かい合つても影でしか輪郭を捉えられないが、一瞬見えた相手の腕も月光館学園の制服だったような気がする。

「そうか……なら、しばらくは一緒に行動しないか?」

「いいけど……」

「!!」

「どうやら今度こそ本物のお出ましのようだな」

「そうだね。シャドウの気配だ……!」

普通に考えれば、出会ったばかりの人間、それも視界が利かないこの状況で、連携が働くわけがない。

しかし、何故だか二人は互いの息や行動の間が手に取るように分かり、現れたシャド

ウを完全に圧倒して倒した。

「……驚いた。キミ、強いんだね」

「それもこつちの台詞だな。顔を見てお礼を言えないのが残念だ」

「そうだね……そういえばまだ自己紹介もしてなかった。僕は——」

「鳴上くーん！」

影の少年が自分の名前を告げようとしたところで、別の声が遠くのほうから割り込んできた。

この声は湊だろう。

「キミの仲間……？」

「ああ」

「だったら行ったほうがいい。僕は一人でも大丈夫だから」

「大丈夫って……一緒に来ればいい」

「いや、僕のほうにも通信が入ったんだ。だからそっちには行けない」

「そうなのか……？」

悠のほうの通信はまだ回復していない。

だから悠は影の少年が気を遣っているのではないかと考えてしまう。

「キミは優しいな。でも本当に大丈夫だ」

「……なら、また会えるか?」

「どうだろう。でも、キミたちがここに挑んでいるというのなら……いつかきつと。だから、自己紹介もその時まで取っておくことにするよ」

「分かった。約束だからな」

「うん。どうでもいい……とは言えないかな」

影の少年は軽く微笑んだような気がする。

悠はその雰囲気安心して、影の少年に別れを告げる。

「それじゃあ、また」

「うん。またね」

二人は互いに背中を向けてそれぞれの場所へと歩き出した。

いつか、その道が再び交わることはあるのだろうか。

もうすぐ終わりがくる。キミの選択が、僕のそれを超えることを願ってる

「え……?」

頭に直接響くようなその声に、悠が後ろを振り返るも、すでに影の少年の気配すらも感じられなかった。

「鳴上くんってば!」

気が付けば湊に腕を引かれている。

霧も完全に晴れ、周囲はタルタロス特有の陰鬱とした空気に戻っていた。
「有里」

「そうだよ。もうボーっとしないですよ。ここはタルタロスの中なんだからね！」
「ああ、すまない……」

今のは夢……ということもないだろうが、影時間やタルタロスにおいても特別な空間だったような気がする。

何よりも影の少年……彼はいつたい何者だったのだろうか。

「ほら、まだ順平と真田先輩、それから山岸さんを見つけないといけないんだから、行くよー！」

「……了解だ」

考えるのは後だ。

悠は湊に続いてタルタロスを進みながら、その思考を切り替えた。

幸いにも……順平と明彦の二人とはすぐに合流できた。

「どーにか全員集合だな」

「今後は、こういう入り方は無理だな……」

さすがの明彦も、懲りたらしい。

意識を失ったり仲間とはぐれるという具体的な危険性があつたのだから、それも当然

の感想だ。

「あ、つーかき。お前ら、ここに来る途中になんか〃声〃聞かなかった?」

「〃声〃?」

「あー、聞いた聞いた! 女の子の声だよね!」

順平の言葉に悠は影の少年のことが頭に浮かんだが、どうやらそれとは違ったらしい。

「誰……? 人……なの?」

「おつ、似てる! そうそうちようどそんな声で……」

「私じゃないってば」

「えっ!!?」

通路の影から青白い顔の少女が姿を現した。

月光館学園の制服……花柄でエメラルドグリーン、タートルネック系の服をインナーとしていた緑髪の女子生徒。

今回の救出目標である山岸風花だ。

「——山岸!」

「あつ……鳴上くん……よかった……」

「ん? 二人って知り合い?」

「おおっ！ 生きてたー！ スゲー！ もう大丈夫だぜ！ オレら、救助隊だからサ！」

「よかったな……俺たちと一緒に来い」

「ありがとうございませ……私……」

風花は衰弱こそしているようだが、五体満足で無事のようなのだ。

風花の無事に悠も胸を撫で下ろしていると、クイクイツと制服の裾を湊に引かれた。

どうやら自分の質問をスルーされたのが不満のようだ。

「前に偶然ちよつと話しただけだ」

「そうなんだ」

それで完全に納得したのかは分からないが、湊は軽く頷くと手を放す。

「フツ……俺の判断は正しかったな。美鶴に連絡を入れておくか」

「ここ、いったいどこなんですか？ 私、学校にいたはずなのに、なんでこんな……」

「んー……、その話はちつと長くなんな。戻ってから説明するっス」

明彦が美鶴との通信を試みるが、やはりノイズが酷くて上手くいかない。

「あ、ケガとか大丈夫か？ つーかここ、化けモン出るだろ」

「じゃあ、やつぱり……ここって何かいるんですね……今のところ、何とか見つからずですんでますけど……」

「——見つからずについて、一度もか？」

通信を諦めた明彦が話に割って入ると、風花は頷いた。

「ええと、何て言ったらいいか……居場所が、何となく分かるっていうか……」

明彦はその言葉に少し考え込むと、荷物から召喚器を取り出した。

「これを持っていてくれ」

「予備ですか？」

「山岸は適性者だったからな。ペルソナを召喚する必要を考えて美鶴に頼んでおいた」

「適性者？ ペルソナ？」

「説明は後です。とりあえず持っていてくれ」

「で、でもこれってピストル……！」

「お守りのようなものだ。弾は出ない」

「お守り……」

「よし、急いで戻るぞ！」

風花に召喚器を若干強引に手渡すと、明彦は行動を促した。

……タルタロス内にも外が見えるような見晴らしのいい場所はある。

ちようどそういう通路に差し掛かった五人は、そこから見える満月に目を奪われた。

「月、デカッ！ 明るッ！」

「月の満ち欠けはシャドウの調子に影響するって説がある。もつとも、人間も同じだが

な」

「シャドウに……」

「……!!?」

「モノレールの時はどうだった!」

「満月……!」

「それに、私たちが寮で襲われた時も……!」

「なるほどな……そういうことか」

「みたいですね」

「うんうん。間違いないよ!」

「あ、あのー、そっち三人で納得しないでオレっちにも状況を説明して欲しいんですけど……」

何事かを納得する悠、湊、明彦の三人に、風花を除けば一人、話の流れについていけない順平がおずおずと切り出す。

「だから大型シャドウの出現タイミングだよ」

「大型シャドウ……?」

「いつも満月だっただろ」

「あ、あー、なーる……ってオレはモノレールのしか知らないスけど」

「そういえばそうだったか……とにかく、行き止まりの結界らしきものを解除する可能性を持つかもしれない大型シャドウ。それは満月の時に現れるかもしれないってことだ」

「え、それって今日出るっつー……」

その時、ザザッとノイズ混じりの通信が入った。

「美鶴か! どうした!」

『明、彦……シャ、ウが……』

「おい、聞こえているのか? 返事をしろ、美鶴!」

『気をつけ……』

明彦の叫びも空しく通信が途切れる。

待機班のほうで何か不測の事態が起こったようだ。

「なに……これ……」

「どうした!」

「今までのより……ずっと大きい……しかも……人を……襲ってる……」

「「!?」」

「くそっ……!」

「な、な、なんスかつ!!? 分かるように説明してくださいよっ!」

「出たんだ！ 予想通りに大型シャドウがな！ それも戦力の揃っている俺たちのほうではなく美鶴たちのほうにだ！」

タルタロス〔エントランス〕

息も絶え絶えに駆け戻ったその先にいたのは、大型シャドウという名前に相応しく巨大なシャドウだった。

それも二体。

まん丸い身体に手足を取り付けたといった感じの杖を持った女帝と、同じく丸いが、こちらは卵のような身体に手足を取り付けたといった感じの剣を持った皇帝の二体だ。

待機班だったゆかりと美鶴の二人は、それぞれ武器を構え、抵抗の意志を見せているものの、突然の襲撃からの戦闘に疲労の色は濃く、今にも倒れそうな状態だ。

「——有里！」

「うんっ！」

その様子を見て取った悠と湊の二人が目配せをした。

息を合わせ、意識を集中する。

「ミックススライド——カデンツァ！！！」

それは彼らが目覚めた新しい力。

二体のペルソナを共鳴させることによって、それまでとは別の強力な効果を持ったスキルを発動させる。

二人のワイルドが揃っているからこそできる技。

これをもしも一人で発動させることができる者がいるとしたら、それは並外れたナニカをその身に宿す者だけだろう。

ミックスレイドとはそれほどに強大な可能性を秘めた力だ。

一人で背負うには重く、使えば誰もが特別視して、知らずその身をすり減らしていくようなそんな力……けれど、ここには二人いる。

本来なら存在しないはずのもう一人、未来からやってきたワイルド、鳴上悠が。

だから背負える。

二人ならいずれ立ち塞がる運命にも挑むことができるだろう。

これはそのための一歩だ。

「傷が癒えていく……!」

「それだけじゃない、すごく身体が軽い……!」

「カデンツァ」は失われた体力を取り戻し、なおかつその速力——回避力をも強化する。

その効果によって、状況は一瞬にして立て直された。

「待たせた!」

「鳴上くん、湊!」

悠の声と湊の存在にゆかりが分かりやすく喜色を浮かべた。

「当然、オレたちもいるぜー!!! ペルソナ!!!」

「ポリデュークス!!!」

続いて順平と明彦がそれぞれのペルソナを呼び出して、大型シャドウに組みつかせると、ゆかりたちから引き離れた。

「久しぶりの実戦で身体がなまったか?」

「フツ、かもな」

明彦の軽口に美鶴もそれまでの重圧から解放されたように不敵に笑う。

六人のペルソナ使い、彼らは全員が揃ったことによる無敵感、万能感を感じていた。

しかし、その中でこの状況——ペルソナやシャドウといった異能の戦いに驚きながらも、少女は誰にともなく眩く。

「ダメ……このままじゃ勝てない……」

眩いたのは彼らの救出対象であつた風花だ。

そしてその眩きは予言のように現実になつていく。

「コイツ、攻撃が効かないのか……!!?」

「——違う！ 弱点が変化してるんだ！」

「んだよ、それ！ いちいち見極めろつてのか!!? 分かりやすく変身するんでもないのに分かるわけないって！」

「桐条先輩！」

「……無理だ！ 戦いながら、それも短時間の連続した変化には対応できない！」

「なら総当たりか」

「精神力が持ちませんよ！」

「やらなきゃやられるだけだ！ 俺はこんなところでやられてやるつもりはない！

——ポリデュークス!!!」

明彦が召喚器で頭を撃ち抜きペルソナを呼び出すと、自らも大型シャドウへと向かっていく。

電撃の耐性があるのを良いことに覚えてばかりの「マハジオ」で周囲に雷撃を降らせると、その電撃を突っ切つて鍛え上げた拳を振るつた。

「お前には魔法が効いてるように見えない……! なら、コイツが効くだろう！」

二体にまとめて電撃を当てることで反応の違いを見た明彦の拳が、大型シャドウをよろめかせた。

「効いた……!」

「だが微々たるものだ。それに耐性があるとはいえ明彦にもダメージが蓄積される」
「ちっ……弱点を変えたか」

身体を軽く焦がしながらも追撃を掛けようとした明彦だが、その手応えの違いに大型シャドウから離れて体勢を立て直す。

「ジリ貧だな……」

「桐条先輩。やはりこの戦いには探知能力が必要です。戦いは俺たちが引き受けますから何とか……」

「……やれないと言える状況ではないな。分かったその作戦で——む？」

大型シャドウの攻撃から飛び退くことを利用してそばに寄った悠の言葉に頷く美鶴だったが、不意にその視線がエントランスの入口へと向けられた。

視線の先にはフラフラと虚ろな目でこちらへと歩んでくる少女の姿。

「ふ、風花……」

「バカな！ 森山夏紀……彼女がなぜ今ここに!!？」

夏紀の様子は普通ではない。

目の前で行われている異能の戦いもまるで目に入っていないようだ。

これが「声」に導かれるということなのだろうか。

「——まさか、森山さん!!? 逃げてっ！ ここは危ないからっ！」

「風花……アタシ、あ、あんたに謝らなきゃって……」

「!」

「おい、危ねえ!」

二体の大型シャドウの内の一体が、乱入者の存在を捉えている。

「私が……守らなきゃ!」

風花は夏紀の言葉に戦いの恐怖も押さえつけて、駆け寄ると、自らのこめかみに召喚器をあてがった。

「……ペルソナ!」

カツ——と風花の覚悟に反応して彼女のペルソナが召喚される。

目を包帯で覆ったドレス姿の女性型のペルソナ……そのスカートの部分は球状になっっており、召喚者の風花はその中に取り込まれるような形で存在していた。

大型シャドウが魔法スキルによる攻撃を仕掛けるも、自らは動くことなく夏紀の壁となつて立ち続けている。

しかし——。

「ダメだ! そのペルソナは戦闘タイプではないはずだ!」

明彦の言葉通りであることは、風花にもすぐに分かった。

だから壁として存在することしかできない。

でも、心配はしていなかった。

この場で戦うのが自分だけではないことを知っていたからだ。

「イザナギ!!!」

「鳴上くん!」

「山岸、無茶しすぎだ」

「ごめんなさい。……でも、私、見える。私……あの怪物たちの弱いところ、何となくだけど見えます……!」

二体の大型シャドウ。

個体名はそれぞれ「エンプレス」と「エンペラー」。

「パラダイムシフト」というスキルを使い、弱点を変化させて戦う。

それ以外の属性は全て無効。

タネが見えなければ無敵のように感じる相手だったのかもしれない。

けれど、風花のペルソナ——「ルキア」の「ハイ・アナライズ」の前にはその何もかもが手に取るように見えた。

「順番に仕留めます……。まずは——火炎!」

「よく分かんねえけど、OK! 行くぜ、ヘルメス!!!」

「カハク!!!」

「次、疾風ですっ!」

「イオ!!!」

「ホウオウ!!!」

「氷結!」

「私の出番だな……ペンテシレア!!!」

甲冑を装備した女戦士といった姿の美鶴のペルソナの中級氷結スキル“ブフーラ”によつて、エンペラーの動きが止まる。

「もう一体! 今なら打撃で行けます!」

「ポリデュークス!!!」

明彦のポリデュークスによる“ソニックパンチ”で同じくエンプレスも吹き飛ばされた。

「敵、二体ともダウン!!! 総攻撃を!!!」

「みんな、行くよー!!!」

六人のペルソナ使用による総攻撃。

さすがの大型シャドウも、疲弊した状態で耐えられるものではなかった。存在を保てなくなったシャドウは闇色の粒子となつて消えていく。

戦いの終わりだ。

「敵……他に、敵は……」

「もう心配ない」

明彦の言葉に風花はキツク召喚器を握りしめていた指から力を抜くと、夏紀の安否を確かめようと視線を動かす。

「風……花……あんた……」

「け、怪我は、ない？」

「うん……」

「よかった……」

ペルソナの召喚に初めての实戦。

張りつめていた気が一気に緩んだのか、夏紀の無事を確認すると、風花はその場に倒れ込んだ。

同時にペルソナも消滅する。

「風花!!?」

「心配ない、疲れが祟っただけだ」

「風花……風花……あたし……」

夏紀は意識を失った風花を抱き抱えて涙を流している。

「森山さん……いいんですか？ 全部見ちゃって、これから……」

「いや、彼女は俺たちとは違う。適性者じゃないんだ。影時間でのことは記憶に残らない。夢のようにな」

「じゃあ……山岸さんが恩人だったことも忘れちゃうんですよね……そんなの……」

「大丈夫だよ！ きつと大丈夫！」

「そうだな……彼女は自分がどうすべきだったか、分かっているようだ」

涙ながらに謝る夏紀の姿に誰もがそう思えた。

記憶は消えても、絆は消えない。

それはいずれ、どのような結末を辿ろうとも、確実に彼らにも訪れる運命だけど、きつと乗り越えられる。

今は誰も——ひとりじゃない。

——……影時間が終わる。

6月9日（火）～13日（土）：NEXT STAGE

2009年6月9日（火）

大型シャドウトの戦いから一夜明けて——ペルソナに覚醒した山岸風花だったが、長時間タルタロスに居たために疲労の色は濃く、詳しい話はまたということで本日は学園も欠席し、念のための検査を含めて病院で休養を取っている。

一方で悠たちS・E・E・Sのメンバーはもはや慣れたものとはかりに日常へと回帰していた。

とはいえ、もちろん疲労がないわけではなく、悠にしても、今日は運動部の練習などは休みを取り、寮へと戻った。

「ただいま帰りました」

「あ、おかえりー。今日先輩たちは山岸さんのお見舞いだよ。彼女、大丈夫かな……。あ、そうそう。幾月さんから伝言を預かってたんだ。ポロニアンモールの骨董屋がリニューアルオープンしたんだってさ。きっと力になってくれるだろうって言ってたよ」

寮の中に入ると、ファッション雑誌とお菓子を手にラウンジで寛いでいたゆかりが声を掛けてきた。

「骨董屋？」

「なんかペルソナの研究をしていた人の店だとかなんとか。えっと、インセンスカード？　だか、スキルカードだかもその研究の成果なんだって」

「なるほど。ペルソナの強化ができるかもしれないと言うのなら行かない手はないな」

「あ、そういう話なんだ？　正直、私はよく分かってなくてさ。まあ実際に利用するかはともかく、リーダーの湊と二人でお店の人に会っておくといいんじゃない」

「そうだな。有里は——」

「ただいまー！」

「今、帰ったツス！」

悠が湊の居場所を尋ねようとしたところでタイミング良く——湊は順平と一緒に騒がしく寮に帰ってきた。

「おかえり。有里、ちようど良かった」

「ん、何？」

「ちよつと一緒にポロニアンモールに行つて欲しいんだが、時間あるか？」

「時間はあるけど……」

「お、遊びに行くのか？　だったら、オレっちも」

「いや、ポロニアンモールにリニユールオープンした骨董屋がペルソナの研究をして

いた人の店らしくてな。協力してくれるかもしれないから、顔合わせをしておきたいんだ」

「なんだ、そういうことか。いいよ、すぐ行く?」

少し迷う素振りを見せていた湊だったが、悠が事情を話すとすぐに頷いた。

あるいはコミュがどうだとか考えていたのかもしれない。

「ああ。大丈夫なら、すぐ行くこう。順平も来るのか?」

「あー……骨董屋かー、ゲーセンとかカラオケなら行っただけだな……いいわ。なんかマジメな話っぽいし、二人に任せる」

「分かった」

ポロニアンモール【古美術・眞宵堂 前】

悠たちも利用する青ひげファミリーの隣にリニューアルしたその店は、港区の複合商業施設ポロニアンモールにあるだけあって、外観からは古めかしい感じなどはなかった。

しかし店内に入れば、骨董屋というだけあって、日常では見ないような品物が溢れている。

乱雑に並ぶ壺に掛け軸に土偶……そして床には頭付きの虎皮の絨毯など、本当に売っ

ているんだなという物まであった。

「……………いらつしやい」

悠たちを迎えたのは眼鏡を掛けた妙齢の女性だ。

「あんたたちだね?」

「私たち?」

「黒沢から話は聞いてるよ。……………戦っているんだってね」

「黒沢さんの知り合いですか?」

「まあね。ここは骨董屋……………表向きはね。裏じゃ、武器を扱ってるよ。その関係であいつとも繋がりがあある」

話が早いというか、眞宵堂の店主は常識的に考えればアウトゾーンではないかという話を口にしてる。

「って言っても住み分けはある。ウチで扱うのはただの武器じゃない。ペルソナと合体させるんだ」

「ペルソナと合体?」

「あんたたちが持っているかは知らないが、武器の素材……………“無の薙刀”や“無の拳”みたいな何にも染まっていない素体を使ってね」

悠が湊に視線を向けると、湊はその意図を察して首を振った。

「……どうやら持つていないようだね。まあ今回は特別だ。ひとつあげようじゃないか。少し待つていな」

〽無の薙刀を手に入れた。

「やった。薙刀だ」

店の奥に引つ込んだ店主から渡された物が自分の装備である薙刀であることから湊は喜んでいる。

黒沢と繋がりがあると言っていたから、その関係でそれを持ってきたのかもしれない。

「次からはちゃんと自分で取っておいでよ。金ぴかのシャドウが持つてるらしいからね」

「レアシャドウか……」

「それと……まだ研究中だからハッキリとは言えないが……ペルソナによって、特定の武器になる場合があるみたいだね」

「特定の武器ですか？」

「確定情報とは言えないけどね。そもそもがペルソナを合体させるわけだからリスクは大きい。その力を一時的にとはいえ失うんだからね。下手したらそのまま戻ってこない。普通やろうとは考えないけど、あんたたちは特別らしいね。ま、色々試してみな

よ」

「はー」

「特定の武器……ねえ、きつとあれだよ！ ペルソナって神話に登場する神様とかの名前を冠してるわけじゃない？ だから、神話上の伝説の武器になるとかそういうの！」

「そんなものか？」

「きつとそうだって！ なんかテンション上がってきたー！ 伝説の武器！」

湊は漲っているようだ……。

まあ悠にしてもそういう気持ちからないわけではなかった。

とはいえ、現段階でいきなりそういう武器を作れるというわけでもなさそうだ。

「……ああ、それとね、忘れるところだった。宝石を持つてくればウチの物と換えてあげるよ」

「ウチの物ってインセンスカードとかのことですか？」

「そうだね。なるほど……そっちの話は聞いてたのかい。まあでも欲しいなら、本当にウチの商品でもいいよ。テイベア、日本人形、カレイドスコップ、遮光器土偶……と少しはプレゼントに使えるような物も置いてあるからね」

土偶をプレゼント……もしかしたら、美鶴なら喜ぶかもしれない。

「宝石ってのはシャドウが落とすものでいいんですよね？」

「むしろそうでないと困るね。それも研究材料だから」

「なるほど。研究は続けているんですね」

「まあ……ね。桐条の研究所は訳あって辞めたけど、あれらとは一度関わったらそう簡単に切り離せるものではないよ。言うなれば呪いのようなものさ。今更かもしれないが、あんたたちも気をつけな。非日常にハマりすぎると日常に戻れなくなるよ」

「……気をつけます」

悠は店主の忠告に神妙に頷いた。

「ん……有里？」

一方で、そんな話を聞いていたのかいなかったのか、商品と交換してくれるという言葉も聞いてから目を輝かせて店内を見回っていた湊は、一つのガラスケースの中をじつと覗き込んでいた。

「へえ……それに目を付けるとはさすがにペルソナ使いだね」

「何を見てるんだ？」

店主の意味深な言葉が気になった悠は、湊の隣に立ち同じくそのガラスケースを覗き込む。

「あれ、これって……」

アルカナカード……二体のペルソナのようなイラストが描かれているそれは、前に時

価ネットで手に入れた物と似ていた。

「ミックススレイド」

同時に発したその言葉に悠と湊は視線を合わせた。

「博識だね。だけどそれは理論上のものだよ。人によつて違うというペルソナの、その中でも特定の二体の能力を掛け合わせることで爆発的な効果を発揮させるなんていう無茶苦茶な考えからなるね。まさに神話を再現するかのような奇跡の力さ」

「奇跡の……」

「そこに並べられているそれらはそのキツカケになるとされているが、私の知る限りでは実際に発動されたことはないね。だからタロットカードのような嗜好品として普通に市場に流れてしまっているくらいだ」

それが時価ネットで流れていた物だろうか。

いや、どちらにしてもだ。

「これ……買います。これも宝石との交換で大丈夫ですか？」

「あ、ああ。それはもちろん構わないが……あんたたちもしかして……いや、いい。知ろうとしないのは研究者の悪い癖だね。……それで一度失敗してらつていうのに」

店主も何か抱えているものがあるようだ。

その後、いくつかの品物と宝石を交換して、店を出た……。

∨ミックスレイド “ジャステイス！”に必要なペルソナの組み合わせを閃いた！

(エンジェル×アークエンジェル)。

∨ミックスレイド “ジャックブラザーズ”に必要なペルソナの組み合わせを閃いた！

(ジャックフロスト×ジャックランタン)。

∨ミックスレイド “ファイナルヌード”に必要なペルソナの組み合わせを閃いた！

(ナルキッツ×スピクシー)。

—同時刻—【巖戸台分寮ラウンジ】

悠と湊が眞宵堂で店主と話をしていた頃、風花のお見舞いから帰ってきた美鶴と明彦を加えた他のS・E・E・Sメンバーは寮のラウンジで今後のことについて話していた。

順平の「それで、次はいつタルタロスに行くんスか」という言葉から始まった流れだ。「ああ、大型シャドウを倒したことで、行き止まりの結界は解除されているかもしれないが、その先に進むには山岸のサポートが必要だ。正直、私のペルソナの探知能力では厳しくなっていたいな。だから攻略は山岸が正式に加入してからだ」

「正式に加入っていうか、加入する前提で話してますけど、OKしてくれるんですかね

？」

美鶴の断言にゆかりがそんな疑問を口にするが、美鶴は問題ないと頷く。

「山岸は乗り気だ。前情報の病気というのも、イジメのせいでも若干不登校気味になっていたことから流れた噂のようだ」

「そうなんですか？ 真田先輩は病院で山岸さんの適性を知ったんですよね」

「そうだが、別に重い病気じゃなくても病院に行くことはあるだろう」

「ああ……まあ、そつか。そうですね。ちよつとした風邪でも行く人は行きますよね」

「そういうことだ。山岸は助けてもらった恩を返したい的なことも言っていたな」

「んなの気にしなくてもいいのにな」

「マジメなんでしょ。というか、山岸さん。そんな風に不登校になるくらいだった相手のためってのもスゴイわよね。それも彼女の性格なんだろうけど」

風花の話になり、大型シャドウと戦った時のことを振り返りながらゆかりがそんな感想を口にする、順平も同意を示した。

「だよなー。そんな相手を助けるためにペルソナ覚醒させるっつーんだからサ。あーあ、初めの頃、混乱して真田さんに助けられたオレっちがスゲエしよぼく思えるぜ」

「それ言ったら私だって、弾が出ないこと分かってて、でもペルソナが出るだろうからって、暴走したらどうしようとか、ビビってたのはもはや黒歴史よ」

「……はあ」

「おいおい、何を落ち込むことがあるんだ。要はお前たちもそれを乗り越えて強くなっただけのことだろ」

話している内に落ち込みだしたゆかりと順平の姿に、明彦はフォローではなく本心からそう言った。

「強く……なってますかね？」

「なってるさ。当初とは比べるまでもない」

「……戦闘以外でも？」

「戦闘以外でもだ。キミたちは誰に称えられるでもないのに、誰かのために戦っているんだ。それは素直に誇っていいことだ」

「誰かのため……」

同じく話に乗った美鶴の賛辞に、しかしゆかりは自嘲気味に首を振った。

「……誰かのためなんかじゃないですよ。きつと」

「だがそれによって救われた人間がいるのも事実だ。無気力症の患者。知ってるか？」

今日に入って次々と意識を取り戻しているらしい。怪談にまでなつた三人の被害者もな。まあ彼女たちの症状は無気力症とはまた少し違つたんだがな」

「ほんとですか？」

「嘘を言っただろうする」

「そっか……私たちのしてることって、ほんとに意味のあることだったんですね」

「ああ、そうだ。安心したか？」

「そうですね……安心、したかもしれないです」

2009年6月10日(水)

その日、悠は二つのおかしな出来事に出くわすことになる。

どちらも湊に関することだ。

一つ目は今まさに目の前を通り過ぎて行った嬉々として人体模型を抱えて歩く湊だ。

これが夜なら七不思議にでも認定されそうな不可解な状況だった。

女子高生が人体模型を持ち運ぶ姿は不気味を通り越してかなりシニールだ。

さすがの悠も呆然と見送ってしまう程には。

「おや、鳴上。珍しいね。君がそんな風に突っ立っているのは。何かあったのかな？」

「大西先生……」

そんな悠に話しかけてきたのは化学を担当している女性教師の大西だった。

赤い細フレームの眼鏡を掛けており、理知的な雰囲気がある彼女は、確か図書委員の

長谷川沙織の担任だったはずだ。

「今、有里が人体模型を……」

「ああ、なるほど。廃棄する予定のものだったんだけどね。有里が欲しいというからあげたんだ。買うと意外と高いものだしね。しかし彼女も変わった趣味をしてるね」

「そうですね……」

「それとも、意外とそんな彼女が気になってしまったりするのかな？」

「え？」

「いや、君くらいの年齢なら青春してるのかと思ってるね。青春は若者の特権だよ。私くらいの年齢になると取り返しが付かないからね」

「先生も若く見えますよ」

「それはどうも。けど32歳だよ、私は。婚約者がいた時もあったが、それと別れてからは、もうそういうことはどうでもいいと思うようになってしまったよ」

「……そうですね」

「ははは、生徒に言うような話でもなかったかな。今の生活がイヤというわけではないが、後悔がまるでないわけでもない。大人つてのは大半がそういうものさ。頑張りなよ若者」

大西は教師として、悠のことを親身になって考えてくれているようだ……。

◇大西との間にほのかな絆の芽生えを感じる…

〓大西のことが少し分かった気がした…

【Rank up!! Rank2 法王・学園の教師】

〓“学園の教師”コミュのランクが“2”に上がった!

〓鳴上悠の失われた力“法王”属性のペルソナの一部分が解放された!

ペルソナ全書を見ると、“アンズー”が追加されている。

疾風無効に全体スキルである“マハガル”、同じく全体の光スキルである“マハンマ”などを持つペルソナだ。

光スキルは即死効果を持つので、それを弱点とするシャドウが相手ならば有用なペルソナだと思われた。

「——それで? 実際のところどうなんだ」

「どうと言われても……」

「言っておくが、タラシにはなるなよ。こういう忠告をすることはあまりないんだが、君は女子生徒の人気も高いようだし、何だかそうなりそうで心配だ。女は怖いぞ。ひとつ選択を間違えただけで修羅場に発展するからな」

「……」

「もしかしてすでに経験済みか? やれやれ、これは私もあと10歳若ければ危なかつ

たかもな」

修羅場の経験……そんなものはなかったはずだ。

いや、なかったはずだと信じたい。

「私じゃなくても教師はやめておけ。学生という立場の間は色々と面倒だぞ。それが良いなんて勘違いしている者も多いが実際は……」

大西のとてもタメになる忠告は続いている……。

なぜ人体模型を運ぶ湊を見かけただけでこうなるのだろうか。

「そうなんだよ。叶先生にもそんな噂があつてな。興味のない私みたいな者にとっては会議の時間が長引いてとても迷惑しているんだ……」

不思議だ。

巖戸台駅前……。

大西の小一時間に及ぶとてもタメになる忠告からようやく解放された悠は、珍しくも顔に若干の疲労を滲ませた状態で、その二つ目のおかしな光景を目撃することになった。

湊と一緒にいるのはホテルのドアマンのような青い服を身にまとった人物だ。

前にも一度一緒にいるのを見たことがある。

綺麗な完二——ではなくて、湊にテオと呼ばれているその人物は、エスカレーターの前でまるで子供のように得意気な表情をしていた。

二人はその後、何やら話しながら商店街のほうへと歩いていく。

テオが目立つ格好をしていることもあって、悠も何となくその姿を目で追ってしま

う。

どうやら二人はタコ焼きを買うことにしたようだ。

「正確には、タコも入っている……ということになりますね。いえ、割合から言えばほぼタコであるとも言えますが……」

風に乗って何やら不穏な会話が耳に入ってきた。

「しかし、アレを食材にするなど……そうか、だからほつぺたが落ちる……」

……アレ？

アレってなんだろうか。

タコ焼きにタコ以外の何かおかしな物が入っているのだろうか。

「うっ……」

なぜだか全然関係ないのに、悠の脳裏にカレーらしきものを筆頭とした料理と呼ぶのも憚られる数々の代物が浮かんだ。

それらは関わってはいけない代物だと記憶にない記憶が警告を発している。

だが、あのタコ焼きがそれほどの物なのだろうか。

前に美鶴と食べた時は何も問題がなかったように思えたが……いや、あるいは何も問題を感ぜられないことが問題なのか、悠は記憶に翻弄され一人、そんな意味不明な思考に陥りかけていた。

「ん？ あれ、鳴上くん」

「おや、貴方は……」

悠の思考を現実に取り戻したのは、その存在に気付いた渦中の二人だった。

「奇遇だねっ。鳴上くんも今帰り——って、なんか顔色悪い気がするけど大丈夫？」

「あ、ああ……大丈夫だ」

「なら、いいんだけど……あ、紹介するね。彼はテオ」

実際現実に取り戻されたことで、気持ちが悪くなり着いてきた悠が頷くと、湊は隣に視線を移し、テオという人物を紹介する。

「初めまして。『テオドア』と言います。テオとお呼び下さい。貴方の事情は何となくですが理解しています。以後お見知りおきを」

「ああ、よろしく。鳴上悠だ」

悠とテオが握手を交わしたのを見届けてから湊が口を開く。

「鳴上くんの事情って？」

「残念ながら、それを私の口から言うことはできません。……怒られますので。凄く」
「そうなの?」

「はい、もし話したことがバレるとそれは大変なことになります。主に私の身がですが」
「そ、そうなんだ……」

「危険が危ないというやつです」

言葉はおかしいが、それだけ大変なことになるのだろう。

悠にしても訊きたいことがないわけではなかったが、その空気を必要以上に察してしまったので触れないことにした。

「せっかくだから、鳴上千くんも一緒に行く?」

「一緒に?」

「そうして頂けると助かります。私、まだまだ知りたいことがありますので」

「分かった」

テオ本人がそう言うならばと、悠もそのおかしな光景の一部となって、テオの望み通りに巖戸台駅前商店街の案内をした。

～テオと知り合いになった。

2009年6月11日(木)

夜……寮の作戦室。

仲間たちの他に理事長の幾月と山岸風花が座っている。

風花の顔色はタルタロスで会った時よりずっと良くなっており、もう大丈夫であるということが分かった。

「話は聞いているよ。山岸風花だったね」

「は、はい」

風花はこの場に理事長がいることに緊張しているようだ。

幾月の口から今回の顛末が少しばかり語られ、そしてキリのいいところで美鶴が口を開いた。

「山岸、ペルソナやシャドウという存在については、これまでの話である程度理解してもらえたと思う。さて、そこで本題だ。君の能力は、今の私たちに必要なものだ。ぜひ、力を貸して欲しい」

「それって……私が、先輩たちの仲間に……？」

「そうだ」

「桐条先輩……」

「俺からも、頼む」

「真田先輩……」

「あのさ、別に強制じゃないから、無理して今決めなくても……」

ゆかりが風花を気遣うようにその口にするが――。

「私、やります。……やらせて下さい!」

風花は一瞬だけ伏せた目をまっすぐに見開くとキツパリとその言葉を口にした。

「え、即答? いいの? 一緒に戦うなら、この察にも入ってもらおうことになるけど

……」

「それは、たぶん大丈夫。どうせ家には私の居場所は無いし……」

「……そう」

それは風花の家庭の事情を匂わす言葉だったが、この場にいる者はそういう状況に理解のある者ばかりだったので、それ以上この状況で突っ込む者はいなかった。

「ありがとう。協力、心から感謝する。ただ、こういう特別な事情だ。ご両親への説明は学園が上手く計らおう」

「はい、ありがとうございませす」

美鶴が幾月に視線を向けると、幾月は了承したよと頷いた。

理事長という立場からS・E・E・Sを支える幾月にとって、そういうやり取りは手の物ということなのだろう。

「……いいんですか? こんな簡単に人を巻き込んで行って」

風花は戦う人間に見えない、無理して戦う理由がないとも考えているのか、ゆかりは風花を仲間にすることに少し否定的なようだ。

「あの、大丈夫ですから、私……」

「大丈夫って……結構危ないこと多いよ」

「それは、分かっているつもり、です。……でも、私も頑張りたいつていうか……同じ学年の女の子が二人もいるから、その……嬉しいっていうか……」

風花がはにかみながらそう言うと、ゆかりは言葉を詰まらせた。

「お、おお……癒し系だ。うちの女性陣に今まで居なかつたタイプだ。うちの女性陣は強気なのぼつかだからなー。はいはい！ オレっちも山岸の入隊に賛成しまーす！」

「うっさいバカ！」

「なー、悠だつて賛成だよなー？」

「え、ああ……そうだな」

順平の言葉にみんなの視線が集まる中で、悠も結構あっさり同意する。

タルタロス探索の危険性などは十分に承知している悠だったが、仲間を増やすことには寛容というか、何かあつても自分たちならどうにかできると肯定的に考えていた。

それに探知能力の必要性も感じていたからの判断だ。

「あ、ありがとう。鳴上くん。私、頑張りますね」

「仲良くしようねー」

「あ、うん！ 有里さん」

「湊でいいよー。私も風花って呼んでいい？」

「う、うん。ありがとう。み、湊ちゃん」

悠も同意して話はまとまったと思ったのか、湊も親しげに風花に話しかける。

その様子にはこれはもう何を言ってもダメだなーとゆかりもその状況を受け入れた。

「まあ……分かんないこととかなんでも聞いてくれて良いからさ。それと……私も名前
でいいよ」

「あ、ありがとう、ゆかりちゃん。これからよろしくね」

「うん。……よろしく、風花」

こうして、S・E・E・Sに新たなメンバーが加わることになった。

▽ナビが桐条美鶴から山岸風花に変更された！

2009年6月12日(金)

今日から風花が学園に復帰するようだ。

朝のHR前、少し気になった悠が、自分の荷物を置いてから席を立つと、同じく湊とゆかり、そして今回は空気を察した順平も席を立ち、隣の2―Eの教室へと足を向けた。

「つと……」

しかし2—Fの教室を出ようとしてすぐに、2—Eの教室の前で躊躇いからか足を止めている風花の姿を見つけて、四人は教室を出ないでそのドアの陰に隠れるようにして風花の様子を窺うことにした。

「……ねえ、背中押してあげたほうがいいのかな？」

「まだ早いよ」

「有里の言う通りだ。最初の一步は山岸が踏み出さないとダメだと思う」

「だな。それが失敗した場合だけだろ。オレたちの出番はさ」

四人がそうして見守る前で、風花は意を決して教室の中に入っていく。

風花が入ると、2—Eの喧騒は一瞬止んで、続いて「あ、ユレーイの子だ」なんて囁きが聞こえ始める。

「むう……」

「我慢だ。彼女の結果を見るまでは」

今にも突入しそうな湊を、問題の彼女——森山夏妃が歩いて来るのを見た悠がそちらを示して宥める。

「風花いるっ？」

「森山さん……」

「風花、あんた……寮に入ったんだって？」

「う、うん。正式には荷物を持ってきてこれから入るんだけど……」

「あいかわらず、くつらいね、あんた。……でも、何かあつたら相談しなよ。いつでも……さ。何なら引越しも手伝うから」

照れ隠しなのか夏妃は視線を逸らしながらもそう口にした。

あの時の涙は、雰囲気流された偽物ではなかったということだろう。

「森山さん……」

「カッタいなー、その呼び方。……ナツキでいいから」

そこまで見届けて、最初に順平が動いた。

帽子のつばを弄ってから自分の席へと戻っていく。

「へへっ、良かったよな。これならオレらが気にしなくても大丈夫だろ」

「そうだね。彼女、発言力もあるだろうから」

「いや、ゆかりツチ……。そういうリアル思考じゃなくてさ。もつと素直に友情が誕生した瞬間を祝えないんかよ？」

「何よ人を冷血女みたいに。大事なことでしょ。この先も陰口が続いたら意味ないじゃない」

「そりゃ分かるけども……」

「混ざりたい……」

「湊は湊でウズウズしてんなよ。空気読めって」

「がーん、その言葉を順平に言われるなんて」

「いやいや、オレっち、結構　空気読むほうだろ？　……読むほう、だよな？」

「そつとしておこう……」

「ちよっ?!」

2009年6月13日（土）

影時間、タルタロスのエントランス……。

「承知の通り、これからは山岸がサポートに回り、私は探索メンバーに加わることになる」

「つまり桐条先輩は今日から私たちと一緒に戦うってことですよね？」

美鶴の言葉にゆかりが確認するように尋ねる。

「そうだ。それがどうかしたか？」

そしてその肯定の言葉を得ると、湊に目配せして頷いた。

その目配せの意味を知らない悠でも、そこには何かの意図を感じずにはいられない。

「いえ、ただそれなら装備が必要ですよね。探索用の」

「何を言っている？ 装備なら万全だ」

「そうじゃなくてですね……」

「？」

「これです!!!」

瞬間、タルタロスに激震が奔る。

「——なっ……!!?! ま、まさか、それを私に着ろというのか!!?」

湊が手にしているのは例によつてのハイレグアーマーだった。

「私は着ました」

「くっ……だがっ!」

美鶴は必死に抵抗している。

だが、かつてゆかりのそれを許してしまった時点で、その抵抗は無意味なものとなつてしまっていた。

結果として——。

「……………」

「ゆ、悠。なんか言えよ……」

「ああ……女帝、いや……女王様の誕生だ……!」

「ヤベエ……これはヤベエ……ゆかりツチのもアレだったけど……桐条先輩はなんつー

か、ハマリ役過ぎるって……!」

珍しく頬を染めながらもその場に佇む美鶴のその姿に、悠と順平の二人は身体に奔る慄きを隠せない。

そして視線も逸らせない。

「じゃあ、今回の探索メンバーは……」

「ハイ! オレっち今回は留守番してます! その装備の桐条先輩のそばで平静に戦える気がしないっス!」

「なっ……伊織!」

「なら俺も……」

「鳴上くんはダメだよ。新しい階層に行くんだから、ペルソナチェンジができる鳴上くんは居てくれないと」

順平に便乗しようとした悠だったが、それは湊によって止められた。

言ってることは正論なのだが、顔が笑っている気かするのは気のせいだろうか。

「俺は行くぞ。確かに美鶴は突飛な格好をしているが、今更気にするほどのことじゃないだろう。水着で戦っているのとそう変わらん」

「真田さん、水着で戦う状況って結構異常っス」

「ん、そうか?」

明彦は美鶴のそんな姿を見ても平静を保っているようだ。

その点に関しては、さすがとしか言いようがない。

だが、いくら明彦が平静を保つていようと、当の美鶴は平静じゃなかった。

「……明彦はダメだ」

「何故だ！」

「私にも慣れというものが必要なんだ。鳴上は能力的に仕方がないとしても、今回に限っては明彦より岳羽のほうがよほどマジだ」

「だが！」

「うるさい！ これ以上ゴネるようなら処刑するぞ！」

「なっ……」

美鶴の目はマジだった。

ぐるぐる渦巻いて混乱してはいるのだろうが、マジ過ぎるほどにマジなのは伝わってきた。

そのマジっぷりには明彦も退かざるを得ないほどだった。

「私はいいですよ。そこまで非情じゃないっていうか、気持ちは分かり過ぎるほどに分かっていますから」

「岳羽……。今まですまなかった。私はこの状況を甘く見ていたようだ」

「いいんですよ、先輩。私たちは同じ苦難を経験したいわば同志です……!」

「岳羽!」

「桐条先輩!」

ゆかりと美鶴。

何だか今まで壁があつた二人の心の距離が一気に近付いていた。

この効果を狙つての装備指示だったら、湊は歴史に名を残すレベルの策士なのかもしれない。

もちろん、まことに残念ながらそんなことは欠片も無く、ただのおふざけ趣味の延長線上に巻き込まれているだけなのだが。

「私、ナビでよかつた……」

ナビであり直接的な探索はしない、ある意味で一人カヤの外の風花は、そんな喧騒を若干引いた様子で眺めながら、心からそう呟いていた。

その後——ある意味“ヤケクソ”状態の美鶴は、47Fに現れた番人タイプで、氷結無効の……本来なら相性の悪い“黄金蟲”を、何故かクリティカルを連発することで圧倒した。

しかしそれだけでは終わらず、59Fの番人タイプで、弱点がなく、強力な魔法スキ

ルなども使ってくる強敵“不屈の騎士”をもほぼ一騎討ちと言える状態で倒した。不屈の騎士を屈服させる様はまさに女王様のそれであったと言えるだろう……。ただ、それ以上は美鶴本人も、それを見ている周囲も限界であったためにその日は探索を終えることにした。

——…影時間が終わる。

6月14日（日）～21日（日）：未知との遭遇

2009年6月14日（日）

「あ、鳴上千ん。どこか出かけるの？」

休日なので、予定を決めた悠が寮の外に出かけようと足を向けると、昨日から正式に入寮した風花に声を掛けられた。

「釣りだ」

「釣り……？ そうなんだ。頑張ってるね」

悠が持っていた釣り道具を示してみせると、風花は少し意外そうな顔をしたものの、微笑んで激励してくれた。

「任せろ。大物を釣ってくる」

風花の激励を背に、悠は釣りスポットへと向かった。

同日　―昼―【青ひげファーマーシー】

「ほお……これまた中々の釣果だな」

「当然です」

「はっはっはっ！ 当然か、そりゃあいい！」

釣りを終えた悠は釣り仲間である青ひげ店主に今日の釣果を見せにきた。

青ひげ店主はそんな悠の言葉に豪快に笑うと、バシバシとその背中を叩いて労う。

「だがな。悠。この程度じゃまだまだ釣りを極めたとは言えないぜ」

「俺に足りないものがある？」

「いや、そうじゃねえ。前にも言ったろ。伝説さ。こここの海には海ヌシ様つてのがあるんだ。そいつを釣った上で……ある条件を満たした者こそが、真にこここの海を制圧した釣りマスターだ」

「海ヌシ様……」

青ひげ店主の言葉に悠の頭に、かつての激闘の日々が蘇った。

「場所が違えば、別のヌシがいる……！ 俺の敵はアイツだけじゃなかったということか……！」

「おお、やる気だな。悠」

「……フツ、戦いの始まりだ。ヌシ釣りに必要なのは……特別な虫」

「ふむ……なるほど。ただ者じゃねえとは思っていたが、他の地域のヌシとの交戦経験があったのか。……よし！ なら、お前にはアレをやるう！」

そう言つて店の奥に引つ込んだ青ひげ店主は、よく手入れされた年季の入った虫取り

網を手に戻ってきた。

∨ 虫取り網を手に入れた。

「これは……ありがとうございます！」

「いいってことよ。この辺りの狙い目はやはり長鳴神社だな。暇ができたら行ってみな」

青ひげ店主に期待されているようだ……。

∨ 青ひげ店主のことがまた少し分かった気がする…

【Rank up!! Rank3 太陽・釣り仲間】

∨ “釣り仲間” コミュのランクが “3” に上がった！

∨ 鳴上悠の失われた力 “太陽” 属性のペルソナの一部が解放された！

ペルソナ全書を見ると、しかし、特に変わったところはない。

∨ どうやらこのアルカナにLV21〜LV30までのペルソナは存在していないようだ。

だが、次に繋がる一步であることは間違いない。

∨ シ釣りと同じく、事前準備の段階ということだろう。

「お前なら……いつかきつと……」

青ひげ店主の眩きを背に寮へと帰った……。

寮に戻ると順平が何やら凹んでいた。

何かあったのだろうか……？

2009年6月15日(月)

「お、鳴上。お前、今日は部活どーすんだ？」

「ああ、今日は生徒会に顔を出そうと思っっているんだ」

廊下を歩いていた悠は一志に声を掛けられた。

一志の部活への誘いを、今日は生徒会に出ようと思っただけのために軽く首を振って断る。

一志は少し残念そうな顔をしたが、すぐに気を取り直したのか笑顔を向けてきた。

「何だそうかよ……まあ、お前は部活に出てなくても特別な鍛え方とやらで鍛えてるみたいだから心配はしてねえけどよ」

「すまない。出られる時はちゃんと出るから」

「お前が色々忙しいのは知ってるって。無理はすんなよ」

「それは俺の台詞じゃないか？」

「ははっ、そういやそうだ」

軽く肩を叩いてから去って行く一志を見送って、悠は言葉通りに生徒会室へと足を向けた。

生徒会——というかその枠組みの中の風紀委員は、例のタバコを吸っている学生というのを未だに特定できていないらしく、秀利もまた見回りに出るということだったので、悠もそれを手伝うことにした。

「別にわざわざ君に手伝って貰わなくても、僕だけで問題ないのだが……それとも、僕の能力が信用できないか？」

「そんなことは……」

「フ、意地の悪い言い方をしたな。だが君の言いたいこともわかる。僕がこの件を頼まれたのが6月3日だ。休日を挟んだとはいえ、10日以上の日数を無駄にしていたことになる」

「目星はついているのか？」

「ああ。それを今から問い詰めに行くところだ。上手く行けばこれでこの話は終わる」

秀利は自信がありそうだ。

とりあえず悠はそのまま任せてみることにした。

「だあかあら! ショーコ持つて来いつての! ショーコ!」

しかしその判断は間違つていたようだ。

秀利の有無を言わせない感じの断定発言にキレた男子生徒が、今にも秀利に殴り掛かりそうだったので、さすがに悠は間に入る。

悠の取り成しに、男子生徒は悪態を吐きながらその場を去つていった。

「……なぜ止めた。彼が公園での喫煙を咎められたことにより男性を殴つた容疑で、警察に任意同行を求められたというのは事実だった」

「それが事実だったとしても、それを理由にもうそういうことは止めていたかもしれない」

「君にはそう見えたか? 君は寛容だな。……いや、確かにそういう可能性もあるか。……鳴上君。僕が目指すのは絶対的な秩序だ。不正を正し、間違っているのだということとを気づかせ、更生に導く」

「その考えは尊いものだと思う」

「そうだろう。……みんなの評判は僕も知っている。こうやって口うるさく言う人間が他者に好かれることはそうないだろう。だが間違いがまだ許されているのは学生だからだ。社会に出れば弱者は押し潰されて終わるだけだ。僕はその前に止めてやりたい」

「……大変だな」

「だからこそやりがいがある。もちろん、僕の発言力を上げるためでもあるが、この気持ちの正義だ。僕は上を目指す人間だ。上に立つ人間は、正しくなければならぬし、揺らいではならない。だから僕も揺らがないように生きるのさ」

秀利の捜査には強引な部分が見受けられたが、それでもその信念は確かなものだった。

悠も難しい問題だと思う。

間違いを放置していれば取り返しのつかないことが起こる可能性は確かにある。

だからと、それを探すのに躍起になって周囲と衝突していても、人は離れ、立場は悪くなっていくだろう。

「これは孤独ではなく孤高だ。それに——いまは君や有里君の存在に、救われている部分もある。君たちは優秀だからな。これからも力を貸してくれ」

「秀利のことがまた少し分かった気がする…」

「Rank up!! Rank 4 皇帝・生徒会」

「生徒会」 コミュのランクが「4」に上がった！

「鳴上悠の失われた力『皇帝』属性のペルソナの一部が解放された！

ペルソナ全書を見ると、影が二つ少しくつきりとした輪郭になっただけだった。

このLVには二体のペルソナが存在しているようだが。

今の悠にこのLV、このランクのペルソナを制御できるだけの力はまだない……。

「もちろんだ」

悠が頷くと、秀利は少しだけ相好を崩した。

だがすぐにキリリと気を引き締め直すと、再び生徒会の活動に戻っていく。

悠も秀利と他生徒の緩衝材として、その活動を手伝った……。

2009年6月16日(火)

放課後……悠は職員室前で出会った美鶴を誘い、一緒に下校することにした。

二度目ということで美鶴も動揺することなく誘いに乗り、二人してモノレールに乗ったところで美鶴が思い出したようにその話題を口にした。

「そういうば鳴上、前に君に頼まれていた件だが」

「頼みというと……」

「ほら、このモノレールに関することさ」

悠が頼んだ件というのは、前に大型シャドウが出現した影響で、モノレール深夜のオーバーランと新聞に小さく載ることになった事件。

それに関して、何の罪もないのにそういう事件を起こしたとして、処分されることに

なった運転士などの、その後に関するフォローをして貰えないかという相談のことだ。

「あ、あれですか。どうなりました？」

「ああ。キミの進言通り、桐条のほうで保障させた。あとは本人次第だが、再就職先も斡旋したので、路頭に迷うということはないだろう」

「そうですか。ありがとうございます」

「お礼を言われることじゃないさ。君に言われるまでそういう後始末は桐条に任せきりだったからな。それがあくまで最低限のものである可能性を考えなかつた自分の浅慮さを恥じるばかりだ」

「そんな。俺は自分の望みを言うだけで、何をしたわけでもないです」

「それを言うなら私もそうさ。結局のところ桐条の力だ」

美鶴は自嘲気味にそれだけ言うのと、視線をモノレールの窓から見える海へと向けた。

「……難しい部分ですけど、それが桐条先輩なんだと思います」

「桐条の威光を振りかざすのがか？」

「はい。俺は桐条先輩がそういう立場でなかったとしても、たぶん接し方はそう変わらないと思いますけど、今の桐条先輩だからこそ、できることがあって、そのせいで、できないことを考えるよりも、そのおかげで、できることをしたほうが俺はいいと思います」

「この立場だからできること……」

「例えばですけど、桐条先輩がそうでなかったら、俺たちも今のような関係ではいられなかったかもしれません。俺たちが出会えたこと。それが桐条先輩が桐条という家の人間だったおかげだと思えば、その立場も少しは好きになれませんか？」

「だが……私がそうでなければ、君たちはそもそも戦う必要がなかったかもしれない。私は君たちに酷い迷惑を掛けているんだ」

「迷惑なんかじゃない。戦う理由はそれぞれです。だから俺が戦うのも桐条先輩のせいじゃない。俺は、桐条先輩のおかげで頼れる仲間に出会えただけで、戦うのはいつだって俺の意思です」

「そうか……」

会話するに際して悠に向けていた視線を再び窓の外に向けた美鶴は、海面に光の反射を見たのか、眩しそうに目を細め、それだけ呟くのだった。

▽美鶴のことがまた少し分かった気がする…

【Rank up!! Rank 2 女帝・桐条美鶴】

▽“桐条美鶴” コミュのランクが“2”に上がった！

▽鳴上悠の失われた力“女帝”属性のペルソナの一部が解放された！

ペルソナ全書を見ると、“ヤクシニー”が追加されている。

氷結無効に全体スキルである「マハブフ」、上位の氷結スキル「ブフーラ」と氷結属性に特化したペルソナだ。

氷結を弱点とするシャドウが相手ならば非常に有用なペルソナとなるだろう。

「……鳴上。君と話すとき色々気づかされることが多い。私のほうが年上なのに不甲斐なく思うかもしれないが、これからもよろしく頼む」

「桐条先輩を不甲斐なく思うことはないですよ。俺のほうこそお願いします」

「もちろんだ。……しかしやはり、迷惑を掛けている気がする。何かお礼でもできればいいんだがな」

美鶴はそう言うと、何やらブツブツと自分の思考に沈み、それは寮に戻るまで続いた……。

2009年6月17日（水）

文化部が再募集をかけているらしい。

再募集をかけている文化部は、写真、美術、管弦楽の三つだった。

……どれに入るべきかと考えて、そういえば悠は自分に楽器経験があることを思い出した。

確かトランペットとベースの経験があったはずだ。

ベースはともかく、トランペットが吹けるなら管弦楽部に入ってもいいだろう。悠は管弦楽部に入ることにした。

管弦楽部には風花も所属していた。

悠がその姿に気付くと、小さく手を振ってくる。

「えつと……入部希望の鳴上くん……で合ってるよね？」

「はい」

「よかった。僕は一応この部の部長ってことになってる3年の平賀慶介です。よろしく」

「よろしくお願いします」

慶介はアンダーリムの眼鏡に、クセ毛なのか軽くウェーブがかった髪型の温和そうな男子だった。

そんな慶介が部長の部だからか、部内にはアットホームな空気が流れている。

今はもう解決したこととはいっても、風花が変わらずに所属している部活ということからも、イジメや争いとは無縁の場所だとわかる。

「ところで鳴上くんは管弦楽できる人？ あ、初心者でも全然問題ないよ？ うちの部

はプロ志望とかそういうのじゃないし、部長の僕だって初心者みたいなものだから」

「トランペットは経験があります」

「そう！ それはいいね。経験があるならきつとうちの部にもすぐに馴染めるよ」

慶介から歓迎されているようだ……。

管弦楽部に入り、部員たちと知り合いになった。

▽ 慶介との間にほのかな絆の芽生えを感じる…

▽ 慶介のことが少し分かった気がした…

我は汝…、汝は我…汝、新たななる絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

“運命”のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん…

▽ “運命”属性のコミュニティである“文化部”のコミュを手に入れた！

▽ 鳴上悠の失われた力“運命”属性のペルソナの一部が解放された！

ペルソナ全書を見ると、絵柄が追加されている。

だが、その絵柄は影になってはつきりしない。

このアルカナはこのランクで追加されるペルソナは居ないようだ。

「うちの部の活動は、火、水、木曜日だからね。もちろん自主練習とかはしてもいいけど、基本的には活動日も自由参加だから。あ、何か分からないことがあったら、僕か……山岸さんにも聞いてね。知り合いなんですよ？」

風花に話を聞いていたのか、それとも意外と目敏いところがあるのか、慶介は穏やか

に微笑んでいる。

その後、部活が終わる時間まで見学をしつつ、ちよつとだけ練習に参加したりした……。

寮への帰り道……。

同じ部活である以上帰る時間も一緒にになり、悠は風花と一緒に帰ることになった。

風花はどこかそわそわしているようだ。

「どうしたんだ？」

「あ、ううん。どうっていうか……誰かと一緒について言うのも久しぶりな感じだったのに、男子と一緒にってなると未知の体験で……」

「有里や岳羽とは一緒に帰ったりしたんだろ？」

「うん。二人とも気を遣ってくれて……優しいよね」

「優しいというか……それが山岸が勇気を出した結果で、勝ち取った日常だってことだ」

「そ、そうなのかな」

「そうだ」

「そうなんだ……。世界って優しいんですね。いままで知らなかった」

嬉しそうにはにかむ風花の姿に、順平の言う風花は癒し系という言葉に深く同意する

悠。

「だから守りたいんだ」

「……」

「ちよつと……クサすぎたか」

「ふふ、ちよつとだけ。だけど、私もそう思うよ。私に目覚めたこの力、その為に使いたい」

2009年6月18日（木）

『あれ……待ってください。タルタロス内に私たち以外の人間の反応があります！』

「えっ!!?」

「もしかしてまた、山岸の時みたいなきっかけが起きているのか?」

『……そうみたいです。たぶんですけど意識を失ってます。ペルソナの反応もありません』

影時間、タルタロスの探索を開始して、少ししたところで風花が通信越しに声を上げた。

理由は通信の通りで、S・E・E・Sのメンバー以外の誰かの反応がタルタロス内に存在したからだった。

「やっぱり……」

「やっぱり?」

「あ、ううん。交番で黒沢さんが私たち絡みかもしれないって、失踪者”の話をしてくれたんだけど……」

「俺たち絡みって?」

「うん。なんか一緒にいたはずの人間が気付いたらいなくなつてて連絡も取れないからって相談に来た人がいたみたいで」

「なるほど。それって時間は?」

「正確には分からないけど、深夜のことみたい。だから私も気になつてて」

湊がその時の話を思い出しながら説明する。

失踪者……:前回の大型シャドウの時に起きたような事件が、それとは関係なくまた起きたということだ。

これは偶然的の出来事なのか、それともシャドウによる被害が拡大し始めているということなのか。

「そうか。なら山岸が見つけた反応は、その人の可能性が高そうだな」

「助けないと!」

「ああ、当然だな。山岸、その反応はどこにあるんだ?」

『すみません。ちょっとはつきりとは……今の最高到達階層よりは下で……40Fよりは上くらいかと……』

「今の最高到達って何階だ？」

「59Fの番人を倒したところだな」

「あ、そっか。桐条先輩のアレ以来だっけか」

「犠牲は無駄じゃなかったです、桐条先輩……！ おかげでいま、私、普通の装備で探索してるー！」

ゆかりの言葉通り、今回の探索パーティーである2年生組の装備は普通だった。

ゆかりは学生服の下に着れる程度の装備で探索できる現状に猛烈に感動しているようだ。

「そういや、今回はなんで普通の装備なんだ？」

「うん、桐条先輩の装備姿も見れたし、もういいかなって。ちょっと飽きちゃった」

「なるほど。飽きられたのか、ゆかりツチは」

「その言い方やめてくれる!!？」

順平の疑問で、感動に水を差されて、キレるゆかり。

そしてそれを良いように受け止めることに定評のある湊はにっこりと微笑んだ。

「大丈夫！ またすぐに新しい装備を見つげるから！」

「大丈夫じゃないし、必要ないっての！ やめて、そこだけは本当に頑張らないで湊！」

「えー……あ、押すな押す的な？」

「違うから！」

どう言えばこの娘に伝わるの……と、助けを求めるゆかりの視線を、悠は今回はマジメにスルー。

「そういう話は後にしよう。失踪者を救出してからだ」

「あ、ゴメン」

「「まったく、ゆかり(ツチ)は……」」

「……あ、ゴメン。ちよつと、二人を裏でシメて来てからでいいかな？」

「じ、ジョーダンだって。ゆかりツチ。スマイルスマイル」

「——さあ、失踪者を助けに行くよ！ やる気ないなら、あり余りすぎて、若干面倒クサイ感じになってた真田先輩と代わってもらおうからね！」

そうして、有里湊の華麗なる転身によって、本題である失踪者の救出に本格的に挑むことになったのだが。

そこはそれ。

特に大型シャドウが待ち構えている訳でもなかったもので、盛り上がる的な山もないままにあつさり45Fで発見することに成功。

命に別状もなく、失踪者・吉本絢子の救出は終了した。
——……影時間が終わる。

2009年6月19日（金）

放課後、バイトなどをこなしてから寮に戻ると、ラウンジに風花が居た。

「あ、鳴上くん」

「山岸。何してるんだ？」

「べつに何って訳じゃないけど……あ、そうだ！ 鳴上くんってどんな料理が好き？」

「料理？」

「えっと……実は私ね、料理部って言うのを立ち上げて、昨日は湊ちゃんも入ってくれたんだけど、それで今後どんな料理に挑戦していくべきかなーって考えてて……でね、せっかくだから、寮のみんなにも食べてもらいたいかなくて」

「なるほど。いいんじゃないか。——そうだ。そういう事ならちようどいい。先月に通販で間違えて女性物のエプロンを買ってしまったから、あとで渡そう。よければ貰ってくれ」

「え、いいの？ ありがとう！」

風花は喜んでいる。

この笑顔を見ると多機能エプロンを買ったのも失敗という訳でもなかったようだ。

「あ、それで鳴上千んの好きな料理なんだけど……」

「そうだな……俺は特に好き嫌いはないが、初めは簡単な料理に挑戦するのが良いと思う」

「簡単……って言うと、カレーとか？」

瞬間、猛烈な悪寒。

悠は自分が何か取り返しのつかない過ちを犯してしまったかのような感覚に襲われたが、高ステータスが幸いして、なんとか表面上は取り繕えた。

「……」

いったい何なのだろうか、この恐怖を伴ったような不快感は。

悠はまだ知らない——かつて未来で悠がベルベットルームに直行させられた、光でも闇でもない、万能属性の即死攻撃「物体X」。

目の前にいる山岸風花という、見た目儂げで可憐な少女が、それをも超えるかもしれない「オラクルクッキング」の使い手であるという事実を。

悠はまだ……知らないのである。

鳴上悠——未来に幸あれ。

∨風花との間にほのかな絆の芽生えを感じる…

〽風花のことが少し分かった気がした：

我は汝…、汝は我…汝、新たなる絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

“女教皇”のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん：

〽“女教皇”属性のコミュニティである“山岸風花”のコミュを手に入れた！

〽鳴上悠の失われた力“女教皇”属性のペルソナの一部が解放された！

ペルソナ全書を見ると、絵柄が追加されている。

だが、その絵柄は影になってはつきりしない。

このアルカナはこのランクで追加されるペルソナはいないようだ。

「あの、鳴上千くん？」

「……はっ！」

コミュを手に入れたからトリップしたのか、トリップしたからコミュを手に入れたのか。

それは悠自身にも分からなかったが、ただ一つ確かなことは、この日から悠は、ある意味でシャドウと戦う以上の死闘を繰り広げなければならなくなったという事実だろう。

だがそれは決して孤独な戦いではない。

なぜなら犠牲者はもう一人、すでに名前が挙がっている有里湊。

そう、これは放っておけば世界を混沌へと貶める

未知のパンデミックに挑む少年と少女の物語である。……違う。

「そういえば寮の屋上にやさしい畑ってあるよね？」

「……あ、ああ。俺が管理してる」

「あ、そうなんだ！ だったら、お野菜ができたら私にも少し分けてもらえないかな？

きつと美味しく料理して返すから。えっと、食べてくれるよね？」

「……………ああ、もちろん」

良い笑顔で頷く悠。

しかしその胸中はやはり複雑で、丹精込めて育てた愛すべき野菜たちが、見るも無残に蹂躪される予感に、心の中でだけそっと涙を流し、その場から静かに立ち去ったのだった……。

2009年6月20日(土)

「あ、鳴上千くん。今、時間あるかな……？」

「ああ。どうした？」

放課後になって、校内を色々と周り、知り合いなどと会話をしていると風花が話しかけてきた。

「えつとね。昨日話したでしょ。料理部。今日も湊ちゃんと活動して、作った料理をお弁当にまとめてみたから、味見してくれないかなって」

「……」

「鳴上くん？」

「ああ、わかった……」

なぜだか、分からない。

なぜだかは分からなかったが、悠はとてつもなくイヤな予感に襲われ、死地に赴くような覚悟を決めた。

何よりも、限界突破してしまった勇気が、撤退を許さない……！

月光館学園屋上……梅雨時ではあるが、雨の気配もなく、夕暮れに染まり始めた空と、潮風の匂いが、心地よさを感じさせる。

だというのに、なぜ自分は死刑を宣告された囚人のような心持ちになっているのだろうか、屋上に備え付けられたベンチに風花と並んで座りながら、悠は悟りを開き始める。

「それで、これなんだけど……」

風花から手作り弁当を渡された。

風花のイメージに合った、女の子らしく可愛らしい弁当箱だ……大きさに量もそれほどではないだろう。

「イケるのか……?」

悠は弁当箱の蓋を開ける。

……食材が混沌と混じり合っている。

そつと蓋を閉じて、帰りたい衝動に駆られたが、風花が不安そうな、それでいて期待を宿した視線を隣から送ってくる。

「闇無効」に「食いしぼり」……悠は自分がちゃんとイザナギを宿していることを確認してから、箸を手を取った。

「あのね。見た目はあまりよくないけど、味は大丈夫なはずだから。……湊ちゃんにも味見してもらってあるし」

「……有里はどうしたんだ?」

「え? ちょっと、用事があるらしいからその後には別れたよ。でも最初にしては上出来だって言ってくれて」

美味しいとは言っていないんだなと……思いながらも、見事その状況を切り抜けた湊に対して、悠は心の中で敬礼を送る。

悠の中において湊の地位が二階級特進した。

「それで、せっかくだから、鳴上くんにも食べさせてあげたらって……」

「(あ、有里オーーツ!!?)」

信頼していた上官は女スパイであつた……もはや、信じられるものはただひとつ！
そう、勇気だけだ！

ガガツと悠は勢いよく料理をかき込んだ。

「……」

「……………鳴上くん？」

そこから少しの間、悠の記憶はない。

ただ、後から風花に聞いた話によると、黙々と、ただ黙々と料理を食べていたらしい。完食してくれて嬉しかったとも言っていた。

ちなみにその影響なのかコミュも上がった。

だが、繰り返しになるが記憶はない。

◇ 風花のことがまた少し分かった気がする……？

〔Rank up!! Rank 2 女教皇・山岸風花〕

◇ “山岸風花” コミュのランクが “2” に上がった！

◇ 鳴上悠の失われた力 “女教皇” 属性のペルソナの一部分が解放された！

ペルソナ全書を見ると、“サキミタマ” と “サラスヴァテイ” が追加されていた。

「どちらも回復タイプなのかメディアを覚えたりしていたが、今はもう何も考えられない……。」

「私は汝と、自分自身であるところの、ペルソナの回復スキルで治る気もしない……。」

「……そうだ、こういう時こそ保健室に行こう。」

意識を取り戻した悠は、2―Fの、自分の席に座っていた。

校内で一番長い時間居る、安心できる場所に、無意識に辿り着いたのかもしれない。

悠は歪む視界とふらつく足取りで、よろよろと校内を歩き、ノックをして、保健室の

ドアを開けた。

「保健室に何か用かね? ヒヒヒ」

中に待機していた居た保険医は、無精ひげに、よれよれの白衣と、清潔や健康とは無縁そうな顔色の悪い黒縁のメガネを掛けた男だった。

何となく来た場所を間違えた気になってしまった悠だが、人を見かけで判断するのは良くないと思ひ直す。

「おやまあー、傷かウイルスか呪いか恋か。随分と調子悪そうですねえ。これは……再び出番ですねえ。イヒヒヒヒヒヒヒヒ」

「ふ、再び?」

「ええ。先程も一人女子生徒がね。特徴的なヘアピンの留め方をした娘でしたが。お

や、その反応、ひよつとして友達かな？」

「はいまあ……」

保険医の言う女子生徒というのは、まず間違ひなく湊のことだろう。

湊は一足先に悠の往くべき道を進んでいるようだ。

「それは奇遇。——さて、取り出しましたるこの秘薬。ニガヨモギにドクニンジン、ヒヨスにナツメにエトセトラエトセトラ……オロしてコネテウサギの手。白山の社氏もビックリの大吟醸。たちどころにアナタの病気を治してみせますよ」

そのエトセトラの内容が知りたい。……いや、知りたくない。

「さあ、飲みなさい……飲むんだー」

保険医の差し出した薬から強烈な臭いが漂ってくる……。

「思い切つて飲みますか？」

↓飲む

飲まない

「……フウー、上出来です。先程のお嬢さんに続いて二人目だ。効くか効かぬかはわかりませんが確かなことが一つだけ。アナタの勇気に乾杯です。……飲んだ後でアレです」

確かに勇気のいる出来事だった。

だけど、ハッキリとこれだけは言える。

風花の弁当を食べるよりはマシだ。

……というか、本当に調子が良くなってきた気がする。

〽悠の調子が絶好調になった!

「あれ……? なんだか調子が良くなってきました。ありがとうございます」

「それは素晴らしい。先程のお嬢さんはそこまで劇的な反応を見せなかったのですが……アナタとは相性が良かったのかもしれない。アナタ、こういう経験はありませんか。冷蔵庫に入っていた何かの草、あるいは、見たことのないキノコを食べる、とか」
「え……な、ないと思いますけど……」

普通に考えてあり得ないことなのに、なぜかちよつと考えてしまった自分に悠は内心で困惑する。

「ヒヒ。その反応だけで充分です。アナタには素養がある。そして、その素養を伸ばす為の巡り合わせも。私もその巡り合わせに一枚噛ませてもらうとしましょうか。私は江戸川です。覚悟が決まったらまた保健室へおいでなさい」

キラリと江戸川のメガネが光ったような気がする。

保険の江戸川に目をつけられたようだ……。

〽江戸川との間にほのかな絆の芽生えを感じる…

∨ 江戸川のことを少し分かった気がした…

【Rank up!! Rank3 法王・学園の教師】

∨ “学園の教師” コミュのランクが “3” に上がった!

∨ 鳴上悠の失われた力 “法王” 属性のペルソナの一部分が解放された!

ペルソナ全書を見ると、“ユニコーン” のアルカナが変化したことに加えて “シー

サー” が追加されていた。

ユニコーンはすでにシャッフルタイムで手に入れており、その時は “女教皇” のアルカナであった。

LVも11で、今回悠のLVと同じ29に変化したことを考えるとだいぶ違う。

シーサーにしても、悠は手に入れていなかったものの、湊が使っているのを見たことがあったのだが、耐性やスキル構成が違うように思えた。

悠と湊の差……似て非なるペルソナ……これはそれぞれの素養の違いということではないのだろうか。

さすがに江戸川の薬で覚醒したとは思いたくないのだが……。

悠が何とか生還を果たした寮の前に、湊とゆかりと風花の三人が集まっていた。

その中心にいるのは、凛々しくも可愛らしい白犬のコロマルだ。

コロマルは長鳴神社の神主に拾われ、その神主が死んだ後も、毎日の日課としていた神主との思い出の散歩道を一日も欠かさずに歩いているという忠犬である。

ご近所周りもその事を知っているので、通報されたりもせずには可愛がられていた。

そしてどうやら、寮の前も散歩コースに入っているようで、悠も真次郎と共に最初に会った時以来、たまに見かけてはモフらせてもらったり、餌をあげたりしていた。

だから、もちろん悠以外が同じようなことをしていても、何ら咎めるようなことではないのだが……それだけは、どうしても許容できなかつた。

「——待て！ それをあげてはいけない！」

「ん？ 鳴上くん、おかえりー。で、えつと何の話？」

「だから、コロマルに山岸の弁当をあげようとしていただろう。それはダメだ。犬の食べ物ではない」

生物の——あるいは、人間の食べ物ではないと言わなかつたのは、ギリギリで働いた悠の優しさだろう。

「あ、私のじゃないですよ。私のは……その、鳴上くんが全部食べてくれたので。これは、湊ちゃんがその時に残った材料で作ったものです」

「そうなのです」

えへんと湊が胸を張ってみせる。

「あ、そ、そうなのか……」

悠は自分の勘違いだったかと湊とは逆に胸をなでおろした。

しかし、風花の弁当については、アレを全部食べたのだろうか、自分のことながら不思議に思わずにはいられなかった。

「……有里は大丈夫なのか？」

「え、あ、うん。大丈夫大丈夫。ハハハ」

質問の意図をすぐに察した事に加え、目の虹彩が瞬時に消え、完全な真顔になってはいたが、本人が大丈夫だと言うならそう思うしかないだろう。

「何の話？」

「さ、さあ……う？」

そして全ての元凶は、自らの創り出したモノについて気づいてはいなかった。

だが、気づかせてはいけないのではないかとすら今は思っている。

たとえその為に、何度命を懸けることになろうとも。

同日 — 夜 — 【巖戸台分寮作戦室】

すでに仲間全員と理事長が集まっている……。

「や。どうどうどうせ」

集まった顔ぶれを見回して幾月が口を開く。

今回全員を集めたのは幾月だった。

何やら大型シャドウに関する事で分かったことがあるらしい。

「さて、実際に戦っている君たちの方が、よほど正確に把握しているかもしれないが、シャドウはその性質によって12のカテゴリに分けられる。生物学の“何科”や“何目”みたいなものさ」

「それってあれですよね。仮面の」

「そう。シャドウが着けている仮面。それがそのまま、そのシャドウの特徴になっている。そしてそれはどうやらあの大型シャドウにも当てはまりそうなんだ」

「えっと……それってどういうことなんスか。それを参考に戦えとかそういう？」

それだったらナビをしてくれる風花がいるんだから、今更のことなんじゃないの？
と思つて順平が尋ねる。

「いやいや、そうではなくてね。これまで現れた大型シャドウ……あれらは、そのカテゴリのI～IVの順に現れていたんだ」

「そうかつまり、大型シャドウは全部で12体いて、これからもそのカテゴリ順で現れる可能性が高いと」

「その通り！ さすがに飲み込みが早いね」

出来の良い生徒たちに幾月は理事長として、そして研究者としても声を弾ませる。

「へえ……そうなんスカ。でも、実際シヤドウって何がしたいんスカね？」

「良い質問だね。実は目的がよくわかっていないんだよ。連中は獲物を殺さずに『精神を喰らう』。捕食には違くないが……生き物のように、ただ繁殖するのが目的なら遠回りすぎる。もつと効率の良い進化方法はいくらでもあるだろう」

「はあ」

「シヤドウは『総体』として何を目指す存在なのか……その辺は研究中なんだ」

影時間にのみ現れるシヤドウが目指すもの……それが分かれば影時間の謎も連鎖的に解けたりするのだろうか？

「……面白いですね。ただ、シヤドウが何でもあっても、残りも全て倒すだけです」

「そうだな……。連中の目的が何であれ、全て倒すしか今は対処のしようがない」

「あと8体か……。相当だな、それ……」

「データでは来るたびに強くなっています。こちらも力をつけないと」

「なんとかするさ。時間は充分ある。それに、通常のシヤドウを相手にしている分にはそれなりに余裕ができてるように思える」

「湊の変な指示もあつて、探索するたびに無駄に戦っている感がありますよね……。本当はこんなに戦わなくていいんじゃないかってくらい。にしても、タルタロスカ。なん

「であんなものがあるんだろ」

色々なことが少しずつ明らかになっていく……。

満月に現れるシャドウのこと、それにシャドウたちの目的とはいったい……。

あと8体……先は長そうだ……。

2009年6月21日(日)

今日は休日だ。

休日の恒例行事である通販番組の確認をしてから、何をしようかと考えながら自室を出た悠は、湊が上の階に上っていくのを見て声を掛けようかと思つた。

……いや、湊は自室に戻るところなのかと思えばそうではないらしい。

階段の近くまで歩み寄り、階段を踏む音の回数で3Fでは止まらないなとそう判断した悠は、なら屋上だろうかと思える。

やさしい畑の世話のこともあるしと、悠も階段を上がると、湊は屋上ではなく、4Fの作戦室の扉を開き、その中に入って行つた。

「？」

影時間でもないのに、作戦室に何の用があるのだろうか、不思議に思つた悠は、湊の後に続いて、作戦室の扉を開ける。

湊は壁に設置された大型モニターの前の席に座り、何やらモニターの操作をしているようだ。

後から部屋に入ってきた悠の存在にはまだ気づいていない。

『居ないのか?』

不意に——美鶴の声が室内に響く。

「(寮内のカメラ……? 何かあった時以外は使用しないという話だが、まさか有里は悪用して、桐条先輩のプライベートを覗き見しようとしているのだろうか)」

それはさすがに良くないのではないかと、湊を止めようとした悠だったが、聞こえてきた声は美鶴のものであるものの、モニターに映っている部屋は順平の部屋であった。

何となく気になって、静観する。

『な、何だこの部屋の惨状は……? まさか、泥棒に入られたのか! いや、シャドウによる襲撃という可能性も……』

順平の部屋は確かに散らかっているが……と、何度かその部屋に上がったことのある悠は、溜息を吐いた。

「(片付けるように言わないと……それともいつそ俺が手伝おうか)」

オカン級の寛容さを持つ悠が、そんなまなまオカンのようなことを考えている間に、モニターの中では、不穏を感じたらしい美鶴が、警官である黒沢に携帯で連絡を取って

いる。

「ちよつ——」

それはちよつと待てと悠が上げた声に、湊が気づいて振り返った。

「うわっ！ 鳴上千くん、いつから居たの？」

「ついさっきだが……それより、あれ止めた方がいいんじゃないか」

「え？ ああ、これ録画だよ」

「……録画？」

「うん。最近なんか機材が不調だから、暇があつたら私にも見てみて欲しいって頼まれたんだけど、なんか勝手に録画しちやってるみたいだね」

「そうなのか……」

湊が悪用しているわけではないと分かり、ホツとすると同時に疑ってしまった自分を悠は恥じた。

それにしてもモニターの中では実際に黒沢がやって来てしまっていた。

その後、部屋の主である順平も姿を現し……部屋がいつもどおり、ありのままの姿だと証言。

美鶴はその事実は無駄に衝撃を受けていた。

呆れたような黒沢の姿と、項垂れながら退出していく美鶴の姿に「せめて叱ってよ！」

と順平は一人取り残された自室で叫んでいる。

モニターに表示された日付は6月14日となっていた。

そういえば、あの日は順平が凹んでいた気がする……これが原因だったのかと悠は納得した。

「とりあえず、これは消去つと。どうせなら鳴上くんの恥ずかしい秘密とかが映つてたらよかつたのにね。あははは」

「俺の恥ずかしい……？」

「そうそう。何かないの。自室で一人でモノマネの練習してるとか。あ、ペルソナを召喚する時のカツコイイポーズの練習とかイイかも。——イケメンにのみ許されたポーズ！」

湊はそう言って、顔の前に手をやったり、首をさすってみたり、胸の前あたりで両腕を交差させてみたりしている。

「……ほどほどにしておけよ」

悠はそれだけ言うとか戦室を後にした……。

部屋を出た悠が、無意識に、湊がやっていたポーズの中のひとつである、首痛めてる系男子になっていたことに、本人は気づいていなかった。

「お疲れ様でした」

作戦室で湊と別れた後、屋上のやさしい畑の世話をしてから街に出た悠は、目的地もなく歩く中で、ポロニアンモールの喫茶シャガールで、ヘルプに入ってくれないかと頼まれ、バイトに精を出していた。

そして、そのバイトも終わり、再び街中へと出ると。

「やっぱここら辺まで来るとシャレてんなー」

「ん?」

聞こえてきた声に何となくで視線を向けた悠の動きがぴたりと止まる。

「マジで1日遊ぶつもりなのか? 明日は普通に学校だぜ」

「おおよ。つか、何マジメぶっちゃってんだよ。お前、明日で15だろ。だから前日から祝ってやろうってんじゃない。いやー、友達思いだわ俺ら」

「んなこと言って、自分たちの時に俺にスゲー奢らそうとか企んでんじゃないやねえの?」

「あ、バレた?」

「バレたつつつちやったよ! たとえそうでも、もう少し隠す努力をしろよ!」

「あはは、まあ、いいじゃん。何にせよ1年に一度のことじゃないかよ」

「そりやそうだけだよ」

中学生の集団……それだけなら別によくある日常の光景で興味を引くこともないと

思うのだが、その中の一人、茶髪でオレンジのヘッドホンを提げた少年にどうも見覚えがある気がする。

「そういや、前にここらでりせちー見たって奴いたぜ」

「マジで!!?」

「りせちーって誰?」

「売出し中の新人アイドル」

「へえ、今度チェックしてみっかな」

悠の視線には気づかず、少年たちは騒がしく去って行った……。

第三者的な視点で語るとするならば、それはあり得ないはずの邂逅だった。

かつて未来では相棒として、共に信頼し合う間柄であったとして、その彼の物語はその通り今より未来のことであり、現在は何も知らない少年に過ぎない。

それこそ、そのすれ違いだけで終わるようなただの他人。

けれど鳴上悠がその場にいるというだけでこうまで影響し合うのか。

まるで最初からそういう運命であったかのように、彼もまたその流れに巻き込まれていく。

翌日になって知る。

彼の名前と、巻き込まれたという現実を。
失踪者——……“花村陽介”。

6月22日（月）～30日（火）：まだまだ抜け日あり。

2009年6月22日（月）

黒沢と失踪者の事について会話。（街を守る者コミュ2）。

今回の失踪者の名前は「花村陽介」というらしい。

……どこか引つ掛かる名前だ。

とにかくタルタロスに助けに行こう。

「——上くん、鳴上くん！」

タルタロスを駆け上がる悠の姿を、パーティーメンバーとして横目に見ていた湊は、何か違和感を感じて声を掛けた。

焦っているとしても言う言葉が一番しっくりくるだろうか。

普段ならもつと細かに仲間の様子を確認し、何よりリーダーである湊の判断を尊重してくれる悠だが、今回はまさに一直線というか、率先して前へ前へと向かっているように思える。

「何だ？」

「何っていうか……いつもとちよつと様子が違う気がするけどどうかしたの？」

しかし湊の感じた違和感、焦りは、当の悠との会話には現れず、湊に向き直った悠の態度にもおかしなところはない。

「ん、そうだったか？」

「うん。もしかしてだけど、今日の失踪者、知り合いだったりした？」

「……いや。知らないはずだ」

一瞬だけ何か考える素振りをした悠だったが、軽く首を振って否定する。

悠に現れた違和感には何か理由があるように思えたが、その悠自身がわかっていない。みたいな、妙な不安定さをまもっているなど湊は思った。

ただ――。

「つーかさ。今日のお前凄くね？ 鬼気迫るつーか、絶好調って感じか？」

「……そうなのか？」

「いやいや、そこでオレつちに聞くなよ！」

順平がそう言うように、その不安定さが悪いほうに出ているというわけでもなく、常時クリティカル状態とでもいうか、普段は抑えられている力が抑えきれずに迸っているような勢いが今の悠にはあった。

この状態で悠のペルソナであるイザナギでも召喚しようものなら、思わず番長とでも呼んでしまいそうだ。

「別に好調なら悪いことじゃないでしょ。自分でも理由がわからなくても調子が良いみたいなときは普通にあるだろうしよ」

「まあそうなんだけどな。何か今のこいつ見てると、番長、お疲れ様ツス！ とか言つて道を譲りたくなるというか」

「あ、わかるー！」

「ええ……わかっちゃうんだ？」

似たような思考になつていたらしい順平の言葉に、湊は手を上げて賛同の意を示した。

「……」

けれど騒がしくしている湊たちとは今は一線を引いて、悠は奇怪さ溢れるタルタロスの、その道の先をただただ見据えていた。

タルタロス — 47F — 【奇岩の庭アルカ】

『その先から今回の失踪者の反応があります。あ、でも、待つてください……何か前回の失踪者とは反応が違うような……』

「反応が違う? でも、そうは言っても進んでみるしかないよね?」

『そう……ですね。一応注意して先に進んでください』

そこは前回の失踪者とは違い、まるで彼のために用意されたかのような階層だった。

47Fに上がった途端に目に入ったのは豪華な扉。

その扉を開いた先は、タルタロス特有の薄暗さを伴った、ただっ広いだけのホールだったが、その中心には茶髪でオレンジのヘッドホンを提げた少年が、一人スポットライトでも浴びたかのようにぼうつと浮かび上がって、存在を主張していた。

「よ——花村陽介?」

悠が尋ねると、ただ立ち尽くしていただけの少年——失踪者・花村陽介に反応が生まれた。

「……誰が助けに来てくれなんて頼んだんだ」

「え?」

「俺は違う……。そうじゃない……。日常では笑って周りに合わせるだけで、非日常に関わっても助けられるだけの一般人……。何だよそれ……。違うだろ……」

悠の声に反応したように思えた陽介だったが、その口から出るのは何やら鬱屈とした眩きばかりだ。

「……彼、何を言ってるの?」

「いやまあ、俺たちには若干共感する部分がある眩きだけ……、つってもそういう場合じゃねえよなあ? とつとと救出して帰ろうぜ」

「だから違う!」

カツ——と陽介が叫びながら顔を上げると、陽介の背後に突然巨大なモニターが降りてきた。

「!!?」

「な、何だよこれ!!」

『そう違う。このフロアでは俺が中心で俺が全てだ。だからよお。代わつちまいな俺と! ちよつと早いがショータイムだ!!!』

「ち、違う違う違うッ! お前も違うッ! お前なんか——俺じゃない!!!」

巨大なモニターに映るのは、もう一人の花村陽介。

金色の瞳をギラつかせて、陽介の否定の言葉に歓喜の笑い声を上げる。

「つ……」

「陽介!!!」

モニターから黄色の霧が吹き出し、それと同時に陽介は体から力が抜けたように崩れ落ちた。

そしてもう一人の花村陽介が——いや、花村陽介とは似ても似つかない異形の怪物が

その姿を現した。

「ジャジャジャジャーーン!!! ひやはははははは!!! たのしーぜ!!! お前も、お前も
お前もお前も! 全部ぶっ壊してやる!!!」

迷彩柄のカエルのような胴体——というか下半身に、赤マフラーに黄色の手袋をした
ヒーロー……いや、何か間違った忍者象みたいな、そんな怪物が周囲に強力な風を巻き
起こす。

「うおわっ?!? こいつもシャドウ?!? 倒しちまっつていいんだよな!!!」

「それ以外何があるのよ!」

『はい! 強力なシャドウ反応! 推定LV30! 強敵です!』

風に吹き飛ばされて転げながらも、キャップだけは吹き飛ばされないように死守した
順平と、強風に耐えながらも、それにツツコむように声を上げるゆかり、そして悠と、湊
の耳にも風花の通信が入る。

「よーっし、戦闘開始!!!」

戦闘が始まってすぐに、悠は倒れている陽介に駆け寄った。

……意識を失っているだけのようだ。

「少し頼む!」

「うん、鳴上千んはその子を安全なところに!」

「風！ 風！！ 風エ!!! 俺の邪魔をする、つまらねえもんは全部、吹き飛ばしまえ!!!」
 中位全体スキルである「マハガルーラ」によつて生み出された風がフロア内で荒れ狂う。

普通なら、歩くのもままならないどころか、ペルソナ使いとして、ペルソナと同期したパラメーターになつていなければ、一瞬で腕やら足やら細切れにされ、千切れ飛んでいるに違いない暴風だ。

しかし、悠はアンズー、湊は「クシミタマ」と、疾風属性無効のペルソナによつて、その暴風もまるで意に介さずに行動し、ゆかりもまた疾風属性には耐性を持っていた。

「くっそ………!」

だが唯一、順平のペルソナだけは疾風属性を弱点としている。

パラメーター補正と装備によつて、ある程度のダメージは軽減されてはいるものの、それでも身動きひとつすらも難しいこの状況は、考えるまでもなく危険と言えるものであった。

「ひやははははは!!! 弱点、発げくん!!! まずは——お前からだ!!! 「忘却の風」!!!」

「があああああああ!!!?」

たった二発だ。

「マハガルーラ」からの「忘却の風」。

それだけで順平は、意識を失い、その場に崩れ落ちてしまう。

『じ、順平くん、戦闘不能！ 誰か回復を！』

「ちよっ——いくらなんでも効きすぎでしょ!!? 復帰させちゃっていいの!!?」

「少し待って!」

順平に更なる攻撃が行かないように、立ち位置を調整しながら、そう言う湊の視線の端には、陽介を退避させ、イザナギを召喚している悠の姿がある。

「おおっと! そうは行かぬーぜ!」

——「ジオンガ」を撃った瞬間には気づいていた。

一手遅かったと。

シャドウがその攻撃を察知して「蒼の壁」を張っているのを見たのだ。

バチイ! ——とシャドウを避けるように、張られた壁に沿って電撃が奔り抜ける。

先に陽介を安全圏まで引きずって行ったことが仇となったようだ。

電撃属性の耐性を得ることができる、そのスキルを使ったということは、このシャドウは電撃が弱点だったのかもしれないが、これで効果が切れるまではほとんど通らない。

しかし、湊たちにも攻撃していたのに、それと同時に補助スキルを使うとは。

『気をつけてください! どうやら、このシャドウは、上の忍者の部分と、下のカエルの

部分で、同時にスキルを使うことができるとは！ どちらか一方を集中して潰した方がいいかもしれません。上が攻撃、下が補助だと思われず！」

風花の通信が入る。

「どうやらそういうことらしい。」

厄介な相手だ。

ゲーム風に言うなら、ダウン追撃とかではなく、単純に2回行動できる相手だということになる。

自らを強化してから攻撃、あるいは相手を弱体化させてから攻撃、攻撃しつつ自分を回復……いろいろな状況が考えられる。

それと順平のことだ。

疾風属性が弱点のままでは、復帰させたところでまた同じ状況の繰り返しみたいなところはあある。

まあそれを囿にしてという非道な作戦を取ることも可能ではあるが……それをやらされる順平からしてみれば堪ったものではないだろう。

「手間焼かせないでよねー！」

ゆかりが『地返し玉』で順平の意識を覚醒させる。

探索に出ずっぱりでLV29の悠や湊と違って、その他のメンバーはLV25程度な

ので、回復型のペルソナを持つゆかりであっても「リカーム」のような「地返し如玉」と同等の効果を持つようなスキルはまだ使えなかった。

「カデンツァ」

「ぐつ……サンキュー……!」

さらに悠と湊のミックススレイドによって、意識を取り戻した順平、ついでにゆかりも全回復させると同時に、回避率も高める。

「無駄無駄ア!!! スクカジャ!!!」

対してシャドウは自分の速力を高める。

そして暴風……これでは状況はそう変わらない。

「防御してて!」

「り、了解!」

確かにこの敵とは相性が悪すぎると、順平は素直に湊の指示に従う。

「ゆかりは全体回復! 鳴上千んと私で仕留める!」

「OK!」

「わかった!」

悠と湊はアイコンタクトを交わす。

上と下どちらを先に潰すか。

一瞬のやり取りではあったが、意見が一致するのがわかる。

「(まずは——補助!)」

下のカエルの方だ。

特に悠と湊は疾風属性を無効化できるのだから、強化や弱体化による状況の変化をなくすためにも、当然の選択と言えた。

それに脚となる部分を潰せば動きも封じることが出来るかもしれない。

「そう簡単にやらせるかっての!」

シャドウはカエルらしくびよーんと飛び跳ねると、フロアの壁にぺたりと張りついた。

そして自分には補助スキルの「チャージ」を掛けている。

「(物理!)」

「チャージ」なら物理系統のスキルだと、悠たちは身構える。

「くらいやがれ!」 「ソニックパンチ!!!」

忍者の腕が伸びる。

「!」

スキルのにはそれほど強いものではない。

この場には居ないが、明彦に倣ってボクシングで言えば、フリッカージャブのような

ものだ。

中距離牽制技。

しかし、「チャージ」の効果と、単純なパラメーターの強さによって、それなりに手痛いダメージを受ける。

ぴよんぴよんと壁を跳び回りながら同じパターンを繰り返してくるシャドウに、悠はアンズーに乗って空中戦を挑む。

「とにかく叩き落とす……!!」

ライオンの頭部に驚の身体……風や雷の化身であるアンズー。

LVは多少の物足りなさがあるが、耐性が優秀だったり、ミックスレイドに使うようなペルソナは、湊と相談して、骨董屋で手に入れられるインセンスカードで最低限の強化はしていた。

一体集中強化とどちらにするかと悩んで、結局状況に対する多様性を選んだ形である。

「俺に近づくんじゃねえ! ……忘却の風!!!」

「!」

アンズーは疾風無効なのになぜ——と、思った瞬間には悠はアンズーの背中から飛び降り、そのまま上空からの斜め下攻撃に移行……シャドウを斬り墜とした。

だが、同時に共感覚で痛みを感じ、アンズーも吹き飛ばされたことを知る。

『あのスキルには、『ガードキル』効果もあるようです！ 注意してください！』

ただの牽制や破れかぶれではない……『ガルーラ』ではなく、『忘却の風』と名前がついてるだけのことではあったようだ。

疾風無効だからと、調子に乗ったら痛い目に遭うかもしれない。

だけどこれは総攻撃チャンス！

「有里!!!」

「みんな、いっくよー!!!」

踏みつぶされたカエルならぬ、斬り墜とされたカエルに、メンバー全員での総攻撃。

戦闘不能にされた下、ずっと防御をさせられている順平なんかは、ここぞとばかりに鬱憤を晴らしている。

しかし、それだけでトドメというわけにはいかなかった。

「くそくそくそつっ！ 『ディアラマ』!!!」

シャドウは無茶苦茶に腕を振り回し、総攻撃から逃れ、体勢を立て直すと、すぐさま回復魔法スキルを使った。

「ちよっ……マジで!!!? シャドウは回復禁止にしろよ!」

順平のツツコミは、このシャドウと対峙する全員の総意であったのは間違いない。

そもそも補助系は下のカエルの役目だったはずだが、役割分担をしてただけで忍者側も使えないわけではないようだ。

あるいは回復だけ別口だろうか。

どちらにしろ、どちらかが残っている状況で一方だけ戦闘不能にしても回復スキルひとつで復帰できるらしい。

状況は完全に振り出し……長期戦の様相になってくる。

“ラクンダ”、“タルカジャ”、“チャージ”——弱体化や強化も合わせて、悠と湊が何とか行動不能にしようとするが、だいぶ削れたと思えても“ディアラマ”で回復される。

シャドウが回復してる分には、悠たちにもそこまでのダメージは入らないのだが、それでも相手のSPの底が見えないということもあって、不利を感じる。

やはり手数不足だ。

そんな中で順平が覚悟を決めた。

「(勇気を出せ、オレ……!)——ペルソナア!!!」

「!!」

順平の行動に瞬時に反応した悠と湊が“タルカジャ”と“スクカジャ”を順平に掛ける。

シャドウの意識していない方向からの攻撃。

順平のペルソナ、ヘルメスによる「キルラツシュ」1、2——3発、入った！しかも、ダウンだ！

これでダメなら再び集中攻撃で戦闘不能、あるいはそうなっても、自分を囮にして、仲間たちにトドメを刺してもらおう。

ペルソナがあれば死にはしないと意思しつつも、それも絶対だという確証はない、完全に捨て身の攻撃から生まれたチャンスであった。

「ちつくしよ……お前みたいな雑魚がア!!!」

「俺たちの中に使えない人間なんていない!!!」

「そゆこと！ 一気に決めるよ!!!」

呻くシャドウをフルボッコ……相手がしぶといのは、もう嫌というほどわかってい

る。だから、悠と湊はタイミングを計っていた。

そこに順平が割り込んできたのは、予想外と言えば予想外だったが。

「で、『ディアラマ』!!!」

「『タケミカツチ』!!!」

「『ここだ!!!』——イザナギ!!!」

「うっ——ぎゃあああああツツツ!!!??」

湊のタケミカツチの「電撃ガードキル」による耐性解除からの電撃一閃。弱点にヒット!

これには堪らずシャドウも絶叫を上げる。

そして再びの総攻撃。

——起き上がると同時に、また電撃。

「蒼の壁」を張り直す時間など与えない。

いや、せいぜい「蒼の壁」と「ディアラマ」の二択で悩めばいい。

ギリギリまでダメージを与えてからと思っただけだが、もう完全にパターンに入っ
た。

ここから詰めを誤るようなことはしない。

そして、その直後には小うるさい上の忍者の部分を行動不能にし、さらには下のカエ
ルの部分も一気に削りきった。

戦闘終了だ。

「ちっ、ここまでかよ……けどなあ! 勘違いすんなよ! これで俺を倒せたと思った
ら大間違いだぜ!」

「何よ負け惜しみ?」

「俺はこいつでこいつは俺だ。お前らがどれだけ力を持つていようが、こいつがこいつである限り、俺という存在は消えねーんだよ！俺はまた必ず現れるぜ！こいつの中で再び力を蓄えてな！その時にもお前らは都合良くこいつの傍にいられるか？」

「……」

「無理だよなあ？ 無駄なんだよ！お前らがやってること全部！所詮は自己満足のヒーローっつこだ！」

「そのの何が悪いの？ 助けたいから助けるだけだよ！」

「ハッ……どうだかな。本当にそれが本心かよ？」

「どういう意味？」

「カッコつけてそっち側にいるけどな、結局は同類なんだよ！今は運よく制御できてるかもしれないが、それはお前らに適性があったってだけのことで、真にそれぞれの影と向かい合ったってことじゃねーんだぜ！」

「私たちの影？」

「そうさ。影はいつでもお前らを見てる。いずれその本当の意味を知ることになるぜ！」

そんな無理矢理な方法じゃ必ずなあ！ひやはははははははは！！！！

そんな言葉と哄笑を残してシャドウが霧散するが、その粒子は陽介の中へと戻っていく。

シャドウが消えたことにより、シン——とホール内が静けさに包まれた。

「な、何だったんだよ今のヤツ……」

「彼のシャドウ？」

「シャドウってよ……もしかして、人間から出るもんなのか？」

「……」

「ペルソナとシャドウは表裏一体の存在……制御できれば身を守る鎧となり、暴走すれば命を奪う刃になるってことか」

「真実は見えない。」

「答えに辿り着いたような気がしても、誰かがそれを正解だと言ってくれる訳ではないのだ。」

「だから彼らはこうして影時間の謎を追い求めて、タルタロスを攻略しているのだから。」

「この子、大丈夫かな？」

「……どちらにしろ、シャドウは倒したんだ。またすぐに復活するものでもないだろう。仮に復活しても今よりはずっと弱くなってるはずだ」

「今はまだこの花村陽介という名前の少年が覚醒する時ではないのだろう。」

「けれどいずれは自らの影に立ち向かう時が来るはずだ。」

その時にこの少年は自らの影に打ち勝つことができるだろうか。

「……きつとできる」

なぜだか悠はそう思った。

そして、もし勝てないとか言うようだったら、その時は自分が殴り飛ばしに行つてやるとも。

▽ 失踪者・花村陽介を救出した。

——……影時間が終わる。

2009年6月23日（火）

「そーいやお前、最近噂になつてる『復讐依頼サイト』って知ってるか？」

「いや……」

放課後のポロニアンモール。

クラスメイトの健二と共に適当に店を回っていると、ふと思ひ出したように健二がそんな話題を口にした。

「なんか『この人に復讐してください』って書きこむと『復讐代行人』が復讐してくれるんだってさ。成功率100%でしかも絶対にバレないとか何とか」

「そうなのか。怖い話だな」

「他人事みたいに流してやるけど気をつけた方がいいぜー。こういうのって何が原因でやられるか分からないからな。お前みたいに目立ってれば尚更だ」

「ああ、注意するよ」

とはいえ何に注意すればいいのか。

まあ、おそらくは怪談とか都市伝説の類の話だとは思うが……。

その後、健二とは別れて、交番に行く。

「来たか。失踪者の少年の話だろう？ 彼なら無事に保護されたぞ。その間のことはよく覚えていないとの話だったが、介抱してくれた人にお礼を言いたいと言っていたから、落ち着いたらまた顔を出すかもな。もし来たら連絡しようか？」

「そうですね……。お願いします」

「ああ。それで今日は何か買っていくのか？」

黒沢の言葉に悠は首を振る。

今日は買い物ではなく、その言葉を確認しただけだった。

「今日はいいです。黒沢さんが言った通りで、ちよつと失踪者のことが気になっただけなので。無事ならそれで」

「そうか。またいつでも来い」

「はい」

黒沢に頭を下げて、その場を立ち去ろうとしたところで、先程の健二との話題が頭によぎり足を止める。

「あ、そういえば『復讐依頼サイト』とか言うのが噂になってるらしいですけど知ってますか？」

「ああ、アレか……。知っているかと訊かれれば、知ってはいるが……。アレについては正直何とも言えないと言うのが現状だな」

黒沢にしては珍しく言葉を濁したような物言いだった。

「ただの噂話だっただけですか？」

「俺の勘は違うと言っている。けれど噂の通りに何も証拠がない。そのサイトにしても、愚痴を吐き出す場所を提供しているようなもので、そこに書かれた人物が不幸な目に遭ったとしても、そのせいだと言えるような状況にはない」

「なるほど……」

「もし本当にそのサイトが仲介に使われてるなら、その書き込みを元に相手を特定して、何か別の方法で連絡を取っているんだろう。そうなると尻尾を掴みづらい」

それにそういうのは俺の担当にはならないしな……。とわずかにだが黒沢が愚痴をこぼす。

悠はそれに対して頷くことしかできない。

街のお巡りさんとしてやれる以上のことを黒沢はやってくれているが、それでもその手の中からすり抜けていく犯罪は多い。

そして、ひとつすり抜ける度に、誰かが知らず不幸な目に遭っているのだろう。

そのことを黒沢は大人として、警察官として、きつと悠以上に深く理解しているに違いないかった。

「それじゃあ、今度こそ俺は行きます」

「ああ」

悠はもう一度ちゃんと頭を下げ、交番を後にする。

“復讐依頼サイト”のことも気にはなるが、やはり悠としては失踪者のことのほうが思考の多くを占めていた。

「花村陽介……俺は彼の何が気になっているのだろうか。前にどこかで会ったことがある？ それとも自分の中からシャドウを出したからか？ もう一度、会うことが出来ればはつきりするだろうか……」

そんなことを考えながら、悠は寮へと帰った……。

2009年6月24日(水)

放課後。

湊が生徒会に行くと言うので悠もそれに同行することした。

「えー、来るのー」と湊は、若干嫌そうな雰囲気を見せたが、それは冗談も入っていたように、すぐにいつもの調子に戻り、廊下を並んで歩く。

生徒会室にはすでに役員たちが集まっているようで、そのドア越しにもいくらか声が聞こえてきていた。

悠がおや？　と思ったのは、その中に憤りだとか、あまり普段の生徒会室とは、似つかわしくないものを感じたからだ。

少なくとも会議の内容によって紛糾しているとかではない。

「お疲れさまー。何かあったの？」

湊が声を掛けながら生徒会室に入っていくのに合わせて、悠も軽く会釈をしつつ入る。

「あ、有里さんに鳴上さん……実は例のタバコの犯人が見つかって……」

「小田桐が見つけたのか？」

「いえ、それが……ちよつと不良っぽい感じの人が、ほら見る俺が犯人じゃなかっただろ、ば……バーカ」って現行犯で連行してきたみたいで」

「どゆーとっ？」

その時の様子を伝えてるだけなのに、馬鹿というところでちよつと詰まるところに千尋のらしさを感じる。

まあ、それはともかく。

「……たぶんだけど、小田桐が事情を訊いたうちの誰かだったんだろう」

「あー、蛇の道は蛇みたいな」

「そうだな……。本人からしたらちようど見つけて自分の潔白を晴らしたみたいなことかもしれない」

「でも、それじゃあ、小田桐くんは納得してなさそうだよ。メンツが潰されたとかって……」

「そうですね……。でも、小田桐さんがどうこうというよりも……」

千尋はさすがにそれ以上は口に出せないらしく、生徒会室の様子を示す。

勝手に引き受けて、強引な調査をしていた秀利が、あまり役に立たない形での解決ということで、他の役員の口からは、鬱憤からなる微妙な陰口のようなものが聞こえてくる……。

「嫌な雰囲気……」

「……小田桐はどこに?」

「職員室です。その犯人を引き渡しに行ったので……」

「一応事件は解決つてことか……」

不意にガラツと生徒会室のドアが開き、秀利がその姿を見せる。

それと同時に陰口も収まり、生徒会室は微妙な雰囲気にも包まれた。

フン……と鼻を鳴らす秀利に悠と湊の二人が近寄る。

「お疲れさま。事件は解決？」

「とりあえずはね。該当の生徒の処分は決まり次第、追つて連絡されることになってゐる」

「納得がいつていなさそうだな」

「……そんなことはないさ。事件は解決した。僕が直接捕まえたわけではないが、僕が尋問した相手が捕まえてきたんだ。僕の行動が全くの無駄にはならなかったということだ。問題は……いや、ここで話すことでもないか。二人ともちよつとついてきて欲しい」

秀利がそう言つて踵を返す。

悠と湊はなんだろう？ と顔を見合わせてから、その後が続いた。

——屋上。

秀利が悠と湊を促して足を運んだ場所は月光館学園の屋上だった。

夕焼けに染まり始めた屋上に、三人の姿だけがある。

「すまないな。こんなところにまで足を運んでもらって」

「それはいいけど……どうしたの？」

湊の問いに秀利はすぐには答えず背中を向けて、眼下の部活動に励む生徒たちに視線をやった。

「地位も名誉も学歴も無い男は何を抛り所に社会貢献に努めるか…… “真心だ” と、あの男に言われたんだ」

「え？」

「しかしその男は、くだらないトカゲの尻尾切りに遭い、今も服役中の身だ。偽証罪でね」

二人が何の話だろうと思ったのは一瞬のことだった。

これは秀利の本質に触れる話だ。

彼が彼として行動する、その原動力となる部分の。

「この社会での弱者は強権者の糧も同然だ。 “真心” では、綺麗事では勝ち残れない！ 僕はね、 “弱者を出さない” 組織を作りたい。そのためには強権者をも裁くことのできる絶対の秩序の構築が不可欠なんだ」

秀利は振り返らない。

だが、その声に苦悩を感じた悠は声を掛ける。

「何があつた」

「……おそらくだが、該当の生徒には退学処分が下されることになる」

「退学？」

「トカゲの尻尾切りだよ。彼らは不出来な生徒を切り捨てることで学園の秩序を維持することを望んでいる。秩序を乱す輩への処罰に同情の余地は無いが、僕が犯人探しをしていたのはあくまで犯行の再発を防ぎ、更生を期待してのことだ」

「ならそう言えばいいんじゃないの？ 退学は厳しすぎるって」

「それを言えば僕は一瞬で厄介な生徒の仲間入りさ。……次期生徒会長の座に着くまでは僕は失敗はできない。まだ僕はスタートラインにすら立てていないんだ。だが、その為に自分の志を誤魔化すのは正しいことなのか……？」

弱者を出さない組織を作る為に、今はその弱者を切り捨てる。

秀利はその矛盾に迷いを覚えているようだ。

「青い考えだと笑うかい？ 所詮は学生の間のことだと。だが、大袈裟かもしれないが、

これは人生の懸かった選択だ。該当の生徒はもちろん、僕にとつてもね」

何が人生の岐路になるかなんて人それぞれだ。

学生の時の失敗ひとつで、そのまま転がり落ちる人間だっているかもしれない。

そんな相手に手を差し伸べなかったことが、ずっとしこりとなって自分の中に残り続けるかもしれない。

「最善な選択なんて分からないよ。だって未来なんて知らないもの。だから必要なのは、いつだって自分の選択に責任を負う覚悟」

「覚悟……」

「失敗したって足を止めない。それでも私はやり遂げてみせる」

「有里くんは強いな……。だけど、世の中には取り返しのつかない失敗というものだけであるだろうか？」

「その時は——」

「——俺が手を貸すよ」

「もう！　なんで鳴上くんは美味しいとこだけ持っていこうとするの！　俺“たち”でしょ！　俺“たち”！」

「あ、ああ……すまない」

言葉が衝いて出たというだけで、それを意識したわけではなかったのだが、プリプリと怒る湊の姿に、悠は素直に謝った。

「小田桐くん。小田桐くんの志が正しいものなら、ちゃんと協力してくれる人は現れるよ。誰だって本当は正しいことがしたいと思ってる。でも、最初の一人になるのは難し

い。小田桐くんが目指してるのってそういうことだと思っただ」

「……フ、確かに。君たちが協力してくれるなら何者にも負ける気がしないな」

▽ 秀利のことがまた少し分かった気がする…

【Rank up!! Rank 5 皇帝・生徒会】

▽ “生徒会” コミュのランクが“5”に上がった！

▽ 鳴上悠の失われた力 “皇帝” 属性のペルソナの一部が解放された！

2009年6月25日（木）

陽介Ⅱ 自称特別捜査隊コミュ。（月1〜2くらいのペース）。

「あ、鳴上悠……さん、ですか？」

「ああ」

「俺、花村陽介って言います。えっと、よく覚えてないんですけど、ありがとうございまして。それだけ言っておきたくて」

「陽介……」

悠はやはり覚えのある名前に記憶を辿るが、どうしてもあと一步のところまでそれが掴めずにいた。

「どうかしたんスか？」

「いや……前にどこかで会ったことあるか？」

「え、うーん……たぶんないと思いますけど……」

「そうか」

「あ、えーと鳴上さんは——」

「——悠でいい。俺も陽介と呼ぶ」

「え、はあ……じゃあ、悠さん……悠先輩？」

「呼び捨てでいい」

「いやいやいや！ それはさすがにハードル高いですって！ 高校生ってことは完全に

年上ですからー！」

「俺が許す」

「え、えー……？？」

「陽介との間にほのかな絆の芽生えを感じる……」

「陽介のことが少し分かった気がした……」

「私は汝……、汝は我……汝、新たな絆を見出したり……絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

「星」のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん……」

「『星』属性のコミュニケーションである『自称特別捜査隊？』のコミュを手に入れた！」

▽ 鳴上悠の失われた力『星』属性のペルソナの一部が解放された！

「ゆ、悠は月光館学園つてとこの2年なんだよな」

「ああ」

「そのどうつスカ……いや、どうだ？」

陽介は敬語も要らないと言う悠との距離感を計りかねているようだ。

「どうつて？」

「あ、いやー、ほら、俺つて中3だから、ちよつと進路とか悩んでて、まあ普通に地元のところかなつて思つてんスけど、他のところもちよつとは興味あるつていうか」

「よければ案内しようか？」

「え、マジすか！ あ、いや……でもさすがにこれからつて訳には、元々お礼だけ言つて帰るつもりだったんで」

陽介は迷っているようだ。

そして意を決したように携帯を取り出した。

「連絡先交換して貰つてもいいっスカ」

「もちろん」

陽介と連絡先を交換した。

「んじや、また連絡するんで。えっと……悠もなんかあつたら連絡してくれ」
「ああ」

陽介と別れて寮へと帰った……。

2009年6月26日(金)

失踪者救出・堤謙二郎、三山佳美。(51F、61F)。

2009年6月29日(月)

黒沢のところまで足立透の姿を見送る。(街を守る者コミュ3)。

アニメとかでは足立は昔からやる気がない感じだった気がするけど、うちの足立さんはここで挫折した設定。

1年間かけて捜査しても何の成果も得られず、勝手に解決してた感じで終わって、無能扱いで田舎にぽーいされたみたいな。

今回もそうなってしまふかは番長との関わり方次第？

「あ、ごめん」

「いえ、こちらこそ」

悠が黒沢を訪ねて交番を訪れると、中から出てきたスーツの人物とぶつかりそうになり、お互いに頭を下げた。

「はあ、被害者が何も覚えてないんじゃないか……。でも、気がついたら直前まで喋ってた相手がいなくなってたなんて普通じゃない。普通じゃない事件からなら無気力症の原因にも繋がるかと思っただけどね……。はは、漫画の読みすぎかな」

その後すぐにすれ違ったので、その人物の顔を正面から正確に捉えることはできなかったが、そんな眩きと、無造作ヘアーというのではなく、おそらくは本当にはねている寝癖が気になって、悠は何となく後姿を見送った。

「ん……。君か。今日はどうしたんだ」

「あの、いま俺と擦れ違いで出て行った人は？」

「擦れ違いで？ ああ、警視庁の新米刑事だ。無気力症や失踪者について職務の合間に調べてるらしい」

「黒沢さん以外にもそういう人が……」

「……。自分のことを言うわけじゃないが、本気で街を守りたいと思っっていたり、事件を解

決したいと思っている者は、この街を中心とした歪みに気づく。だが解決はできない。仮にオカルト的なものを素直に受け入れることができても、その対抗策がないからだ」

「だから黒沢さんは俺たちに協力をしてくれるんですね」

「そうだ。だが、君たちのことをそうそう広めるわけにもいかない。彼が信用できないとかいう話ではなくな。……彼は若干抜けている部分もあるが、優秀な人間だ。正義感も強い。この判断が彼の挫折に繋がらないといいのだが」

「挫折？」

「学生の君に言うことでもないが、優秀で正義感が強い、そういう人間は得てして上からは煙たがられるものだ。自分にやましいことがあれば当然、なくてもいずれ追い抜かれると頭の片隅で考えてしまうからな」

「……あの人の名前ってわかりますか？」

「『足立透』だ」

足立……何となく引つかかる気がするが、特別珍しい名前というわけでもないだろう。

なら知り合いだろうか……いや、知らないはずだ。

【Rank up!! Rank3 正義・街を守る者】

〽『街を守る者』コミュのランクが『3』に上がった！

▽ 鳴上悠の失われた力 “正義” 属性のペルソナの一部が解放された！

「だがそういう周囲の雑音を振り切つて、ああいう人間が上に行けるようなことがあれば、現場も少しはマシになるんだがな」

「……そうなるといいですね」

コミュは黒沢ではなく足立に反応したのでだろうか。

その答えはまだわからなかったが、悠はそれだけ言つて、とりあえずその話はそこで終わった。

2009年6月30日（火）

「あら、鳴上くん……」

「長谷川。今、帰りなのか？」

「ええ。鳴上くんはアルバイト？」

放課後……悠がポートアイランド駅前にあるラフレッシュ屋でバイトをしていると、湊と一緒に図書委員をしていた沙織が声を掛けてきた。

沙織は悠のエプロン姿を物珍しそうに見ている。

「鳴上千ん、お友達？」

「あ、すみません。仕事中に話し込んでしまっただけ」

「いいわよ。それより彼女？」

「いえ、違います」

「なーんだ、そうなの？ まあいいわ。ちょうどいい時間だし、今日はこれで上がっていいわよ」

「そうですか？ ありがとうございます」

一応は気を遣われたという形になるのだろうか。

彼女どころか、悠にとっては湊に紹介されて一度話したきりの相手なのだが。

「……なんかダシに使うみたいにならなって、すまないな」

「構わないわ。お仕事お疲れさま」

空気を読んで待つていてくれた沙織と二人、職場であるラフレシ屋から少し離れて喋る。

「ああ、ありがとう。長谷川のおかげで少し早く上がれたし、お札に何か奢ろうか？」

「そんなの気にしなくてもいいけれど……なら、その自動販売機で飲み物でも」

「了解だ」

悠は自動販売機で自分の分と二つ飲み物を買った。

流れる的に飲み物を渡してさよならともならず、近くのベンチに座り雑談を交わす。

「あ……」

「どうした？」

「いえ、ごめんなさい。私のせいで少し面倒な噂が流れるかも」

不意に声を上げた沙織の視線の先には、こちらを窺うようにして何やら喋っている女子生徒たちの姿があった。

「ああ……でも、そういうのはお互い様だ」

「ならいいのだけど……私、あまり学園生活に馴染めていないみたいで」

「そうなのかな？」

「ええ。女子で私と親しくしてくれるのは湊ちゃんだけね」

「男子は？」

「遊びに誘われることはあるけれど、親しいと思える相手はいないわ」

「そうか……」

「そういう誘いを受けるせいで、他の女子の印象が悪くなるのも分かるのだけど、誘ってくれるのを断るのも違うと思うの。だって、別に悪いことをしているわけじゃないで

しょっ」

「……難しい問題だな」

「湊ちゃんにもちよつと訊いてみたんだけどね。湊ちゃんもそんな感じのことを言ってたかな」

「……」

「鳴上くんは私とは逆に女子からの誘いが多そうね」

「悠がその言葉に何と返すべきか考えていると、沙織はそんな悠の姿が面白かったのか、楽しそうに笑っている。」

「ふふつ、困らせたのならごめんなさい。……私ね。誰かに必要とされたいの。その相手を好きになれるかは別として、必要としてくれるなら誰でもいいんだと思う。鳴上くんはどう? 私のこと必要?」

「……どうだろう? でも、有里は友達なんだろう」

「うん、そうね。……鳴上くん、今日はこれで帰るわ。私のこと必要になったらいつでも誘ってね。あなたなら他の男子とは違う風に思えるかもしれないから」

「そうだな。でもその時はみんな遊びに行くのもいいと思う」

「ええ、それはとても楽しみだわ。それじゃあ、また」

沙織と別れて寮へと帰った……。

7月1日（水）　　※今のところ7月以降は全部ここ。

2009年7月2日（木）

沙織と一緒に居たせいで沙織に迷惑をかけたらしいことを湊から告げられる。（湊的には委員会コミュ5）。

―夜―【巖戸台分寮】

「あ、鳴上くん！」

屋上でやさしい畑の世話を終えて、自室に戻ろうとしていた悠は、ちょうど階下から上がってきた湊と階段で鉢合わせた。

そんな湊はどこか不機嫌そうというか、名前を呼んだ声にも責めるような響きがあったために、悠は首を傾げた。

「どうした？」

「昨日、じゃない、一昨日かな？　沙織と一緒にいたでしょ」

「え、ああ……バイトの時に会って少し話したな」

突然の質問に悠は一昨日のことを振り返りながら答える。

「もーっ、鳴上くんのせいで、今日沙織が責められて大変だったんだからね！」

「どういうことだ？」

「まったく。鳴上くんはもうちよつと自分が人気あるつてことを自覚した方がいいと思
うよ。まあ鳴上くんが悪いってわけじゃないから、私としても困るところなだけで」
湊は直接的な状況説明をしなかったが、一昨日の事を振り返った結果、それらしい心
当たりがあつた悠は大凡のことを理解した。

つまり、あの時に様子を窺っていた女子生徒たちをキツカケとして、何かそういう面
倒な事態が発生したのだろう。

「そうか……俺のせいで迷惑をかけたなら謝った方がいいな」

「ダメだって。そういうの逆効果だから。というか、鳴上くんは今まで通りでいいんだ
けど、少し注意して欲しいっていうか……うーん、こういうの苦手なんだよねー」

「そうだな」

眉間にしわを寄せて唸る湊に悠も同意する。

悪意とかそういう大袈裟な話ではなくて、それこそちよつとした嫉妬とか、その程度
のことなのかもしれないが、それだけにその感情を解消するのは厄介だったりする。

目立つゴミをほいっとするより、隙間の掃除の手間が掛かる的な話だ。

「むー。やっぱり時間を掛けてちよつとずつ輪を広げていくのが一番なのかな」

「俺に何かできることがあればいつでも声を掛けてくれ」

「うん、ありがと。はー、愚痴ってゴメンね。あ、お詫びにこれあげる。また作ったの。湊はポケットから取り出した物を、悠の掌の上にほてつと乗せる。

「へえ、〃ウサギのあみぐるみ〃か……言っておくが、コミユは出ないと思うぞ」

「いらないから！ ……私のコミユランク、上がってないよね？」

「上がってないな」

「なら、良し！ じゃあ、またねー」

声を掛けて来た時とは逆に、満面の笑みを残して去って行く湊の後姿に、悠は何となく溜息を吐くと、階段を下りて自室へと帰った……。

2009年7月3日（金）

やっぱり気になったので、沙織に謝りに行く。

2009年7月4日（土）

湊がたなか社長と話している場面に遭遇、スカウトされる。（港区に住む人々コミュ

1）。

「ずっとテレビ通販をメインにやってきたけれど、時代はとつくにネットに移ってるわ。そこでアタシもネット通販部門にもっと力を入れようと思ってるんだけど、良い若手がいないくてね……。そこでアナタよ！」

「俺ですか？」

「そう！ アナタこそ次代のスター！ アタシの目に狂いはないわ！」

ずっと利用してきた番組の社長に目を掛けられるというのは素直に嬉しいことではあったが、さすがに話がいきなり過ぎることもあり、悠をしてその状況に戸惑っていた。

「社長！ 私！ 私はー！」

「アナタはダメよ。どう鼻屑目に見ても『可憐な天使』ってところだもの。番組は戦場よ。『美しき悪魔』と言われるくらいになってから出直してきなさい」

「がーん……」

湊はたなか社長の指摘にショックを受けているようだ。

悠的には、『美しき悪魔』よりも『可憐な天使』でいた方がいいのではないかと思うのだが、今後、世の中を渡り歩くには悪魔の方がいいのだろうか……。

「……決断できないみたいね。なら、こちらも妥協して、素材の提供だけでも構わない

わ。どう?」

「素材の提供?」

悠が迷いを持つていると思つたのか、たなか社長はネット動画への直接の出演から、素材の提供へとわかりやすくハードルを下げてみせた。

「あなたの写真を何枚か撮らせてもらえれば、あとはうちのスタッフが加工、編集して、それっぽい動画に仕立て上げるわよ。アナタはその通り看板として客引きをしてくれればいい。そうね……報酬は10万円かどうかしら」

「10万円……」

正直グラツとくる額ではある。

素材として、自分の写真を数枚提供するだけで、その額が貰えるというのなら美味しすぎるバイトだ。

だが、その額と引き換えに自分の姿がネット上に露出されることを考えると、簡単に領いてしまってもいいのか微妙なところであつた。

自分に自惚れているわけではないが、時価ネットの名前を背負つて世間に露出する以上は、それなりの衆目の目に晒されることは想像に難くない。

「あの一、たなか社長。気になつたんですけど、その10万円つてもしかして私が払つた4万円も入つてるんじゃない……」

「アンタはちよつと黙ってなさい。今は彼と話してるの」

「むうー……」

湊の意味深な横槍もたなか社長はあつきりと跳ね除ける。

4万円……なんで払ったのだろうか。

オカン級の寛容さを持つ悠は、そういつた謎行動を受け入れながらも、オカンの立場から湊の金銭感覚が気になって仕方がなかった。

「あー、じゃあ、鳴上くんの素材は私が集めます！　というか、私が動画を作ります！」
「あら、アナタ動画編集とかできるの？　ならせつかくだし任せてみようかしら。アナタたち仲良いみたいだし、彼のレアショットを頼むわ」

「任せてくださいー！」

イマイチ決断できずにいた悠をぶつちぎって、なぜか湊が了承するようなことを言い出す。

自分だけ面白そうな話からハブられそうなのが嫌だったのか、それとも特に何も考えずにその場のノリだけで言っているのか、あるいは何か悠には計り知れない深謀を巡らせているのか。

とにかくまた湊に振り回されそうな気配に、悠はどうしたものかと思いつながらも、自分自身興味があること自体は否定が出来ないまま、結局流されてしまうのであった。

とはいえ——。

「……」

「湊がやる気だ。なぜか、不安しか感じない……。」

「そう思ってしまうのも仕方ないことだろう。」

「我は汝…、汝は我…汝、新たな絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

“節制”のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん…

「“節制”属性のコミユニティである“港区に住む人々”のコミユを手に入れた！」

「鳴上悠の失われた力“節制”属性のペルソナの一部が解放された！」

その後、無駄にやる気を発揮した湊と、湊に協力を頼まれた風花の手によって、鳴上悠をモデルにした“とある高校生の華麗なるピフォーアフター”という動画が夏休み中に制作され、“闇ネットたなか・お試し版”としてネット上で配信された。

なぜ闇とかネガティブっぽく銘打っているのかは知らない。たなか社長の趣味だろう。

その動画の内容をかいつまんで説明すると、平凡な、あるいはちよつと地味目な高校生が、時価ネット商品を使って、最終的には物凄いハジけた青春を送るというもので、静

止画編集でありながらも、その変わりようが話題になり、なかなかの再生数を稼いだ。

それに伴い、関連の商品も売れ、たなか社長は悠に投資した10万円どころではない額を手中に納め、左団扇で高笑いをしながら第二弾を計画中とか何とか。

もつとも、幸か不幸か、普段必要以上にはネットに触れるタイプではない悠は、その事実を軽く小耳にはさんだ程度で、その動画を素材として、更なるネタ動画が作られたり、拡散していつてゐることは、当分の間 知ることはないのであった……。

※適当に画像検索すれば、P4スタート時からP4Dに至った番長の比較画像とかが見られるはず。湊と風花が作ったのはそういう素材を「これを使えばあなたも——」的なテロップをつけた動く静止画動画として編集したもの。

番長MAD動画がここから少し時間が流れた夏休み後に、この世界に解き放たれるという考え方でも間違つてはいない……かも。

2009年7月5日(日)

湊がクラブに入っていく姿を発見し止めるが、なら一緒に連れて行かれる。

無達と知り合う。

2009年7月7日(火)

大型シャドウ戦。

寮の作戦室……。

風花が、ペルソナのルキアを召喚して周囲の様子を探っている……。

風花が加入するきっかけともなった前回の大型シャドウとの戦い。

その時に生まれた仮説、大型シャドウは満月の日に現れる、という考えからS・E・Sのメンバーは満月の日である今日、全員で寮の3階にある作戦室に控えていた。

いつもとは少し違う緊張感の中、不意に風花がその静寂を破る声を上げた。

ルキアの探知能力によって大型シャドウの反応を捉えたのだ。

「——決まりだ。ヤツらは満月の日に出現する」

5体目の大型シャドウの出現に、明彦が確信を持つて頷く。

「月がなんか関係あるんスカねえ？」

「さあな。しかし物語では月で狂暴化する怪物の話はよくあるだろう。現実でもそうだったというだけのことだ」

「満月で狂暴化って言うと、狼男とかっスよね。つーことは、新説・狼男はシャドウだっ

た！ みたいな」

「フンフン。おもしろい考えだね。——そう、満月で狂暴化するという彼らは、満月を合図に共謀して物語に出てくるような事件を起こしていたのかもしれないね」

大型シャドウに関して、進展があるかもしれないということで、作戦室には理事長の幾月の姿もあつた。

唯一の大人であり、シャドウ研究の第一人者でもある彼の、どや顔で発せられた意見を、しかしS・E・E・Sのメンバーは真顔で流した。

「それで山岸。大型シャドウの正確な位置を教えてください」

『はい……ええと。場所は巖戸台の……白河通り沿いのビルです』

ルキアの球状のスカート内部から発せられる風花の声は、通信時のように傍にいても若干エコーがかった声で聞こえる。

そんな風花が発した白河通りという単語に、今回のシャドウ事情を理解した者たちが若干微妙な表情を浮かべた。

「ここ数日、影人間が2人1組で見つかるって聞いてたけど……なるほどねえ」

「？ 白河通りってどんな所でしたっけ。私、あの辺にはあまり行かないもので……」

「行かれても困る」

「聞いたことあるけど……」

ルキアを戻して尋ねる風花に、すでに事情を理解している美鶴とゆかりがやはり微妙な表情のままでも応えた。

「あ、そっか。ホテルんところ。だから、2人1組なわけね。風花も知ってたんだろ？ ホテル街だよ、ホテル街！——ぐぼあ!!？」

「鉄拳制裁！」

「え、ええっ……」

「なかなか良いストレートだ。有里」

「……あー、うん。今のは当然だよ。完全にセクハラオヤジみたいになってたもの」
悶絶する順平に、湊を褒める明彦、動揺する風花に、冷めた目を向けるゆかり、そしてそれら全てをまとめて、そっとしておく鳴上悠。

作戦室からはすでに当初の緊張感が失われかけていた。

「はあ……なーんか、今回はヤな予感する……。行くのヤメよっかな……」

「ま、まーた、ゆかりツチ。意外なトコ子供なんだから」

「ちよつ、あんたねえ……子供はどっちよ！ フラついてるくせに、少しは懲りろつっの！……フン、オツケー、行こうじゃん。私、今日の作戦は、前線で戦うの予約します！」

「え、予約制なの!!？」

「有里。リーダーは君だ。前線に連れていくメンバーを決めてくれ。残りは不測の事態に備えて山岸の護衛兼バックアップだ」

「それじゃあ……」

そして湊は、自分と同じくペルソナチェンジができる悠と、予約で押し切ったゆかり、そして風花の加入で今回の大型シャドウ戦では完全に戦闘要員となった美鶴の三人を選んだ。

「俺は留守番か。……まあ、お前がそう決めたなら仕方がない。今回譲るんだから次は俺だぞ」

「真田さんの中では次もあること決定なんスね。つーか、オレも留守番かよ」

「順平は足にキテるから」

「誰のせいだよ!!」

「順平」

「順平」

「順平」

「ここで総攻撃!!? しかも悠まで!」

【白河通り】

影時間ということもあって、周囲は緑の夜。

普段は重苦しい空気感のそれも、そういうホテルに入るという気恥しさみたいなのを薄れさせるのには役立つてくれた。

それでも、大型シャドウを探してホテル内のドアを開ける度に、散乱する衣服だとか、ベッドの上の二つの棺桶だとか、そういった行為を想像させるようなものは溢れていて、何とも微妙な感じにさせてくれる。

「……」

とはいえ、唯一そういったものでイチイチ騒ぎそうな順平が留守番のために、ゆかりが時折微妙な表情を浮かべる以外は、淡々と探索が進んでいった。

「この中っぽいね」

ホテルの三階、ちよつと他よりも豪華っぽい部屋の前で、リーダーとして先行していた湊が立ち止まる。

大型シャドウの気配……準タルタロス化した空間の歪みも見てとれた。

ここで悠は少し大型シャドウについて考える。

大型シャドウは何を理由にこの場所に存在しているのか。

そしてなぜ、大型シャドウと戦うのに都合の良いこんな空間が生まれているのか。

それらに関する考察だ。

4月、最初の大型シャドウは街中に現れたものを、明彦が発見し、交戦……手傷を負うが、回復する手段を持っていなかったために、寮へと撤退、それを追いかけて現れた。その時は、まだ何も知らなかったこともあり、準タルタロス空間なんて気にしてはいなかったが、特別街に被害は出ていなかったはずだ。

5月はモノレール……ここで公共物に乗っ取るということをやらかしたために、大型シャドウは怪獣映画のように、無差別な破壊を行う存在、そんな可能性も浮上したように思えるが、実際の被害はオーバーラン……モノレールの暴走だけ。

単純な破壊を目的としていたのなら、そんな遠回りな手段ではなく、力の限り大暴れすればいいだけなのに、そうはしていないことから、大型シャドウは別に破壊を目的としているわけではないと考えられる。

6月……一度に二体現れた大型シャドウは、現れる兆候として、風花参入のキツカケともなる、オンリヨウ事件の原因の一端を担っていた。

原因がこの大型シャドウであるのは、大型シャドウを倒した後に、意識不明となつていた学生たちが意識を取り戻したことから間違いはないだろう……大型シャドウは精神の捕食を行ったのだ。

いや、より正確には、人間の中に存在するシャドウの解放だろうか……陽介の時のア

レが、完全に特殊な事例というわけではなければ、そういうことになる。
「……………」

ともかく、大型シャドウの目的は破壊ではなく、捕食……そう考えれば、それぞれの狩場や巣を傷つけないように、大型シャドウ自身が準タルタロス空間を創り出しているということも考えられるのではないだろうか。

そして――。

「(大型シャドウが準タルタロス空間を創り出しているとするとするならば……仮にタルタロスを創り出した存在がいた場合、それは、確実に大型シャドウ以上の力を持った存在ということにならないか……?)」

その考えに悠の心が少し冷える。

シャドウの王、魔王、神……子供みたいな想像ではあるが、こんな非日常の中での出来事だ、本当にそういう存在がいる可能性はある。

だとしたらそれが自分たちの真なる敵なのだろうか……。

「――鳴上くん、考え事? 集中して」

「ああ、わかってる」

まだ、情報が足りない……。

突入前にメンバーの調子を確認した湊に諫められたこともあり、悠は考察を中断する

と思考をこれからの大型シャドウとの戦闘へと戻した。

『敵、個体名は“ハイエロフアント”。アルカナは“法王”。電撃は反射されるみたい
です。光と闇も無効化されます。それ以外の属性で攻撃してください!』

その大型シャドウは、でつぷりと太った男が女性をモチーフにした椅子に座るとい
姿をしていて、アルカナが“法王”な上に、そういうホテルに居るからというイメージ
もあるかもしれないが、教義を忘れ墮落した法王、そんな風に見えた。

戦いが始まって、悠たちが共通して感じたことは、この大型シャドウはあまり強くな
さそうだというものだった。

三つの属性に耐性を持ち、バステも通じず、ゆかりには弱点となる電撃属性を使つて
くるが、それでも力押しが通じる相手、そういう印象を持った。

実際、それは間違いではない。

悠たちがこれまでにタルタロスで得た経験は、ハイエロフアントを圧倒できるレベル
に達していた。

だが、それでも敵は大型シャドウなのだ。

普通ではない。

そういった僅かな緩みが戦況を一変させることはままある。

“滅亡の予言”。

ハイエロファントが使った、全体に“恐怖”を与えるそのスキルが、彼らにいずれ訪れる“終わり”を垣間見せる……。

『勝て……ない……』

“それ”を前にして悠は膝を屈した。

悠だけじゃない。

誰もが悠と同じように“それ”の発する圧力に這い蹲っている。

絶対に無理だ。

あんなの勝てるわけがない。

心も身体も、自分を形作る全てがそう言っている気がした。

やつぱりどこか甘く見ていたんだと思う。

何でも出来る気になっていたのかもしれない。

だってそうだろう。

それはすでに彼らが乗り越えた過去の出来事で、その結末を少し変えるためだけに自

分がこの場所に来たというのなら、当然それは自分の力を加えるだけで出来ることなのだと思うだろう。

だけどそうじゃないのだと思ひ知らされる。

戦う戦わないの話ですらない。

『俺が間違っていたのか？ 不老不死でも何でも俺たちは、最初から“それ”に――

――“死”という存在に敗北していることなんてわかりきっていたじゃないか……！』

本当はもうダメだと諦めたかった。

真実を知ろうが、あるいは知ったからこそ、どうしようもないことというのが現実には確かに存在していた。

でも、諦めたら喪ってしまふ。

それがわかっていたから、ここで意識を手放してしまふことはできなかつた。

『無理しなくていい。キミが助けようと思ってくれたことは嬉しかった。でも、やつぱりこれは僕が――いや、俺がやるべきことなんだ』

『(誰、だ……?)』

不意に声が聞こえて、何とか視線を向ける。

悠たちに対して背中を向けた少年が、“それ”が待つ 空へと向かつて、ふわりと浮かび上がる。

闇が斬り払われる。

“絆”が“恐怖”を燃やし尽くしていく。

少年と少女が、それを感じて振り返った気がした――。

――悠の目に今の敵の姿が映る。

ハイエロフアント。

もう緩みはない。“恐怖”も。

横目に湊たちの復帰が映り、風花の通信も耳に入る。

先ほど見た光景はもう少ししか覚えていない。

ただ、その結末を迎えてはいけないうことだけは心で理解した。

「イザナギー！」

電撃が効かないことはわかっている。

それでも、今はイザナギだと、なぜだかそういう思いがあった。

イザナギと同時にコンビネーションで攻める。

「続くよー！」

湊たちも悠に続いて追撃を仕掛ける。

元々力量の差はハッキリしていた相手だ。

そうやって攻勢に転じることが出来ればすぐだった。

∨悠たちは大型シャドウ、ハイエロフロントを倒した……。

∨……………!?!?

そして再び“心”を試される。

だけど今度は――。

……………。

……………。

……………。

ふと。

気がつくのと、悠は聳える壁の前に立ち尽くしていた。

壁は無数のブロックで構成されており、それらは例えばジエンガのように、引き抜いて別の場所に移したりできるらしい。

それを足場に、羊型の悪魔たちが壁の頂上を目指して進んでいる。

よくわからないが、悠もそうしなければならぬようだ。

どうであれ、立ち尽くしていても仕方がない。

体感型のパズルゲームみたいな状況を乗り越え、悠は壁の頂上へと立つことに成功した。

そこには部屋がひとつだけあって。

悠は扉を開きその中に入った。

部屋は懺悔室のような装いになっていた。

悠が部屋の中に備え付けられていた椅子に座ると、中空に質問が文字として浮きあがった。

∨好きなのはどっち？

【P3の女性陣】【P4の女性陣】

じゃんつと二本の紐が空から垂れてきた。

どちらかを引いて質問に答えろと言うことらしい。

左の紐ならP3、右の紐ならP4ということのようだ。

これは……………

……究極の選択だ。

単語の意味はわからないが、問われている内容は察してしまった。

つまり、現在の仲間と、かつて——あるいは未来の仲間とどちらが大切かという質問だ。

「違うでしょ、鳴上くん」

悠が答えについて悩んでいると、懺悔室の四方の壁が、パカツとドツキリのセットか何かのように倒れ、暗闇に包まれた空間にスポットライトが当たる。

ライトに照らされているのは、懺悔の椅子に座っている悠と、それぞれ左右の空間に現れた見覚えのある女性陣である。

「どちらが大切か……じゃなくて。どちらが好きか。ハッキリ言っちゃうと、この中の誰を選ぶのってこと」

声の主は湊だ。

「鳴上くんが良い人だったのは知ってるよ。前の仲間との絆だって大切だよ。でも現在はどうなの？　一緒にいるのは私たちだし、それは私たちを選んだってことじゃないの？」

P3の女性陣を代表して湊が悠に問いかけてくる。

「違うっつーの。鳴上くんは頼まれたから助っ人に行っただけ。本当はあたしらと一緒に

にいたい決まってるじゃん」

ちよーつと待ったとばかりに、P4の女性陣から千枝が右手を伸ばして割り込んだ。

「あたしらっていうか、先輩は私と一緒にいたいんですよね？ ねー、先輩」

「ちよつと、りせちゃん。ここ、抜け駆けする場面じゃないから」

「えーでもお、あの人だって、この中の誰を選ぶのかって言ってたじゃないですか。もういつそ、誰が一番決めてもらった方が早くありません？ どうせ、私が勝つに決まってますもん」

「何なのその自信……」

「だって、アイドルですし」

「ゆ、有名人が有利だと言うなら、僕だって探偵王子としての知名度があります」

「確かに直斗くんは色々手強い気がするけどお。王子って別に有利な要素じゃないですよ」

「うっ……」

「わ、私は女子高生女将だよ！」

「それって、先輩に旅館を継がせるってことですか？ 先輩はそういうのじゃないと思うなあ」

「そ、それはりせちゃんの考えであって、鳴上くんがどう思うかは別でしょう」

「まあまあ、だったらここはいつそ、間を取ってあたしと警察官になるって言うのがいいんじゃないかなー……なんて」

「それはない」

「なんでさー！　鳴上くんが警察官つていいじゃん。将来的には堂島さんみたいな感じで想像できるでしょー」

「千枝。鳴上くんと堂島さんは違うから」

「スゴイ冷静に言われた!!?」

「——とまあ、鳴上くんはこういうノリに疲れたから都会に戻ってきたんですよね?」

「風花、黒ー……でも、そうだよ。もう攻略済みならどうでもいいじゃん。今度は私たちと絆を築いて、そのままゴールインしちゃえば」

「その通りだ、鳴上。君と彼女たちのあれこれはもはや終わった物語にすぎない。そして、君か、あるいは彼女たちは、そのただ一人になることは叶わなかった。チャンスを逃したのだ。私たちならばそんなミスは決して犯さない」

「一撃で仕留めるであります!」

「誰!!?」

「今はまだ秘密ですが、P3のメインヒロインという大役を仰せつかっています」

「ちよつと待つて!　メインヒロインは私じゃないの?　コミュも恋人のアルカナだ

し、最初から仲間だし、回復役だし、完全にメインヒロインでしょ?」

「負けヒロインですね」

「ちよつ、風花! こつちにまで毒吐かない!」

悠は目の前で繰り広げられる女の戦いに圧倒されていた。

左か右か、右か左か、P3かP4か。

答えが出せないままに時間だけが過ぎていく……。

「答えが出せないってことは、どちらでもないってこと。あんたたちの時代はもう終わってことよ!!!」

バンツと左右のどちらでもない、真ん中、悠の正面の空間に、新たな選択肢が紐と共に現れ、スポットライトが突然現れた彼女たちを照らす。

【P5の女性陣】

個性的な怪盗服に身を包み、素顔を隠した仮面の集団。

悠の記憶の中に完全に存在しない誰かが、新たに現れた選択肢についての主張を始める。

「時代は常に先に進んでいるの。悲劇ぶった過去の救済なんて終わりにして、私たちと怪盗ライフを始めれば万事解決よ！」

「そうね。たとえ人気アイドルだって私たちの知名度には勝てないわ」

「つーか探偵王子も二代目いるしな。初代はその仲間と一緒にお役御免つてことで」

「あなたの力。きつと私たちのところでも活かせるはず。私たちがまだ到達していない真実だって、あなたなら白日の下に曝け出せるかもしれないわ」

「——で。結局どれを選ぶの？」

いつの間にか悠の後ろに回り込んでいた湊が、椅子の背もたれに手を掛け、耳元で囁く。

「俺は……」

※現在の状態

【P3の女性陣】 【P5の女性陣】 【P4の女性陣】

【YOU】

【湊】

～あなたなら、だれを選びますか……？

「——る上くん！ 鳴上くん！ おーい、鳴上くんってば！」

「あ、有里？」

「あつ、よかった！ やつと気がついた。って言っても私もさつき気がついたばかりなんだけど」

「夢……だったのか？」

「うーん。精神攻撃ってやつかな。大型シャドウ、倒したつもりだったけど、倒せてなかったみたい。私ももう少しで鳴上くんを押し倒しちゃうところだったよ。あはは、危ない危ない」

「え？」

見ると湊の頬はほんのり上気しているようにも見える。

というか、シャンプーか何かの良い香りがする。

そしてここは、大型シャドウの反応があつたラブホテルの一室……。

「つてか、鳴上くんもハダケ過ぎだから。とつととシャツのボタン止めなよ」

「あ、ああ……すまない」

「別に謝らなくてもいいけどね。ギリギリで何もなかったから。——ねえ、風花」

『え、あ、はい!』

「……何でちよつと慌てるの?」

『え、その、ちよつとゆかりちゃんと桐条先輩が……じゃなくて! な、なんでもありません!』

「そこまで言ったら何でもなくないと思うけど」

「大変みたいだな」

「そうだね。——さ、じゃあ、本当に取り返しがつかないことになつちやう前に二人と合流しようか」

「ああ、行こう」

その部屋から廊下に出て、風花の指示に従つて、しばらく進むと、何やら微妙な雰囲気になつているゆかりと美鶴の二人の姿を見つけた。

「よかつた。そつちは大丈夫だったのか?」

「な! 何も! べ、別に何もなかったわよ! ねえ、桐条先輩!」

「あつ、ああ……そうだな。何もなかったとも」

悠の気遣いに対して、何とかその状況を自力で抜け出したはずの二人が、これは完全に何かがあったのではと思わせる過剰な反応を見せる。

全てを知っているであろう風花も無言だ。

ついでに、二人の衣服に若干の乱れが見えているのもよくない。

「キスでもしたの？」

「し、してないからー」

湊のド直球な質問が飛び、ゆかりがパタパタと手を振った。

関係のない悠も、どうにも気が気ではない。

もし本当にしていたとして、それを告白されてもどうしようもないからだ。

そもそも、今はそんな状況ではないだろう。

倒し損ねたらしい大型シャドウを倒さなくてはならない。

にしても、悠は考える。

「(手応えは確かにあった……。本当に倒し損ねたのだろうか。再生能力を持つとか、分身だったとか、何かしらのトリックがあったのかもしれない……。まずはそれを見極めなくては)」

そう、ゆかりと美鶴のあれやこれやなどではなく、だ。

『あれ、この反応……あ！ すみません。今わかりました。この大型シャドウは先程のとは別の個体です！』

「別？」

「なるほど……。先程の大型シャドウは倒せていなかったのではなく、先月のように、大型シャドウは初めから二体いたということか」

『そうなります……。すみません。もう一体いるなんて予想してなかったです。どうやらみんなを“怒殺”状態にしたのも、その二体目の大型シャドウの能力のようです』

「とにかくそいつを倒せばいいってことでしょ」

『はい。また大型シャドウとの戦闘になりそうですが、大丈夫ですか？ 順平さんと真田先輩も控えています。無理はしないでください』

精神的なダメージを除けば、全員まだ充分な余力があった。

そう言えるだけの実戦を越えて来ている。

『もう一体の大型シャドウの本体は、先程と同じ部屋にいますようですが、入り口に結界が張られており、今のままでは手出しが出来ないみたいです』

「結界？」

『タルタロスの行き止まりのようなものですけど……ちよつと待ってください。ええと………分かりました“鏡”です！』

「『鏡』……………」

『このホテルにある『鏡』のいくつかから本体と同じ反応が感じられます！ 多分この

『鏡』を壊せば結界が解けるはずです』

どういう原理かはわからないが、風花がそう言うのならそうなのだろう。

ナビを信じられなければ探索は進められない。

「『鏡』……………そういえば、探索してる時になんか変に思ったような気がするかも。何でそう思ったんだっけ……………」

「そうなのか？ 室内が暗かったし、そこまで気が回らなかったな。有里に鳴上、君たちはどうだ？」

「いえ、俺もそこまでは……………。シャドウとか分かりやすいものを警戒していたので」

「私もそんな感じだったけど……………とりあえず見て回れば分かりますよ。ここも、戦う意志さえあれば、決着がつくまで影時間が終わらない感じですけど、もうだいぶ時間が経ってるし、一気に見て回りましょう」

「そうだな」

影時間になって、白河通りまで移動し、ホテルを探索し、大型シャドウと戦い、精神攻撃を受ける……………確かに本来であれば1時間は経って、影時間が終わっている頃合いだ。

それでもこうして続いているのは、タルタロスのように、戦う意志が消えていないから……。

「(大型シャドウも外敵である俺たちと決着をつけたがっているのか? まさか倒されたいと思っているわけでもないだろうし、結界を張っているとはいえ、それは俺たちを消耗させるための時間稼ぎだろう……。逃げる気ならとつくに逃げてるよな……。?)」

そんなことを考えながらも、もう一度ホテル内を探索して回ると、自分たちの姿が映らない鏡があることに気づいた。

ゆかりが引つ掛かっていたのも、探索してる時に微妙な気持ちになつて、視線を逸らした時とかに、自分が映っていなかったのをうつすらと認識していたかららしい。

悠たちは湊の指示のもと、手分けしてその鏡を割っていく。

そして再び、先の大型シャドウが居た三階の、ちよつと他よりも豪華っぽい部屋の前に戻ってきた。

『この先に本体がいます! 大丈夫ですか?』

「大丈夫」

湊が悠たちの状態を見てから頷く。

『先程も言いましたが、大型シャドウの『悩殺』攻撃には注意してください』

「うん。——じゃあ、行くよ!」

「安心して、風花。相手が何をしてくるかわかってるのに喰らったりなんて——はうっ!!?」

「落ちたー!!?」

湊が扉を開けて、戦闘状態に突入するとほぼ同時に、二体目の大型シャドウ「恋愛」のアルカナに属する「ラヴァーズ」が放った「エンジェルアロー」——ハートの矢が、何やら頼もしげなことを言っていたゆかりにさくつと刺さる。

『はあ。ゆかりちゃん、「悩殺」されてます……。注意してください……!』
お約束とも言える展開に、溜息を吐きながらも、風花の注意を促す声が通信で聴こえてくる。

ちなみに、ラヴァーズは「恋愛」のアルカナに属しているということがわかりやすい、ハートに羽根が生えたような姿をした大型シャドウだった。

その身体は羽根の部分が流動し、触手状に、そして鞭のように打ち付けることが出来る構造になっていて、それがこの大型シャドウの基本となる物理攻撃のようだ。

「た、岳羽しっかりしろ! 意志を強く持つんだ!」

美鶴の叱咤にもゆかりの反応はない。

とろんとした虚ろな目で、ふらふらとしている。

「とにかく回復を——」

『あつ、待つてください！ 敵大型シャドウの反応を見るに、戦闘中、一定の時間毎に“悩殺”スキルを使ってくるみたいです。基本的に対象は一人のようですが、一連の流れを見ても、非常に防ぎづらいと思います。それを考慮に入れて作戦を立ててください』
先程まで全員が“悩殺”されていたことに加えて、今回またあつさりと“悩殺”されたゆかりの姿を見れば、風花の言葉はもつともだ。

「え、それって、回復に時間を使うより、ゆかりを囮として放置してた方がいいんじゃないの。私“悩殺”されたくないもの」

ヒュン——と湊の頬を矢が掠める。

ついさきほどまでふらふらとしていたゆかりが、風花の忠告にそんな正直な感想を漏らした湊に対して反応したのか、明確に湊を標的として弓を構えている。

一筋の血が流れて、湊は一瞬の間を置いた後、脱兎の如くその場から逃げ出した。

「ゴメン、ゴメンってゆかり！ 冗談！ いつものジョーダンだから！」

必死に謝る湊だが、どうやらその“いつもの”というワードは逆効果だったようで、意識がないなりに“いつも”やられていることを思い出したのか、ゆかりの矢の勢いが激しくなる。

怒怒怒怒怒——ツ!!!

と、傍目には、まるで流星群のような矢の大群が乱れ飛んでいる。

「鳴上、こうなれば有里が岳羽を引きつけている間に、我々で大型シャドウを仕留めるぞ！」

「了解です」

その状況でも、冷静さを持った美鶴の判断に、悠も頷く。

二人で大型シャドウを相手にするというのはかなり辛いですが、幸いというか相手は搦め手、精神攻撃を得意とするタイプのようなのだ。

その搦め手の最大脅威がゆかりに向いている以上、二人でも戦えないということはないだろう。

ラヴァーズは搦め手以外では、火炎スキルを使ってくるようなので、悠はペルソナを火炎を無効化できる「カハク」にして、まずは美鶴に「ラクカジャ」をかけて防御能力を上昇させた。

美鶴もそれを受けて、ペンテシレアと共にラヴァーズへと挑む。

「ちよつ、ちよつとお！　まずはリーダーの私を助けるべきでしょー！　わーっ！つ!!?ズル、インチキ！　なんでゆかりの弓は矢が尽きないのー!!!」

そんなことをしている間にも逃げ回っている湊の今更なツツコミ……その答えは当然だがペルソナの恩恵であった。

ペルソナ使いが使う武器は、ペルソナ使いがパラメーターの補正を受けて超人化する

のと同じように、特殊な強化が為される。

剣や刀ならそう簡単には折れなくなるし、ゆかりのように弓なら、矢が手元に戻って来たり、そもそもスキルのように、光の矢みたいなものを作り出して放つことが出来た。

その為、極論を言ってしまうと、ペルソナ使いは玩具でも戦えるのである。

ただ自分たちが“そういうもの”だと認識すればいい。

そうすれば、心の力であるところのペルソナが“そういうもの”なのだと世界に認知させる。

実際これまでも、湊がラクロスステイツクで戦っていたり、ゆかりがまんま おもちゃの弓をびよんびよんしていたのが、それを示している。

「っー」

激闘が続く……だが、どちらかというところ、大型シャドウがどうこうと言うより、湊V S ゆかりの戦闘が激しさを増していた。

「鳴上千くん！ 手、手だして！」

「手？」

薙刀を回転させて器用にゆかりの矢を切り落としていた湊が、連撃の隙間をついて、悠へと向かって凄いい勢いで走ってくる。

悠はその勢いに押されて、刀を持っていない左手をパツと出してしまった。

「はい、ターチー！」

「え？」

勢いそのままに悠の横を駆け抜けた湊が、パアンと自分の手を悠のそれに合わせ、そのまま彼方へと逃げる。

「ほら、タッチー！ タッチしたから！ ゆかり、次狙うのはあっち！ あっちだよ！ わかる？ あっち！」

「……え？」

悠がツツコミを入れる間もなく、実際にゆかりの標的が悠へと移った。

いい加減湊との追いかっこが嫌になっていたのかもしれない。

「そうなるのか……！」

悠は湊に恨めしげな視線を向ける。

対する湊は「頑張つてー」と満面の笑顔を浮かべて手を振った後、真剣な表情でとつととラヴァーズと対峙してしまった。

「……」

そして悠はラヴァーズから一転して、ゆかりと向かい合うことに。

「くそっ……！」

ゆかりの矢を半身、切り払いなどで躲していくが、なるほど、これは辛い。

それに仲間を相手に本気で戦うことはできない。

そこで悠の頭に浮かんだのは、かなり姑息な戦法——イザナギハメであった。

この戦法を例えば——そう、あくまで、例えば格闘ゲームで現すとしたら、□ボタンのコンボから、○ボタン連打でイザナギを呼び出し続け、パーフェクト、更には2戦目にバーストからの超必殺で完全勝利を収めるといふ……。

対人戦闘では、まず決まらないだろうが、もし決まってしまったら、それなりの仲の友人が相手でもガチ切れされ、リアルファイト必至の初心者殺し技と説明できるだろう。

まあ、実際には——。

「電撃が弱点の岳羽をイザナギで一気に押さえ込む……!」

程度の考えであつたのだが、実際やつてるとはだいたい同じだから、例えは決して間違つてはいない。

だが、問題は、当のゆかりにはイザナギハメが効き辛いということであつた。

「くっ……イザナギより、岳羽の矢の方が速いか……!」

湊が反則と言うのも領けると、ほとんど途切れることのない矢の雨を前に、イザナギが防戦状態に陥る。

悠はそれを見て、その射線上からまずは自分が離れて、次にイザナギを消すと、すぐ

に別のペルソナ——タケミカヅチを喚び出した。

「！」

イザナギという目標を失った矢は、今はもう誰もいない明後日の方向へと飛び去り、横合いからのタケミカヅチの突進にゆかりの行動が阻害される。

悠のタケミカヅチは湊に遅れて、シャッフルタイムで入手したものであるが、なぜか古代人的な見た目の、その胸の部分にドクロの刺繍的なものが入っており、しかもやらと物理に特化していた。

それもあつて間合いを詰められると、相手からすればかなり厄介に思うはずであった。

それに一応ゆかりの弱点である電撃スキルも使える。

『鳴上千ん、もう少し……タイミングを合わせてください！ 湊ちゃんが総攻撃での決着を狙っています！』

なるほど——と悠は、タケミカヅチのおかげもあつて、少し余裕のできた頭の中で“悩殺”を解除できる“チャームデイ”を持つペルソナを準備する。

『——今です！』

どこかの軍師のような、ナビの合図に、悠はゆかりの“悩殺”を解除すると、その足でラヴァーズへの総攻撃に加わる。

“悩殺”を解除されたゆかりも、状況の把握に一瞬戸惑った様子を見せたものの、総攻撃をするとうことはわかったようで、少し遅れてそれに加わった。

それでも無意識の激情か、いつもより攻撃は激しい。

いや、そもそも今のことは覚えていなくても、その前にも“悩殺”でかなり恥ずかしい目に遭わされているのだ。

その激情は当然であつた。

そして――。

∨悠たちは大型シャドウ、ラヴァーズを倒した……。

「今度こそ終わりー!」

湊がラヴァーズが霧散していくのを見て、はーっと息を吐く。

「なんかあつさりだったね」

「「……………」」

「ちよつ、何よみんなしてその反応……」

そりゃあゆかりはいきなり“悩殺”されて、最後の総攻撃に参加しただけだし……と、言わないのはせめてもの優しさ。

ではなく、キレたゆかりの厄介さをその身で体験した防衛本能からなるものである。

「ううんいいの。ゆかりはもう何も気にしないでゆつくり休んで」

「……湊が優しいと何か不安になるんだけど」

「大丈夫だ。岳羽。何もなかった。いいな。何もなかったんだ」

「はあ……」

美鶴にも念押しされて、悠に視線を向けるゆかり。

悠はただ、そつとしておくことによってその場を逃れた。

ともかくにも、7月の満月の夜。

五体目と六体目の大型シャドウの討伐に成功したS・E・E・S。

▽また、ひとつ厳しい戦いをくぐり抜けた。

▽仲間同士の信頼感が高まった気がする……。

▽増え続けていた「影人間」も、これでまた減ることだろう……。

だけど、彼らはまだ知らない。

そんな彼らの人知れず行われているはずの戦いを、向かいのビルの屋上から観察していた人間が居たことを……。

——……影時間が終わる。

2009年7月8日(水)

元氣のないネコを保護。(動物王国コミュ2?)。

2009年7月9日(木)

タルタロス、無骨の庭ヤバザ・前半が開放される。

2009年7月10日(金)

湊がクエストのネコを探すが見つからない。

犯人は鳴上悠。

「ネコがいなくて……」

「ネコ?」

「……………」

悠の腕の中でなうーと鳴くネコの姿に無言になる二人。

「……ちなみにだけど、そのネコってどこで保護したの?」

「ポートアイランド駅の駅前広場の外れだな」

「……………」

「鳴上千んのせいかーっ!?」

湊の怒りもなんとか治まって、話題は当たり前のように悠が保護したネコのこと。

「それで、この子ってどうするの? このまま飼うの?」

「別にそれでもいいが……」

「じゃあさ。名前決めようよ!」

「名前……何か候補はあるのか?」

「そうだなー。ネコでしょー? ソラ、モモ、レオ、タマ、クロ、コタロウ、ポチ……あ、
ピーンと来た! モルガナってのはどう?」

「にゃー」

「ん」

「あつ、気に入った? いま反応したよね? よーし、今日からキミの名前はモルガナに

決定!」

2009年7月11日（土）

ゆかりと風花が得た情報から、美鶴や幾月に事情を聞く。

―夜―【巖戸台分寮作戦室】

幾月と仲間全員が揃ったので、美鶴から、ホテルでの戦いの報告があった。

そして報告も終わり……聞く立場であつた幾月が口を開こうとしたところで、ゆかりが待ったを掛けた。

「……あの、この際なんで桐条先輩に訊きたいことがあります」

「私に？」

「私だけじゃないと思うけど、ここに來てからビツクリの連続で……。私……。少し流されてきた気がするし、だから、この際、はっきりさせたいんです」

ここ最近、ゆかりが風花に頼んで、何か調べ物をしているのは悠も知っていた。

その上でハッキリさせたいことは何だろうか。

「ズバリ訊きますけど……先輩、私たちにまだ何か大事なこと言っていないんじゃないですか？ 例えば“影時間”や“タルタロス”のこと、分かんないみたいに言っていましたけど……あれって10年前の“事故”と関係あるんじゃないですか？」

「10年前のジコ？」

順平は何の話だときよんとするが、悠にはその話に心当たりがあった。

前にゆかりが話してくれた、ゆかりの父親が巻き込まれたという事故のことだろう。普段は抑えていても、それがゆかりの戦う理由として、根幹にある以上、キツカケがあれば噴出してくる。

それが今日このタイミングだったという話だ。

「10年前、学園の周りであつた爆発事故でたくさん人が死んだって話……幸い生徒は無事だったみたいですけど、何かへん。同じ頃、一度に何十人も生徒が不登校になつているんです」

「その何が変わなんだ？ ジョがあつたから、ビビつて休んだとかそういう話だろう？」

「そ。建前ではそうなつてる。でも、実際は違う。不登校なんて記録だけで、実際には急に倒れて入院したつて。これ、似てますよね。風花の時に意識不明になつた人たちと」

少なくとも、風花の時の原因はシャドウだった。

なら、10年前にもシャドウが現れていたのだろうか、そしてその事故の原因も？

しかし、その割には風花の時の対応は後手に回っている。

「ちゃんと説明してください！ 学園は桐条グループが建てたんだから、桐条先輩は知ってるはずでしょ！ 私、ホントのことが知りたいんです！」

「……隠してる訳じゃない。必要のないことは告げていないというだけだ。しかし……」

静観していた幾月が仕方ないさと後押しをする。

「分かった。全て話そう……」

美鶴は一呼吸置いた。

そして、自分の知る事柄を話し始める。

「シヤドウにはいくつも不思議な能力があるのは君たちも知つての通りだと思うが、研究によれば、それは時間や空間にさえ干渉するものらしい……」

時間に空間……影時間のことを考えればそれはよく分かる。

その中で活動しているのだから、何かしらの関連性もあるだろう。

しかし、悠はそれ以上に何か引つ掛かっていた。

時間や空間を越えて起こる現象……他にも何か体験したことがあるような気がする。

いや、それどころか今この場所に居ること自体が……ダメだ、その考えはなぜだかまとまらない。

とりあえず、話の続きを聞こう。

「私たちは敵と思つているからあまり意識しないが、もしそれを利用できるとしたら……どうだ？ 何か大きな力になるかもしれないと思わないか？」

「え……？」

「大きなというか……ペルソナになるんじゃないですか？ この間の陽介—— 失踪者

の時がそうでした。人間の中からシャドウが現れた。つまりペルソナとシャドウは表裏一体の存在……」

これまでのシャドウの「捕食」と思われていた行動も、同族に呼び掛け、そして増やしている行為だと考えることもできる。

繁殖よりも直接的に、シャドウの数を増やしているのだと。

「それは私としても予想外の出来事だった。だが、当然可能性としては考えられることだったのかもしれない。……」

美鶴はそこで一度目を伏せる。

代わりに口を開こうとした明彦を軽く手で制する。

「……私のペルソナは後天的なものだと言うと、少し意味が違うかもしれないが。君たちのように影時間に適応してすぐに使えるようになったものではない」

「どういうことですか？」

「当時は召喚器がなかったというのものもあるが、実験の末に無理矢理覚醒させたようなものだと思ってくればいい。その際に、ふと、研究者たちにとっては、自分もシャドウと同じだな、などと自嘲した覚えはある」

「実験って……」

「実験とは言っても大層なものじゃない。ちよつとデータを取られたり、タルタロスの

エントランスの調査に同行したり、その程度だ。一応適性自体はあったから、色々なことから、目を逸らすことを許されなかったのさ」

「そう、ですか」

「先程の話に戻るが、今から14年前。一人の男がシャドウの力を我が物にしようと考え、実践に移した。桐条グループの先代、*“桐条鴻悦”*……私の祖父だ。祖父は単純にペルソナを得ようと思った訳ではなく、何か大きなものを作り出そうとしていたらしい」

「大きなもの……？」

「詳しいことはわからない。しかしそのために祖父は、研究者を集い、大量のシャドウを集め始めた」

「シャドウを集めたあ……？ 正気かよ」

「集めるってどうやってですか？」

「さあな。ただ、倒すのではなく、集めるといっただけなら、乱暴な話、そのシャドウには壊せない檻でも用意して、そこに追い立てればいい」

「なるほど」

話を続けるぞ……と美鶴はゆかりが気になっていた事故について触れる。

「10年前……計画開始から4年が経ち、実験の最終段階。12にカテゴリーズされ、ま

とめられたシャドウをひとつにしようとした時に、「暴走事故」が起こった。それこそが岳羽の言っている事故だ」

「暴走……」

「強大な、強大となりすぎたシャドウの力を抑えきれなかったのだろう。結果として、制御を失ったシャドウの力によって、後には忌まわしい痕跡が残ることになった」

「それって……」

「そう。影時間とタルタロスだ」

それが始まり。

「(つまり、影時間やタルタロスは10年前に桐条グループが生み出した……。俺たちはそれぞれで決断したとは言っても、桐条グループの後始末をさせられている形になる訳か……)」

自然現象からなるものではなく、人為的な発生源があるのなら、解消できなくはないかもしれないと樂觀的にはなれない。

悠だけじゃなく、その事実を初めて聞いた者たちは、誰もが絶句し、自らの思考の海に沈む。

その中で口を開くのは、やはり最初に真実を求めたゆかりだ。

「待ってください。今の話が本当なら、なんで学園がタルタロスに？ まさか実験を

やった場所って」

「……そうだ。全て君の考えている通りだ。傘下にあつて、人も集まり、最も好きなようにできる」場所……おそらく、ポートアイランドは最適だったんだ。実験の場所は紛れもなく10年前の月光館学園だ」

「それ……どういうことですか……！　つまり私たちはそんなことの後始末をさせられてるってことですよ？　なんでそんな！　私たち騙されていたってことですか!!?」
桐条先輩だけじゃない……真田先輩だつて知つてたんですよ!!?」

「……ああ」

「じゃあ、なんで教えてくれなかつたんです！　それとも先輩は、戦いさえできれば、戦う理由なんてどうだつていいつてことですか!!?」

「そんな風に言つた覚えはない！」

確かに明彦のこれまでの言動からは、戦いたがつてる、としか思えない部分は多々あつた。

だけど、それはあくまで表面的な部分であつて、明彦の本質ではない。

それでも明彦は痛いところを突かれたとでも言うような、バツの悪さを見せた。

「……黙っていたのは、確かに私の意思だ。そういつた筋道よりも君たちを確実に引き入れることが大切だと思つたんだ。理不尽だろうとシャドウを倒すことができるのは

私たちだけ。ペルソナ使いだけだからな。……済まなかった」

「いまさら……!」

「岳羽君。罪は『過去の大人たち』にある。そして彼らは、みんな自らの行いによって、その暴走事故で命を落とした……。今はもう、当事者は居ないんだ。謂れない後始末なのは、みんな同じなのさ」

「でも……」

「事故から10年、その事故で消失したと思われていたシャドウたちが、どうして今になって目覚めたかは本当にわからない。でも、目覚めたことは、見つけて倒せるということでもある。——これ、どういうことか分かるかい?」

「……影時間が消せる?」

湊の呟きに、幾月はその通り! と手を叩いた。

「本当なんですか!?!」

「元凶のシャドウは消失したと思っていた。でも、影時間は残っている。原因不明。だったら、もうタルタロスを探索するしかない。これがこの間までの活動方針だ」

「はい……」

「しかし、大型シャドウが現れ、その研究をして、状況は変わった。今日は実はそれを伝えようと思っていたんだ」

「それ、影時間を創り出した存在がいるなら、それを倒せばいいみたいなことスか？」
「そういうことだね。可能性はかなり高いとみている」

「じゃあ、タルタロス探索も必要ない？」

「いや……それは継続した方がいいだろう。シャドウも強くなってきたし、タルタロスの存在が大型シャドウとリンクしてるのも事実だ。あの行き止まりとかね。探索することで実戦経験を積めるし、新たにわかることもあるだろう」

幾月の言葉が事実なら、何もかもが手探りだったこの状態で明確なゴールが見えたことになるとなる。

「だけど、気になることがない訳でもない。」

悠はそれを尋ねることにした。

「ひとつ良いですか？」

「何かな？」

「影時間を創り出したのはシャドウで、そのシャドウは消失したと思っていたけど、生きていたから、それを倒せば、影時間やタルタロスは消えるに違いないってのは良いんですけど、そもそもシャドウは影時間の前からいたってことですか？」

「……そうなるね」

「じゃあ、影時間を消しても、その他のシャドウは消えないってことでは？」

「そうかもしれない……。しかし、影時間という境界が曖昧なものがなくなれば、そこから生まれるかもしれないなかった被害は消える。今は奴らの世界への扉が開きつばなしみたいなものだと考えればいいだろう。それを閉じるというのは充分有意義なことだ」
確かにそうだ。

シャドウの発生理由はわからないが、そんなことは多くの生物に当てはまるようなことでもある。

理由なんて、気にすることじゃないのだろうか……。

それでも引つ掛かっているのは、シャドウが人間から出てくるところを見たからかもしれない。

影時間の始まりを知って、事態は進展したようにも思えるが、美鶴たちからすればすでに知っていたことであるのも事実だ……。

それに、これだけでゆかりの美鶴たちへの不審が拭い去れたという訳でもないだろう。

亀裂は確かに存在している。

それでも終わらせ方も知ることが出来たのは大きい……。これからが本当の戦いの始まりだ。

2009年7月14日(火)

期末テスト。

Q. カバラを経典に持つ宗教は？

A. ユダヤ教

Q. 水脈探しとして発達した、探し物の自然魔術は？

A. ダウジング

2009年7月15日(水)

Q. 二千年札に描かれている人物は次のうちどれか。

A. 紫式部

Q. 欧米でデビルフィッシュと呼ばれ、あまり食べる習慣がない生物は？

A. イカ

2009年7月16日(木)

Q. 黒船で来日した外国人が、武士のマゲを恐れた理由は何か。

A. 飛び道具が発射されると思った。

Q. 鎌倉幕府を創設した人物は誰か。

A. 源頼朝

2009年7月17日(金)

Q. コンタクトレンズの原理を発見したのは誰でしょう？

A. レオナルド・ダ・ヴィンチ

Q. 夏目漱石の作品の題名を選びなさい

A. 倫敦塔

2009年7月18日(土)

期末テスト、最終日。

2009年7月19日(日)

屋久島旅行前日、準備。

2009年7月20日(月)

屋久島旅行。

2009年7月21日(火)

屋久島旅行。

そして最後の一人として、ある意味では全勝中の悠が金髪の少女に声を掛ける。

「こんにちは」

「貴方は……似てる……？」

最初はこれまでにない反応に好感触かと思われた二人の出会い。

しかし――。

「す、スープレックスだと……!!？」

「ええええええっ!!? 何がどうしたら声を掛けただけでそういう展開になんだよ!!? 別の

意味で予想外過ぎる!!？」

鳴上悠……状況は分からずも金髪の少女の、抱きつかれたと勘違いする時間もないくらいに突然のスープレックスにより――ペルソナチェンジをする暇もなく撃沈。

「ハッ、すみません。なぜだかそうしななければいけないような気がして……。貴方は危険……危険? はたして貴方は危険なのでしょうか?」

俺に聞くな……きっと意識があれば悠はそう思った。

とりあえずそれに対しての答えを二人の代わりに示すのならば、特別な意味はあつてないようなものである。

悠が目覚める頃には分かっていることだが、金髪の少女は湊を守ることを使命とする存在だった。

その理由は金髪の少女自身よく分かっていないようだが、そこは今はいい。

その状況で悠が意識を刈り取られた理由。

それはつまり、正しく別の意味で悠が湊を攻略できる存在であるということを、金髪の少女がなんとなく感じとったからであつた。

要は湊とコミュを築いたために起きた、物理的な衝撃を伴った弊害ということになる。

鳴上悠よ……安らかに眠れ。

※推奨BGM【Never More】

「なるほどなー」

・
・
・

▽ 鳴上悠は遅ればせながらも食いしばった！

「……『アイギス』?」

長鼻の老人の夢を見る寸前で戻ってきた悠は、順平たちに運ばれた屋敷のソファの上から身を起こしながら、金髪の少女に関する話を聞く。

「そう。彼女の名はアイギス。見ての通りの『機械の乙女』だ」

空色のワンピースを着ていた時は分からなかったが、剥き出しになった関節部は確かに機械のそれで、知る限りの知識ではその完成がまだ無理なはずだとは思っても、目の前にいれば信じざるを得ない。

アイギスは二足歩行で人の形をした——ロボットだった。

2009年7月22日（水）

屋久島旅行。

2009年7月23日（木）

屋久島旅行、最終日。

ウォーターガンによるサバイバル鬼ごっこ。

「みんな、集合!!!」

「何、急に?」

「どうしたんだ?」

湊の号令に、ビーチ周りで各々楽しんでいたメンバーが集合する。

「このままちよつと遊んで帰るのもあれなので、最後に本気の勝負をします!」

「本気の一つは何やるの? ビーチバレーとか?」

「遠泳はどうだ。良いトレーニングになるぞ」

「それは勘弁ツス! というか、真田先輩はもう充分過ぎるほどガチに泳いでたじゃないツスカ」

順平の言葉どおり明彦は先程から一人、かなりガチ目なトレーニングに精を出していた。

遠泳だけでもすでに数km、それに加えて砂浜でのダッシュだとか、遊び目的の面々からすると、この人は将来的に何を目指しているんだろうと、本気で思ってしまうようなメニューを一人で黙々と熟していた。

いつ「俺より強い奴に会いに行く」とか言つて武者修行をしに行つても、割とすんなり受け入れられそうな状態だ。

「アイギス。礼の物を」

「了解であります」

まあそんな明彦の将来はともかくとして、湊はすでに打ち解けたらしいアイギスに合図を送り、どさどさと山盛りのそれを用意する。

「水鉄砲？」

確かにそれは水鉄砲であつた。

100円ショップで売つてそんな安物から、電動式の結構本格的な物、さらには消防に使うポータブルC A F S的な——これは本当に水鉄砲と言つていいのかという物まである。

「そう！ ウォーターガンによるサバイバルゲーム！ これで勝負よー！」

湊はそれらを前にして満面の笑みを浮かべると、高らかにそんな宣言をした。

「サバイバルゲームって……ただの水鉄砲遊びじゃないの？」

「もちろん！ これで撃たれたら——死にます」

「「!?!」」

「社会的に」

「「社会的に!!」」

湊の言葉に反応が良い悠たち二年生組が声を揃える。

美鶴と明彦は先輩の余裕なのか、静観の姿勢だ。

「というのも、このウォーターガンの中に入ってる水はただの水ではなく、桐条グループが総力を挙げて開発した、衣類だけが溶ける水だからです」

「「!?」」

「ちよつ、嘘でしょ?!」

「うん、嘘」

「嘘かよ!!! ちよつと期待しちまったじゃねーかよ!!!」

順平が大袈裟に手を振って、残念さをアピールしている。

桐条の名前を使われた美鶴は「当たり前だ」と呆れ混じりの溜息を吐いた。

「まあ、水着の上に白シャツを着れば、透けるかもしれないけど」

「よっしやあ!!! オレはやるぜー!!!」

「順平、あんた……」

この中で一番の被害者になる予感が、すでにひしひしとしているゆかりが険悪な目つきになるが、いつだって湊はそんなことでは止まらない。

「うんうん。シャツが透けるかはともかく、撃たれた人は罰ゲームだから。みんな本気でやってね」

「ば、罰ゲーム……湊が言う絶対嫌なやつじゃんそれー」

加えて罰ゲームまで存在するという言葉に、ゆかりは味方になってくれそうな人物を

探すか、どうにも居ない。

風花ですら、普段できない遊びに、ちよつと面白そうと思つてゐるように見えた。

「サバイバルゲームか。好意的に見れば、ペルソナ能力なしでの俺たちの戦闘判断力を試すにはうつつけの場かもしれないな」

「そう！ 私もそれが言いたかつたの！ さすが真田先輩！」

「……絶対その場のノリで言つてるよね、あれ」

諦めたようにゆかりが愚痴る。

とりあえず、遠泳させられるよりはマシかと、何とか自分を納得させようとしているようだ。

「それで、そのサバイバルゲームとか言うのはルールはどうなつてる？」

「チーム戦とかでもいいんですけど、それだと乱戦時の判定とか難しくなつちゃうんで、今回は私が鬼の鬼ごっこルールでやります。とは言つても撃たれたらリタイアで、みんなは制限時間内を逃げ切るか、その時間内に私を倒せば勝ちつというルールです」

「何？ 有里一人で俺たち全員と戦う気か？」

「そうです。代わりに私は水の補給自由で装備も最初から最強！ みんなは初期装備の水鉄砲以外は、エリア内で装備を見つけることで、最強装備の私とも戦えるようになっていくつて感じで」

そうやって湊は水のタンクに繋がれたポータブルC A F S的な水鉄砲をその手に持った。

それがどんなものかと一応見た目の補足説明しておく、要はサブマシンガンに水のタンクを付けたような代物だ。

まあ、これはあくまで水鉄砲なので、ポータブルC A F S的な見た目の代物であって、本当にC A F S泡が出る物ではなく、水の補充が出来るサブマシンガンのものだと思えばいいだろう。

「あと、これとこれもつと」

ついでにと湊は普通の拳銃型の水鉄砲二つと、アイギスが持ってきた警察の機動隊が持つような透明のライオットシールドも装備する。

これで予備装備含めて防御も完璧だということらしい。

「なるほどな……。だが、初期装備でもお前を倒せば勝ちなんだろう?」
「そうですけど。それ、完全に死亡フラグですよ。最初は素直に私から逃げながら装備を集めた方がいいです」

確かに1000円ショップの水鉄砲で挑むには無謀と言える装備だろう。

難点を挙げるなら、水のタンクと合わせて10kg以上の重量があることか。

ペルソナ補正が無しだというなら、装備は強力で、湊本来の機動力はあまり活かさ

ないに違いない。

そこに勝機があるかどうか。

「ちなみに、ラスト5分になったら、無敵キャラのアイギスを投入します！　なので、最後まで逃げたり隠れたりするよりは、それまでに装備を揃えて、私に挑んできた方がいいです」

「無敵？」

「メインの鬼はあくまで私だから。アイギスには水を当てても、10秒間動きが止まるだけ」

「10秒か……。なかなか厳しいな」

「でも、結局水鉄砲だしよ。いくら敵が湊で最強装備で固めてるとか言っても全員で囲んじゃえば瞬殺できるんじゃないの」

「うーん。そうかもねー。だけど、スタート地点はバラバラにする予定だし……。あ、そうだ！　それなら、みんなの中に一人裏切り者がいるって設定にしよっか」

順平の言葉に考える様子を見せた湊は、これは名案と手を叩いて新たなルールを追加提案した。

「裏切り者？」

「……裏切り者ってことは、最初は5人对2人の勝負になるってことか。そして鬼側の

「1人は裏切り者……ステルスだから、味方にも気をつけてないと背後から撃たれる可能性がある」と

「そゆこと。それでステルスが発覚して撃ち合いとかになった場合は、私だけじゃなくてステルスもちゃんと倒さないとダメって感じで。時間切れなら関係ないけどね」

「なんかややこしいルールだね。メンドクさそう」

「そうかな。結構面白そうって思ったけど」

「風花つて意外とこういうの好きだったりするの?」

「というか、ただの撃ち合いだとみんなに勝てないと思うから。どっちになるにしても作戦が入る余地があつた方がいいかなって。みんなと合流できれば湊ちゃんが相手でも勝てると思うし、ステルスならステルスで色々やりようがあると思うから」

「探り合いなら本領発揮だもんね……。私は苦手かなー。みんなよりは遠くから動くのを狙うのにも慣れてるかもしれないけど」

ゆかりは適当な水鉄砲を手にとって、軽く撃つマネをして見せる。

「とは言っても、拳銃型の水鉄砲の射程では、到底ゆかりが言うような狙撃のような真似はできない。」

電動式の物でも2、30mが良いところだろうか。

「じゃあ、ルールの確認だけど、ゲームエリアは桐条邸の敷地内……って言ってもかなり

広いから充分だよ。裏庭って言うか、森だし。川とかあるし。それで——制限時間は1時間かな。私的には10分ちよいで一人倒せればいい感じで」

「結構長いね」

「森の中で鬼ごっことかくれんぼしながら戦闘すると思えばこれくらいだと思っただけど」

「あー、それもそっか」

「それでいいだろう。通常の影時間とも同じ長さだしな」

「なんかそう言われると本当に戦闘訓練みたいで微妙な気持ちになるんですけど……」

ゆかりは未だに愚痴っているが、何だかんだやる気になってる人間が多く、それぞれ置いてある装備を手にとってみたりして、意外と準備に余念がない。

「あ、それと。基本的には私が公正に判断するけど、やられた時はわかりやすいようにそれっぽい台詞を言っただけ」

「有里。それっぽい台詞とは何だ」

「あれっすよ。桐条先輩。——くっ……オレもここまでか。とか。後のことはオマエに任せませ……とか。そういうやられ台詞」

※ルール説明補足

い方が出来るようになる。

補給用ペットボトル：リロード用。自分で飲んでもいいけど勿体ない。

補給用タンク：レア装備。1つしか配置されていない。リロード用。これがあれば補給の心配はほぼなくなるが、重い。

通信機、拡声器：他プレイヤーとの連絡用アイテム。ただし、通信機は2個揃わないと意味がなく、拡声器は鬼側にも声が届くためにリスクがある。

【プレイヤー名：鳴上悠】

装備：水鉄砲

体力：A

知力：A

技能：無し

特徴：万能型のプレイヤーで何事にも対応できるが、特殊技能はないため、特殊技能が必要な場面では他プレイヤーに頼る必要がある。

【C-2地点】

ゲーム開始の合図……湊からの連絡はない。

どうやらステルスではないようだ。

「まずは装備を探しつつ、他プレイヤーと合流……ただしステルスには注意、か」
クジで決まったC―2地点でゲームの開始を待っていた悠はそれを受けてプレイヤーとしての行動を開始した。

ゲームが始まってわずか数分。

悠は視界の端に映った影に、さっと傍の木に寄って身を隠す。

——湊だ。

どうやら湊はB―2地点でスタートしたらしく、とりあえず中央に行ってみようと考えた悠と進路が重なってしまったらしい。

湊は先ほど見た通り、警官隊とかが使うような透明の盾に、連射が効き、射程も長い、ポータブルCAFS——大型の水鉄砲を持って悠々と歩いている。

「さすがにこの装備じゃ無理だな……」

初期装備の拳銃型の水鉄砲と、湊の装備を含めた運動能力を比較して、そう結論づけた悠は、湊が立ち去るまでその場で息を潜める。

どうやら気づかれなかったようだ……。

その後、この先に湊はいないと、小走りで移動した悠は装備をひとつ回収。

だが、それはアタリともハズレとも言えない、補給アイテムである500mlペットボトルの水であった。

そしてゲーム開始から10分ほどが経って、悠は湊に続く二人目の人影を発見する。「(山岸か……。普通に考えたら合流するところだが、山岸がステルスだったらと考える」と少し怖いな)」

とは言っても、ステルス以外の人間とは、協力しなければ、湊を倒すことは難しいだろう。

アイギスの戦闘力は未知数だが、対シャドウ用だという話だし、参戦した場合の引きつけ役などもないと厳しいに違いない。

それに確率で言えば、風花がステルスである可能性は5分の1だ。

運が悪くない限り、いきなりステルスに当たることはない……。と思いたいが、風花は正直読めないところがあると悠は思っていた。

これが順平なら、分かりやすく背中を向けた瞬間に襲ってくるかもしれないし、明彦なら正々堂々と敵に回りそうだが、風花の場合は、時間ぎりぎり使って完全に信用させるか、絶対に避けようがないタイミングに急に撃つて来そうな印象があった。

「(それこそ自分を犠牲に、自爆によって、一人は必ず脱落させるような戦法を取る可能性すらある気がする……。だが、そう考えた場合、仮にステルスでも序盤の山岸は安全

なはずだ)」

悠は風花の前に姿を現した。

「! あ、鳴上くん……」

「山岸、そっちの状況は?」

「私はまだ、この水風船を見つけただけ。この中の水に当たってもダメみたい」

「手榴弾的な役割か……」

風花は最初こそ驚いた様子を見せたが、悠がちゃんと姿を現したからか、普段の態度で応対してくれる。

「鳴上くんは?」

「俺はこの水のペットボトルだけだ。それと有里を遠目に見つけて、とりあえず進行方向は確認した。反対に行ったからしばらくは遭遇しないだろう」

「そうなんだ。なら、安心だね。あ……鳴上くんは、ステルスじゃないんだよね?」

「ああ。もしそうなら、多少無理をしても山岸に奇襲を仕掛けてる」

「そうだよ。いくら初期装備でも、鳴上くんと同じや運動能力が違いすぎるもの。そう。この水風船も鳴上くんが持ってた方がいいよね。はい」

悠は風花に手渡された水風船を受け取る。

確かに地肩で投げることを考えれば、風花よりも悠が持っているべき装備だろう。

風花がステルスなら、先程考えた自爆戦法のためにも、水風船を渡してくることはないだろうか？

それとも、この程度のアイテムで信用を得られるならと手放すか。

「いや、そもそも自爆戦法自体が俺の想像だ。あまり考えすぎても仕方ないか……」
思考を止めるわけではないが、考えすぎて動けなくなったら意味がない。

風花と二人で行動するようになってしばらく、アタツシユケースの中から通信機を発見する。

試しにと使ってみると、意外にもすぐに反応があった。

悠たちよりも早く通信機を手に入れていた人間がいたようだ。

その人間とは、ゆかりだった。

『鳴上千くん、それに風花もいるんだ？ 二人で行動してるってことは敵じゃないよね。よかったー。正直どう行動したらいいか分からなくてさー。できれば二人と合流したいんだけど』

「ああ、そうだな。現在地は分かるか？ 俺たちはA—2地点だ」

『A—2？ えっと、私はたぶんだけど——って、え、ちよつ、ま、きやあああああつ！！？』

「岳羽?!? 岳羽?!? おい、どうした?」

『まずは一人目』

「有里……………」

次に通信機から聴こえてきたのはゆかりではなく湊の声だった。

『鳴上くんだね……………。ゆかりは死んじやったよ。せつかく警戒できてたのに、安心させちやつた鳴上くんのせいだね』

「……………岳羽の仇は必ず取る」

『そう? 鳴上くんにできるかな。鳴上くんには誰も守れないってことを教えてあげよ』

悪役に徹しているらしい湊の冷たい声に、悠は軽く歯噛みをした。

∨ 岳羽ゆかり脱落……………! 4 / 5

「そんなゆかりちゃんが……………」

「……………行こう。有里にこちらの居場所がバレた可能性がある」

悠は先程の通信でゆかりがこちらの居場所を復唱した後にやられたことで、その可能性が高いと踏んでいた。

「は、はい。……………あの、ゆかりちゃんってほんとに脱落したんですよね?」

「え? どういう意味だ」

「こういうゲームだと脱落したフリしてみたのが手法としてあるのかなって……」
「！……」

それは悠が考えていなかった可能性だった。

風花が言うのと、なるほど、らしく聞こえる可能性だ……。

だが、そうやって意識を散漫にさせることが風花の狙いだとしたら……風花がステルスという可能性も、変わらずにまだある。

悠は自分の中に生まれていく疑惑の芽を摘み取ることができずにいた。

▽ 岳羽ゆかり脱落……？

ゆかりとの通信から15分ほどが過ぎた。

もう1時間という制限時間もその半分ほどが過ぎたはずだ。

15分の間に悠たちはA―3地点に移動し、そのエリアを探索、少し良い水鉄砲を二つと補給用ペットボトルを見つけていた。

あまり引きが良いとは言えないが、意外とこのまま接敵しないまま行けるのではないかという安易な気持ちも少しだけ出てきていた。

しかし、どうやらそう上手くはいかないらしい。

「あ、待って鳴上くん……。あつちで何か……。誰か戦闘してる……。？」

風花の指し示す方に意識を向ければ、木々で阻まれて見えづらいが、確かに何やら動く影が見えた。

あれは——明彦だろうか。

まだアイギスが投入されるまで時間がある以上、明彦が戦闘をしてるなら、相手は必然的に湊ということになる。

いや、明彦がステルスで順平や美鶴と戦っている可能性もなくはない。あるいはその逆も。

悠はそれを確認するために、風花に軽く合図しながら立ち位置を変えつつ目を凝らす。

「——有里だ！ 真田先輩を援護する」

「は、はい！」

湊の姿を確認した悠は、風花に自分の斜め後ろ、少し離れた距離から追従するように指示を出し、木々の合間を縫って素早く戦闘中の二人へと接近する。

「(有里の後ろまで回り込めるか……?)」

水鉄砲は少し良い物を手に入れたとはいえ、あくまで玩具、その射程は心許ない。

に加えて、正面からの突撃は湊がライオットシールドを持っている以上無意味と断言していい。

実際湊は正面に盾を構えて、その場からほとんど動かず、何とか接近しようとして試みている明彦に対して一方的に攻撃している。

まだ明彦がやられていないのは、ボクシングで鍛えたフットワークの賜物だろう。

湊の機動力は削られているのだから、できれば逃げて欲しいところだが、明彦の性格からして、敵の装備が強いからというだけでは逃げる選択にはならないのかもしれない。

湊の背後に回り込もうと動く悠と明彦の視線が合う。

湊にはまだ気づかれていない。

悠はアイコンタクトで明彦と意思の疎通を図る。

このタイミングなら——と、悠がGO！ サインを出すと、明彦は湊へと一気に距離を詰める。

「イケる……！」

明彦はやられるかもしれないが、正面に気を取られていれば、その間に悠の射程にまで持ち込めるだろう。

湊を倒せればそれで勝ちだ。

だが。

「なっ……！」

湊は明彦に視線を向けたまま、半身で背後の悠を撃ってきた。

瞬間的に鞭のようになった薙ぎ払いの銃撃を、悠は近くの木の裏に転がるように跳んで避ける。

「その声は鳴上くん？ 甘いよ。クレバーに立ち回ってた真田先輩が突然向かってきたら何かあるって思うじゃない」

明彦の銃撃は単純に盾でいなしたようだ。

悠が崩された為に明彦もバックステップで再び距離を取った。

「くそっ……！ 真田先輩、一度退きますす！」

奇襲を読まれた以上、その考えは間違いない。

明彦も自分一人ならともかく、そうじゃなくなったからか素直にその指示に従った。

「はあ……はあ……どうやら有里の追撃はなさそうだな」

悠と明彦が揃ったことに警戒しているのだろう。

「まさかあれに対応されるとはな」

「そうですね……。有里、敵に回すと恐ろしい相手だ」

とにかく明彦と合流できたのは大きい。

装備さえ揃えられれば湊と対抗することもできるだろう。

不安要素はやはりステルスか。

まだ姿を見ていない順平か美鶴……風花は——もうないかもしれない。

風花がステルスなら湊と合わせて悠を脱落させることはできたのではないだろうか。確実ではないから躊躇した可能性もあるが……。

そしてゆかりは？

本当に脱落しているのかどうか……。

「（この状況でステルスじゃないと確定できるのは有里と戦っていた真田先輩だけか……。だけど真田先輩の運動能力があれば選択肢は一気に——）」

ふと。

気配に振り返れば、明彦が悠に向けて銃を構えていた。

「鳴上、お前を殺す」

銃口から飛び出す水を、悠は避けることができない。

最初から読み間違えていたのだ。

明彦はどんな状況だろうと正々堂々と戦うというわけではなかった。

拳が封じられた上に、敵の数も多い……その場合の明彦は、ただただ最善を尽くし、勝てる確率の高い戦法を選択してくる。

いつものように湊と戦ってみせたのもフリだったのだ。

奇襲が通じるはずもなかった。

明彦自身が湊に悠が背後に来ていることが分かるように動いたのだから。

「鳴上くん……!」

動けない悠の前に風花が割り込む。

風花は戦闘力が低い自分を奇襲してこなかったことで、悠を白と確定していた。

だからこそ他の誰よりも悠を生存させることを優先して行動しており、明彦がステルスである可能性を消していなかったがゆえの反応であった。

「チツ、仕留めそこなったか……!」

風花を仕留めながらも、ここで脱落させておきたかった悠が生き残ったことで、明彦は舌打ちすると、すぐにその場から離れた。

悠が銃口を向けるが一瞬遅い。

「山岸!」

「よかった……鳴上くんが無事で。鳴上くんならきつと勝てるから……頑張つて、ね……」

風花の身体から力が抜ける。演技派だ。

悠の頭の冷静な部分があることを思ったが、とにかくこれでステルスは確定した。

風花でもゆかりでもなくステルスは明彦。

う。これまでの全てはただの考えすぎで、ゆかりも普通に脱落していたということだろ

「まさかここまでとは……」

完全にハメられた。

そして問題となるのは、味方がまた一人減ってしまったこと、そして、素の運動能力なら、トップだと思われる明彦に、鬼である湊、さらには終盤に参戦してくるアイギスと、敵の戦力が充実しきっていることであつた。

だが自体はさらに悪化する。

『ステルスは鳴上だ！ 鳴上に山岸がやられた！』

拡声器によって明彦の声がエリア内に響く。

「(しまった……!)」

明彦があつさりとその場から離れたのは、拡声器を確保していたことも理由だつただ。だ。

∨ 山岸風花脱落……! 3 / 5

一方その頃……順平は水の中にいた。

B-3エリアでスタートとなつた順平は、川の中に身を潜める戦法を選んだ。

川の中なら見つかり辛いことに加え、仮に銃撃を喰らっても、少しなら最初から濡れていたのだと誤魔化すこともできる。

逃げ切りをメインとした、卑怯もいいところの待ちの構えである。

だが、10分20分と時間が過ぎていくにつれて、さすがに何やってんだオレという考えも浮かんできていた。

そんな中である。

明彦の声が拡声器によって響いてきたのは。

「マジかよ。悠がステルスとか。うちのツートップが二人とも鬼じゃねえか。やっぱ潜んでて正解かもな。ガチでやったらゼッター負けんだろ」

そう思ってその後も潜み続けることを選択した順平だが、ずっと水の中にいたせいで、身体が冷えて催してきた。

このまましてしまうかという考えも一瞬浮かんだが、さすがにそれはと川から上がり茂みへと向かい、下半身を露出。

そして。

「動くな」

ちよろつと出かけた尿意が一瞬で引つ込む。

悠の声だ。

完全に無防備な状態で、順平は後頭部に銃口を突きつけられていた。

「ちよつ、ちよちよ、さすがにこの状態はねーって！ 悠、タンマタンマ！」

「いいから聞け。俺はステルスじゃない。本当のステルスは真田先輩だ。山岸は俺をかばって真田先輩に撃たれた」

「はあ？ じゃあなんで今こんな状態なんだ。つてか、後で聞くからちよつと離れててくれよ！ そんな傍にいられたら出るもんも出ねえよ！」

「——わかった。じゃあ、離れるけど間違えないでくれ。俺がステルスなら、いま順平を脱落させるのは簡単なんだ。それをしないってことは俺はステルスじゃない」

「わーった、わーったって！ 真田先輩がオレらを混乱させようとしてんだろ！ そんなことより、いいかげんオレは限界なんだよ！」

待つ事しばらく、順平が戻ってくる。

「はー。マジでヤバかったぜ……。んで、なんだっけ？ 真田先輩がステルス？」

「そうだ。真田先輩に山岸は脱落させられた。そして岳羽も有里に脱落させられてい

る」

「え、マジで？ ヤベエじゃん。どーすんだよ。やっぱ川の中に潜むか？」

「……川？ 順平、お前そんなことをしてたのか？」

賢いと言えば賢いが、それはだいたい卑怯だ。

「へへっ、良い考えだろ？」

「いや、卑怯だ」

「はつきり言われた!!？」

「それにその作戦はたぶん無意味だ。有里はその程度読んで来るし、アイギスが投入されたら普通に引きずり出されるだけだろう。それまでにアイテムを集めていないと対抗できない」

「その通りだ」

ガサツと——唐突に悠たちの前に美鶴が姿を現す。

「桐条先輩！」

「だが安心していい。この辺りに散らばるアイテムはある程度回収しておいた」

美鶴に促されてその後について行くと地面にかなりの数のアイテムが安置されていた。

レア装備であるライオットシールドまである。

「うおーっ！ 流石ツス、桐条先輩！」

「これだけあれば……」

「対抗はできるだろう。だが問題は多い。——どうやら明彦が敵だったようだ。つまり敵の戦力は有里とアイギスと明彦の三人。ペルソナ無しはこの状況ではかなりの脅

威と言えるだろう」

単純に運動能力が高い上に、アイギスに至ってはシャドウと戦える性能を持った口ポットなのだ。

「有里と明彦だけならば何とかできなくもないだろうが……向こう側にアイギスがいる、しかもアイギスは脱落することがない。ラスト5分間という短期存在ではあるが、これはかなり厄介だ」

美鶴が神妙な顔で問題点を挙げるが、悠の考えは少し違った。

「いえ、アイギスは一時的なスタンしかできなくて厄介だと思うかもしれませんが、実際にはそうじゃないです。俺はそこにこそ勝機があると思っています」

「どういう意味だ？」

「どんな方法でもいいからアイギスの動きを止めることが出来たら、あとは10秒経つ直前——9.5〜9.8秒あたりでまた引き金を引いて水を当てればいいんです。それを繰り返せばアイギスの動きはずっと封じることができる」

「え、セコ」と順平が先程までの自分の行動も顧みず呟くが、美鶴は「なるほど」と頷く。

「しかしそれだと、私たちの動きも制限されるが？」

「この盾を持つていれば、遠距離からの攻撃は防げます。アイギスが止まっている限り、敵は最大でも二人。両方がアイギスを解放するために向かってくるなら、その後ろを狙

えばいいですし、一人なら盾だけでも凌ぎきることも可能なはずです」

「アイギスが戦線離脱しないからこそ成り立つ策という訳か」

「そうです。単純にアイギスに動き回られるのは防ぎたいというのがありますが、それを防ぎさえすれば、立場は一気に逆転させることができる。相手が時間を使ってくれるならそれに越したことはない。その段階までくれば、たった5分凌げればいいんです」
これまたかなり卑怯な作戦だが、最悪そこに引きつけて他の二人は全力で逃げるという手もある。

それほどに美鶴が回収してくれたこの盾の存在は大きかった。

そして決戦の時が来る。

制限時間残り5分となったことで最終兵器であるアイギスが鬼として投入され、時速130kmの脚とロボットのセンサーによって戦場を把握。

遠巻きに悠たちの様子を窺っていた湊と明彦の二人と合流すると、そのまま三人揃って悠たちの前に現れた。

「——散開！ 一気に殲滅するよ！」

「了解(であります)！」

木々を壁にした撃ち合い。

そんな中でも、フットワークの軽い明彦と、素のスペックが超人級のアイギスがどん

どん距離を詰めてくる。

何ならこの二人は水鉄砲どころか実弾ですら普通に避けそうだから、この程度の弾幕では無意味ということだろう。

「作戦通り明彦は私が足止めする。あとは任せたぞ鳴上」

「はい」

美鶴は明彦の側に走り、明彦に牽制を入れながら戦場から離れる素振りを見せる。

実際逃げられたら鬼側の負けだ。

そしてこの時点で誰も追わなければ美鶴なら5分間程度は逃げ切るだろう。

「美鶴はこのまま俺が仕留める！」

「任せます！」

だから湊は明彦に追撃の許可を出した。

ここまでは湊側にしても想定範囲内の行動であった。

「(問題はここから鳴上くんがどう動くか……)」

湊の視線の先では、アイギスの5本の指からマシンガンのように飛び出す水を、盾で防ぎつつ応戦する悠とそれを援護する順平の姿がある。

残り時間は3分と少し……アイギスの機動力ならペルソナ補正のない悠と順平を制圧するには十分な時間だ。

「……順平、任せた」

「え？」

ここで、悠が選択したのは自爆戦法であった。

湊たちからすればまさかの選択だ。

盾を順平に渡して、周囲の木々に前もって仕掛けておいた水風船を一斉に落とし、そ

して自分もアイギスに突撃を仕掛ける。

どれか一つでも当たればアイギスはスタン。

「!? これは避けられません……!」

直後、悠の脱落とアイギスのスタンが確定する。相打ちだ。

悠がぼたりとその場に倒れる。

確かに悠は実際の戦闘でもサポートに回ることは多かったが、やはりここぞというところ

で決める人間、そういう役回りだという思い込みがあった。

それをわずか10秒、アイギスを止めるためだけに使い捨てにしたのだ。

美鶴が明彦を足止めしたとしても、すでにゆかりと風花も脱落している以上、もはや

残っているのは順平一人。

「(順平に全てを託した? それとも桐条先輩が真田先輩を撃破すると読んだ?)」

「悠! オマエの犠牲は無駄にはしねえ!」

湊が考えてる間に順平が盾を構えて前進、盾とアイギスそして木によって自分の三方を固める。

「あつー！ そのパターンか！」

湊がしまったと思った時にはもう遅い。

順平は先に悠が言った方法でアイギスの行動を封殺した。

湊の射撃もライオットシールドが完全に防ぐ。

「こっとなつたらー！」

湊の決断は早かった。

自分の機動力を落とすだけの装備をその場に捨て二丁拳銃を手に順平に詰める。

それに対して順平も盾を地面に突き刺し固定し、片手でアイギスを撃ち、片手で湊を牽制する形を取る。

「くっそー！ まだかよタイムリミットはー！」

残り1分……。

59:00

57:29

55:01

時は確実に刻まれていく。

湊はもう近くまで迫っている。

順平に心理的なプレッシャーがかかる。

41:35

その負荷から視線をいまだ律儀に倒れたままの悠に向け——天啓を得た。

「悠！　いまだ！」

「!!」

これなら押しきれれると思っていた湊の思考に雑音が混じる。

悠が倒れたのはブラフではないかというものだ。

39:39

そして感覚を順平だけではなく悠にも向け——結果、まったく違う方向から銃撃を受けた。

「え……う？」

湊がゆっくりと振り返る。

そこには湊が捨てた装備を拾って湊を撃つ美鶴と、その美鶴を一瞬遅れて撃ち抜いた明彦の姿があった。

「あー……そこまで計算済みか……」

ばたりと湊がその場に倒れる。

湊がアイギスを解放するために装備を捨てて突撃してくることを読み、その捨てた装備をエリアを離れるフリをした美鶴がなんとか確保して湊を無力化する。

そこまでが悠たちの作戦だったのだ。

明彦が残っているとはいえ、少し距離があることに加えて、盾持ちの順平に対してもう30秒しかない。

しかも順平はアイギスを撃つてからのラスト10秒は、もうその場に留まる必要もなく、逃げてしまってもいい。

「(私たちの負け……か……)」

湊は自分たちの負けを受け入れた。だが――。

「げっ、水切れ!!」

順平のそんな声が耳に入る。

「……再起動であります。さようなら、順平さん」

「え、ちよっ……ぎゃ〜〜!!」

ドドドドドと順平がオーバーキル気味に撃ち抜かれた。

「(え、え……そんな終わり?)」――そんな終わりだった。

▽ 鳴上悠、桐条美鶴、伊織順平 脱落……! 0/5
▽ 鬼側の勝利だ……!

2009年7月24日(金)

期末テスト結果発表。

健二が叶先生に告白する。(クラスメイトコミュ4)。

アイギスが加入。

風花のビデオ。

「おーい、試験の結果、張られたぞー」

クラスメイトの言葉に悠たちも試験結果を見に行くことにした。

悠の成績は——なんと、学年トップだ!

周りから一目置かれている!

同日【??】

「月光館学園―裏サイト―ムーンサイド」

裏試験対策：Part. 13

うちの学園の教師変じやね？：Part. 3

桐条美鶴親衛隊：Part. 17

真田明彦F.C.：Part. 11

ポロニアアンモールオススメ情報：Part. 21

ちよつと怪しいバイト情報：Part. 1

オンリョウについて：Part. 4

月光館学園七不思議：Part. 1

弓道着女子こそ至高：Part. 2

真田先輩に殴られ隊：Part. 5

生徒会長に罵られたい男子の集い：Part. 29

・
・
・

↓謎の転校生：

：有里湊Part. 6

↓：鳴上悠Part. 7

匿名希望：まだ3カ月なのに伸びすぎだろw

匿名希望：話題に事欠かない男

匿名希望：有里を突き放しに掛かってるな

匿名希望：生徒会長ペース

匿名希望：マジで謎の転校生だから笑うwww

匿名希望：2回連続学年トップとか

匿名希望：不正疑惑

匿名希望：ないと思われる。授業中もうちの教師の訳わからん質問全部答えてて
ちよつと引くレベル

匿名希望：誰かこれまでに分かっていることまとめ

匿名希望：陸上部：エース級 管弦楽部：普通に上手いっぽい 生徒会：会長の推薦

バイト：5か所くらいで目撃される 試験：2回連続学年トップ

匿名希望：どゆこと

匿名希望：謎の転校生を地で行ってるなw

匿名希望：苦学生？

匿名希望：通販に注ぎ込んでいるという噂

匿名希望：通販マニアwww

匿名希望：骨董店とかで謎の買い物してるのも見た

匿名希望：釣りマニアでもあるらしい

匿名希望：どんな高校生だよ

匿名希望：だから謎の転校生だろ

匿名希望：フアーwww

匿名希望：引き笑い止めろ

匿名希望：それで女性関係は

匿名希望：やめるんだそれは俺たちを苦しめる話題だ

匿名希望：転校初日から両手に花

匿名希望：ぎゃー

匿名希望：寮には生徒会長もプラス

匿名希望：うごご……

匿名希望：なんか他にも女子入ったって聞いた

匿名希望：ワイのこと全然違うんやけど。どうなってるの

匿名希望：イケメンだから

匿名希望：リア充爆発しろ!!!!

匿名希望：リアルな話、なんかあの寮に入るには審査があるらしい

匿名希望：優等生ばっかなのは認める

匿名希望：そうだっけ？ なんか変なのいた気がするんだけど

匿名希望：ああ、あのハゲなw

匿名希望：友人枠だろ 女子の誕生日とかスリーサイズとか教えてくれる奴

匿名希望：ギャルゲーかよ

匿名希望：人生イージーモード

匿名希望：むしろ超ハードに見える件

匿名希望：確かに

匿名希望：確かに

匿名希望：俺たちとは違う時間を生きてるんじゃないの

匿名希望：1日を36時間くらいにしてくれたら

匿名希望：それでも追いつける気がしないw

匿名希望：確かに

匿名希望：もういいよそれは

匿名希望：年齢を詐称してる可能性

匿名希望：ねえよ

匿名希望：うちの学校って留年とかないだろ

匿名希望：ある

匿名希望：図書室の人

匿名希望：荒垣

匿名希望：そいつは留年してない

匿名希望：荒垣ってだれ

匿名希望：うちの番長

匿名希望：そんなのいんのwww

匿名希望：いる

匿名希望：それなら鳴上が番長でよくない？

匿名希望：確かに

匿名希望：確かに

匿名希望：それやめろって　なんかイラっとする

匿名希望：確かに

匿名希望：うぜえw

匿名希望：なんか今日だけで埋まりそう

匿名希望：大人気だな

匿名希望：しかも男子が多そうなのが

匿名希望：ホモオ

匿名希望：ほ、ホモじゃねえし！

匿名希望：彼女できたら発狂者多数

匿名希望：修羅場期待

匿名希望：むしろ余裕で6股7股しそうな予感

匿名希望：やめろよ……

匿名希望：やめてくれ……

匿名希望：会長だけは落ちないと信じてる

匿名希望：もう落ちてる

匿名希望：くあwせdrftgyふじこlp

匿名希望：落ち着けよ まだひとつ屋根の下に一緒に帰る程度だ

匿名希望：まだw

匿名希望：orz

匿名希望：たった3カ月であの真田と並んだか……

匿名希望：それはない

匿名希望：無敗の男やぞ！

匿名希望：まだまだだね

匿名希望：真田×鳴上

匿名希望：やめろやめろw

匿名希望：腐女子は去れ ガチホモは許す

匿名希望：どっちも嫌だろ……

匿名希望：どう違うの

匿名希望：妄想か現実か

匿名希望：そんな解説すんなよw

匿名希望：恋愛は自由だから（遠い目

匿名希望：鳴上もまさか自分がホモネタにされているとは思うまいwww

匿名希望：見てたら笑う

匿名希望：え、見てませんよね……

匿名希望：たぶん あまり携帯とかパソコンとか触ってるイメージはない

匿名希望：見ても許してくれそうではある

匿名希望：オカンだしな

匿名希望：そこは共通認識

匿名希望:同意 番長でオカン

匿名希望:鳴上は番長でオカンってどういう結論www

【Rank up!! Rank 2 刑死者・学園の生徒】

∨ “学園の生徒” コミュのランクが “2” に上がった!

∨ 鳴上悠の失われた力 “刑死者” 属性のベルソナの一部が解放された!

∨ 鳴上悠の評判が “謎の転校生” から “噂のアイツ” になった!

「?」

悠はそんな風に自分のことで盛り上がっている者たちがいるとは、つゆ知らず、不意に出たクシヤマに首を傾げながらも、いつも通りマイペースに過ごしていた……。

同日―夜―

学園から戻ってきて、屋上のやさしい畑の世話をした悠が階下に降りると、ちょうど湊が作戦室に入って行くところだった。

何かあったのかと思って、作戦室の扉に手を掛ける悠だったが、そう言えば前にもこ

んなことがあったなと思ひ出す。

はたして湊は——その記憶にある光景と同じく、モニターの前で何やら機材を操作していた。

今回映っているのは風花の部屋のようだ。

クッションにカーペット、ベッドと、室内は花柄のもので溢れており、さらにはドラ伊フラワーやプリザーブドフラワーがパーティションラックやウオールシエルフに並んでいて、本当にそういうものが好きなんだなと思わせた。

「……」

だけど重要なのはそこではない。

悠がこの状況を静観……いや、ガン見しているのは、モニター内の風花がなぜか水着姿でいるからだった。

日付は7月15日……テスト期間中ではあるが、屋久島旅行に備えての準備をしているようだ。

「(O R E C……くっ、ない!)」

悠もそこは男子なので、たとえばりモコンでも持つていけば、録画ボタンを連打するところだが、モニター内の風花の笑い声に、ふと我に返って首を振る。

風花はセパレートの水着でお腹が出るのを気にして、時価ネットで購入したウエスト

すつきり低周波パットを巻いていたが、その刺激がどうにもくすぐったいらしく、悠の理性を挑発するように身悶えていた。

「(こ、これ以上はダメだ……! 影時間でもないのに、バステに掛かる……!)」

モニターの中で水着姿のまま身悶える風花……その姿に、若干惜しいものを感じながらも、悠が湊に声を掛けようとした、ちょうどそのタイミングで画面が切り替わる。

「?」

画面が切り替わったとは言っても、部屋は変わらず風花の部屋だ。

ただ、風花は普通の私服姿で、ノートパソコンを前に何やら真剣な表情をしている。

先ほどまでとは、別の日の記録だろうか。

パソコンを操作しているので、まず頭に浮かんだのは、ゆかりに頼まれた調べ物をしていた時の記録というものだ。

「何だ?」

「何だろう……」

湊が当たり前のように悠の呟きに同調する。

「気づいてたのか?」

「うん。どこで声掛けてくるかなって、鳴上千人の人間性を観察してた」

「……そうか」

悠は傍から見る限りは平静に頷いていたが、実際には「(有里、恐ろしい子……!)」と、いったい自分はどういう判定を下されたのだろうか、最初ガン見していた負い目もあつて、そこそこ焦っていた。

『わ、ホントにあつた……。つていうか、なんか結構知ってる人ばかり……。オンリョウって……。うう、意外と多いし……。にしても、やっぱり目立ってるんだ……。うーん、せつかくだし、どれか見てみようかな……。』

「それでこれは？」

「さあ。……えーつと、あ、リアルタイムかも」

「……それはさすがにマズイと思うぞ」

「そうだね」

「……………」

そう言いながらも、あともうちよつとだけと様子見をする二人。

そこら辺は歳相応な好奇心を持つ、似た者同士である。

『やっぱり、こつちの方が女の子が多いかな……。』

「リアルタイムなら、また、岳羽に頼まれてとかそういうのではなさそうだな」

「でも、さつきオンリョウとか言ってたよね。もしかしてあれかな。ホラー系の投稿サイトとかそういうの」

湊の言葉に悠はなるほどと思う。

夏という怪談話が流行る時期ではあるし、風花のような大人しめな子が意外とホラー好きということはあり得そうだ。

『あ、これ私? ……ふふつ、確かに。……………。……女子、ガチホ…………え、どう違うんだろう? ……聞いてみようかな、どう違うの、つと』

風花は時たま領いたり、眩きを漏らしたりしている。

あまり変化のない光景だ。

風花の手がちよつと動いて、カタカタとキーボードで何やら打ち込んだようだが、その内容も詳しくはわからなかった。

「もういいんじゃないか。気になるなら山岸に直接聞いてみればいい」

「覗いてた内容を尋ねるってどうなの…………。まあ確かに、これ以上の変化は——あれ?

なんかキョロキョロしてる」

風花は当然のことながら、悠と湊が自分の様子を見ていたなんてことは知らないのだが、奇しくもあるサイトの中で『え、見てませんよね…………』とちよつと不安になっていたところだった。

ここで湊も「はい、終了」と、モニターを消す。

それとほぼ同時にクシャミをした悠に「風邪?」と尋ねるが、悠は首を傾げるだけの

曖昧な反応を返す。

ノゾキと逸脱した世間話、第三者的にはどっちもどちな状況であった……。

2009年7月25日（土）

美鶴からテストのご褒美やそれまでのアレコレでバイク（原付？）を貰う。（美鶴コミュ?）。

2009年7月26日（日）

夏休み開始。

2009年7月27日（月）

運動部特訓。

昨日から始まった、学生にとっては待望の夏休みだが、悠たち運動部に入っている者にとつては、逆に地獄の始まりであるとも言えた。

特に陸上部は、次の日曜日には、全国高等学校明王杯という大会がある為に、その最後の調整に余念がない。

それは普段、割と自由参加でいい陸上部の、唯一とっていい、全部員強制参加のイベントであった。

しかも、それらはあくまで特訓であって、合宿じゃないというのが悲しいところだ。というか月光館学園の場合、タルタロスになってしまいう為に、桐条の圧力で学園での寝泊りなども許されていない。

本当に朝から晩まで延々と特訓をしては帰るの繰り返しだ。

まあ、大会がすぐということもあって、倒れるまでやるとかそういうことではないのだが、とにかく陸上のことや身体の動かし方などの細かいことをひたすらに考えさせられる。

まさに陸上以外のモノに触れることを禁止されるかのような、陸上漬けの日々が一週間ほど続くわけである。

夏休みに入って、いきなりそれだと言うのだから、悠も含めて多感な男子学生たちには、これが地獄と思えても仕方ないことだろう。

実際、運動部の特訓をしている間は、他のことが出来そうにない……。

ちなみに女子テニス部に入っている湊なども特訓を行っているのだが、大会などに出

るわけではなく、地方の学校との練習試合だった。

そしてそれは土日の2日間だけとはいえ、八十稲羽の老舗の温泉宿に遠征と、正直、悠からすればかなり羨ましい日程になっていた。

だが、一志との約束もある以上、挫けてはいられない。

1週間やり切らなければ……。

↓8月1日(土)

運動部特訓。

湊は八十稲羽へ合宿。

運動部の特訓の日々……。

走つてばかりいたせいなのか、まるでワープしたかのように、瞬く間に時間が流れていつている。

そんな折、湊から写真付きのメールが送られてきた。

笑顔の湊が地元の中学生らしき少女二人と写っている。

なんだか、二人共どこかで見たことがあるような気がしたが、思い出せない。

ん……背景にもう一人、ちよつと厳つい容姿の少年が写っている……その少年もどこかで見たことがあるような気がするが、どこだったか。

とにかく、湊は合宿を楽しんでいるようだ。

若干の羨ましさを感じながらも、悠はメールを保存して、携帯を閉じた。

2009年8月2日(日)

全国高等学校明王杯。

一志は予選に勝利するも敗退。

託された悠は決勝まで勝ち進むが、陸上を専門にして毎日鍛えている者にはさすがに勝てず、優勝は逃して上位入賞。

だが初めての公式戦で上位入賞は凄いと一志は褒める。

一志の甥っこも二人の頑張りを見て、自分も頑張ると宣言。

優勝は他校のエース早瀬護。

早瀬護と出会う。(港区に住む人々かアルバイト先の人々に出てくる)。

湊が合宿より帰還、お土産で八十神高校の制服。

普段の部活にはあまり出れていなかったが、影時間では移動中によく走っていたし、特訓も含めて自分なりに全力を尽くした。

それでも届かない。

「……」

悠はその事実には、悔しさを感じながらも微笑みを浮かべた。

そうでないかと困る。と。

この場所には自分よりずっと陸上に懸けている人間が大勢いるのだから、その中のたった一人だろうと、自分の上に行く存在は当然いるべきなのだ。

それでこそやりがいがあるし、モチベーションにも繋がっていく。

何かに本気になるって言うのはきつとそういうことだ。

……とかなんとか考えてみても。

「負け惜しみだな……」

と、少し肩を落とす。

普段は超然としたところがある悠であっても、同年代に負けるのはやっぱり悔しかったようだ。

もつとも悠自身がこれを機に陸上に目覚めるかなんてのは完全に別の話だが――。

それもまた、可能性のひとつ。

「お。鳴上、こいつが俺の甥っ子の坂本竜司。小4」

「ああ。よろしく、竜司」

「お、おう。兄ちゃん、カズ兄より凄かった人だよな。決勝は残念だったけど、なんつか、カツコ良かったぜ」

「そうか。ありがとうな。頑張った甲斐があったよ」

「へへ」

「竜司お前、俺の応援に来てくれたんじゃないかなかったのか？」

「応援つーか、カズ兄が無理やり連れてきたんだろ。約束通り勝ったら俺にも頑張れとか言ってるよ。で、負けてるしよ」

「ぐっ……すまん。だけど来年の選考会は必ず！」

「いいって。あ、いいって言うのはよ。俺との約束は気にしないでいいって言うか、その、俺も頑張るからさ。なんか兄ちゃんたちの頑張り見てたらやつぱ俺も走りてーってさ。事故ってこんななんたってさ。でも、ほんとはもうほとんど治ってんだ」

「え、そうなのか？」

「ただ、リハビリとか大変らしくて。ちよつとビビってたつーか……。でも、ちゃんとやれば中学では普通に陸上部に入れるだろうし……そしたら、俺、自分の力で一等賞にな

るからよ。兄ちゃんたちも自分の為に頑張ってくれよ」

「そ、そうか！ そうだな！ じゃあ鳴上、俺たちも竜司に追い付かれないようにまた頑張らないとだな！」

「ああ。俺に追いつけると思うなよ」

「へへっ！ 絶対追いついてやるっつーの！ 俺が兄ちゃんみたく高校生になった時には、世間をあつと言わせる有名人になってやるぜ！」

【Rank up!! Rank7 戦車・運動部】

∨ “運動部” コミュのランクが “7” に上がった！

∨ 鳴上悠の失われた力 “戦車” 属性のペルソナの一部が解放された！

同日【??】

匿名希望：【速報：鳴上悠 明王杯優勝逃す！】

匿名希望：あー、ダメだったか

匿名希望：鳴上が敗けるとかアスリート界は奥が深い

匿名希望：上位入賞でも相当だろ

匿名希望：フ、鳴上は月高四天王でも最弱……

匿名希望：あと三人誰だよ

匿名希望：真田、桐条、有里

匿名希望：あ、最弱だわw

匿名希望：有里には勝ってるんじゃないの

匿名希望：せやな

匿名希望：有里が男だったら敗けてた

匿名希望：どんな前提だよ

匿名希望：その発想はなかった

匿名希望：真田や生徒会長は漫画キャラみたいなものだし、比べるのが間違ってる

匿名希望：それもどうなんだw

匿名希望：謎の転校生コンビもそんな感じだろ

匿名希望：でも真田や生徒会長はガチでファンクラブとかあるくらいだしなあ

匿名希望：鳴上たちにはないの？

匿名希望：ない方がいいよ 真田や生徒会長の奴らは正直やり過ぎ 真田を取り囲ん

でる姿とかよく見る

匿名希望：確かに。リアルでもここのノリで集まってるもんな

匿名希望：ここの利用者って月高生の1割とかだっけ？

匿名希望：でも部活のエースでしかもイケメンとかだったらそんなもんじゃね？
子園ヒーローとかのがよっぽど凄い

匿名希望：それな

匿名希望：ここで彼女いない歴年齢の自称文化部エースのワイが通りますよつと

匿名希望：その部の女子にちやほやしてもらえw

匿名希望：それ無理 女子いないし（泣

匿名希望：w w w

匿名希望：特定した

匿名希望：やめたれよw まあ自称だから実際どうか知らんけど

匿名希望：ファンクラブはともかく、有里の写真はなんか出回ってたな

匿名希望：あーなんか日常の隠し撮り的なやつな

匿名希望：それ普通に犯罪じゃね？

匿名希望：着替えとかならともかく日常だからなあ 言い訳はいくらでもできんだろ

匿名希望：あの！ 有里先輩じゃなくて、鳴上先輩の写真はないんですか？ 違法性

のないやつで

匿名希望：後輩女子キター！

匿名希望：血涙

匿名希望：他にも結構いるだろ つーか後輩男子かもしれないぞ

匿名希望：あつ……(察し)

匿名希望：女子ですけど

匿名希望：やっぱり後輩女子キター！

匿名希望：血涙

匿名希望：涙拭けよ そして部活入って活躍してこい

匿名希望：無茶を仰る……

匿名希望：とりあえず写真欲しいなら、写真部とか新聞部に頼めば。夏休みとはいえ、今回の大会にも行ってるんじゃないの

匿名希望：あ、なるほど！ ありがとうございました！

匿名希望：はー、後輩女子に慕われない……

匿名希望：慕われるようなことすればいいだけでしょ

匿名希望：そもそも接点がない

匿名希望：寝て起きたら鳴上になつてねーかな

匿名希望：それは微妙に嫌だw 過労死する自信があるw

【Rank up!! Rank3 刑死者・学園の生徒】

〽“学園の生徒” コミュのランクが“3”に上がった！
〽鳴上悠の失われた力“刑死者” 属性のペルソナの一部が解放された！
〽鳴上悠の評判が“噂のアイツ”から“校内の人気者”になった！

同日【巖戸台分寮】

「うん、似合う！ 前から鳴上くんには学ランのほうが似合うんじゃないかなーって思ってたんだよね！ ほら、イザナギもそっち系の格好だしさ！」

「あー……確かにイザナギって応援団っぽい格好だよね」

「そうそう！ という訳で、今日から鳴上くんがタルタロスを探索する時の基本衣装は学ラン姿に決定しました！ はい、拍手！」

「タルタロス？」

パラパラとまばらに拍手が上がる。

うつかり、乾の前でペルソナやタルタロスのことを口にはしているが、乾も少し首を傾げる程度の反応なので、とりあえずはスルーしておこう。

「……分かった」

それはともかく、悠もなんだか異様にしつくりきたので、湊の提案を受け入れる。

▽ 鳴上悠は魅力が限界突破した！

▽ 鳴上悠は魅力が「番長」から「オシャレ番長」になった！（キーアイテム・八十神高校服服）。

「あ、ちゃんとみんなにもお土産あるから心配しないでね！」

「えっ……なんかイヤな予感」

まずは順平。

「エプロン……？　なんでエプロン？　ってかなんでジユネス？」

次に明彦。

「ほう。『FBIスーツ』か。FBIの名前を冠しているだけあってスーツの割には動きやすいな。悪くない」

そして乾。

「え！　僕にもあるんですか？　ありがとうございます……ってなんですかコレ？　童話の王子様の服みたい……どこで着ればいいんですか？」

「タルタロス！」

「つーかよ、さつきから普通に喋りすぎじゃね？」

またもや普通にその名称を口にする湊に、さすがに順平が軽くツツコんだ。

「だから、タルタロスってなんですか……」

「が、学園の演劇部の別名……とか？」

「僕は初等部ですよ」

ゆかりのそんなフオローによって、これまたとりあえずでそれらはスルーされた。

「風花はコレね」

「『探偵服』……？」

「そうそう。似合うと思うよ！ それに、風花は探索に欠かせないからね！ そういう

意味でもピッタリの衣装でしょ」

「うん、ありがとう」

風花はタルタロスの探索においては、装備の変更とか必要ないからか、非日常的な衣装を貰って普通に嬉しそうにしている。

「桐条先輩はコレです！」

「……着物か」

「『付け下げ』ですつ。これを着て女子高生女将とか名乗ってもいいですよ！」

「ふっ……考えておこう」

美鶴も満更でもないようだ。

女子高生女将はともかく、付け下げを着た巖戸台分寮の寮母ならすぐにも誕生する

かもしれない。

「……というか、ちよつと待って。なんで私が最後の。あんた、絶対なんか変なネタ衣装持ってきたでしょ」

「そんなコトないない！ カッコイイよ！ ゆかりへのお土産はコレです！」
湊が掲げた衣装に男性陣が反応する。

「そ、それはまさか……！」

「男の子の憧れ……！」

「懐かしいな。俺も昔はそんな風に強くなりたと思ったものだ」

「……僕そっちがよかったです。いえ、なんでもありません」

「……」
「フエザースーツ……！！」

「そう！ フエザーマンRのピンクコスチュームです！」

「……やっぱり、ネタ衣装じゃない」

「ちなみに、レッドは私です！——あ、天田くんも安心して。実はこれ人数分あるから」

「えっ！ ホントですか!!? うわーうわーっ！ やったー！」

戦隊ものの変身スーツを手にした乾はとても嬉しそうだ。

座っていたソファから立ち上がって喜んでいる。

「——ハッ。……お、お土産ですからね。一応貰っておきます。そ、その、ありがとうございます」

乾はみんなの視線を集めている事に気づくと、こほんと一つ咳払いをしてから、テレビの様子で再びソファに座った。

「つていうか、天田くんはともかく、なんで私がこれなのよ。別にフェザーマンとか興味ないわよ?」

「大丈夫! ゆかりはきつと3年後くらいに女子大生モデルとしてフェザーマン・ヴェクトリーのピンクとか演じてるはずだから!」

「何その妙に具体的な未来予想!!? 予言!!? やめてよね……モデルとか、その……ちよつとしか興味ないしさ」

「意外とノリ気じゃんか、ゆかりツチ」

「あつ、うそうそ! だから、そもそもフェザーマンには興味ないんだつてば!」

「ちなみに、その頃、順平はフリーターかな」

「「「「あ………」」」」」

「ちよつ!!? 巻き込まれた!!? しかも何でみんなして納得してんの!!?」

「日頃の行いでしょ」

「ぐはっ………」

さらりと放たれたゆかりの言葉によって順平はその場に崩れ落ちた。

「つていうか、人数分あるなら、別に私のお土産として出さなくてもいいじゃないの」

「あ、うん。安心して。ゆかり専用のお土産もちゃんとあるよ」

「えっ、そうなの？　なんか催促したみたいでゴメンね。でもそれならそうと早く言うてくれればいいのに」

「はいー！」

間。

妙な沈黙がその場に流れた。

「——つて、なんで『鼻メガネ』!!!」

湊に掛けられた鼻メガネをゆかりは投げ捨てた。

「あー！　ヒドイ！　せっかく買ってきたのに捨てるなんて！」

湊はてててーつと鼻メガネを拾いに行くと、それを掛けて戻ってくる。

「ぶふっ……」

氷結魔法ではない。

単純に美鶴が噴き出した音だ。

どうやらツボに入ったらしく肩を震わせている。

「こんな素敵装備の良さがわからないなんて！　ゆかりはおかしいよ！」

「おかしいのはあんたの頭でしょ……」

「よ、よせ、有里……すぐにその装備を外すんだ……わ、私を笑い殺す気か……っ！」
「つていうか、桐条先輩もこんなのでツボらないでくださいよ……」

しかし鼻メガネを外さない湊は、もう一つ同じ物を取り出すと、そつと悠に掛けた。

——美鶴にクリティカル！

美鶴はダウンした！

「さて——じゃあ、こつちが本当のヤツね」

「あ、うん……つて放置するの!!? しかもコレ……『割烹着』？ いや、今までのに比べれば全然良いんだけどね。うーん……」

「割烹着女子つて流行ると思うー！」

「そうかなー……」

ゆかりは湊の言葉に首を傾げながら、割烹着を手に眺めている。

「あつ、コロちゃんはコレね。『クマミミ』」

「わん……っ？」

忘れてはならないと最後にコロマルに青いクマミミを装着すると、湊は満足そうに頷いた。

これで全員分お土産が配り終わったようだ。

「あれ、なんか一つ残ってるぞ」

「あ、それ荒垣先輩の分」

「へー、荒垣さんの分も買ってきたのか」

順平が言いながら、その衣装をお土産袋から取り出す。

“特攻服・総長仕様”だった。

順平は頷くと、そつとお土産袋の中にその衣装を戻した。

「似合い過ぎだろ!!?」

「それで何か問題があるの?」

「え、いや、問題しかないと言うか……これ渡されて荒垣さんもどう反応すればいいんだ

よって話だろ」

「着ればいいと思うなっ!」

「着たら、その瞬間に逮捕されるレベルだつての……」

後日、実際にそのお土産を渡された真次郎は、ただ頷いてお礼を言うことしかできな

かった。

少なくともその場で着るようなことは避けたようだ。

そして、湊に素で存在を忘れられていた幾月だったが、そのことを微塵も感じさせずに渡された鼻メガネをたいそう喜んで受け取ったらしい。

有里湊のテニス部の合宿はそんな感じで終わった。

2009年8月3日(月)

湊が目には怪我をした野生の子狐(P4のキツネ)をこっそり連れ帰っていたことが判明。(動物王国コミュ)。

失踪者救出・村林靖子、新村修一。(69F、83F)。

2009年8月6日(木)

大型シャドウ戦。

S・E・E・Sがストレガと対峙。

2009年8月7日(金)

長鳴神社で湊とテオドアに遭遇(ベルベットルームの住人コミユ)。
湊に文句を言われる。(BLダメ! 絶対!)。

▽テオドアとの間にほのかな絆の芽生えを感じる……。

「えっ」

我は汝…、汝は我…汝、新たなる絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

「悪魔」のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん…

▽「悪魔」属性のコミユニティである「ベルベツトルームの住人」のコミユを手に入れた！

▽鳴上悠の失われた力「悪魔」属性のペルソナの一部が解放された！

「い、いまの雰囲気もしかして……い！」

湊が悠とテオの間の空間に対して、人差し指を突き刺して、ぷるぷると震えている。

「な、なんでー！　どーしてー!!?　私とはコミユが出ないくせに、なんで鳴上くんには出るの!!?　……ハッ!!?　も、もしかして、そういう趣味!!?　だ、ダメダメ！　BLダメ！

絶対!!」

「……そういう趣味？　BLとは何でしょうか？　鳴上様はお分かりになりますか？」

悠は言葉の意味は知っていたが、何だかそれをこの場で説明するのは憚られた。

勇氣的には全然可能だが、そういう次元の話ではなかった。

特にテオは……イマイチ思い出せなかったが、後輩の誰かに体格というか、そういうのが似ている気がしたのだ。

雰囲気自体は正反対だったはずだが……初めて見かけた時にも、確かそんな印象を抱いたはずだ。

「有里、そんな訳ないだろう。こういうのは縁だ」

軽く首を振って否定する。

「どうかなー……。鳴上千んつて、そういうところ老若男女問わずな雰囲気があるんだもの」

「言いがかりだ」

「じゃあ、女の子が好きなの？」

「それはそうだ」

「へー。ならどういう子がタイプ？」

有里

テオドア

↓菜々子

∨選ぶには記憶の欠片が足りないようだ……。

有里

テオドア

↓菜々子

▽選ぶには真実の欠片が足りないようだ……。

有里

テオドア

↓菜々子

▽選ぶには彼女があと10年は成長しないと逮捕される……。

有里

テオドア

↓菜々子

▽堂島さんはきつと怖い……。

有里

テオドア

↓菜々子

▽諦めるんだ……今回に関しては退くことが勇気だ……。

有里

テオドア

↓菜々子

∨……仕方がない。シミュレーションだけだ。

「菜々子だ」

「……菜々子？」

悠は菜々子について熱く語った。

「そうなんだ」

湊は悠の話をちゃんと全て聞いた後、慈愛に溢れた笑顔を浮かべ、携帯で黒沢に連絡を取った……。

∨そして、世界は何も変わらなかった……。

【BAD END7：鋼のシスコン番長、あるいはナナコンの末路】

↓有里

テオドア

特にない（強いて言うなら妹系）

「有里だ」

「そういうのはいいから」

ぐいぐい来るから有耶無耶にしようと思つたら、流された……。

さすがに手強い。

「なるほど。鳴上様のタイプは貴女なのですか……。ということは私とはライバルということになりますね」

「え」

「私も大切なお客人である貴女には好意を持っていますから。こういう場合、確かこちらの世界では河原で決闘をするのでしたか？ おやりになりますか？」

……一瞬驚いた表情を見せた湊が、今ではキラキラした瞳でこちらを見ている。

河原で決闘をして欲しそうだ。

だが、さすがに、これはないだろう……。自分の中の何かが時期尚早だと、訴えかけている。

「また今度にしよう」

「そうですか。分かりました。では、その時を楽しみにするとしましょう」

「えーっ、決闘しないの？ ——私のために争わないで！ って言ってみたのに……」

「……悪女だな。有里」

2009年8月8日（土）

コロマル加入。

タルタロス、無骨の庭ヤバザ・後半が開放される。

2009年8月10日（月）

夏期講習。

2009年8月11日（火）

夏期講習。

夏期講習後に生徒会の用事で来ていた千尋と千尋の希望で、少し前に見つけて気になつていたという喫茶ルブランへ。

ついででバッテリーセンター。

面白いように打てる……まさか自分に野球の才能があったとは。

まるで気分はホームラン王だ。

野球経験はとくになかったはずだが、影時間でシャドウの攻撃を見切ったりしているからかもしれない。

あるいは、普段は前髪で隠れている額に第三の目——サードアイでも開眼したのだろうか。

心なしかボールのスピードもゆっくりに感じている気がする。

とはいえ、バッティングセンターという遊びの範囲でならの話だろうが。

2009年8月12日(水)

夏期講習。

「そうだ。野球をしよう」

夏期講習後にコミュニケーションやらを集められるだけ集める。

昨日のバッティングセンターでのホームランの感触がまだ忘れられていない。

ちよっと実践で通用するのか試してみたくなった。

『もしもし。悠先ば——じゃなくて、悠。どうしたんだ?』

「野球だ」

『は?』

「明日だ。いいから来い」

2009年8月13日(木)

夏期講習。

夏期講習後の午後にみんなで野球。結構集まる。

【鳴上チーム】

1番：遊撃手：花村陽介

2番：一塁手：宮本一志

3番：投手：真田明彦

4番：捕手：鳴上悠

5番：二塁手：伊織順平

6番：中堅手：早瀬護

7番：左翼手：友近健二

8番：三塁手：小田桐秀利

9番：右翼手：平賀慶介

代打要員：天田乾、青ひげ店主

マネージャー：西脇結子、伏見千尋

「フ、完璧な布陣だ。真田先輩のボールはまず外野まで飛ばされることはないだろうが、飛ばされた場合に備えて早瀬にセンターに入ってもらえば、レフトとライト、どちらのフォロワーもあの足でやってくれることだろう。この勝負、貰った——！」

【有里チーム】

1番：中堅手：アイギス

2番：二塁手：桐条美鶴

3番：投手：有里湊

4番：捕手：荒垣真次郎

5番：三塁手：テオドア

6番：一塁手：無達

7番：遊撃手：岩崎理緒

8 番：左翼手：岳羽ゆかり

9 番：右翼手：たなか社長

代打要員：コロマル、ベベ、神木秋成、黒沢巡査（保留）

マネージャー：山岸風花、長谷川沙織、舞子

応援：北村文吉、光子

審判：幾月修司

自分がほとんど誘うことをしなかった女子メンバーが多くて有利なはずなのに、悠は相手チームのメンバーを実際に見て、底知れない力を感じていた。

アイギスを筆頭に……人外の力を発揮しそうな気配がある。

いや、そうじゃなくても、坊主とか社長とか、なぜこの場に居るのかというクセ者メンバーだ。

決して油断はできない。

——1回表——

有里湊の第1球——ストライク！

「さすがは有里だな……」

湊の投げたボールは女子だというのに100キロ越え……110キロ以上出ていそ

うだった。

あまり野球をしたり、見たりしない者たちは、その速さに驚いている。

第2球——ボール！

だが、陽介は冷静にボールを見極めているようだ。

第3球——ヒット！

陽介の打ったボールはセンター前にポテンと落ちた。

「よっしゃー！」と陽介が一塁上でガッツポーズをしている。

対して、打たれた湊は納得がいかぬような表情を浮かべていた。

確かに湊のボールは女子としては速かったが、ある程度運動ができる男子からすると打ち頃の速さというやつだったのだ。

その後、2番手の一志にも打たれたことによつて湊もその事実を仕方なく受け入れる。

湊の口元がわずかに動いた。

「——タルカジャ」

タルタロスにおいて湊と連携することが多い悠は、マウンド上の湊が何をしたのか瞬時に理解した。

「(有里の奴……ペルソナを使う気か!)」

というか、グラブに召喚器を隠しての一瞬の早業……しかも、ペルソナの顕現化も無しと謎の技術を使用して悠は感心してしまった。

「(そもそもどこに召喚器を仕込んでいたんだ……。有里はマジックとか得意なのかもしれない。後学のためにぜひ教えて欲しい。——が喜びそうだ……)」

ちなみに、ペルソナを使用すること自体は問題なかった。

互角に戦えた方が緊迫した楽しい勝負になるからだ。

——3番手は特に運動能力の高い明彦、「タルカジャ」改め、宿していればオートで効果が得られる「タルカジャオート」の力によって、球速が突如20キロ以上も上がる事態に見舞われたが、ボクシングで動体視力なども鍛えられていたからなのか初球打ち。

しかし、その打球はそのままセカンドの美鶴の正面に飛んでいき、ベースも踏んで、ダブルプレーとなってしまうた。

「くそっ……！」

明彦は悔しがっているが、良く反応できたとも言える。

そして、ツアアウト、ランナー一塁で悠の打席が回ってきた。

「来たね。鳴上くん……。鳴上くんには、とっておきの秘策を考えてきたんだから！」

「望むところだ！」

〽熱い勝負の予感だ……！

とっておきの秘策と聞いて、悠は、もしかしてペルソナのパラメーター補正も受けるつもりかと思つた。

しかし、それはさすがにないだろうとすぐに考えを改める。

スキルをちよつと使うだけなら、最高でも“チャージ”によつて2倍ちよいの威力を発揮するくらい——要は男子と互角以上に戦えるようになるくらいだが、パラメーター補正を受けたら、その瞬間にはもう一般人置いてけぼりの超人野球になってしまう。

じゃあ、変化球か何かかと、悠は初球は見ることにした。

第1球——ボール！

おや？ と悠は首を傾げる。

第2球——ボール！

第3球——ボール！

第4球——ボール！

「……」

悠は無言で一塁へと進む。

マウンド上の湊に視線をやると、したり顔である。

「つて敬遠かよー！」

悠の代わりにベンチ上で陽介がツッコんでくれていた。さすがだ。

「フ……鳴上くん！ 勝負の世界は非情なのよ！ なんか、絶対に打ちそうな鳴上くんには全打席敬遠！ これがとっておきの秘策よ！」

そこには勝負師の顔付きをしている湊がいた。

「……」

悠は無言だった……。

空が青い。

「はっはっはっ！ 策士策に溺れるとはまさにこのこと！ 悠のことばかり気にして、オレっちのことを忘れていたようだな！ 野球と言えば、このオレ！ 伊織順平様の独壇場だぁー！！！」

三球三振、スリーアウトでチェンジだった……。

——1回裏——

真田明彦の第1球——ボール！

明彦は「タルカジャ」も使っていないのに湊よりも球速が出ているように思えた。

下手すれば140キロ近くでている。

流石すぎる身体能力だ。

その分、コントロールは微妙な感じだが……何とかストライクゾーンに入ってくれば、それだけでも簡単には打たれないに違いない。

カキン——ッ！

いきなり打たれる……アイギスは卑怯だと悠は思った。

しかし、2番手の美鶴は上手いこと抑えて、続くバッターは湊だ。

「(有里は俺たちに比べると筋力は低いかもかもしれないが、何でも器用にこなせる奴だ。桐条先輩と同じく厳しめに攻めよう……。とはいえ、真田先輩のコントロールじゃ内角は危ないから、外角を中心に、最悪歩かせてもいいくらいの気持ちでいこう)」

悠は打席に立つ湊をジロジロと見て、方針を決める。

明彦も悠の出すサインに素直に頷いた。

1球、2球と、上手いことストライクゾーンに入って、追い込むことができたが、じゃあ1球置こうかと思ったボール球が、狙った辺りには行かずに、打たれてしまった。

これでランナーを背負った状態で4番に打順が回ることになる。

湊チームの4番は真次郎だ。

雰囲気と言えば4番打者のオーラが出ている。

パワーも明彦以上にありそうだし、とても打ちそうだ。

悠は野手用のサインを送って、守備位置を少しだけ後ろにずらす。

そして明彦にもボール球を要求するが、明彦は首を振った。

どうやら真次郎に対してだけは、まっすぐ勝負がしたいようだ。

これは仕方ないと、悠はそれを受け入れて、ど真ん中でキャッチャーミットを構えた。

第1球——ストライク!

1球目は見逃しのストライクだった。

どうやら、初めから見ると決めていたようだ。

だが、明彦のボールもかなり走っている。

真次郎が相手だと気合が違うようだ。

第2球——ストライク!

「(また見逃し……? 真田先輩が3球勝負をしてくるって、荒垣先輩もわかっていてのことか……)」

できれば、ここでせめて1球外して欲しかったが、甲子園が懸かった公式戦でもないのに、男の勝負に口出しはできない。

悠はミットを一度叩くと、変わらずど真ん中に構える。

第3球——打球は高く上がり、センターの護のグラブにスポツと納まった。

「やるじゃねえか……アキ」

アウトになっても堂々の風格である。

実際に風でも吹いていればそれだけでホームランになつていそうな打球だった。

真次郎の打席はあと何回あるのか……できるだけランナーを溜めたくない相手だと悠は息を吐く。

次のテオドアは、これまで何を見ていたのか、イマイチルールを理解していないようで、バットを上下逆さに持ったり、空振った上になぜか三塁に走つていこうとしたり、おかしいことをやっている間にストライクスリーでアウトとなつた。

——これで1回は終了だ。

(中略・やたら長くなりそうなので、とりあえずダイジェストで)

湊の打った打球はまっすぐにピッチャーである明彦に向かっていった。

明彦はそれをカウンターの要領でグラブでキャッチ……ではなく、なぜか本当に拳で打ち返した。

良い子は絶対に真似しちゃいけない行動だ。

普通なら、拳が壊れる。

ボールが再び打席へと向かってくる。

悠がキャッチしてアウトにと、そう判断して動こうとしたのだが、それよりも速く、これまたなぜか再度湊が打ち返した。なんで走らずに打席に残っているのだろうか。

「なにっ!?!」

明彦が驚きつつも、何とかそのボールを避ける。

何だかんだで湊はアウトになったのだが、明彦は二度目のボールを避けてしまったことにかんりの敗北感を感じているようだ。

「いやいや、野球ー、これ野球ですから!」

どういうルールで戦っているんだと悠はツツコもうかと思っただが、その前に陽介がツツコんでくれていた。助かる。

「どらあ!!」

もはや坊主というか破戒僧だ……。

60歳を越えているであろうに、この打撃力……意外な伏兵かもしれない。

「ヒュ〜ウ、ワンダホ〜! みなさんご覧になりましたか! 今あたしが見事にキヤツチしたこのゴールデングラブ。さらにはイチローばりのレーザービームを可能にするかもしれないマツスルドリンコをお付けして、お値段29800円! いかがです〜!」

か、買わなければ……!

キヤツチャーである悠には必要ないというのに、悠は見事なアウトを取った、たなか社長の口上にあつさりに乗ってしまふ。

〈悠は29800円を失った……。

「ぐはっ……!」

〈悠はマツスルドリンコを飲んで『毒』になった……。

「は、謀られたか……!」

「いやいや、勝手に引つかかったんだろーが!」

『ボズムデイ』ですぐに回復したが、悠の精神的ダメージは大きい……。

「ブツ……!!?」

「え……死——ツ!!?」

突然口から緑色の液体を吹き出し倒れた秀利と慶介の姿に、ベンチ内がザワつく。

談笑していたはずの二人にいったい何事が起こったのかと思えば、マツスルドリンコに続いて、青ひげ店主特製の青汁スムージーによる犠牲者が出たようだ……。

店主は好意でスポーツドリンクをすり替えていたようだが、それは今や罰ゲームアイテムとして学生たちの間に広まっているものである。

まさか味方の中に敵が潜んでいるとは思わなかった。

「あ、危ねえ……！」

陽介が手にしていたボトルを手放す。

運が良かったと陽介は安堵の息を吐いているが、彼は未来でガツカリ王子というあだ名がつく程度には不運な少年なのである。

そしてそれはすぐに証明されることになる。

「これくらい余裕だぜ！」

陽介がそう言っただけでグラブを出す、イレギュラーバウンドによって、そのボールの方向が変わり、陽介の股間を直撃した。

「うーっ……!!?」

アレは痛い。

男性陣が同情している間に、その惨劇を生み出した張本人である湊はててーと陽介の横を通りすぎていく。

ハッと気づいて、慌てて順平がボールを掴んだ時には、湊は三塁まで辿り着いていた。

「いえい！」

敵チームだからだろうか、Vサインを出す湊に空寒いものを感じる。

もしか、イレギュラーバウンドすらも狙って、股間に当てたのではないかと、そんなことを考えてしまったのだ。

悠は自分がちゃんとファウルカップをしていることを何となく確かめてしまった。

回が進むごとに打てなくなってきている。

普通なら逆だ。

回が進むごとにピッチャーに疲労も出てくるし、その球速にも慣れてくる。

なのに、なぜ打てなくなってきているのか……その答えを悠はすでに見つけていた。

——風花だ。

風花がアナライズ能力によってこちらの能力を分析したのだ。

苦手コースや手を出しやすい球種、有里は器用にそれに応えている。

“タルカジャ” なしでも、軟投派で通用しそうな気がする投球だ。

しかし、まさか野球にも応用できるとは……さすがはS。E。E。Sが誇るナビであつた。

「え〜と、仕事で抜けられなかった黒沢巡査の代わりで来たんだけど……」

新米刑事の足立が湊チームの助っ人として現れた……。

野球の腕前はどののだろうか。

第1球——ストライク！

「!!?」

凄いボールが来た。

150キロ級……これは間違いない。

“タルカジャ”に加えて、“チャージ”を使った投球だ。

投球動作に移るまでにちよつと間があると思つたらこれか。

「最終回。私たちのチームが勝ってる状態で鳴上くんが打席が回ったら、その時だけは勝負するつもりだった。勝負よ！ 鳴上くん！」

「望むところだ！」

「～熱い勝負の予感だ……！ 今度は真剣だ！」

悠と湊、それぞれの目の奥にボツ！ と炎が燃え上がる。

「ぐっ……」

2球目は空振り……だが、呻いたのは悠ではなくて、キャッチャーの真次郎だ。

先程よりもさらに速い投球……160キロ級。

「(有里の後ろにチャップマンが見える……。生霊か何かを、ペルソナとして召喚してないだろうな……)」

スピードガン導入以降、人類最速170キロを出したというチャップマン。

しかしその記録は2009年には存在しないものだということに悠は気づいていない。

「(でも、俺は負けない……！ そっちが人類最速なら、俺は第2回WBC決勝のイチローだ！)」

こちらは時間的には間違っていない。

悠は2009年で一番の話題とも言える、イチロー伝説の集大成のような、あのシー

ンを思い出して集中力を高める。

第3球——ファール!

「掠った……!!? さすがは鳴上くん……。ここまでやってもついてくるなんて……!」

「(有里はやはりチャップマンとは違う。本物のチャップマンの投球なら俺はきつと打つことはできないだろう。だけどこれは、『タルカジャ』と『チャージ』で無理矢理作り出した速度だ。速いだけならタイミングさえ合えば打てないことはない……!)」

悠からは黄色の、湊からは青の、燃え上がるオーラが天高く舞い昇っているかのようだ。

第4球——ボール!

「(危なかった……。まさか、150キロフォークなんてものを、この目で見ることにしろうとは)」

まるで速いだけじゃないと悠の考えを否定するようなボールだった。

しかし、これを堪えられたのは大きい。

湊は明彦と真次郎のように、全球ストレート勝負というわけではなく、これを決め球にしていたに違いなかった。

「(そうじゃなくても、次はストレートで来る……!)」

「(鳴上くんはストレート勝負と読んで。ここで『タルカジャ』も『チャージ』も使

わなければ、球速差がフオークと比べても40キロ以上……打ち取れる可能性は高い。でも……それじゃあせっかくの熱が冷めちゃうよね。うん！ やっぱり熱血には熱血！」

湊はマウンド上で悠に握りを見せた。

最後はやっぱり王道、ストレート勝負だというアピールだ。

悠は頷いた。

「来い!!! 有里!!!」

「行くよ!!! 鳴上千くん!!!」

第5球——その速すぎるボールの行方を追えた者は少ない。

キイインという耳鳴りのような金属音で、バットには当たったのだらうと遅れて気づく者たちが出てくる。

そして、ベースを回り始めた悠と、自分の背後の空をゆっくりと仰ぎ見た湊の姿に、二人の真剣勝負の決着を知ったのである。

鳴上千チームの逆転だ。

「代走！ コロマル！」

「犬ー!!!」

陽介が居るとツツコミをしなくて済むから助かる。

何度目かになるそんなことを思いながら、その選択はアリだなと思った。

コロマルの速力はアイギス以上……コロマルは命令にも従えるし、それにもう最終回だ。

逆転してしまえば次の回はないし、それが無理でもまずは同点にということだろう。

悠が考えている間に、さらに湊が動く。

「代打！ 神木秋成！」

湊の言葉に、顔色のあまりよくない青年が打席に立った。

代打に出る前に少し揉めていたようにも思えたが、どういう意図での起用なのだろうか。

悠は秋成を観察するが、運動を得意としているような身体つきには見えない。

少なくとも、わざわざ美鶴を下げるほどの打者ではないだろう。

……大事な場面ではあるが、せっかくなら来てくれたから記念にとかそういうことなのか。

あるいは考えさせての四球狙い……？

とりあえず、バッターに意識を向けるよりも、良い球を投げられるように、そう思っ

ていた方がいいかと悠は思考を切り替える。

「！」

秋成の送りバント。

ボールを上手く当てた秋成は、走る気はこれっぽっちもないようだった。

しかしコロマルは確実に2塁に進んだ。

「(なるほど……この場面でプレッシャーを感じない。プレッシャーに強いタイプだったか)」

野球部員が居るわけでもないし、いままでバントをしようという人間がいなかったの
で、失念していた。

塁に居るのがコロマルだったこともあって、とにかく前に落とせさえすればよかった
わけだ。

まあ、そういう理由なら結局美鶴でもよかったのかもしれないが、やはりそれは、来
てくれたしせつかくだからという考えもあったのだろう。

とにかく、これでワンナウトで湊……そして、その次の真次郎にも回る可能性が高く
なってしまう。

湊にはどう攻めるべきか……と言っても、やはり後は明彦に投げ切ってもらうしか
ないが。

「！」

まさかのバントだ。

秋成に続いて、湊までバントしてくるとは、悠の考えにはなかった。

湊は自分で決めに来るはずだと思っていたからだ。

「(荒垣先輩に託したってことか……。ヒットひとつでコロマルはホームに還ってくる。それでも延長……。いや、まだ他にも手があるかもしれない。ホームランなら逆転サヨナラか……。よくできた展開だな)」

先ほどホームランを打ったお返しかもしれないと悠は思った。

そして、打つとしたら湊自身ではなく、真次郎だということだろう。

ファールが続くが、さすがにそろそろ決着がつく頃合いだ。

というか、ストレート対決に拘っている以上、ここは最後にもう一球だけ、最高の球を投げてもらおうしかない。

注文通り、最高の一球が来たと悠は確信する。

バットを振り切る真次郎……タイミングは合っている。

キーン——!

真次郎の打った打球は、空高く上がり——しかし、豪快なスイングとは裏腹に飛距離は伸びず、ピッチャーである明彦がガツチリとキャッチした。

——ゲームセットだ。

明彦が打席の真次郎へと歩み寄り、その左手に視線をやる。

真次郎はそんな視線から逃れるように両手をポケットへと入れた。

「シンジ……お前、有里の球を受けてたことで、手が痺れてたんだな」

「……言い訳はしねえよ。負けは負けだ。……アキ、最後の一球が一番速かったぜ」

結局、再逆転はならず、明彦の完投と、悠の劇的なホームランによって試合に決着がついた。

「負けたよ……。鳴上くん」

「有里」

いろいろあったが、良い勝負だったとお互いの健闘を称えて握手を交わす。

∨ 湊のことがまた少し分かった気がする…

【Rank up!! Rank 5 愚者・有里湊】

〽有里湊〃 コミュのランクが〃5〃に上がった!

〽鳴上悠の失われた力〃愚者〃 属性のペルソナの一部分が解放された!

「こらあー!!」 誰だ、ワシの車にボールを当てたのは!!!」

その声に、さあーッと悠の周りから人が引いて行った。

「え?」

みんな早い……さつきまでの青春ドラマのような状況はどうしたのだろうか。

いや、これから起こるであろう出来事もそれっぽくはあるのだが。

そして怒鳴りながら現れたのは、えらく出っ歯で特徴的な髪形をしたスーツ姿の男だった。

男の話聞くに、2年後辺りに実現を目指している、学園交流の下見のために出向してきた、八十神高等学校の倫理教師〃諸岡金四郎〃というらしい。

諸岡はクドクドと説教を始めた。

ホームランのすぐ後に来なかったのは、いまさつき車の惨状に気づいたからだよ。
だ。

これは本来なら逃げ出したいと思うことなのかもしれない。

しかし、悠は、その説教が何かとてもありがたいことなように思えて真摯に聞いていた。

もう二度と聞くことのできない大切なもののように思ってしまったのだ。

その悠の真摯な態度に諸岡は溜飲を下げたのか、悠のホームランによつて壊れたというミラー代の弁償は免除してくれると言う。

マジメな学生相手には意外とイイ教師なのかもしれないと思った。

「うむ……。都会のガキは生意気なだけかと思っていたが、貴様の態度は悪くなかった。それでいい。そのまま真面目な学生として日々をキチンと過ごせ。わかったな」

「はいっ。ありがとうございます」

悠が頭を下げると、諸岡は悠の背中をバシンと叩いて、夕日をバックに去って行った……。

【Rank up!! Rank5 法王・学園の教師】

∨〃学園の教師〃コミュのランクが〃5〃に上がった!

∨鳴上悠の失われた力〃法王〃属性のペルソナの一部が解放された!

※打ち上げ。(展開まだ若干未定)

悠が隠しメニューを完食。

だが……。

「(ば、馬鹿な……あの人がくれスペシャル肉丼をこうもあつさりど完食するとは……あの男子学生、ああ見えてステータスがカンストしているのか……!)」

一応ツツコンでよくと、ただ大食いなだけである。

「おかわりを頼む」

「(な、なんだってー!!?)」

悠は噂のグルメキングに対して、かつてない敗北感を感じていた……。

見た目が小太りなだけでと、心のどこかで彼を侮っていた部分があったに違いない。

しかしその敗北感こそが、いつか悠を更なる高みへと押し上げる原動力へと繋がることだろう。

悠の胃袋が宇宙になる日も近い……のかもしれない……。

2009年8月14日(金)

夏期講習。

2009年8月15日(土)

夏期講習。

2009年8月16日(日)

S・E・E・Sメンバーで夏祭り。(衣装の浴衣をGET!)

2009年8月17日(月)

順平、健二、一志と映画祭り。(クラスメイトコミュ5)。

叶先生と上手くいっているらしい。

帰りにゲームセンター。

港区のゲームマスターJINの存在を知る。(コミュは8月20日だからまだ。順平

がチドリと会うのも20日)。

悠のステータスに器用さが追加。

「いやー、実は俺、叶先生へのアタック成功したんだよね」

「は? いやいやいや、それはさすがに夢見すぎでしょ」

「マジだったの！ 鳴上も言つてやつてくれよ」

「マジだ」

「……マジで？」

「マジだ」

「マジ……かよ……」

「つーか、お前らはどうなの？ オレらもう高2よ。彼女の一人も、当然いるべきでしよ」

「な、何だよ。オマエ。急に上から目線になりやがって……。ついこの前まで、芸能人相手に叶わぬ夢を見る同士だったのに。くそーつ、あの頃のオマエはどこに行っちゃまったんだよー！」

「フフ、これが年上の女と結ばれた者の余裕つてやつかな」

健二はイケメン顔で鼻の下を軽くこする。

猛暑続く夏だというのに爽やかな風が健二の髪をさあつと撫でた。

「ええい、誰かコイツを斬れ！ 裏切りだ。ここに裏切り侍がいるぞー！」

「おいおい、裏切つてなんかないだろー。だから、心配してやつてんじやん。どうなの？
つて」

「どうもこうも何もねーよー！」

順平がガーッと健二にキレる。

確かに悠の目から見ても、夏休み中の順平は基本的に寮や駅前などでダラケ呆けてい
るだけだった。

ちゃんとしているのは影時間での戦闘中とかだけだ。

「宮本はどうなん?」

「俺は今部活一筋だからな。ケガもしちまつたし、女にうつつを抜かしてる余裕なん
てねーよ」

「そうだそうだ。オマエみたいにフラフラしてる奴とは違うんだよ!」

「なんで伊織がそっち側みたいになつてんの。オレと同じで帰宅部のくせに。お前だつ
て別に青春を部活に懸けてたりしてないだろ」

「うぐつ……」

「それに宮本もさ。そういうの理解してくれる彼女なら癒しだとか張り合いになつてい
いんじゃないの。例えば陸上部のマネージャーとかどうなのよ。結構仲良い感じじゃ
ん」

「マネージャーって西脇のことか? どうって言われても、あいつはガキの頃から知っ
てるし、マネージャーはマネージャーだからそういう目で見たりしねーって」

「何? 部活内での恋愛禁止とかあんの?」

「そんなんねーけど。そういうことじゃないだろ。お前だつて、あの幼馴染相手にそう思つたりしてないんだろ？」

「理緒？ まーそりやそうだな。幼馴染以前に、そもそも年上にしか興味ないしなー。オレ」

人と人の縁は不思議なもので、周りからはお似合いとか、付き合つたら良いのにとか思うような状況でも、本人たちにはまったくその気がないということは結構ある。

それで後々後悔する者もいれば、完全にそういうものだと割り切つたままの付き合いを続けていく者たちもいるだろう。

彼らがどちらであるかは分からないが、この時の彼らの考えは確かに言葉通りのものだった。

「んじや、鳴上は——……いや、お前はいいや。女子人気も高いしな。その気になれば、彼女くらいすぐにできんだろ。お前が誰を選ぶのかは見ものだけだ。つーか、調子に乗りすぎて、背中からブスリとかはやめてくれよー」

「ついだからゲーセン寄つてかねー？」

「いいぜー。オレっちのスゴ技でお前らに格の違いを見せつけてやるぜ」

「港区のゲームマスターJIN……一体何者なんだ……」

先程の特徴で完全に正体を把握してしまった気がするが、悠はあえてそう呟いた。

知ってはいけない彼らの日常の一部を知ってしまったようなそんな気分になったからだ。

彼らに関わるつもりならそれなりに覚悟を決めた方がいいだろう。

そんな気がしていた。

2009年8月18日(火)

明彦のビデオ。

2009年8月19日(水)

失踪者救出・小野塚サツキ。(95F)。

2009年8月20日(木)

ストレガのタカヤと遭遇。

「おや……貴方も面白い物ですか？」

ストレガのタカヤ……悠は警戒するが、戦いの気配はなく、先の言葉を考えるに、別に悠が一人のところを狙って現れたという訳でもないようだ。

単純に面白い物に現れたということなのだろうか。

「まあ私も霞を食べて生きている訳ではないのでね」

それはそうと、タカヤもさすがに普段から半裸でいる訳ではないようだ。

いや、あまり変わらないかも知れないが、一応という感じで——前ボタンは全開であるものの——白のワイシャツを羽織っている。

だがそれも当然か……さすがに普段から半裸でいれば、いくら海が近いとはいえ職質をされる可能性も高くなる。

それはタカヤとしても望む状況ではないはずだ。

「……料理はしないのか？」

「特には。私にとって食事とは生を繋ぐ行為でしかない。そこに喜びを求めるようなことはありません」

「栄養バランスは考えた方がいい」

「必要ないのですよ。私たちにはね」

必要ないと言う言葉を悠は少し考える。

タカヤのその言葉には食に対する興味が無い以上のものが籠められているように思えた。

「いえ、少し喋り過ぎましたね。まあ、どうでもいいことです。問題があるならサプリメントでも飲めばいい」

「……余計なお世話かもしれないが、簡単なレシピを書く。気が向いたら作ってみて欲しい」

タカヤは無言で悠を観察するような視線を向けているが、断ることも立ち去ることもせずにそのレシピを受け取った。

「本当に余計なお世話ですが、一応お礼は言っておきますよ。そもそも人に世話を焼かれるという行為が珍しい事柄ですからね」

「そうか」

悠が頷くと、タカヤは唐突にジーンズの背中に差し込んでいたらしい銃を抜くとその銃口を向けた。

一時的なものかもしれないが周囲に人気はなく、二人が向かい合うその空間だけが切り取られたような状況になっており、見咎めるような者はいない。

タカヤはこの瞬間を狙っていたのだろうか。

「ペルソナが使える状況では圧倒的な力を持つ貴方でも、今ならあっさりと殺せるかもしれないですね」

「……」

「試してみますか？」

タカヤの挑発を悠は真つ向から受け止めて見返す。

それを確認すると、タカヤは銃を再びジーンズの背中に差し込んで歪んだ微笑みを浮かべた。

「ふっ……冗談ですよ。私たちには特別な力がある。故に決着をつけるのはこのような場所ではない」

周囲の喧騒が戻ってくる。

二人の姿も僅かにだが人の流れの中に紛れた。

「もつとも、貴方の反応がつまらないものであったら本当に撃っていたかもしれませんけどね。とりあえず合格です。貴方には特別足り得る理由があり、私たちの敵としても相応しい」

我は汝…、汝は我…汝、新たなる絆を見出したり…絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、
“道化師”のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん…

∨ “道化師”属性のコミニティである “ストレガ”のコミニを手に入れた！
∨ 鳴上悠の失われた力 “道化師”属性のペルソナの一部が解放された！

「さて、それでは私は行きます。次に会うのはあの時間の中かそれとも……どちらにしても少しだけですが楽しみに思っている気がします。勘違いでないと良いですね」
そう言つてタカヤは去つて行つた。

街中でいきなり銃口を向けて来るとは、やはりタカヤは危険人物であるようだ。
ストレガと名乗る彼らは、きつと力を求めている。

特別であることを強く望んでいるようだ。

その気持ちはあるいは普通の感情なのかもしれないが、もつと深い何かがある気もした。

「ストレガ……S. E. E. Sの前に現れた敵……か」

悠はそれだけ呟くと、買い物物の続きをしてから、寮へと帰つた……。

2009年8月28日(金)

乾が加入。

「（これがシャドウ……怖い……リーダーも鳴上さんたちも、みんな、ずっとこんなのを相手に戦ってきたのか……！　でも、こいつらと戦っていれば、母さんの死の原因に、あの仇に辿り着くはずなんだ……！　だから——！！）」

「（逃げちやダメだ逃げちやダメだ逃げちやダメだ逃げちやダメだ逃げちやダメだ……！！）——ペルソナ!!!」

「……乾、大丈夫か？」

「は、はい！　これくらい平気です」

「本当に？　戦闘が怖かったりはしないか？」

「そんなこと！　……いえ、確かに、これが生き物が相手で、もつと感情剥き出しだったり、血がドバドバ出たりしたら、多少は怯んだかもしれないけど、シャドウってそういうのじゃないですか。だから大丈夫です」

乾はちよつとだけ嘘を吐いたが、その口にした言葉もまた事実であった。

悠たちにしても、それは、ペルソナに覚醒してすぐに戦えるようになった理由のかな

り大きな要因であると言える。

生き物ではないから何やってもいい感とでも言うのアレな感じだが。

これが例えば、人間とまでは行かなくても、普通にモンスターで、そして死体が残るような相手だったら、まず間違ひなく躊躇していたはずだ。

シャドウが相手の戦闘にはそれがない。

でも……。

「(ストレガ……)」

今は人間の敵がいる。

そんな状況でまだ小学生の乾をメンバーに加えてしまつてよかつたのかどうか。

「(ペルソナは精神の力だ。俺たちという前例を見て、そういうものだと思ひ込んだ結果というだけかもしれないが、乾のペルソナ能力はこれまで探索を繰り返してきた俺たちにもそこまで引けを取らない)」

「(あるいはお化けとか妖精が子供にしか見えないみたいなき感じで、子供の方が非日常に馴染みやすいのか。それとも……この年齢にしてすでに、何か絶対に譲れない信念みないなものでも持っているのだろうか)」

2009年8月31日(月)

夜、悠と湊の二人でコロマルの散歩。(湊コミュ5)。

湊コミュが5になってる事を湊が知り、自主リバース発動。

「……5だな」

「……………」

「えーっ!!? なんで!!? 鳴上くん、いつの間に私をそこまで攻略してたの!!?」

「いや、だから攻略って……………」

「ダメだって! そんなのダメ! 罨カード! 自主リバース発動!」

「は?」

「リバース状態だからね! 今、私リバース状態だから! 気安く話しかけないで!」

「……有里、何を言ってるんだ?」

「だからリバース状態なの! 行こっ、コロちゃん!」

「クウーン……………」

「…………そつとしておこう?」

2009年9月2日(水)

真次郎が加入。

人数が増えてきたので探索のパーティーを2つに分けることに。
湊と悠のダブルリーダー仕様になる。

湊が無駄に対抗意識を発揮。

「そうですね……。いいんじゃないですか……。」

「ものスゴイ不満そうだな」

「べつに有里の指揮能力を疑っている訳ではない。効率の問題だ」

「……分かってます」

「そうか。なら、パーティーの分け方だが……」

美鶴がそう口にすると同時に上がる手が一つ。

「ハイ！ 私、鳴上くんの方を希望します！」

「ゆ、ゆかり……。私を裏切るんだ……」

「裏切るとかじゃないっつーの！ あんたと同じパーティーだと着せ替え人形みたいな真似をさせられるからでしょーが！」

「ヒドイ！ 私はゆかりの魅力を最大限引き出そうとしてるだけなのにっ」
「頼んでないから」

「ふ、ふうんだ！ 将来モデルになってから私のありがたさが分かるんだから！」
「だから、その妙に確信したような予言は止めて欲しいんだけど……」

〈ゆかりが悠のパーティーに加入した！〉

「まあまあ、湊。代わりにオレっちがお前のパーティーに入ってやるからよ」
「順平……」

湊が潤んだ瞳を順平に向ける。

だが――。

「気持ちは嬉しいけど、保留で」

「なんでだよっ!!？」

「だって……物理系なら荒垣先輩の方が見た目から強そうだし……真田先輩の方が回復スキルも使えるから……」

「ちよつとー!!! 理由がマジすぎて反論しづらいつて!!!」

〈順平、保留。〉

「わたしの大切は貴方を守ることであります」

「うん！ アイギスは一緒に行こうね！」

「……………そしてこの対応の差だよ」

「アイギスが湊のパーティーに加入した！」

「俺はどっちでもいいぞ」

「僕も……………」

「じゃあ、回復役のゆかりが取られたから二人共こっちで！」

「そうだな……………それなら、私が鳴上の方に入るか」

「えっ……………桐条先輩……………」

「そんな目を向けられても困る。人数で言えば、有里の方はもう足りているだろう」

美鶴もゆかりと同じ理由がその判断の大部分を占めていたが、それを表情に出さないところはさすがである。

「全員こっちでもいいのに……………」

「……………なんの為のパーティー分けだ」

「美鶴が悠のパーティーに加入した！」

「明彦と乾が湊のパーティーに加入した！」

「残りはシンジとコロマルか……………」

「オレー!!! 真田さん!!! オレっちも残ってますっつて!!!」

「……………そうだったな」

「実際問題として鳴上があと一人を選べば、残りは山岸の護衛でいいのだがな」

美鶴の言葉に順平が必死に悠に向けてアピールを開始した。

悠はそんな順平の肩を叩き、じっとその目を見る。

「悠……」

「ああ。コロマルで」

「うおいつ!!?」

「……半分冗談だ。順平とコロマルが俺の方に入ってくれ」

「ちよつと待ったー!!! 順平はともかく、コロちゃんはこつち!!!」

「オレはともかくってさあ……」

悠も半分は本気つてことだしよお……と順平は愚痴っているがそちらはスルー。

「ん? それでもいいが、なら荒垣先輩はこつちだな」

「ああ……」

「ぐ、ぐぬぬ……荒垣先輩がこつちでいいです……」

「そうか。じゃあコロマル。よろしく頼む」

「ワン!」

〽 順平とコロマルが悠のパーティーに加入した。

〽 真次郎が湊のパーティーに加入した。

結果として――。

有里湊。パーティー：真田明彦、アイギス、荒垣真次郎、天田乾

鳴上悠。パーティー：岳羽ゆかり、伊織順平、桐条美鶴、コロマル

というのが、これからタルタロスを探索するのに当たつての基本的なパーティーということに決定した。

「こ、これで勝つたと思わないでよっ!」

「そもそもどこに勝ち負けを感じてるのかが分からないんだが……」

悠の言葉も湊には届かず。

未だに自主リバース状態であるようだ。

「ふっ、だが結果的によかったな。久しぶりにお前と組める」

「そうだな……」

明彦に対してそう返す真次郎の視線は乾に向けられていた。

このタイミングで真次郎が復帰した理由は乾がいることと何か関係があるのだろうか。

「では、これで決定だな。その日の体調や探索状況に合わせて、どちらか一名を山岸の護衛兼備えとして待機させるようにしてくれ」

「分かりました」

「了解です」

基本的には体調の悪い者を残して行けばいいと思うが、風花がペルソナに覚醒した時に大型シャドウがエントランスに現れたことなども考えればそうとばかりも言えないかもしれない。

よほど絶好調の者でもない限りはローテーションにでもするのが無難だろう。そして今日も彼らはタルタロスへと挑む……。

2009年9月3日（木）

新人アイドル・久慈川りせと遭遇。（自称特別捜査隊？コミュ4く6？ ↑若干未定）
夜行動中、ポロニアンモールで携帯を拾い、渡そうと追いかけたところナンパされたりせを助ける。

失踪者救出・牧田令子。（108F）。

「誰デスカー？ つーか、あんた。俺らの邪魔するとぶつ飛ばしちゃうよ？」

「あ、こいつまさか……」

二人組の一人が睨みを効かせながら詰め寄って来ようとしたところを、もう一人がハッと何かに気づいたのか、その肩に手をやって止めた。

「お、おい、待てって！ こいつ月高の番長じゃ……」

「番長ってお前、昭和生まれかよ。いまだきそんな奴が——ってアレか!!? 復讐代行者を返り討ちにしたってやつ！」

「そう、それだよ！ 前にこいつにあしらわれた奴らの一人が、こいつがリア充っぽくてムカつくつてのもあって、シヤレで復讐依頼したら振り込んだ金が数日後に返金されたって」

復讐代行……確かストレガのことだ。

しかしまさか復讐代行サイトの依頼対象にされていたとは、少し自重した方がいいのだろうか。

ああ、完璧な自分が憎い。……いや、冗談だ。

でもこういう冗談を、選択肢を選ぶようなノリで簡単に口に出してしまうと、きっとまた依頼される気がするから気をつけることにしよう。

「復讐代行者って拳銃持ってるって噂もあつたよな……?」

「あ、ああ……」

「拳銃持ってる奴を返り討ちにするってどんだけだよ！ ヤベエ……行くぞー！」

少女に絡んでいた男たちは、こちらの返答を待たずに、自分たちで状況を完結させるとスタコラといった感じで去って行った……。

「大丈夫だったか？」

「あ、うん……えつと、番長なの？」

「いや、そういう風にかかわれたことはあるが、噂になってるのは初めて聞いた」

「そうなんだ。ふふつ、変なの！」

夜に男二人に絡まれるという緊張状態から脱したからか、少女は悠に対して笑顔を見せた。

「あ、携帯ありがとう」

「可愛いストラップだな」

「うん。お気に入り。失くしてたら大変なことになってたから本当に助かった。あ、携帯のことね。仕事の連絡も入るから」

「仕事の？」

「あ……うーん。内緒だけど、私、実はアイドルなの」

「そうなのか」

「そつと口元に手を当てて自分の秘密を披露する少女だったが、悠の反応が驚くでも

なく普通であったためにぶくーっと頬を膨らませる。

「むー。 あっさりした反応。 まあ確かにまだまだ新人なんだけどね。 ——久慈川りせ、中学2年生の期待の新人アイドル! ……なんて、名前くらい覚えてね、先輩」

目深に被っていた帽子を取って、その場でくるっとターンして自己紹介をするりせ。けれど勢いでやったことで恥ずかしくなったのか、それとも人目を気にしたのか、いそいそとすぐに帽子を被り直した。

それから悠も自己紹介をして、少しだけ世間話のようなこととして……。

「明後日ね、このクラブでシークレットライブをやるの。 まあクラブでやるとは言っても私の年齢の問題でお昼にやるんだけどね。 今日には近くに来る用事があったから、ついででその下見っていうか……」

「そうか」

「うん……結構ね。 毎回不安なの。 少し前までは人前で歌うなんてこと考えてもなかったから。 だからつい足が向いちやっただけで感じかな」

「なるほど。 ——でも、この時間に中学生が一人で来る場所じゃない。 駅までなら送るよ」

「あ、ありがとう」

駅へと続く道を二人並びながら歩く。

そんな中でりせがちらつと横目で悠のことを見上げながら、口を開いた。

「……あの、先輩って、前にどこかで会ったことある？」

「いや……ない、と思う。振り返ると、そういうえばテレビで何度か見たような記憶はあるけど」

それは悠も感じていたことで、例えるなら……そう、陽介などと最初に出会った時の感覚に似ていたが、悠は不確かなそれを、テレビで見っていた芸能人と直接会ったからだというところで納得させた。

……そういうえば陽介は久慈川りせのファンだとか言っていたような気がする。

この状況を陽介に知られたら羨ましがられるだろうか？

「そっか。だったら、私の方が知ってる理由にはならないよね。……私、普段はこんな喋る方じゃないんだけどな……うーん、ま、いつか。じゃあ、悠先輩！ 私はこれで。縁があつたらまた会おうね！」

笑顔で手を振って、いつの間にか着いていた駅構内へとりせの姿が消えていく……ハズだったのだが、りせは不意に立ち止まり、くるつと振り返ると小走りで戻ってきた。「——と思っただけど、縁って自分の力で作るものだよね！ これ、私のシーケレットライブに入れるチケット！ ちょうどあまつてたから悠先輩にプレゼント！ よかつたら遊びに来てね！」

「ああ。ぜひ行かせてもらおう」

「うんっ。じゃあ今日は本当にありがとう!」

【Rank up!! Rank 4→6 星・自称特別捜査隊?】

▽ “自称特別捜査隊?” コミュのランクが “4→6” に上がった!

▽ 鳴上悠の失われた力 “星” 属性のペルソナの一部が解放された!

2009年9月5日(土)

りせのシークレットライブでトラブルが発生、通りすがりの探偵王子と協力して解決する。(自称特別捜査隊? コミュ)。

大型シャドウ戦。

2009年9月12日(土)

失踪者救出・北村文吉。(120F)。(湊のコミュ相手)。

2009年9月18日(金)

湊と相合傘イベント。

湊が自主リバーズ状態から復帰。(湊コミユ6?)。

台風よ去れー! と湊の指揮の下S.E.E.Sメンバーが総出で無駄にペルソナを発動してまで願う。(台風は去った)。

「みんな、ペルソナを出して! そして願うの! 台風よ去れー!!! ——はい、続いて!」

「「「「「た、台風よ去れー……」」」」」

「全! 然! ダメ! 特にゆかり! 今声出してなかったでしょ!」

「だって実際去って欲しくないしき……」

「はい、アウト! ゆかり、アウト! これでもし台風が去らないで、文化祭が潰れたら、ゆかりは今後タルタロスをバスタオル一枚で探索します」

「ちよっ!!? あり得ないから!」

「いいえ、あり得ます! イヤなら声を出して心から願うの! 私たちペルソナ使いには奇跡を起こす力があると! 天候くらい変えられると信じてっ!」

「分かったわよ……」

「じゃあ、みんなもう一度ペルソナを出して！」

「イザナギ！」

「イオ！」

「ヘルメス！」

「ポリデュークス！」

「ペンテシレア！」

「ルキア！」

「パラディオン！」

「ネメシス！」

「ウォーン(ケルベロス)！」

「カストール！」

「——オルフェウス！」

「続いて、鳴上くんは私と一緒にペルソナチェンジをし続けて！

主に天候に関係あり

そうなペルソナで！」

「分かった」

「イイ感じ！ それじゃみんな行くよ！ 台風よ去れ——!!!」

禁)

看病イベント。(湊コミュ)。

※カリギュラ効果。

見てはいけないものほど見たくなくなる。

してはいけないものほどしたくなる。

という心理効果のこと。

そんな訳で、ここで帰ったほうがいいです。

まあ、この先は本当にちよつとだけなんですけど……。

2009年11月9日(月)

望月綾時が転入してくる。

影の少年コミュが発生。(死神コミュ)。

ひとりでにテレビが点いた。

モニターの中に誰かの姿が映っている。

月光館学園の制服……首には湊と同じようにMP3プレーヤーを提げてるが男子学生のようなのだ。

『……繋がった……キミが……そうか……』

ザザツ……ザーツ……。

モニターが消える。

影の少年。

彼は何を伝えたかったのか。

暗がりの中で見てもその姿はもう映らない。

我は汝……、汝は我……、汝、新たな絆を見出したり……絆は即ちまことを知る一歩なり。汝、

“死神”のペルソナを呼び出せし時、我ら、失われた力を解放せん：

∨ “死神”属性のコミュニティである “影の少年” のコミュを手に入れた！
鳴上悠の失われた力 “死神” 属性のペルソナの一部が解放された！

∨ この先にはまだ踏み込むべきではない……。

∨ 本当に踏み込みますか……？

↓ 踏み込む

踏み込まない

20××年○月×日(?)

悠が寮の屋上でやさしい畑の世話をしていると、キイ……つと寮に繋がる屋上のドアが開いた。

現れたのは湊だ。

湊の様子がいつもと違うのはすぐにわかった。

湊はいつもの明るさを潜め、儂げな愁いを帯びた表情をしている。

悠の存在には気づいているようで、一瞬視線を向けたが、特に話しかけてくることなく、腰よりは少し高いくらいの屋上の縁へと寄つて、腰を下ろし、ぼんやりと眼下の街並みを眺め出した。

身体は内側に向いているが、その雰囲気もあつてどこか危なっかしい。

話し掛けづらい——話しかけないで、とそういう感じのオーラが出ているが、悠はそれを理解した上で踏み込んだ。

「何かあつたのか?」

悠の言葉に、湊は苦笑を浮かべながら視線を悠へと向ける。

「やっぱり鳴上くんは、こういう時に踏み込んでくるタイプの人なんだね」

「迷惑だったか?」

「んー。どうだろ……。でも、もしかしたら期待してたのかも」

湊は少し口を噤んで、はあつと一度白い息を吐き出してから、喋りだす。

「神木さんって言つて鳴上千くんは分かる?」

「神木……俺も何度か会つたことがある相手だな。色白で線の細い——」

「うんそう。神木さんね。死んじやつたんだ」

視線を街並みに戻し、ぽつりと湊はそう言つた。

「……そう、か」

「病気。本人も自分の余命がいくばくも無いのは分かつて、私も知つてた」

冬の冷えた空気が、二人の心までも冷やしていくようだ。

かじかむ指先が妙に気になる。

「でもさ。知つていたからつて、分かつていたわけじゃないの。その日に居なくなるつて。あれが最期だなんて。そんなの分からなかった。嘘みたいだよ。もう居ないんだつて、神木さん。もうどうやつても会えないの」

湊がまたはあつと白い息を吐き出した。

「私ね。こういうの初めてじゃないんだ。昨日まで居たはずの人が居なくなるつてやつ。鳴上千くんももう知つてるよね。私の両親が事故で死んだつてこと。事故つて言うか……それが始まりみたいなものだつたらしいけどさ」

「……」

「家族が自分の目の前で死んだことで、私は『死』を乗り越えた気にでもなつたのかな……。結局あの頃とあまり変わつてないのかも。弱いまま。誰かが死んじやうんだつてことを知つても、何もできはしない。それと戦わなくちやいけないのに」

「それは……別に弱さじやない」

「そう？　ねえ、鳴上くん。メンドクサイ質問するけど、生きるつてどうということだと思ふ？」

「生きる……」

悠の中にその答えは無数にあつた。

これまで沢山の人たちが、それぞれの表現方法でそれを残しているからだ。

でも、それが悠自身の答えになるかと言えば、そうではない。

だつたら、悠もまたそれを残すことが、生きるといふことなのだろうか。

「……私はね。実はもうほとんど自分の中で答えが出てるんだ。『生きる』とは、命を懸けること。自分の大切なものの為にその命を使い尽くすこと。私は、自分よりも大切だと思ふ誰かや、何かの為に、生きて——そして、死にたい」

「有里」

「なんて。ほんとはそもそも死にたくないんだけど。でも、私、みんなが好き。ゆかりも風花も順平も、桐条先輩も真田先輩も荒垣先輩も、天田くん、コロちゃんにアイギス、

それに、もちろん鳴上千くんもね。誰にも死んで欲しくない。生きていて欲しいの」

「そんなの俺だつて同じだ。有里だつて死なせはしない」

「あはは、ありがとう」

湊は悠の言葉に笑顔を浮かべる。

その笑顔は含むものがない、いつもの湊のそれに見えた。

しかし、それもすぐに消える。

「神木さんにも、そう思ってたんだけどなあ」

「……」

「ねえ、分かる？ 鳴上千くん。これがきつと私たちの敵なんだよ。病気だから仕方ないって思ったり、それが天命だったなんて受け入れようとしてみたりさ。命を諦めた、死を想うこと全部。——ね。本当のところ、勝てるわけないって思わない？」

湊は弱音を吐いているのか、それとも悠の覚悟を試しているのか。

その横顔からは伝わってこない。

コミュ能力の高い悠にも、それが分からないのは、湊の作り出す空気感に吞まれていくせいかな。

「それでも、諦めるわけにはいかない」

不安がないわけじゃなかった。

だから悠は自分に言い聞かせる為にもそう口にした。

真実を嘘にして、嘘を真実にする。

真実を探求し続けた悠からすれば矛盾する行為だが、今更でもある。

この戦いは、きつと初めからそういうものだった。

全ては、死ぬはずの人間の運命を覆す為にあつたのだから。

「——だったら約束してくれる？」

「約束？」

「そうそう。そこまで言うんだから、鳴上くん、私を守ってよ」

「任せろ」

「そんな簡単に返事して大丈夫？ 私、たぶんスゴイ無茶するよ。誰かがピンチになれば自分の身を投げ出すだろうし、難易度高いと思うな。だってどうしてもこれだけは譲れないんだもの。つまり、私を守るってことはみんなを守るってことだよ」

「任せろ」

悠は頷き同じ言葉を繰り返した。

それに関しては悩むまでもないことだった。

そもそもそれが悠の目的で。

そして、そんなのは今までずっと、影時間に挑むことを決めてから今日まで、ずっと

繰り返してきたことなのだから。

「そうなんだ……。任せちゃっていいんだ？」

「ああ」

「そっかあ」

湊は何だか納得したように頷く。

「じゃあ——指切り」

湊が小指を差し出してくる。

子供の時にも何回もやってないだろうそんなやりとりを、同級生とやるといふ状況に、悠は多少の気恥ずかしさを感じながらも、自分の小指を差し出して湊のそれに絡めた。

冷えた指先、そこにだけ熱が灯る。

「ゆびきりげんまーん、うーそついたらー、嘘ついたら——どうしよっか？」

「何でもいい。約束は守るからな」

「じゃあ、神様にケンカ売って、倒してくるとか」

「神様?」

「だってもしそんなのがほんとに居るなら、この状況を静観してるってことでしょ。一発くらい殴っておきたいなあって」

「なるほど」

ペルソナとは違う本当の神仏。

かつて未来でそれを倒した悠は、いまだその未来の先を知りはしない。そしてそこでは過去であったはずの現在も。

実際これまではある意味で勝利が確定していた戦いだった。

けど、ここからは違う。

敗北必至——そして確実に人が、湊が死ぬ戦い。

湊のこの言葉ですら、すでにある未来を示唆するだけのものだ。

だけど、悠はそれを覆す為に、ここに来た。

∨湊のことがまた少し分かった気がする…

【Rank up!! Rank9 愚者・有里湊】

∨“有里湊”コミュのランクが“9”に上がった！

∨鳴上悠の失われた力“愚者”属性のペルソナの一部が解放された！

「——期待してるよ、悠！」

「え？」

ゆーびーきった！ と絡めた指を解いて立ち上がった湊が、ぼんと悠の胸を叩く。

「どうかした？ 鳴上千くん」

湊は先程までとは違い、にやにやと試すような視線を向けている。

美しき悪魔は伊達ではないようだ。

「いや……」

だが、悠はそれに返すことはできない。

へタレているわけではなく、最後の戦いがどうなろうと、自分がこの世界から居なくなることをもう理解しているからだ。

それがへタレだと言われればどうしようもないが。

「あーもー、ダメダメー！ 鳴上千くんはそういうラブコメの主人公みたいなびみよーな反応は似合わないよ。決める時はビシツと決めないと。あはは、なーんて。そういうのは全部終わってからじゃないと、ね。これは——未来を掴む為の戦いなんだから」

勝手なのは理解していた。

湊が語った神木秋成のように、どうしても死ぬ人間も出てくる。

毎日どこかで見知らぬ誰かが死んでも知ってる。

それでも湊を助けたい。

頼まれたからとかじゃなくて、自分の意思で。

それが今の悠の紛れもない本心だった。

湊がみんなを守るなら、そんな湊を守る人間が一人くらい居てもいいはずだ。

「いや、一人なんて傲慢だな……。未来を知れば、きっと彼女に関わったほとんど全員がそう思う。有里湊は、そういう人間なんだ」

寮へと戻っていく湊の背中を見送って、悠は空を見上げる。

「(それと、もう一人……。必ず助けてみせる)」

物語の終わりが近い……。

P 3とP 4を入れ替えてみた・体験版

転校することになった。

酔っ払いから女性を助けたら、その酔っ払いが転倒して怪我をして、訴えられることになったせいだ。

そのゴタゴタが変に広がってしまったから、そうした方がいいんじゃないかと暗に転校することを勧められ、俺もそれを受け入れた。

転校先は私立月光館高等学校。

港区にある人工島に建設された、それなりに有名な学校だ。

元々東京育ちではあるが、今までよりもちよつとばかり都会な学校と言えるだろう。

実家から少し離れたこともあって、俺は寮通いをするようになった。

今回の件では家族にも迷惑を掛けたからちよつと良いと思つた。

寮のすぐ近くには叔父も住んでいるようで、何かあれば頼るようにと言われた。

叔父は刑事だから、叔父がそうだというわけではないが、自分を守ってくれるのではなく責める立場になった警察には、ちよつと会いたくない感じではあつたのだが。

——しかし幸先が悪い。

荷物は基本的に送っていたが、何かトラブルがあった時の為に着替えとかを詰めた旅行バックを手に、俺は人身事故で長く止まっている電車の中で溜息を吐いた。

こんなに止まるのも珍しいってくらいに止まっている。

どうも事故のせいで線路とかにも影響が出て、応急工事か何かをしていたらしい。

もうその場で降りてタクシーとかで向かうという手もあったが、必要以上にお金を取られるのは何だか悔しかったし、もういいやと、スマホで音楽を聴いたりしながら待っていた。

そして結局、目的の巖戸台駅に着いたのは深夜0時間近。

7時8時には着くつもりだったから、途中で眠ってしまったというのもあるが、結構なニュースになるレベルの事故だったと言えるだろう。

電車を降り、改札を通ると、不意に駅の電気がすべて落ちた。

スマホから流れていた音楽も止まる。

停電と充電切れ……？

やけにタイミングが合っているなと思いつながら、俺はとりあえず駅を出た。
人気がない。

棺桶のような不気味なオブジェが建っている。

緑色の夜だ。

普通じゃない状況なのはすぐにわかったが、どうすればいいのか。

人気がない以上、誰に聞くこともできない俺は、これまたとりあえず目的地であった寮に行ってみることにした。

特にそれ以上何が起きるでもなく辿り着いた寮はモダンな建物だった。

中に入ってみると、ホテルのようなカウンターがある。

実際にホテルだった場所を寮として使うようになったのかもしれない。

「遅かったね。長い間キミを待っていたんだ」

囚人服のようなと言うと例えが悪いかもしれないが、ストライプの服に身を包んだ少年が俺に声を掛けてきた。

寮の関係者だろうか。

人身事故で遅れた俺をずっと待っていたということか、それとも。

とにかく俺は少年に言われるがままに署名をすることになった。

「鳴上悠」

「確かに」とそれを受け取った少年の姿は消えた。

そして駅からずっと消えていた電気が点く。

同じく充電が切れたかと思っていたスマホもついて、イヤホンから先ほどまで聴いていた曲が微かに漏れ聴こえてきて、俺はそれを止めた。

「——誰？」

俺は寮の奥から現れた人物に視線を向ける。

緑系の部屋着を着た、ショートカットの少女だ。

「どうしたの千枝」

続いて赤系の部屋着を着た、こちらは長い黒髪の少女が姿を見せた。

「あー雪子。ほら」

「あ……もしかして今日、っていうかももう昨日かな。来る予定だった人じゃない？」

「おー、入寮者！　そういえばあったね。そんな話」

俺は軽く頭を下げて自己紹介をした。

「あ、こりやどうも。あたしは里中千枝。で、こっちは」

「天城雪子です」

「あたしらもここの寮生ね。ここ、三階は女子なの。男子は二階。って言っても、女子はあたしらだけだし、男子は一年の子が一人春休みの頃に入ってきただけ。あ、見た目厳しい感じだけど、先輩後輩の上下関係は守るみたいだから安心していいよ」

俺は曖昧に頷いておく。

「まあ、最初だしキミの部屋まで案内してあげるよ。えっと、二階の奥だっけ？」

「だと思ふよ。荷物運ばれてたし」

「だよね。あつと、ここのドア出ると別館でお風呂とかあるとこね。洗濯機もそこ。普通に男女別で時間帯で交替とかじゃないから、夕方から朝くらいまではいつでも入れるよ。管理人さんとか見たことないんだけど、まあそれだけはやつといてくれるから」

「それだけってこともないと思うけど……」

「えーでも、ご飯とかは作ってくれないじゃん。あたしら自炊とかできないのに」

「それは私たちの問題だから……」

「あ、キミは料理できる人？」

料理はできたので俺はできると答える。

「マジでー！ 最近の男子の女子力たるや……。あー、鳴上くんや、あたしたちに毎日ご飯を作ってくれてもいいんじゃないよ」

「ちよつと千枝……」

「あはは、ジョーダンジョーダン。まあそういった話は追々と言うことで、もう夜も遅いし、いいかげん部屋に案内しよつか。明日からもう学校だし、起きれなかつたら困るもんね」

俺は里中と天城の後に続いてこれからの自室となる部屋に案内される。

「あ、ちなみに三階は男子は立ち入り禁止だから。屋上に出るとかで一瞬通るのはいいけどね。見つけたら顔面靴底の刑だからね。ホアチャー！」

「えっと……千枝ってカンフー映画とかが好きなの」

「まあ、そんなわけで、あたしらはこれで。なんか困ったこととかあつたら気軽に声掛けてよ。そいじゃね」

「おやすみなさい」

俺もおやすみと返して、遠ざかっていく足音を背に部屋の中に入る。

机にベッド、冷蔵庫にテレビに洗面台と、一人暮らしに必要な物は一通り揃っていた。

俺が送った荷物もダンボールで室内に積まれている。

片付けは明日でいいだろう。

とりあえず俺は洗面用具と着替え、明日の学校関係の物だけ取り出して眠る準備をし、あとはスマホを充電器に繋いで、ベッドに腰掛けた。

「これから、ここに……か」

同じ寮生だという二人は親切で、上手くやっていけそうな感触はあった。

けれど気になるのは先程の不思議な現象だ。

一体何が起こっていたのか。

謎は尽きない。

俺はこの先に待ち受ける波乱の予感に、少しだけ胸をざわめかせながら、明日は学校

だと眠りに就いた。

朝、スマホのアラームで目覚める。

月光館学園の制服に着替えるが、都会なのに学ランとは珍しいと思う。

前の学校ではブレザーだったので若干の違和感もある。

まあ、普通の学ランではなくてオシャレ学ランって感じがするのはさすがだが。

不意にドアがノックされた。

「鳴上千ん、起きてるー？ 初日だし、よかつたらあたしらと一緒に学校行かない？ 案

内したげるよー」

俺はちよつと待つてくれと洗面台で身だしなみをチェックする。

問題なさそうだ。

「おはよー。おつ、学ラン似合ってるねー。イイ感じだと思うよ。ね、雪子」

「えつと、うん。そうだね。あ、そうだ。おはよう」

俺も頷いておはようと朝の挨拶を返す。

女子の制服のことは知らないのだが、里中は上着が緑のジャージみたいな服で、天城は赤いカーディガンを着ているが、これはアリなのだろうか。

「あ、うちの学校。上着は結構自由なの。まあ男子はインナーを変えるくらいで普通に

制服着てること多いけど」

らしい。

俺たちは寮を出て人工島に繋がるモノレールに乗る。

俺は朝食を食べ損ねていたが、里中と天城はパンとかおにぎりとかですでに済ませていたようだ。

ただ、基本はそういうコンビニものだったり、お弁当や惣菜を買って来るくらいらしいので、やっぱり自炊がーとか言っていた。

「寮で不便なこととかはない？ 実はここにおられる雪子嬢は、あの寮の持ち主だから何かあれば言えば改善してもらえるかもしれないよ」

「ちよつとやめてよ千枝。別に持ち主じゃないってば」

「あはは、ゴメン。あ、天城グランドホテルって知ってる？ 雪子はその娘で、あの寮もそのホテルだったの。今はもつとでつかいのが建ってるから、あれは学校に寮として提供？ だか、なんかしたんだって。人工島の建設にも資金援助とかで関わっててさ」

「あくまで親の仕事だから……。あまりそういうの気にしないでね」

天城はあまり親の仕事の話題とかを出されるのが好きではないようだ。

お嬢さま扱いされたりするのが嫌なのだろうか。

「あ、見えてきたよ。あれが今日からキミも通うことになる月光館学園がある人工島」
人工島というだけあって周りは海で囲まれている。

繋がってるのはこのモノレールとムーンライトブリッジという名前の大きな橋だけだ。

人工島には初等部から高等部までの月光館学園があり、他にもショッピングモールとかが存在している。

だから学生以外にも島内には入ってくるが、やはり学校周りには学園生と教師くらいしかいない。

「ようこそ、私立月光館学園へ！ なーんてね。えっと、鳴上くんはとりあえずゲスト用のところに靴入れて、職員室でクラス聞いてね。職員室はあっち。あ、あたしらは2—Fだから」

「じゃあ、ここだね。もしも同じクラスだったらよろしく」

里中と天城が二階へと階段を上がっていくのを見送って、俺も里中が指差した方へと向かう。

職員室と書かれたプレートはすぐに見つかり、俺はその中に入って担任に挨拶をする。

そのまま担任に連れられて教室へ。

クラスは2—F。

里中や天城がいるクラスだった。

転校生お約束の自己紹介を無難にこなし、新たな環境での時間は瞬く間に流れて放課後。

「おつす。転校生。よかつたら一緒に帰らねえ？　ここら辺案内してやるよ」

茶髪でヘッドホンを首に提げたクラスメイトが話しかけてくる。

「あ、俺、花村陽介な。ここエスカレーターでそのままって奴が多いだろ。俺も去年からの転校組だからさ、いきなりそういう場所に入れられる大変さがわかるっていうか。声掛けてやんなきゃなつて。へへ、イイ奴だろ」

「あー花村。なに鳴上くん絡んでるのさ」

「なつ、別に絡んじやいないつて。ここら辺を案内してやろうかって、そんだけだよ」

「あーそういうの、あたしらがいるから間に合ってるよ」

花村との会話に割り込んできた里中が、シツシツと軽く手を振った。

「え、何？　おまえら知り合い？　つてか、そーいやイケメンが、おまえと天城に挟まれて登校してきたとかつて話があつたけど、もしかしてコイツのことかよ」

「何その馬鹿つぽい噂話。登校しただけでどんだけ話題に飢えてんの。鳴上くんとは寮が同じつてただだよ」

「へえ寮が……って何くくく!!?! おまえらの寮って男女同寮なのかよ！ 何それ、そんなん漫画の中だけだろ！ 現実であっていいの！」

花村が誰に向かってなのが大袈裟に訴えかける。

「あーうっさい！ そりやあるんだからあるんでしようよ。大体なにを想像してんだか……変なこととか別にないよ。男女は階だつて違うんだから。アパートとかマンションで暮らしてるのと何も変わらないよ」

「そう言われるとそうかもだけどき……。同級生がひとつ屋根の下に住んでるってだけでなんか青春の香りがすんだろ！ 青春の香りが！」

「知るかよ……」

「まー確かに里中だけだとアレだけどな。でも里中って確か天城と同じ寮だつて話じゃん。そこはやっぱり惹かれるよなー。天城つつたら天然ものの美少女だからさ。その分誰もお近づきになれないって、その難易度は天城越えなんて言われてただけどな」

「あたしだけだとアレって何さ」

「あーいやいや、それはさすがに本人の前ではちよつと……」

「それ、言ってるも同じだろーが！」

「ぐはあ!!?!」

花村は里中の蹴りを避けようとして、背中を蹴られ、机の角にアソコをぶつけていた。

「う、ウゴゴ……角が直に……」

「自業自得。つてか、それはあたしのせいじゃないかね！」

「どう考えてもおまえの蹴りのせいだろうが……」

ぴよんぴよんトントンと花村は大変そうだ。

「な、なあ。今度おまえんとこ泊めてくれよ。さすがに今日すぐとは言わないけどさ。俺も寮生活とか一人暮らしとか興味あんだよ。親父とは何度か交渉してんだけどさー。体験できればそれをキツカケにうんと言わせられるかもしないしよ」

いきなり随分と距離が近い話だが、まあ男同士ならこんなものだろうか。

会ったばかりとはいえ、花村は若干残念なところがあるが基本的にはイイ奴といった印象だったし、クラスメイトを泊めたところでそう問題が起ころうこともないだろうとテキトーに頷いておいた。

「あ、千枝。まだ教室にいたんだ。用事すんだよ。帰ろう」

「あつ、うん。つと、鳴上くんどうする？ あたしらと一緒に帰る？ ……花村はいらないけど」

「おいおい、先に声掛けたのは俺だろ。それで俺だけハブるつてのはどーなのよ」

「何、あんたも来たいの？」

「もちー！」

「雪子どーする?」

「え、別に千枝がいいなら一緒でも良いけど……」

「はあ……まあ、転校してきたばかりの鳴上千の為には男友達も必要だよな。それが花村みたいな奴でもさ」

「俺、結構イイ奴よ?」

「自分で言うなっつーの」

そしてその日は四人で帰ることになった。

シヨップングモールにも寄って、一通りオススメの店とかを教えてもらった。

寮に戻ったら、いまだ段ボールの中に入っている荷物の整理をして、帰り道で里中や天城と一緒に買った弁当屋の弁当を食べて、風呂にも入る。

ホテルだったということもあり、一人だとかなり広い。

そういえば男子はもう一人……一年がいるという話だったが、こちらから尋ねてみた方がいだろうか。

「——誰さか」

というわけで尋ねてみる。

ノックの音に反応したので自分の名前と来訪した理由を告げる。

少ししてドアが開いた。

「あーどうも、スイマセン先輩。わざわざ」

もう一人の男子というのは、里中が言っていた通り確かにだいぶ厳しかった。

ガタイも良いが、染めたらしい白髪に、ピアス、ドクロのTシャツとまさしくと言った感じで、見た目かなり不良っぽい。

とはいえ、一応俺の挨拶に対して頭を下げてきたし、問答無用で威嚇してくるとか、そういうことはなさそうだ。

「俺あ、巽完ニッス。まあ、学年も違うし、普段は特に絡むこともないと思うスけど、なんかあつたらよろしくッス」

会ったばかりなのでそれ以上の話題は特になく、俺は頷いてじゃあ、とその場を後にした。

自室に戻って眠りに就く。

なにか長鼻の老人が出てくる不思議な夢を見た気がするが、イマイチ内容は思い出せなかった。

2日後……1日の間を挟んで、早くも花村が寮へと泊まりに来た。

「おーっ、何か雰囲気あるっていうか、こんなところ学生が住んでいいのかよ。あー、スゲー羨ましくなってきたぜ！」

花村は寮に入つてすぐにテンション高く騒いでいる。

「ん……ウース、先輩。その人、誰スか？ 先輩のダチ？」

まあ部屋に泊めると言つておいて、そうじゃないと言うのもわけがわからない感じになるので頷いておいた。

「そうスか。いいスね。先輩、友達多そうで」

完二はそう言つて、一足先に自室へと消えていった。

ちなみに俺は先輩は名前前で呼んでしまつていいと思つている派だ。

「……お、おいおいおい！ 何だよ、今のあからさまに不良オーラを放つてるヤバそうな奴！」

花村は完二の容姿にちよつとビビつていたようだ。

俺は完二のことを話した。

「異完二？ それつてアレじゃねーのか？ 中学時代に族を一人で潰したとか、そういう伝説持つてる奴。マジかよ……なんか急激に羨ましくなくなつてきたぜ。あれに因縁つけられたら俺ちびつちまうかも……」

そんな話をしながらもとりあえず自室へ。

「ほー。部屋の中もモダンーつて感じだな。……つーか、越して来たばつかだからか荷物あんまねーな。これじゃ、お宝発掘も何もねーじゃん」

俺は花村の言葉に呆れてみせる。

「何だよ。俺は興味ありませんってか。俺らの年齢でそんな男子いねーよ！ ああ、でもそうか。ここだとアレだもんな。クラスの子がいるんだもんな。なんかの時に部屋上げて見つかつたら一気に女子に情報回るかもって警戒してんだろ」

里中と天城はそういうタイプではない気がするが。

「あーまあな……。確かにそういうの流す奴らじゃねーか。つーか、上に天城が住んでるってだけで妄想には事欠かねーだろ。このムツツリ！」

花村はイヤラシイ顔で笑っている。

その後は下ネタから外れて普通の世間話だとかをして。

ちよつとネタがなくなったのでテレビを点けたり、スマホのゲームと一緒にやってみたりして過ごした。

花村は流行には敏感な方らしく、最近人気なアイドルだとか、ちよつと話題になっている探偵王子の話だかをテレビを見ながら語っていた。

夕飯はこういう時だからと、ちよつと豪勢に割り勘でピザを頼んだ。

せっかくだから里中と天城も呼ぼうぜとか花村が言ったせいで、お金は倍必要になっちゃったが。

というか図らずしも、女子を部屋に呼ぶ、なんかの時になってしまった。

……部屋にお宝を置いていなくてよかったと思う。

みんなでピザを食べて、その後トランプとかの簡単にできる定番ゲームで盛り上がった。

そして10時くらいに解散し、風呂に。

まんまホテルの風呂なので、普通に花村と一緒に入る感じになった。

途中で隣、壁越しに里中と天城の声が聞こえてきて、花村がやらたらドギマギしていた。「おいおいヤベーって！ 超楽しくねーか、ここの生活！ もう毎日が修学旅行みたいになってんじゃない！」

自室に戻って、花村用に床に敷かれた布団の上で、花村は先程のことでも振り返っているのか興奮気味にそんなことを言っている。

まあ実際には花村が来たからこそそのイベントといった感じではあるが、確かに楽しかったのは事実だ。

日常のような非日常のような時間。

けれど——本当の非日常はそんなものではないとすぐに俺たちは知ることになる。

深夜0時。

男二人集まったら、そんな早い時間には眠れないと、変わらずに喋っていた俺たちだが、不意に部屋の電気が消えたことでそれを中断させることになる。

「なんだ？ 電球切れたか？ それとも停電？」

花村は手元のスマホをつけようとしたみたいだが、「あれ、スマホつかねー」と言葉を漏らす。

この感じは知っている。

俺が初めてここを訪れた日の夜にあつた出来事だ。

そういえばあの時も深夜0時。

最近は新生活ということで早めに眠ってしまっていたが、まさか毎日起こっている現象なのだろうか。

「おい、なんかおかしくねー？ つーか、なんか気味わりいんだけど……ここ、昔、人が死んだとか怪談がある場所じゃねーよな？」

俺たちが何をできるでもなく部屋に留まっていると、ドーン!!! と外から何か大きな音がして、建物が揺れた。

「うええ!!? な、何々!!?」

地震ではない。と思う。

何かが建物を叩いたみたいなそんな感じの揺れだ。

「ギャー!!! ヘルプミー!!!」

さらにはそんな少年みたいな甲高い声が聞こえてきた。

「な、何なんだよ今の声!!! 助けを求めてんのか!!! つーか、何この急展開!!! もしかして漫画みてーな状況になっちゃってんじやねーの!!! 夢!!! これ、夢か!!! 俺、寝落ちした!!!」

「落ち着け」と俺は見るからにテンパリ始めた花村を宥め。
意を決して部屋の外に出てみることにした。

「えー行くの? 行っちゃうんすか! マジかよ……俺の勇気はすでに枯渇気味だぜ?」

そう言いながらも花村は俺の後に続いて部屋を出てきた。

「あー、そうだ! あの不良くん! こういう時こそアイツに頼ろうぜ! なんかあつたら守ってもらおう! 部屋どこだよ?」

花村が名案と声を上げたので、一応完二の部屋を指差して教えた。

花村はすぐにドアに張りついてドンドンとノックをする。

「おい!!! いねーのかよ!!! おーい!!! もしかしてこの状況で寝てんのか!!! 起きてくれよ!!! おーい!!!」

花村が声を張り上げるが無反応。

ドアノブをガチャガチャと回しても鍵が掛かっているようで開かない。

どこかに出かけているのか、それとも本当にぐっすりと眠っていてまるで気がついて

いないのか。

どちらにしても完二に頼るのは無理なようだった。

「だ、だったら里中と天城だ！ あいつらは女子だけどまだ人数がいた方が安心できるぜ！」

花村はそう言つて、俺を三階へと引つ張つていく。

男子が三階に上がったたら顔面靴底の刑なのだが……そんな場合でもないかと花村の後に続いた。

しかし、里中の部屋も天城の部屋も完二の時と同じく完全に無反応であった。

「だーっ！ さすがにあいつらがいないつてことはねーだろ！ どんだけぐつすりなんだよー！」

花村が悪態を吐く。

その直後にまたドーン!!! と寮が揺れた。

「へ、ヘルプミー!!!」

俺たちは顔を見合わせる。

「ま、またかよ……。つーかなんか上から聞こえなかつたか？ 屋上？」

俺もそう思ったので上に続く階段へと向かう。

「や、やつぱ行くんすか……。なあ、やめとかねえ？ 俺、嫌な予感しかしねーんだけど」

待っていてもいいと俺は花村に言ったが、「一人で残されるのだけは勘弁！」と花村は俺についてきた。

何の部屋があるのかもわかっていない四階を素通りして、屋上へと上がりそのドアを開ける。

屋上にはカラフルなキグルミが転がっていた。

中に人が入ってるのかジタバタしている。

シユールだ。

「な、何なんだよこのシユールな光景……。つーか、月デカツ!!? 緑の夜とかマジでどーなってるんだコレ……」

俺たちはとりあえずクマ——サル? クマ? のキグルミに近寄り、助け起こした。

「おおよ……。あ、ありがとー、助かったクマ!」

「おい、何なんだよおまえ。こんなところに転がってよ。この寮の住人ってわけじゃねーだろ」

「え? クマはずっとここに住んでるクマよ」

「マジでか。おまえ月高生? いや、もしかして管理人とか言わねーよな?」

「うーんキミが何を言ってるのよくわかんないけど、クマはこっちの世界の住人だから、キミたちの世界の際には住んでないクマ。あくまでここに住んでるクマよ」

「なに言ってるんだおまえ」

花村は理解不能と俺に視線を向ける。

とはいえ、事情がわかっていないのは俺も同じだった。

「だーから、クマは影時間から出たことないっつってんの！ オーケー？」

「影時間？ ……もしかして、このおかしな現象のことか？ おい、おまえなにか知って

んのかよ！ だったら話せ！」

「話せて言われても、クマだって詳しいことはよく知らんクマよ……。ただキミたちの世界の時間で深夜0時になると、この隠された時間である影時間になって、少しの間キミたちの世界の時間が止まるようになってるクマ。クマはその世界の住人なのね」

「隠された時間なあ？ これ、元には戻るんだろっうな？」

「戻るクマよ。いつもテキストにポーっとしてると終わってるクマ」

「そしたらおまえはどこに行くのよ」

「……さあ？」

キグルミはちよこんと首を傾げる。

「さあつてなあ……」

「クマからしたらずっと影時間が続いているだけクマ。でもそれがキミたちの世界から見ると深夜0時ごとにしか起こってないらしいのね。それ以上は知らんクマ」

「むしろ何でそこまでは知ってたんだよ」

「前にキミたちみたいなのにこの時間に入ってきた人たちが言ってたのをこっそり聞いたクマ。その時はクマ、突然の未知との遭遇に、ドキドキして話しかけられなかったクマよ」

「俺たち以外にも人が？ でもそいつらこの現象のことを知ってたってことは、俺たちみたいにいきなり巻き込まれたとかじゃねえんかな？」

「塔の調査をしに来てみたいクマ」

「塔？」

「——って、そんなこと話してる場合じゃなかったクマ！ 今日はやけにシャドウたちがざわざわしてて、スツゴイ大物が暴れ出してるから早く隠れるクマよ！ クマ、その衝撃でビックリしてこけたクマ！」

「それ、さっきの揺れのことか？ つか、シャドウって何だよ！」

「それは——あ、ああ、来る！ 来るクマ！ あれがシャドウ!!! シャドウはこっちの世界で動いてる人間を襲う性質があるクマ!!! キミたち早く逃げるクマよ!!!」

そしてそのキグルミが指差した先——屋上の縁から現れる影。

それはそのまま影のような化け物で、まるで蜘蛛のような多くの腕の集合体。

その腕の一本一本が、日常ではゲームの中でもない限りまず見ることのない剣を手

している。

あれで斬られたり刺されたりしたら、当然痛いどころでは済まないだろう。どうする……？

死を間近に感じたからなのか、脳裏にいくつかの場面がフラッシュバックして、最後に、寮に来た初日に会った少年を成長させたような細身の少年の姿を見た。

少年はその手に銃を持ち、俺に向けてとても軽い感じで引き金を引いた。

バン。

銃から弾は出ていなかったようなのに、俺は脳天を撃ち抜かれたような衝撃を受ける。

『さあ——キミの番だよ。キミの選択を見せてもらう』

そんな言葉を残して白昼夢のような、フラッシュバックから始まった少年の幻影は消えて、現実へと意識が向いた。

花村が腰を抜かしてへたり込み、キグルミが震えている。

キグルミがシャドウと呼んだ化け物はこちらとの距離を縮めようとするような動きを見せた。

この状況をどうにかできるとしたらきつと自分だけだ。

そんな意識が俺の中に生まれ、意志が蒼い炎となって周囲に沸き昇る。

「ペ…………ル…………ソ…………ナ…………!!!」

できる。

俺にはできる。

できないわけがない。

確信を持って口にしたその力ある言葉に応えて、俺の背後に仮面の怪人が姿を現した。

軽く3mはある巨体に、それこそ学ランのような黒のロングコート、手には矛のようにも見える巨大なナイフを持っている。

この非日常で戦う為の力。イザナギだ。

行け！——と戦い方をイメージすると、イザナギはその通りに動き、シャドウへと襲いかかる。

それは圧倒的な力だ。

イザナギは雷を纏ったナイフを一閃するだけでシャドウが持っていた剣の半数を斬り砕き、残りの半数も使わせないままにあっさりとトドメを刺した。

「これが…………俺の力…………」

敵であるシャドウが消えたことで、イザナギもまたその姿を消す。

いや、俺が消したのだろうか。

わからない……イザナギが消えたことで先程まで感じていた万能感も薄れて、俺は先程のフラッシュバックとはまた別の、暗闇に意識を持つていかれる感覚に陥った。

気を取り直し「スゲー何だよ今の!!! おまえが出したのか!!!」と騒いでいた花村が、俺のそんな様子に、キグルミと一緒に慌てている。

その日の記憶はそこまで。

そして俺の——俺たちの影時間を巡る約1年間の戦いはこうして始まった。

その戦いの果てに、俺たちは命の答えに辿り着くことになるが、それがどういうものになるかなんて今の俺には知る由もなかった……。